

現代語複合辞用例集

2 0 0 1

国立国語研究所

はじめに

言語体系研究部第一研究室では、平成8（1996）年以来、「複合辞の意味・用法の記述的研究」をテーマとして、用例のデータ・ベースの構築を行い、記述研究を進めるとともに、年度毎に研究会を開催して、関係研究者と意見交換を行いつつ、考察を深めてきた。平成11年を以って、当該テーマでの研究がいったん区切りを迎えたことをきっかけに、その成果を用例集の形でまとめることとし、同年以降成稿に向け準備を進めた。未だ稿本というべき段階ではあるが、一応の総括というべきものがまとまってきたので、ここに報告する次第である。

現代日本語においていわゆる「複合辞」形式の発達は、文法面での一つの重要な特徴であり、その研究は、記述面・理論面でもまだまだ積み重ねられねばならない。本報告書は、そのための基礎研究の一步となることを意図したもので、理論的な面を念頭に置きながらも、結果としては、個別記述の方に力を注いだものとなっている。辞書類でも必ずしも十分な説明が与えられていないこの種の形式について、広く平易に記述したことは、一般に裨益するところも少なくないものと考えるとともに、個別の記述の積み重ねが理論化の契機となることを期するものでもある。

本報告書の執筆は、言語体系研究部第一研究室室長の山崎誠と平成12年度同研究室非常勤研究員藤田保幸（滋賀大学教育学部教授）が担当し、全般に協議しつつ進めた。中心となる4の「用例と解説」については、用例の選定と整理を山崎が担当し、解説の原案を藤田が執筆して、相互に持ちより、協議のうえ完成稿をまとめた。

平成13年3月

国立国語研究所長 甲斐睦朗

目 次

1. 複合辞研究の展開と問題点	1
2. 資料について	12
2.1 本書の用例資料	
2.2 参考・基本先行文献でとりあげられた「複合辞」一覧	
3. 凡例	28
4. 用例と解説	
項目一覧	35
第一部 助詞的複合辞	39
第二部 助動詞的複合辞	169
第三部 複合辞関係文献目録	249

1. 複合辞研究の展開と問題点

一. はじめに

1 いくつかの語が一まとまりになって、その一まとまりが固有の「付属語」(辞)的な意味を担うものとして用いられる形式——およそ、「複合辞」とはそのようなものと理解されている。例えば、次の(1)(2)(3)において、

- (1) 文法について研究する。
- (2) 迷ったところで、仕方がない。
- (3) 今日は遅くなるかももしれない。

「について」「ところで」「かもしれない」といった形式は、それぞれ「ニ」+「就ク」+「テ」とか「所」+「デ」とか「カ」+「モ」+「知レル」+「ナイ」といった単語の組み合わせだったものと理解されるが、全体で一まとまりとなって、個々のもとの意味の組み合わせ以上の一種の辞的な意味を担うものといえる。このような「複合辞」に関する研究が、現代日本語の文法論・意味論において一つの重要な課題であることは、近年いっそう明確に意識されるようになってきたと思われる。

こうした現状の背景には、突きつめれば、次のような二つの経緯が考えられよう。

一つには、文表現の分析にあたって、個々の単語を基本とする把握・記述を行なうだけでは限界があるということが、はっきりしたのだといえる。我々は、言葉の最も基本的なまとまり(単位)として「文」と「語」をまず意識する。中でも今日の文法研究の中心となる対象は「文」であるが、「文」は「語」を素材として組み立てられていると見られるから、

「文」を「語」という素材に分解し、「語」と「語」の関係のあり方を調べることで、「文」の構造を記述しようという方略がとられる。それは自然なことであり、実際そこから多くのこともわかってくる。もし、ある「語」として把握される言葉が、常にその「語」として一定の意味・働きを持つものであり、それがいわば加算的に積み上げられることで、文の意味や構造が形づくられるというようなものであるなら、上記のような方法で、「文」のしくみは十二分に説明できるはずである。しかし、実際には事はそう単純に済むものではなく、

「文」においては、「語」という単位に離散的に還元しては記述しにくいような“意味”がいろいろな次元で見出されるものであり、また、ある「語」として分析できる言葉が、そういう「語」として常に一定の意味・働きを持つものともいえない。現代日本語の文法研究の進展が、そのような言葉の“実際”をより明確に示してきたことと相応じて、文の構造分析にあたっては、「語」より大きな言葉のまとまりをも一つの単位としてとり上げる必要があ

1 複合辞研究の展開と問題点

ることがはっきりしてきた。「複合辞」とは、そうした「より大きな」単位の一つであるが、日本語の文法において付属語（辞）的な形式が重要な役割を果たすものであることからしても、こうした形式の研究が大切であることは言うまでもないことといえる。

今一つには、こうした複合辞的形式の発達は、近・現代日本語の文法の一つの特徴的事実と考えられるものだという事である。しばしば指摘されるように、一般に、古典語から近・現代語への文法面での変化は、総合的表現から分析的表現への移行と特徴づけられる面がある。例えば、古典語の助動詞「べし」は一語で、強い推量・意志・可能等のさまざまな意味を表わすとされるが、近・現代語においては、それが「～にちがいない」「～つもりだ」「～ことができる」「～ほうがよい」等と言い分けて表現される。つまり、一語で総合的に言い表わしていたいろいろな意味が、それぞれ場合場合で分析・区別されて言い表わされるようになったといえる。そして、そのような言い分けのための形式として、さまざまな複合助動詞的形式が利用されている。また、こうした複合辞は、複合形式であることにおいて、所謂「透明性」が高い。例えば、「～にちがいない」といった形式は、「～ニ-違イ（トイウモノガ）-ナイ」と把握される複合形式であり、「確カニ～ダ」との強い推量を表わす形として、その意味するところの組み立てが読みとれ、その点においても分析的な表現といえる。このような観察からも知られるとおり、「複合辞」とは、近・現代日本語の文法の一つの特徴とされる「分析的表現」という一面を支える重要な要素であり、その研究は、史的な問題を意識しても重要と考えられるわけである。

以上のとおり、「複合辞」の研究の必要性・重要性が意識されるようになってきたことは、それなりの必然性のあることではある。けれども、現段階では、拠り所となるものとして参照すべき、射程の広い研究は、まだ必ずしも多くない。以下、いささかこれまでの研究の流れを概観し、複合辞研究の課題・問題点を考えてみることにしたい。

二. 研究史概観

2-1 「複合辞」というとらえ方を初めて提唱したのは、永野賢（1953）「表現文法の問題——複合辞の認定について——」である（注1）。

永野は、例えば「（～スル/シタ）からには」のように、「語源的・構造的には」更にいくつかの語に分解できるものであっても、「言語主体（話し手・聞き手）の意識に即して考える時」単なる部分の合成以上の「一まとまりの意味を持っているものと見てよい」連語形式の存在を指摘し、これを「複合助詞」と呼ぶ。そして、その種の「複合助詞」の認定基準として、次の三ヶ条の条件の一つでも満たせばよいとする。

その一 — 単なる構成要素のプラス以上の意味をもっていること。

その二 — 類語（意味の近似した他の助詞や複合助詞）の中にあつて、独特の意

味やニュアンスを分担していること。

その三 — 構成要素の結合が固着していること。

確かに、例えば上記の「～からには」で考えると、これは「カラ」+「ニ」+「ハ」という個々の語の意味の総和では考えにくい「特に理由を提示して、課題の場を設定し、次に来る陳述を強く期待させる」(99頁)といった特有の意味を担っていると考えられるものであり、理由表現としても「～から」「～ので」など類義的な表現と異なる意味・ニュアンスを持って対立するものだし、これで一つの固定度の高いまとまりといえよう(「からにこそは」などと間にはさみ込めない点でも、それは明らかだろう)。いずれの条件も満たしており、まさに典型的な「複合助詞」ということになる。

更に、永野は同様の基準で「複合助動詞」をも考えることができるとし、また、時枝文法の「辞」の考え方に立って、感動詞や接続詞のような言葉も「辞」的形式として同種の複合した形のものが考えられるとしたうえで、「複合助詞」「複合助動詞」及び「複合感動詞」「複合接続詞」を一まとめにして、「複合辞」と呼んだ。「複合辞」というとらえ方が、ここに初めてはっきりした形で提示されたのである。

もともと、複合形式の感動詞や接続詞をも「複合辞」として一括する処理は継承されなかった。こうした自立語的形式を「複合助詞」「複合助動詞」のような付属語的形式と一括して同次元で扱うことには、いろいろ無理があろう反面、とりたててのメリットもなかろうから、まずは妥当なことといえよう。また、以上のような接続する語の結びついた表現を「連接結合」とするのに対し、「……ば～ほど」(ex. 「見れば見るほど」)のような呼応表現も「呼応結合」と呼んで「複合辞」の一種とする考え方も示されているが、このような見方も以後の研究の採るところとはなっていない。呼応することで密接に関係するものと、接続して一まとまりになっているものとは、結びつきのあり方が異なるものと思われ、こうした見方が継承されなかったことも、確かに納得できる(ただ、こうした呼応表現の構文的な位置づけは、文における呼応表現のトータルな整理ともかかわらせて何らかの形で試みられて然るべきものであり、その点については、なお今日に至るまで一つの宿題が残されたことになるといってもよいだろう)。

以上のように、すべてがそのまま継承されたわけではないが、約半世紀を経た現在の目で振り返っても、永野の所論については、その視野の広さに感心させられるところも多いし、「複合助詞」「複合助動詞」を中心とする「複合辞」というとらえ方の趣旨は、今日にまで十分受け継がれるものとなったといえるだろう(注2)。

(注1) なお、永野(1953)に先行する国立国語研究所(1951)『現代語の助詞・助動詞——用法と実例——』は、永野が担当したものだが、「複合辞」というとらえ方につながる記述も十分に加えた秀れた用例集として、現代日本語研究の分野で広く活用され続けた。

(注2) ただ、一点評言を加えておこななら、永野は、自らの提唱した「複合辞」という考え方を

1 複合辞研究の展開と問題点

「表現文法の問題」と位置づけ、「従来のような単語や文節などが単位とされる」文法論と別次元の問題として、従来の文法論との対決を回避した。時代的制約とってしまえばそれまでだが、永野の論じたことが、その新しさにもかかわらず古い考え方を超克する契機としてなかなか生かされなかったということも、今ふり返れば、一面でまた故なきことではない。

2-2 永野(1953)以降、「複合辞」「複合助詞」「複合助動詞」といった考え方は、折にふれ必要に応じて参照はされるものの、幅広く考察を加えるといった形の研究は、ほとんど見られなかった。こうした形式の研究が重要な問題としてクローズ・アップされてくるまでには、何より、現代日本語文法の研究が相応に深化する時間が必要だったわけである。

1970年代に入る頃から、文法研究に新しい動きが際立ってくるが、「複合辞」の問題と関連してまず注目されるのは、鈴木重幸(1972)など教科研グループの文法研究で示された「後置詞」という考え方である。「後置詞」とは、

単独では文の部分とはならず、名詞の格の形(およびその他の単語の名詞相当の形式)とくみあわさって、その名詞の他の単語に対する関係をあらわすために発達した補助的な単語である。(鈴木(1972)499頁)

とされる。具体的には「(～)において」「(～)について」「(～)として」「(～)をめぐって」などの、複合助詞的表現の部分の問題にするものであるが、格助詞の部分の名詞の屈折的形式と考える形態論をここでも一貫させるから、例えば上記のような表現では、「～に」「～と」「～を」までは名詞の格の形であり、「おいて」「ついて」「して」「めぐって」などが格の形に補助的に添えられる「後置詞」とされるのである。「後置詞化しつつある単語はかなりあり(500頁)、「どのようなものを後置詞とみとめるかについては、なお検討を要する」が(501頁)、上記のような動詞由来の「後置詞」以外にも、形式名詞を含むものには補助的な関係を表わすものが見られ、その中でも例えば、「(～の)おかげで」「(～の)のために」「(～の)くせに」などというような類は「後置詞的である」としている。

この「後置詞」という考え方は、鈴木らが拠って立つ形態論の考え方を一貫して分析を進める中で出てきたもので、「複合助詞」などとして問題にされる表現形式を彼らの体系的な文法記述の中に然るべく位置づけたものとして注目される。こうした記述の仕方については、なお検討する余地もあろうが(注3)、「後置詞」という記述の仕方に立つ研究は、その後、高橋(1983)、金子(1983)、佐藤(1990)などの成果を生んでいくことになる。

他方、奥津敬一郎は、例えば「誠は死ぬほど疲れた」「この布地は高いだけに品がよい」など、必ず実質内容を補足する語句と組み合わせさせて副詞的規定句を形成する自立しない形式のいろいろを、「形式副詞」と呼んで記述している(未見ながら、奥津の学位論文である奥津(1973)『生成日本文法論』の約半分の未公刊部分には形式副詞論が含まれる由、また、その所論の要点は、奥津・他(1986)の第一章に要領よくまとめられている)。「形式副詞」

という考え方は、既に1960年代後半から示されており、副詞的修飾句（節）の再編・体系化を目ざしたものであったが、「形式副詞」としてとり上げられた形式には、「複合助詞」として扱われるようなものもいろいろあり、そうした形式について掘り下げられた記述は、「複合辞」の研究の興味深い事例として読むことのできるものともなっている。

（注3）複合辞については、その一まとまりとしての性格が強調されるのではあるから、そのような形式を——例えば「～によって」を「～に」と「よって」に分割する扱いがよいのかどうかは、検討の余地のあるところである。

例えば、「バラを病気見舞いとして送る」の「として」と、「彼にしてあの程度の出来事だ」の「にして」は、かなり意味の異なるものであり、それはそれぞれが「として」「にして」の形をとることによって生まれている相違といえよう。それを「～と」+「して」「～に」+「して」と分割して、等しく「して」のような後置詞をとり出すのがよい処理かどうかは考えてみてよいことかと思われる。

2-3 1970年以降の現代の文法研究の深化は、必然的に「複合辞」のような形式への注目を避けられないものにしていった。

例えば、受身文における動作主を表わす形式には、「～に」「～から」などととも「～によって」の形がある。そして、「太郎が次郎をなぐった」に対する受身文では、「次郎は太郎になぐられた」と、動作主は「～に」で表わされるのが自然だが、「芥川龍之介が『羅生門』を書いた」に対する受身文では、『羅生門』は芥川龍之介によって／＊に書かれた」のように、動作主が「～によって」で表わされるのが自然で、「～に」の形では不自然である。受身文の表現を綿密に記述していく過程では、当然こうした使い分けが問題になってくるものであり、そういった研究の深まりの中では「に」に対して複合辞「によって」の特性が注目されることになる。

このように、文法研究の深まりとともに、様々な局面で、通常の（単純）助詞・助動詞とともに「複合辞」にも注目しなければならないということがはっきりと認識されるようになっていったといえよう。また、盛んになってきた日本語教育の分野においても、こうした「複合辞」形式が表現のためのパタン（文型）としてとり上げられ、その意味・用法の分析を深める必要性が実感されたことも、「複合辞」の研究を推進するものとなった。

そういった認識・問題意識から出発して、改めて複合辞のうち「複合助詞」を広く俯瞰して、その特質をおさえようとしたものに、砂川有里子（1987）がある。砂川は、「複合助詞」を広く概観し、意味と統語（構文）的特徴の両面から、その特質を考察した。

すなわち、まず意味的な特質としては、「複合助詞」は、構成要素となっているもとの実質語の部分の実質的意味が稀薄化して一まとまりの関係構成的意味を担うものとなっているにせよ、もとの実質的意味が全く消えたものではなく、むしろそれが関係構成的意味の

1 複合辞研究の展開と問題点

差異化に貢献するものだと考えられる。更には、それがまた（単純）助詞によっては表わせない関係構成を可能にすることにも貢献していると、砂川は指摘する。例えば、「用例集の作成に向けて作業を進める」と、複合助詞を用いて言える関係表現は、「用例集の作成に作業を進める」などと、単純な助詞を用いただけでは、決して表わせないというわけである。こうした観察から、砂川は、

あいまいな関係、あるいは格助詞によって結び付けられないような結び付きの弱い関係にある二者をことさらに関係づけるような働きが、上に挙げたような複合助詞に認めることができるのである。 (46頁)

として、複合助詞についてその「関係構成力の強さ」（同）を強調する。もっとも、強弱といった程度の差という言い方で、複合助詞と一般の（単純）助詞の関係構成のあり方の違いをとらえることが妥当かどうかはよく考えてみなければなるまいが、砂川の指摘したところは、とりわけ複合格助詞の関係構成的な働きの特質を考えるにあたって基本となる大切な事柄といえよう。

また、統語（構文）的な観点からは、「複合助詞」は、その構成要素が、複合助詞の部分として固定化するにあたって、もともと持っていた統語的な機能を失っていくことが指摘される。動詞を構成要素とするものでは、動詞の本来持っているヴォイス・テンス・ムードの区別や肯定—否定の区別が失われ、そうした区別に応じた形を自由にとれなくなる。例えば、「取り扱いにあたっては慎重を要する」と言っても、「取り扱いにあたらなくては慎重を要するわけではない」などと否定の言い方はとれない。また、動詞が本来とれるはずの格成分も自由にとれなくなり、ごく限られたものと結びつく形しかとれなくなる。例えば、「～にあたって」の場合、「～に」と結びつく形しかとれなくなっている（「君が取り扱いにあたっては慎重を要する」などという言い方は不可で、動詞「あたる」が本来とれるはずの「～ガ」はもはやとれない）。名詞を構成要素とするものでも同様のことで、その名詞部分が自由にいろいろな格助詞を伴ったりできなくなっているのである。こうした指摘は、永野が「複合辞」であることの要件の一つとして問題にした「結合が固着していること」という点を、文法的な面から具体化しておさえたものということができる。

以上、砂川の研究は、今日においてもまず考えるべき基本的な事柄をよくおさえており、対象が「複合助詞」にかぎられるとはいえ、この時期の研究の水準を示す一つの総括となっているといっただろう。

2-4 ちなみに、「複合助動詞」については、全体をおさえた総括というべきものは出なかったが、複合助動詞と考えられるような形式が多くはモダリティ的な意味を担うと見られるものであったため、1980年代後半以降、文法研究の流行がモダリティの問題に移るにつれ、個々の意味・用法の記述はそれなりに進んでいったといえる。

ただ、現今のモダリティ研究では、「だろう」「らしい」といった一般の（単純）助動詞で

あれ、「かもしれない」「にちがいない」などの複合助動詞であれ、モダリティ形式として特段の区別立てなしに記述されるのがふつうのようである。けれども、複合形式が複合形式であることの特性といった面に光を当てる観点や、そういった観点からの概観の可能性についても、なお考えてみる必要があるかもしれない（注4）。

（注4） そういった観点を生かしたいささかの試みとしては、藤田（2000）第4章第二節第1項の分析がある（その3-3・4参照）。

2-5 さて、1990年に入る前後の頃から、松木正恵の一連の研究が世に問われ、「複合辞」の研究は新たな段階を迎えることになる。

松木の研究は、考え方においては、永野の所論を承けてその精密化を目ざしたものであり、最も端的には松木（1990）によってその概要を知ることができる。また、これに先行する松木・森田（1989）は、もっぱら松木の尽力による膨大な用例の集成と記述分析であり、ここにおいて、現代日本語の「複合辞」研究は大きな拠り所を得ることになった。全体的な俯瞰と個別的な記述という両面にわたる松木の研究が出されたことは、文字どおり画期的なことであったといえる。

今、松木（1990）に拠って、その考え方の骨子を本稿なりに要約しておくことにする。

まず、研究にあたっては、対象を確定しなければならない。「複合辞」の研究においても、「複合辞」をどのようなものとして認定していくのかが、最初に（そして、実はおしまいまで）大きな問題となる。認定の拠り所としては、さしあたり永野（1953）の三ヶ条の条件が考えられる。しかし、そのうちの「その二」、つまり、「類語（意味の近似した他の助詞・助動詞や複合辞）の中で独特の意味やニュアンスを分担する」という条件は、実は「複合辞」にだけあてはまるものとはいえない（一般の（単純）助詞・助動詞や形式名詞・形式用言についてもあてはまり得るものである）。このような「その二」も含めて、三つの条件のどれかを満たしていれば「複合辞」だとするのは、不的確で甘すぎるということになる。そこで、松木は、永野の三ヶ条の「その一」を生かし、「形式全体として、個々の構成要素の合計以上の独自の意味が生じていること」とすることに加え、「形式的にも意味的にも辞的な機能を果たしていること」と、「辞」（付属語類）であることをも明確にし、この二点を新たな複合辞認定基準の骨子としている。また、一方で「複合辞」を形の面から次のような三つのタイプに分類し、

第1種複合辞——助詞・助動詞のみが二語以上複合したもの。

第2種複合辞——実質の意味が稀薄になった形式名詞を中心に複合したもの。

第3種複合辞——用言が実質の意味を稀薄にしたもの（形式用言）を中心に複合したもの。

第2・3種の認定基準は、第1種の場合とは自ずから異なってくるものとして、これらについ

1 複合辞研究の展開と問題点

ては、更に「中心となる『詞』（自立語類）の実質的意味が薄れ、形式的・関係構成的に機能していること」という一点をも付け加えている。

更に、こうした基準を満たして「複合辞」となっている場合でも、その複合辞化の度合いは一樣ではないとして、「複合辞性（複合辞らしさ）」という観点を導入し、どの程度複合辞らしくなっているかを計る考え方を示した点は、注目される。「複合辞化」を計る尺度としては、次の三つの観点があげられている。

- (i) 構成要素の（結びつきの）緊密化の度合い
- (ii) 形式名詞・形式用言の形式化（＝実質的意味の稀薄化）の度合い
- (iii) 形式用言の文法範疇（≡ヴォイス・テンス・ムードなどの文法的表現の区別）喪失の度合い

一見して明らかかなように、(i)は永野の基準の「その三」を生かしたものであり、(ii)(iii)は砂川などの先行研究を着実に踏まえていこうとするものといえよう。こうした観点から、複合したと見なされる形式の意味・文法的特質を様々に探り、個々の複合辞を、その“複合辞らしさ”の違いで位置づけていこうとするのである。

以上の松木の研究は、永野によって「複合辞」のとらえ方を整理・改善し、いわば一桁レベル・アップしたものであることは、疑いない。これによって、「複合辞」の認定基準が明確化され、多様な「複合辞」も「複合辞性（複合辞らしさ）」の相違として然るべく位置づけられることになる。確かに、理念的にはそうであるはずなのだが、しかし、残念ながら実際問題としては、まだまだそれには程遠い段階にとどまっているといわざるをえない。なぜなら、松木のいう認定基準や尺度がいろいろな点で抽象的なままであり、これを実際に適用するにあたって、考えるべきこと・手さぐりのままであることがいくらかも残されているからである。

端的には、「構成要素の合計以上の独自の意味」とはどういうことなのか——どういう場合は“合計”にすぎず、どういう場合は“合計”を超えたものなのか、はっきり対極的な事例なら紛れまいが、微妙なところではなかなかきれいに割り切れないのである。（例えば、「～スルうえに」の「うえに」は、「うえ」+「に」の個々の意味の合計を担うだけの単なる連語なのか、それとも、それ以上の独自の意味を担う「複合辞」なのか、その判定は決して自明のことではあるまい）。そもそも、微妙なところを切り分けるために“基準”が欲しいのだから、そこをスッキリ割り切れなければ、未しということであろう。ただ、考えてみれば、この点は、複合語として独自の概念を表わしているのか個々の意味の組み合わせを表示しているだけなのかといった、単語の認定という基本問題ともつながるものであり（しかも、自立語類と違って、指し示す内容が具体的でないだけいっそう厄介である）、本当は容易に片づく問題でないようである。基本的な事柄にわたる考察の深化が要請されることかもしれない。

あるいは、「複合辞性」を計る尺度（特に(ii)(iii)）についても、具体的な個々の場

合についての判断が難しい場合がある。殊に (ii) については、判断がかなり主観的にならざるを得ない場合もあろう。また、(iii) についても、具体的な次元に下ろしてみても、問題になって様々な要件をそれぞれどう考えるかは、決して簡単ではない。例えば、文法範疇の一つとして、ていねいな形をとるか否かということが考えられる。その点で、例えば、

(4)-a 相手がなにも知らないからといって、だましていいわけではない。

(4)-b *相手がなにも知らないからといまして、だましていいわけではありません。

(5)-a このところ、土曜というと、雨ふるな。

(5)-b このところ、土曜といいますと、雨がふりますな。

のように、「といて」はていねいな形をとれないが、「という」とは一応ていねいな形をとれる。つまり、前者は“ていねい-非ていねい”という文法範疇を失っているのである。しかし、だからといて、「といて」の方が「という」とより「複合辞」らしいと言うのがよいのか、いささか気になるところである。むしろ、どちらも独自の関係構成的意味を担った相応に「辞」的な形式であることにおいては、さほど異ならないようにさえ思える。“複合辞らしさ”を計るのに本当に（あるいは、大いに）有効な特徴とそうでない特徴があるのではないかということも、一度考えておく必要があるだろう。

松木（1990）で示されたとらえ方は、なおいわば青写真というべき部分も少なくないというべきであろうか。それを具体的に肉づけしていくには、個別の言語事実一つ一つとの対話において、更に考察を深めていく必要があると思われる。松木自身が、松木（1992a）などで新たなとらえ方の手掛かりを模索する一方（注5）、近年は個別記述に力を注いでいることも、その意味では示唆的なものがあるといえよう。

（注5）松木は、「くせに」のような複合接続助詞がマイナス評価の述定を誘導するといった観察を高く評価し、そうした特性をもつものがそうでないものよりも「複合辞性」が高いとするようである（そうした特性をもつか否かといった点を、「機能度」という尺度でとらえ、「機能度」が高いこと（＝そうした特性をはっきり持つこと）が“複合辞らしさ”が高いことになると見ているらしい）。

しかし、誘導とか文末制約とかいった影響を与えるということは、要するに、当該の辞的形式の持つ意味の反映であろう。とすれば、実際のところは、複合助詞のような辞的形式にも、その特徴が文末制約の形で反映されるような意味を持つものもあれば、そうでないような意味を持つものもあると、まずは考えておくのが穏当な見方だろう。そうした制約を持つものの方が、持たないものよりも複合辞的な性格が強いといった見方は、必ずしも成り立たないと思われる。極端な例で言えば、「けれど」と「のに」は（もともとは複合によって生まれたものであり）、ともに逆接の接続助詞とされるが、かなり性格が異なり、「のに」は、反期待といったニュアンスがあることもあって、一般に命令の言い切りを導きにくい。しかし、そうした制約（“導かない”という形での誘導）があるからといて、それ故「のに」

1 複合辞研究の展開と問題点

の方が「けれど」より（複合？）辞的性格が強いと判断するのは、いかにも不自然であろう。松木の上記のような見方にも、これと同様の不自然さがあるように思える。

2-6 複合辞研究にとって、最近の最も注目すべき貢献といえるものは、砂川を代表とするグループ・ジャマシイ（1998）『日本語文型辞典』であろう。単語単位の従来辞典類ではとりあげにくかった、単語を超えるレベルの重要な表現パターンを「文型」としてリスト・アップし、現代日本語の用例を作例で示すとともに、簡潔な解説を付したものである。単語を超えるレベルの結びつきを取り上げるから、もちろん、「複合辞」とされるような多くの表現形式が採られている（それにとどまるものではないが）。十年近い年月をかけて編まれた労作であり、基本文献として松木・森田（1989）とともに、最初に参照すべきものとなるだろう。ただ、その価値を高く評価したうえで、この労作が「文型」という言語教育の分野の単位設定によって編まれたことにより、等閑に付している問題がある——例えば、複合辞か否かの認定をうるさく問うようなことは、さしあたり問題にならない——ことも、一応念頭に置いておいてよい。

三. 総 括

3-1 以上、かけ足で、「複合辞」の研究のこれまでをふり返ってみたが、既に（とりわけ、松木（1990a）あたりで）明らかなように、結局、複合辞研究の根本問題は、どのようなものを「複合辞」としてとり上げていくのかの認定・正確な概念規定の問題である。永野の提唱が受けいれられていったことでも知られるように、「複合辞」という呼び方で特立して論じたいと感じられる形式が、現代日本語において少なからず見出せることは事実である。ただ、そうしたいわば直観的に認定される形式群に通有する特質をこれと規定することは、容易ではない。なぜなら、それを試みようとするれば、問題は具体的には、「構成要素の意味の単なる総和以上のものになるとはどういうことか」「実質的な意味が希薄になるとはどういうことか」「辞（関係構成的な形式）として働くとはどういうことか」といった基本的な問いへと解体することになるし、「文法的な種々の機能を失うこと」といった重要な事実の意味するところを改めて考え直すことが求められることにもなるからである。

けれども、事柄が基本的であるだけ、その考究は大切な事柄だともいえる。当面の困難をいとわず、とにかく研究の道をつけたい——1996年度より、言語体系研究部第一研究室が「複合辞の意味・用法の記述的研究」をテーマとした意図も、事実そういったところにあった（なお、本書に一応の成果をまとめるにあたってのさしあたりの考え方・方針については、凡例に記した）。

そして、個々の複合辞の意味・用法の個別記述は、相変わらず重要な課題である。松木・

森田（1989）や砂川・他（1998）のような労作も出されたが、現状では具体例に基いた個別記述の蓄積はまだ必要であり、また、深化もされなければならない。そのような現状を念頭に置き、本書では、まだ稿本の段階というべきではあるが、新しい用例を集めることに努め、また、個々について事柄によっては敢えて踏み込んで論じてみたところもある。それがまた、一つの問題提起の意味を持つなら幸いである。

3-2 「複合辞」の研究には、以上のように理論面と記述面のいずれにおいても、取り組むべき根本的な課題が横たわっている。そして、そうした課題への解答は、言語事実への省察と理論化との往還の中に求められようかと思う。本書の研究は、そうした道程の一步に寄与することを意図したのである。

【参考文献】

- 国立国語研究所 [永野賢] (1951) 『現代語の助詞・助動詞——用法と実例——』 大日本図書 [もと、秀英出版より刊行]
- 永野 賢 (1953) 「表現文法の問題——複合辞の認定について——」 (金田一博士古稀記念論文集刊行会編『金田一博士古稀記念言語民族論叢』三省堂、のち、永野賢『伝達論にもとづく日本語文法の研究』東京堂出版に再録)
- 鈴木重幸 (1972) 『日本語文法・形態論』 むぎ書房
- 高橋太郎 (1983) 「動詞の条件形の後置詞化」 (渡辺実編『副用語の研究』明治書院)
- 金子尚一 (1983) 「日本語の後置詞」 (『国文学 解釈と鑑賞』48-6)
- 奥津敬一郎・他 (1986) 『いわゆる日本語助詞の研究』 凡人社
- 砂川有里子 (1987) 「複合助詞について」 (『日本語教育』62)
- 松木正恵・森田良行 (1989) 『日本語表現文型 用例中心・複合辞の意味と用法』 アルク
- 佐藤尚子 (1990) 「後置詞と前置詞 名詞の格の周辺」 (国文学 解釈と鑑賞55-1)
- 松木正恵 (1990) 「複合辞の認定基準・尺度設定の試み」 (『早稲田大学日本語教育センター紀要』2)
- (1992a) 「複合辞性をどうとらえるか——現代日本語における複合接続助詞を中心に——」 (『辻村敏樹教授古稀記念論文集 日本語史の諸問題』明治書院)
- (1992b) 「複合接続助詞の特質」 (『早稲田大学大学院研究科紀要別冊 (文学・芸術学編)』18)
- (1993) 「複合辞」 (『国文学 解釈と教材の研究』38-12)
- (1995) 「複合助詞の特性」 (『言語』24-11)
- グループ・ジャマシイ [砂川有里子・他] (1998) 『日本語文型辞典』くろしお出版
- 藤田保幸 (2000) 『国語引用構文の研究』和泉書院

2. 資料について

2. 1 本書の用例資料

本書で主に用例を採り上げた資料を次に一覧する。主に1970年代以降の現代日本語の資料(もっとも古いもので1966年刊)として穏当なものを採り上げるよう選定した。なお、同様の考え方で、これ以外にも適宜多様な文献から用例を収集している。

詳説・随筆・新書・実用書等

- 阿刀田高「夜間飛行」 *
- 生田久美子「認知科学選書14「わざ」から知る」東京大学出版会 1987年
- 石川喬司「彗星伝説」 *
- 阿部謹也「自分のなかに歴史をよむ」筑摩書房 1988年
- 伊藤桂一「羊蹄甲の花の蔭」 *
- 井上ひさし「夏に花散る天坊一座」 *
- NHK出版編「覚えたい山野草のテクニック」日本放送出版協会 1995年
- 長田弘「ねこに未来はない」晶文社 1971年
- 亀井節夫「日本に象がいたころ」岩波新書 1967年
- 河合信和「ネアンデルタール人と現代人」文春新書 1999年
- 河合隼雄「とりかへばや、男と女」新潮文庫 1994年
- 川口松太郎「はだか修行」 *
- 岸田今日子「セニスイエンタの家」 *
- 栗本薫「イエロー・マジック・カーニバル」 *
- 黒岩重吾「海の蜚」 *
- 源氏鶏太「運がよかった」 *
- 柴門ふみ「恋愛論」PHP研究所 1990年
- 柴門ふみ「恋愛論2応用編」PHP研究所 1991年
- さくらももこ「もものかんづめ」集英社 1991年
- 佐野洋「無事永眠」 *
- 澤野久雄「小さな林檎の実から」 *
- 篠田節子「絹の変容」集英社文庫 1993年
- 主婦の友生活シリーズ「なつかしい手作りおやつ」主婦の友 1993年
- 高橋三千綱「花言葉」集英社文庫 1994年
- 田中光二「泳ぐ男」 *
- 田中小実昌「不思議な娘」 *
- 田辺聖子「姥ごよみ」 *
- 築山桂「浪華の翔風」鳥影社 1998年
- 筒井康隆「日本古代SF考」 *
- 中村正軌「嘔吐の海」 *

2 資料について

中村雄二郎「術語集一気になることばー」岩波新書 1984年
夏樹静子「鼓笛隊」＊
ねじめ正一「高円寺純情商店街」新潮文庫 1992年
野坂昭如「沼袋ぬばたまの夜」＊
野崎昭弘「人工知能はどこまで進むか」岩波書店 1988年
村上陽一郎「科学者とは何か」新潮選書1994年
野本陽代「宇宙の果てにせまる」岩波新書 1998年
半村良「秋子の写真」＊
藤原審爾「風とまる」＊
三浦哲郎「お菊」＊
三浦哲郎「忍ぶ川」新潮文庫 1965年
水上勉「森」＊
三好京三「地摺りの歌＊」
向田邦子「鮒」＊
森村桂「天国にいちばん近い島」角川文庫 1966年
山口洋子「情夫（いろ）＊」
養老孟司「ヒトの見方」ちくま文庫 1991年
吉行淳之介「踊り子」＊

＊を付けたものは、日本文芸家協会編「ザ・エンターテインメント1982」角川書店 1982年所収の短編小説である。

新聞CD-ROM

朝日新聞社「CD-HIASK'94」紀伊国屋書店・日外アソシエーツ 1995年

白書

経済企画庁編「平成10年版国民生活白書」大蔵省印刷局 1998年

中学校・高等学校教科書

大塚明郎ほか「標準高等物理Ⅰ」講談社 1974年
柴田雄次ほか「化学Ⅰ」大日本図書 1974年
石田寿老ほか「生物Ⅰ」清水書院 1975年
湊正雄ほか「地学Ⅰ」実教出版 1974年
中村元ほか「倫理・社会」東京書籍 1974年
辻清明ほか「政治経済 新訂版」自由書房 1974年
宝月圭吾ほか「詳説日本史（再訂版）」山川出版 1974年
土井正興ほか「三省堂世界史」三省堂 1974年
青野壽郎ほか「高校新地理B」二宮書店 1974年
坪井忠二ほか「新理科1分野上」大日本図書 1980年
坪井忠二ほか「新理科1分野下」大日本図書 1980年

坪井忠二ほか「新理科2分野上」大日本図書 1980年
坪井忠二ほか「新理科2分野下」大日本図書 1980年
鶴飼信成ほか「新しい社会〔歴史〕」東京書籍 1980年
鶴飼信成ほか「新しい社会〔地理〕」東京書籍 1980年
鶴飼信成ほか「新しい社会〔公民〕」東京書籍 1980年

シナリオ

大石静「アフリカの夜」ドラマ1999年5月号
大森寿美男「夜逃げ屋本舗」ドラマ1999年3月号
大森美香「美少女H 一七歳の記録」ドラマ1999年9月号
岡田恵和「彼女たちの時代」ドラマ1999年8月号
金子ありさ「美少女H2 卒業旅行」ドラマ1999年9月号
北阪昌人「海の中の砂漠」ドラマ1999年4月号
君塚良一「グッドニュース」ドラマ1999年5月号
倉本聰「もう呼ぶな、海！」ドラマ1999年3月号
武田徳久「屋根裏のガラスの靴」ドラマ1999年6月号
武田百合子「コワイ童話 シンデレラ」ドラマ1999年4月号
寺田敏雄「24時間だけの嘘」ドラマ1994年4月号
林宏司「愛してるってゆうてえな」ドラマ1999年6月号
坂東賢治「新・俺達の時代」ドラマ1999年8月号
坂東賢治「美少女H2 ソーダマシン」ドラマ1999年9月号
吉田紀子「卒業旅行」ドラマ1999年4月号

2. 2 参考・基本先行文献でとりあげられた「複合辞」一覧

以下にあげる表は、複合辞に関する基本的な先行文献である森田・松木(1989)『日本語表現文型』に見出し項目としてとりあげられたものを基本とし、それらが、国立国語研究所編〔永野賢〕(1951)『現代語の助詞・助動詞』、グループ・ジャマシイ編(1998)『日本語文型辞典』に採録されているかどうかを一覧した対照表である。なお、「備考1」欄には、本書での採録状況もあわせて表示した。

「複合辞」欄に取り上げたものは、上記森田・松木(1989)の見出し項目によったが、本書で若干加えたものもある。すなわち、①他の二書(のいずれか)に採られており、複合辞として併せて取り上げてよいと考えられたもの(「備考2」欄に「*1」と記す)、②同義の形式の形の上でのヴァリエーションというべきもの(「備考2」欄に「*2」と記す)、③注記のような意味で関連して取り上げたもの(「備考2」欄に「*3」と記し、末尾に注記する)である。しかし、基本的には、森田・松木(1989)の項目に基づいている。

配列は、「複合辞」欄の五十音順である。語形(及びその表示の仕方)は森田・松木(1989)に従った。なお、同書で語形が同じで用法が異なるとされるものについては、その区別の手がかりとして「備考2」欄に同書を参考にして簡単な注を表示した。これらについては、それぞれの文献の間で必ずしも用法の区分が一致していないものもあるため、厳密な対比にはならないが、森田・松木(1989)に従って用法が確認できたものについては記号を付した。

記号の見方であるが、「○」は、見出しあるいは小見出しにその語形が確認できるもの、「△」は、見出しには挙げられていないが、解説あるいは用例の中にその語形あるいは用法が確認できるものや参考として挙げられたもの、「-」は、採録されていないものである。

「複合辞」	日本語表現 文型	現代語の助 詞・助動詞	日本語文型 辞典	(備考1) 本 書	(備考2)
あげく (こ)	○	-	○	-	
あとで	-	-	○	○	*1
あとに	-	-	○	○	*1
以上 (は)	○	-	○	-	
一方だ	○	-	○	○	
うえ (で)	○	-	○	○	
うえ (に)	○	-	○	○	
うえは	○	-	○	○	
得る	-	-	○	○	*1
お〜ください	○	-	○	-	
お〜願います	○	-	○	-	
おかげで	○	-	○	-	
かい	○	○	-	-	問いかけ
かい	○	○	-	-	反駁
かゝい	○	-	○	△	

限りだ	○	—	—	—	
かぎり (は)	○	—	○	—	順接・仮定
かぎり (は)	○	—	○	—	順接・因果関係
かというと	○	—	○	—	
かといえは	○	—	○	—	
(か) と思うと	○	—	○	○	同時性
かと思うと	○	—	○	○	逆接・対比
(か) と (思う) 間もなく	○	—	○	—	
(か) と思えば	○	—	○	○	同時性
かと思えば	○	—	○	○	逆接・対比
(か) と思ったら	○	—	○	○	
かとすれば	○	—	—	—	
(か) とみると	○	—	—	—	
(か) とみれば	○	—	—	—	
かな	○	○	○	—	詠嘆
かな	○	○	○	—	問いかけ
がな	○	○	○	—	詠嘆
がな	○	○	○	—	非難
がな	○	○	○	—	願望
が早い	○	○	○	○	
かもしれない	○	○	○	○	
かもわからない	○	—	○	△	
からいうと	○	○	○	—	
からいえは	○	○	○	—	
からいって	○	○	○	—	
からして	○	○	○	○	視点
からして	○	—	○	○	起点
からすると	○	○	○	○	
からすれば	○	○	○	○	
からといって	○	○	○	—	
からには	○	○	○	○	
からは	○	○	○	—	
からみたら	○	○	○	—	
からみて	○	○	○	—	
からみると	○	○	○	—	
からみれば	○	○	○	—	
かわり (に)	○	—	○	○	
くせして	○	—	○	—	
くせに	○	○	○	○	

ことか	○	○	○	—	
ことがある	○	○	○	○	
ことができない	○	—	—	△	
ことができる	○	—	○	○	
ことだ	○	—	○	○	詠嘆
ことだ	○	—	○	○	勧告
ことだ (し)	○	—	○	—	
ことだろう	○	—	○	—	
ごとに	—	—	○	○	* 1
ことにしている	○	○	○	△	
ことにする	○	○	○	○	
ことになっている	○	○	○	△	
ことになる	○	—	○	○	必然
ことになる	○	○	○	○	自然成立
ことに (は)	○	—	○	—	強調
ことには	○	○	○	—	順接・仮定
ことは	○	—	○	—	
ことはいけな	○	—	—	—	
ことはない	○	—	○	△	
ことはならない	○	—	○	—	
こともならない	○	—	—	—	
ざるを得ない	○	—	○	○	必然
ざるを得ない	○	—	○	○	肯定的意向
すえ (に)	○	—	○	—	
ずこいる	○	○	○	—	
ずこおく	○	—	○	—	
ずこおる	○	—	—	—	
ずこしまう	○	—	—	—	
ずこ (は) いられない	○	—	○	△	
ずこ (は) おかぬ	○	—	○	—	
(する) ところ	○	—	○	—	
せいか	○	—	○	—	
そばから	○	—	○	○	
だい	○	○	○	—	詠嘆
だい	○	○	○	—	疑問
だい	○	○	○	—	反駁
(たい) ものだ	○	—	○	—	
だけあって	○	○	—	○	
だけに	○	○	○	○	

だけのことはある	○	○	○	—	
たっけ	○	○	○	—	確認
たっけ	○	○	○	—	回想
だっけ	○	○	○	—	確認
だっけ	○	○	○	—	回想
だって	○	○	○	—	確認
だって	○	○	○	—	伝聞
たっていい	○	○	—	○	
たってかまわない	○	—	—	—	
たって仕様がな	—	—	—	○	* 2
たところ	○	—	○	—	
たばかり	○	○	○	○	
ため (に)	○	○	○	—	
たらしい	○	○	○	○	
たらしいけない	—	—	—	○	* 2
たらだめ (だ)	○	—	—	—	
たらどう	○	○	○	—	
つつある	○	○	○	○	
って	—	○	○	△	* 1
つもりだ	○	—	○	○	
てあげる	○	—	○	—	
てある	○	○	○	—	
ていく	○	—	○	—	
ていけない	○	—	○	—	
ていただきたい	○	—	○	—	
ていただく	○	—	○	—	
ていただけますか	○	—	○	—	
ていたところ	○	—	○	—	
ていらっしゃる	○	△	—	—	
ている	○	△	○	—	
ているところ	○	—	○	—	
ておく	○	—	○	—	
ておる	○	—	—	—	
てください	○	—	○	—	
てくださいますか	○	—	○	—	
てくださる	○	—	○	—	
てくる	○	—	○	—	
てくれ (ないか)	○	—	○	—	
てくれる	○	—	○	—	

てさしあげる	○	—	○	—	
て仕方 (か) ない	○	—	○	○	
てしまう	○	—	○	—	
て仕様がない	○	—	○	○	
てたまらない	○	○	○	○	
てちょうだい	○	—	○	—	
てならない	○	—	○	○	
ては	○	○	○	○	順接・仮定
ては	○	○	○	○	順接・確定
ては	○	—	○	—	反復
てはいけない	○	—	○	○	禁止
てはいけない	○	○	—	○	当為の否定
て (は) いられない	○	—	○	—	
てはだめ (だ)	○	—	○	△	
てはどう	○	—	○	—	
てはないか	○	○	○	—	驚異
てはないか	○	○	○	—	問いかけ
て (は) ならない	○	○	○	△	当為の否定
てはならない	○	○	○	△	禁止
てほしい	○	○	○	—	願望
てほしい	○	○	○	—	要求
て参る	○	—	—	—	
てみせる	○	—	○	—	
てみたら	○	—	○	—	
てみると	○	—	○	—	
てみれば	○	—	—	—	
ても	—	○	○	○	* 1
て (も) いい	○	○	○	○	
て (も) かまわない	○	—	○	△	
ても仕方がない	○	—	○	—	
ても仕様がない	○	—	—	○	
でもって	○	—	—	—	状態
でもって	○	—	○	○	手段・原因
でもって	○	—	—	—	境界
てもらいたい	○	—	—	—	
てもらう	○	—	○	—	
てもらえないか	○	—	—	—	
てやる	○	—	○	—	
といい	○	△	○	○	

～といい…といい	○	—	○	○	
という	○	○	○	○	同格
という	○	—	○	—	強調
ということ	○	—	○	—	
という (ことだ)	○	—	○	△	
というと	○	○	○	○	
というのは	○	○	○	—	定義
というのは	○	○	○	—	主題化
というものだ	○	—	○	△	
といえども	○	○	○	○	
といえば	○	○	○	○	
といけない	—	—	○	○	* 2
といった	○	○	○	○	同格
といった	○	—	—	—	強調
といったら	○	—	—	—	主題化
といったら	○	—	—	—	感嘆
(とい) ったらない	○	—	○	○	
といって	○	—	○	○	
といっても	○	○	○	○	
～といわず…といわず	○	—	○	○	
ときたら	○	—	○	○	主題化
ときたら	○	—	—	—	非難
とくると	○	—	—	—	
ところ (か)	○	○	○	○	継起
ところが	○	○	—	—	逆接・仮定
どころか	○	○	○	○	添加
どころか	○	○	○	○	逆接・対比
どころか	○	○	○	○	添加
ところだ	○	—	○	○	
ところで	○	○	○	○	逆接・仮定
ところで	○	○	○	○	逆接・確定
どころではない	○	○	○	○	
ところの	○	○	○	—	
ところを	○	—	○	○	
としたら	○	—	○	○	順接・仮定
としたら	○	—	○	○	順接・確定
として	○	○	○	○	資格
として	○	—	○	△	強調
としては	○	○	○	○	

としても	○	—	○	○	主題化
としても	○	○	○	○	逆接・仮定
としても	○	○	○	○	逆接・確定
とすると	○	○	○	○	順接・仮定
とすると	○	○	○	○	順接・確定
とすれば	○	○	○	○	順接・仮定
とすれば	○	○	○	○	順接・確定
とたん (に)	○	—	○	—	
と同時に	○	—	○	—	
となったら	—	—	○	○	* 1
となっては	○	—	○	—	
となると	○	○	○	○	
となれば	○	—	○	○	
との	○	○	○	○	
とのこと	○	—	○	—	
とのことだ	○	—	○	—	伝聞
とは	○	○	○	○	定義
とは	○	○	○	○	主題化
とは	○	○	○	—	感嘆
とはいへ	○	—	—	—	
とはいへながら	○	—	○	○	
とはいへものの	○	—	○	○	
とはいへ	○	—	○	○	
と (は) いて (も)	○	—	○	△	
とは限らない	○	—	○	○	
とばかり (に)	○	—	○	—	
とも限らない	△	—	○	○	
と (も) なく	○	—	○	—	
とやら	○	○	○	—	不明確
とやら	○	○	○	—	伝聞
ないか (い)	○	○	○	—	
ないかな	○	○	○	—	
ないではいられない	○	—	○	○	
ないではおかない	○	—	○	—	
ながらに	○	—	○	—	
なくてはいけない	○	—	○	△	
なくてはだめ (だ)	○	—	—	△	
なくてはならない	○	△	○	○	
なければいけない	○	—	○	△	

なければだめ (た)	○	—	○	△	
なければならぬ	○	○	○	○	
ならでは	○	—	○	△	
なり (で)	○	○	○	—	継起
なり (で)	○	○	○	—	並立
なんか	—	○	○	△	* 1
なんて	—	○	○	△	* 1
にあたって	○	—	○	○	
にあつて	○	—	○	○	
に至っては	○	—	○	○	
に至る	○	○	○	—	
に至ると	○	—	—	—	
に至るまで	○	—	○	○	
において	○	○	○	○	
に応じ (て)	—	—	○	○	* 1
におかれましては	○	△	○	—	
における	—	○	○	△	* 1
に限って	○	—	—	○	
に限らず	○	—	—	○	非限定
に限らず	○	—	—	○	添加
に限り	○	—	○	○	
に限る	—	—	○	○	* 1
にかけ (て)	○	—	○	○	終点
にかけて (は・も)	○	—	○	○	対象
にかけても	○	—	○	○	対象
にかけると	○	—	—	—	
に関して	○	○	○	○	
にきまっていた	○	—	—	○	
にきまっている	○	—	○	○	必然
にきまっている	○	—	○	○	推量
に比べて	—	—	○	○	* 1
に際し (て)	○	—	○	○	
に先立ち	—	—	○	○	* 1
に先立って	—	—	○	○	* 1
に従い	○	—	○	○	相関
に従い	○	—	○	○	順接・因果関係
に従って	○	—	○	○	相関
に従って	○	—	○	○	順接・因果関係
にしたって	○	—	○	△	主題化

にしたって	○	—	○	△	逆接・仮定
にしたって	○	—	○	△	逆接・確定
にして	○	—	○	—	手段
にして	○	—	○	—	時・場所
にして	○	—	○	—	強調
にしては	○	○	○	—	主題化
にしては	○	○	○	—	逆接・確定
にしてみても	○	—	○	—	
にしてみれば	○	—	○	—	
にしても	○	○	○	○	主題化
にしても	○	—	○	—	強調
にしても	○	○	○	○	逆接・仮定
にしても	○	○	○	○	逆接・確定
～にしても…にしても	○	—	○	△	
にしろ	○	—	—	△	主題化
にしろ	○	—	○	△	逆接・仮定
にしろ	○	—	○	△	逆接・確定
～にしろ…にしろ	○	—	—	△	
に過ぎない	○	○	○	○	
にせよ	○	○	○	△	逆接・仮定
にせよ	○	○	○	△	逆接・確定
～にせよ…にせよ	○	△	—	△	
に相違ない	○	—	○	△	
に対し(て)	○	○	○	○	対象
に対して	○	—	○	○	割合
に足りない	○	—	○	○	
に違いない	○	○	○	○	
について	○	○	○	○	対象
について	○	—	○	○	割合
につき	○	—	○	△	対象
につき	○	—	○	△	根拠
につき	○	—	○	△	割合
～につけ…につけ	○	—	○	△	
につけ(て)	○	—	○	○	関連
につけ(て)	○	—	○	○	状況
につれ(て)	○	—	○	○	相関
につれ(て)	○	—	○	○	順接・因果関係
にとって	○	○	○	○	
にとどまらない	—	—	—	○	*3 [注1]

にとり	—	—	—	○	* 2
になると	○	○	○	—	
には	○	○	○	—	
には及ばない	○	—	○	○	
にはおこなならない	○	—	○	○	
に (も) かかわらず	○	○	○	○	
に (も) なく	○	—	○	—	
によったら	○	—	△	—	
によって	○	○	○	○	手段・根拠
によって (は)	○	—	○	○	対応
によらず	○	—	○	○	対応
によらず	○	—	○	○	非限定
により	○	—	○	○	手段・根拠
により	○	—	○	○	対応
によると	○	○	○	○	手段・根拠
によると	○	—	○	—	対応
によれば	○	—	○	○	
にわたって	○	—	○	○	
にわたり	—	—	○	○	* 2
ねばならぬ	○	○	○	△	
のあまり (に)	○	—	○	—	
(の) 折から	○	—	○	○	
(の) 折こ	○	—	○	—	
のかぎり	○	—	○	—	
(の) くせして	○	—	○	—	
(の) くせに	○	△	○	△	
のこと (で)	○	—	—	—	
のだ	○	○	○	—	
のだろう	○	△	○	—	
のに対し (て)	○	—	○	○	
のみならず	○	○	○	○	
ばい	○	△	○	○	
ばかりか	○	○	○	—	(副助詞用法)
ばかりか	○	○	○	—	(接続助詞用法)
ばかりだ	—	○	○	○	* 1
ばかりに	○	○	○	—	
ばこそ	○	○	○	—	
はずがない	○	—	○	△	
はずだ	○	—	○	○	必然

はずだ	○	—	○	○	推定
べからず	○	○	○	—	
べきだ	○	—	○	○	
べきで (は) ない	○	—	△	△	
べくもない	○	—	○	—	
ほうがよい	○	—	○	○	
ほか仕方がない	○	—	—	○	
ほかない	○	—	—	○	
まいとする	○	—	○	△	
まいに	○	—	—	—	
までだ	○	○	○	○	
までのことだ	○	○	○	○	
までのこともない	△		○	○	
までも	○	○	○	—	
までもない	○	○	○	○	
まま (で)	○	—	○	—	継起
まま (で)	○	—	○	—	並立
ものか	○	○	○	—	否定
ものか	○	○	○	—	適當
ものだ	○	—	○	○	詠嘆
ものだ	○	—	○	○	本性・勧告
ものだ	○	—	○	○	回想
ものだから	○	○	○	—	
もので	○	○	—	—	
もので (は) ない	○	—	—	△	否定形による当為
ものではない	○	—	○	△	否定
ものではない	○	—	○	△	禁止
ものなら	○	○	○	○	
ものの	○	○	○	○	
ものを	○	—	—	—	順接・因果関係
ものを	○	○	○	○	逆接・確定
ものを	○	—	—	—	非難
ものを	○	—	—	—	理由・根拠
や否や	○	○	○	○	
(よ) うか	○	○	○	—	反語
(よ) うか	○	○	○	—	勧誘
(よ) うが	○	○	○	○	逆接・仮定
(よ) うが	○	○	○	—	確認
(よ) うが	○	○	○	—	後悔

～(よ)うが…まいが	○	○	○	△	
～(よ)うが…(よ)うが	○	○	○	△	
(よ)うことなら	○	—	—	—	
(よ)うではないか	○	○	○	—	
(よ)うと	○	○	○	○	
～(よ)うと…まいと	○	○	○	△	
～(よ)うと…(よ)うと	○	○	○	△	
(よ)うとする	○	○	○	○	
(よ)うとするところ	○	—	△	—	
(よ)うに	○	○	○	—	
ようにしている	○	—	△	—	
ようにする	○	—	○	—	
ようになる	○	—	○	—	
(よ)うものなら	○	○	○	○	
より仕様がない	—	—	—	○	*2
より(ほか)に仕方がない	○	—	○	○	
(より)ほか(は)ない	○	—	○	○	手段の限定
よりほか(は)ない	○	—	○	○	必然
わけがない	○	—	○	○	
わけだ	○	—	○	○	
わけではない	○	—	○	△	
わけに(は)いかない	○	—	○	○	不可能
わけにはいかない	○	—	○	○	当為の否定
わりあい	○	—	—	—	
わりに	○	—	○	○	
を介して	—	—	—	○	*3 [注2]
を駆って	—	—	—	○	*3 [注2]
を通じて	○	—	○	○	仲介
を通じて	○	—	○	○	範囲
を通して	○	—	△	○	
を問わず	○	—	○	○	
をはじめ	○	—	○	○	
をめぐる	○	—	○	○	
をめぐる	○	—	△	—	対象・関連
をもって	○	○	○	○	状態
をもって	○	○	○	○	手段
をもって	○	○	△	○	境界
をや	○	—	—	—	
をよそに	○	—	○	○	

んとする	○	○	—	—	
んばかり	○	○	○	△	強調
んばかり	○	○	○	△	アスペクト

注1 「にとどまらない」・・・相応に固定化しており、「にすぎない」などとも対比される形式としてここで取り上げてもよいと判断した。

注2 「を介して」「を駆って」・・・相応に固定化しており、「～ヲ…」型の連用辞の一つとしてここで取り上げてもよいと判断した。

3. 凡例

I. 編集方針・項目選定について

本書における記述・研究にあたっては、次のような考え方で、項目選定を行った。

まず、松木・森田(1989)で複合辞として立項されているものを基本とし、そのうち更に他のいずれかの用例集でもとりあげられている形式で、一つの複合形式として熟合度が高く、また、一般性も高いと判断されるものを、さしあたりの研究対象としてリスト・アップし、記述を開始した。1の「展開と問題点」にふれたとおり、複合辞の認定の問題は確かに基本的な問題ではあるが、当面あえて細かく議論せず、従来直観的に選ばれてきたもののうち無理がないと感じられるものの範囲の中で記述を進めることで、そこから認定の問題をも考え直そうという方針をとったものである。ただ、認定の点に関しては、残念ながら、未だ研究の及ばないところが多く、考えるべきことを適宜ノート等で覚書的に記した部分もあるが、総括した形での見解をまとめることは、今後の課題としたい。本書は、結局、理論的な考究の基礎となる各論的な記述に力を注いだ形でのいったんの結果報告である。

記述を進めるうちに、一般性の高くないものについていくつか削除したほか、当初予定していた項目のうち、終助詞的な複合辞については、今回はとり上げないこととした。談話レベルのいろいろな問題がからんでくることで、他のものとはかなり異なる考察の観点をとる必要もあり、今回は時間的にそこまでは難しいと判断されたからである。また、「のだ」などもとり上げてしかるべきだが、さすがにかなり研究の蓄積があるものでもあり、先行研究に委ねることとして省略した(ちなみに、「～している」などの「て……」型の補助動詞形式が複合辞としてとり上げられることもあるが、熟合度の点でとるべきものではないと判断し、一切とらなかった)。一方、当初採らなかつたものでいくつか注目されたものも追加した。以上のような経過で、本書のような項目でもって最終的にまとめることにした。

II. 複合辞の分類について

複合辞は、辞的形式であるから、まず、述語の部分に付加されて活用する「助動詞的複合辞」と、基本的に活用しない「助詞的複合辞」に大別することができるだろう(もっとも、「助詞的複合辞」のうち、格助詞に近いタイプの類には、その連体形式を活用的な語形変化で派生するものもあるが、述語の部分に付加されるものでないという意味でそれらを助動詞的と扱う必要はないと考えられる)。

このうち、「助詞的複合辞」については、従来、格助詞・副助詞・接続助詞といった学

校文法の助詞分類に引き付けて整理されることが多かったが、ある形式を格助詞的複合辞、別の形式を副助詞的複合辞と区別しきること、無理の出てくる面もあるので、本書では、ややゆるやかな整理として、

接続辞類：基本的に節（述語句を含む文的なまとまり）を受けて、複文前件を形成するもの。

連用辞類：基本的に名詞を受けて、述語にかかる成分を形成するもの。

連体辞類：名詞や節などをを受けて、連体修飾句を形成するもの。

文末辞類：文末に付加されて、話し手のコミュニケーション上のさまざまな気持ちを示すもの。

という四分類をとることにした。ただし、上にもふれたとおり、文末辞類（終助詞的な複合辞）については、本書の記述から外した。更に、記述の整理の便宜上、「接続辞類」と「連用辞類」については、形に即して以下のように小分けして配列した。

接続辞類 1：～ト系	「～といっても」など
接続辞類 2：～ウ系	「～（よ）うと」など
接続辞類 3：形式名詞転成系	「～うえで」など
接続辞類 4：その他	
連用辞類 1：～ニ系	「～について」など
連用辞類 2：～ト系	「～として」など
連用辞類 3：～ヲ系	「～をめぐって」など
連用辞類 4：その他	

なお、しばしば複合辞とされる形式のうち、厳密には複合辞とすべきでないが、使用度も高く注意すべきもののいくつか（もっぱら、口頭語的なもの）は、参考として付記した。

また、「助動詞的複合辞」についても、同様に形に即して以下のように小分けして配列した。

名詞複合系	「つもりだ」など
コト系	「ことがある」など
副助詞複合系	「ばかりだ」など
～ニ系	「にちがいない」など
～イイ／ワルイ系	「ほうがいい」など
その他	

こうした小分けは、一応の整理のための見通しをつけるもので、特段の理論的基準によるものではない。

Ⅲ. 項目の記述について

①見出し

「助詞的複合辞」(A 1～)と「助動詞的複合辞」(B 1～)とに分けて挙げた。数字は、それぞれの中での通し番号である。

②接続

前接する部分にどのような言葉がくるのか、形式・品詞的特徴についての情報を簡略に示した(詳しい点については、文法の項で更に説明したものもある)。なお、いささか注記しておく。

- (i) 用言等については、未然形・連用形・假定形などのどの形を承げるか、またスル形(つまり、終止一連体形)・シタ形を承げるかという点をまず、逐次記した。その他のいろいろな形についても、記すべきかもしれないが、煩瑣になりすぎるので、特に問題となる場合を除き、シテイル形・シテイタ形について併せて触れるにとどめた。接続する形が複雑な場合には、極力具体的な形を示すようにした。
- (ii) 説明に際し、「用言」「動詞」などと記しているが、特に断らない限り、「用言」「動詞」などは、「行く」「正しい」などのような単独の語に限らず、「行かせる」「正しくない」などのような使役・受身の助動詞や否定の助動詞(及び補助形容詞)などを伴った形をも指すものとしておく。
- (iii) 名詞という場合は、単独の名詞に限らず、「私の家」「色の白い花」のような修飾語を伴った名詞句をいうものとしておく。なお、名詞節という場合、特に断らなければ、「私が彼に会ったこと／の」のような「～コト」「～ノ」節をいうものである。

③意味・用法

当該形式の担う意味あるいはその用法について、まとめて示した。その際、中核となるところをおさえて示すよう努めた。また、当該形式の担う意味として記述した方が分かりやすい場合と当該形式の表現としての用いられ方として記述した方が分かりやすい場合とがあるが、それぞれ便宜に従って記述した。用例の配列は、基本的に意味・用法の記述と対応するようにして考えた。

④用例

1970年代以降の資料から、使用の実例を広く集めるとともに、実例が不足する場合には、極力自然な実例に近い作例(その旨を注記)を用意して、掲げた。資料とした主要文献は、2の「資料について」に記した通りである。また、作例については、その自然さに問題がないかを、第三者の目でチェックして、信頼度のあるものとするようにした。作例のチェックには、余田弘実氏(西山短期大学専任講師・国語学(近世語))の尽力を得た。ここに謝して、明記しておきたい。

⑤文法

当該形式の形態的なヴァリエーション(ていねい形がとれるかどうか、連体修飾の

形が取れるか、連用中止の形が取れるか、意志・命令・疑問などの形がとれるか、等々) についての情報、前後の共起関係に関わる文法情報など、文法面で注意すべき事柄を記す。また、必要に応じて、接続の部分の補足も記す。

⑥ノート

上記の項目で記述出来ない事柄、もしくは、十分な記述が出来ない事柄について、各論的に立ち入って述べた。とりわけ、類義表現との相違や用法の制限について、具体的に記すよう心掛けた。参考文献としてあげた先行研究の知見を紹介する事柄もあるが、本書の見解として新たに提出する事柄もあるので、研究的に引用する場合は、必ず参考文献の方も確認されたい。

⑦関連項目

当該形式と意味・用法等で関連する形式で、本書において立項されているものを、参考として指示した。

⑧参考文献

直接この項の記述と関連する、あるいは、この項の記述のために参照した参考文献を挙げた。巻末の参考文献リストへの参照を指示する形をとっているが、巻末のリストに上がっていないものは、ここに書誌情報も掲げた。

※付記

記述に際しては、ヴォイス（能動・受動・使役などの区別）・テンス（時制、すなわち、過去・現在・未来の時の区別）・アスペクト（完了・進行などの区別）・モード（推量・断定など文表現に係わる話し手の主観的なとらえ方の表現や伝達に際する主観的な気持ちの表現）など、ごく少しだけ専門用語を用いたが、一般の参考に供することを念頭に置いて、平易な一般的言葉づかいで書けるところは、極力そのような表現をとった。同様の趣旨で一般的な学校文法の用語を用いることが多いが、一方で学校文法で用いられない「～スル形」等といった用語を用いたところもある。不統一なのは批判のあるところかとも思うが、項目によっては、学校文法による表示の仕方あるいは学校文法によらない表示の仕方では、事柄を表すのがどうしても困難もしくは煩瑣であり、やむなく便宜に従ったものである。

なお、誤解のないよう、いくつかの用語・記号について、簡単に注記しておく。

A・B 用法のパターンを示す時に、当該形式の前後にくる言葉を一般化して、A、Bのように表示する。例えば、「AどころかB」のようにして、当該の「どころか」の前後にくる言葉を一般化して表す。なお、「～」「……」のような書き方にする場合もある。

N 用法のパターンを示す時に、名詞（体言）をこのように略記することがある。

前件・後件 複文の主節（言い切り節）の部分を後件、従属節の部分（とりわけ、

接続助詞を除いた部分)を前件と呼ぶ。例えば「春になったとはいえ、まだ寒い」の場合、「春になった」が前件、「まだ寒い」が後件にあたる。

スル形・シタ形 用言の終止・連体が同形であるその形をスル形と呼ぶ。スルで代表させるが、形容詞・形容動詞などの終止・連体同形の形もスル形である。すなわち、「歩く」「正しい」「静かである」は、いずれもスル形である（なお、「静かだ」という終止形に対しては、「静かな」という連体形が考えられるので、この場合終止・連体同形とは言えないが、便宜上「静かだ」も一応スル形としておく）。同様に用言が「タ」を伴う形がシタ形で、「歩いた」「正しかった」「静かだった」はいずれもシタ形である。また、「歩いている」「歩いていた」のような形をシテイル形・シテイタ形と呼ぶ。

4. 用例と解説

項目一覧

助詞的複合辞

接続辞類 1 : ~ト系

- A 1 ~とあって・~といても
- A 2 ~とはいえ
- A 3 ~としても
- A 4 ~とすれば・~とすると・~としたら
- A 5 ~というと・~といえ
- A 6 ~となると・~となれば・~となったら
- A 7 ~と (は) いうものの
- A 8 ~と (は) いいながら
- A 9 ~ (か) と思うと・~ (か) と思えば・~ (か) 思ったら

接続辞類 2 : ~ウ系

- A 10 ~ (よ) うと・~ (よ) うが
- A 11 ~ (よ) うものなら

接続辞類 3 : 形式名詞転成系

- A 12 ~うえで
- A 13 ~うえに
- A 14 ~うえは
- A 15 ~あとで
- A 16 ~あとに
- A 17 ~くせに
- A 18 ~そばから
- A 19 ~わりに
- A 20 ~ところを
- A 21 ~ところが
- A 22 ~ところで
- A 23 ~ごとに
- A 24 ~おりから
- A 25 ~かわりに
- A 26 ~ものの
- A 27 ~ものを
- A 28 ~ものなら

接続辞類 4・その他

- A 29 ~ては
- A 30 ~ても
- A 31 ~やいなや・~がはやいか

4 項目一覧

- A 3 2 ～にもかかわらず
- A 3 3 ～のに対して
- A 3 4 ～にしても
- A 3 5 ～だけに・～だけあって
- A 3 6 ～からには
- 参考1 ～って

連用辞類1：～ニ系

- A 3 7 ～にあたって
- A 3 8 ～にあって
- A 3 9 ～において
- A 4 0 ～に限り・～に限って
- A 4 1 ～に限らず
- A 4 2 ～に応じて・～に応じ
- A 4 3 ～にかけても・～にかけて
- A 4 4 ～にかけては
- A 4 5 ～に比べて
- A 4 6 ～に関して
- A 4 7 ～に先立って・～に先立ち
- A 4 8 ～に際して・～に際し
- A 4 9 ～に至っては
- A 5 0 ～に至るまで
- A 5 1 ～に従って・～に従い
- A 5 2 ～に対して・～に対し
- A 5 3 ～について
- A 5 4 ～につけて・～につけ
- A 5 5 ～につれて・～につれ
- A 5 6 ～にとって・～にとり
- A 5 7 ～によって・～により
- A 5 8 ～にわたって・～にわたり
- A 5 9 ～にかけて・～にかけ
- A 6 0 ～によっては・～によらず
- A 6 1 ～によれば・～によると

連用辞類2：～ト系

- A 6 2 ～として
- A 6 3 ～としては・～としても
- A 6 4 ～といえども
- A 6 5 ～ときたら
- A 6 6 ～といい～といい
- A 6 7 ～といわず～といわず

連用辞類3：～ヲ系

- A 6 8 ～を問わず
- A 6 9 ～をよそに
- A 7 0 ～をはじめ
- A 7 1 ～を通じて
- A 7 2 ～をとおして
- A 7 3 ～をめぐる
- A 7 4 ～をもって
- A 7 5 ～を介して
- A 7 6 ～を駆って

連用辞類 4：その他

- A 7 7 ～からして・～からすれば・～からすると
- A 7 8 ～でもって
- A 7 9 ～どころか
- A 8 0 ～のみならず
- A 8 1 ～とは
- 参考 2 ～なんて
- 参考 3 ～なんか
- 参考 4 ～ならでは

連体辞類・接尾辞類

- A 8 2 ～という・～との
- A 8 3 ～といった

助動詞的複合辞

名詞複合系

- B 1 ～ものだ
- B 2 ～はずだ
- B 3 ～つもりだ
- B 4 ～ところだ
- B 5 ～一方だ
- B 6 ～どころではない
- B 7 ～ほかない・～より（ほか）ない・～（ほか／より）仕方（が）ない
- B 8 ～わけだ
- B 9 ～わけがない
- B 1 0 ～わけにはいかない

コト系

- B 1 1 ～ことだ
- B 1 2 ～ことがある
- B 1 3 ～ことができる
- B 1 4 ～ことになる

4 項目一覧

B 1 5 ～ことにする

副助詞複合系

B 1 6 ～までだ・～までのことだ

B 1 7 ～までもない・～までのこともない

B 1 8 ～ばかりだ

～ニ系

B 1 9 ～に決まっている

B 2 0 ～に限る

B 2 1 ～にとどまらない

B 2 2 ～に足りない

B 2 3 ～にちがいない

B 2 4 ～にほかならない

B 2 5 ～に過ぎない

B 2 6 ～には及ばない

～イイ／ワルイ系

B 2 7 ～ほうがいい

B 2 8 ～たらしい・～といい・～ばいい

B 2 9 ～たらいけない・～といけない・～てはいけない

B 3 0 ～て（も）いい・～たっていい

その他

B 3 1 ～ても仕様がなない・～たって仕様がなない

B 3 2 ～ないではいられない

B 3 3 ～てならない・～て仕方ない・～てたまらない・～てしょうがない

B 3 4 ～といたらない

B 3 5 ～つつある

B 3 6 ～（よ）うとする

B 3 7 ～かもしれない

B 3 8 ～とは限らない・～とも限らない

B 3 9 ～得る

B 4 0 ～ざるを得ない

B 4 1 ～べきだ

B 4 2 ～なければならぬ・～なくてはならぬ

第一 部 助 詞 的 複 合 辭

接続辞類 1・～ト系

◇A 1 ～とあって・～といても

接続

文あるいは文相当の語句に付く。

意味・用法

「Aとあって／といてもB」の形で、基本的に前件Aの内容から推論される事柄を否認する意味の後件Bを導く言い方で用いられる。

用例

(1) 世の中が変わった**といても**、そこからぬけ出すことは容易ではないことを示す典型的な例を見ることができる。(太田次男「諷諭詩人白楽天」)

(2) 江戸の町は広いんだ。盲滅法走り廻ったから**といて**辻斬りに出くわすものでもなかろう。(平岩弓枝「御宿かわせみ・迷子石」)

(3) 町屋ならば町奉行所の支配下だが、大名家はもとより、旗本、御家人の屋敷には、盗賊らしい者が逃げ込んだから**といて**、いきなりふみ込むわけには行かない。(平岩弓枝「御宿かわせみ・牡丹屋敷の人々」)

(4) もっとも郵便馬車が速い**とは言っても**、法律に規定によれば一番速いギャロップで走ってはならず、それより遅いトロットで走るようになっていた。(本城靖久「馬車の文化史」)

(5) そして、見知らぬ人々に、自分が誕生日だから**といて**祝福を強制してはいけない。(柴門ふみ「恋愛論」)

(6) 「いや、そうは参りますまい。家を出た**と申しても**市太郎に落度があったわけではなし、長男は長男でござれば、〔略〕(平岩弓枝「御宿かわせみ・白い影法師」)

(7) 減税がある**といても**、消費税を上げることが前提ならば効果はない。(朝日新聞 '94.2.4)

(8) ガンだ**といても**、早期発見だ。(作例)

(9) かまうもんか。柳屋が以前の主人だ**といても**、知らん顔をしておればよいさ。(作例)

(10) 機械化が進んだ**といても**、坑内の労働はきびしい。(鶴飼信成ほか「新しい社会〔地理〕」)

(11) しかし、太陽の三〇〇倍から四〇〇〇倍の明るさがあり、遠いところでも見える**といても**、星は星である。(野本陽代「宇宙の果てにせまる」)

(12) 一句ひねる**と言っても**、俳句ではなく川柳である。(半村良「秋子の写真」)

(13) 「潜る**といても**五十センチぐらいですが、サンゴがあって、きれいなお魚が泳いでいて、それはきれいでした」(朝日新聞 '94.1.20)

(14) すぐに来て下さい。まあ、すぐ**といても**、ご無理のないぐらいで結構ですが…。(作例)

(15) 同じ東洋の漆**といても**、南北の暑い地域、たとえばビルマ、タイ、インドなどの漆の木は日本の漆よりも木が大きく、〔略〕(松田権六「うるしの話」)

(16) ニコチン酸**といっても**、たばこのニコチンと直接関係があるわけではありません。
(五十嵐脩「ビタミン」)

(17) 「**両国橋界限と申しまして**も、神田側でござんすが、吉川町に茶碗屋のあったことはわかりました。〔略〕」(平岩弓枝「御宿かわせみ・雨月」)

(18) 原子の大きさ**といっても**、原子がそれぞれ殻を持ったようなきまった形をしているという意味ではない。(大塚明郎ほか「標準高等物理 I」)

(19) お答え**といっても**、感想のようなものですね。(柴門ふみ「恋愛論」)

文法

「～だ(から)といつて(も)、……ない」といった、後件に否定が来るパターンで用いられることがもっとも普通である。前件の「～だ」という内容から、なんらかの推論が出てくることを見越して、それを「……ない」と否認するのが基本だからである。ただし、後件には、前件からの推論を否認する事実や判断もしくは(そうした判断につながる)問いが述べられるだけでなく、(5)のように、そうした判断に基づく命令・禁止や意志の表現も現れる。

「**といっても**」は、例文(4)のように「**とは**いっても」と「**は**」の入る形も可能である。また、「**といつて**」「**といつても**」は、例文(6)(17)のように、「**と申して(も)**」「**とおっしゃつて(も)**」「**といひまして(も)**」などの敬語の形がとれる。こうした点では、まだ複合辞の核となる「**いつて**」の部分に動詞的性格が残っているとも見られる。「**といつても**」には、例文(15)～(19)のように名詞などの単語を受ける用法もある((15)は「同じ東洋の漆だ**といつても**」と「**だ**」を補えるから、実質的には文相当である)。これらは、前接する語が文字どおりに、あるいは、典型的に理解されたりすることを否認する内容の叙述が以下に導かれる用法である。

ノート

1. 例文(8)(9)のように「～だ(から)といつて(も)」が、後件に否定的でない表現を導く場合がある。これらは、基本的なパターンからの一種のヴァリエーションで、(8)の場合、真の帰結「助からないわけではない」を導く別個の理由節であるべきものが後件に入った形、(9)は、「恐れることはない」といった帰結から更に展開された内容が後件に入ったものである。

2. 「**といつても**」は、どちらかというところ、「～だ**といつても**」のような、用言の終止形や名詞に付く場合が多いのに対し、「**といつて**」は「～から」の形となじみがよい。ということは、「**といつて**」は、原因－結果の関係に殊更光を当ててる言い方であり、どちらかというところ、そうした命題相互の論理関係を云々することに重点がある形式で、「**といつても**」の方は、前件に一つの事柄を取り上げて後件の事柄と対比するといった言い方であって、どちらかというところ論理よりも事実・出来事の対比に重点のある言い方かと思われる。もっとも、実際の使用においては、両者は混交しており、その違いは必ずしも明確ではないようである。

関連項目

A2 「～とはいへ」

参考文献

藤田保幸(1987)(2000)

◇ A 2 ～とはいえ

接続

文あるいは文相当の語句に付く。

意味・用法

「AとはいえB」の形で、前件A事実があることによっても、後件Bの事実は、無効にならずちゃんと存在する、という関係づけで前件と後件とを結ぶ。

用例

(1) 長年、番頭をつとめて来た**とはいえ**、もともとは先代の倅である。甲州屋を継ぐのは不思議ではない。(平岩弓枝「御宿かわせみ・独楽と羽子板」)

(2) 湖岸は、干上がっている**とはいえ**ぬかるみ、おまけにまだ雪ものこり、融水はそこから中を流れていた。(亀井節夫「日本に象がいたころ」)

(3) 自分のミスではない**とはいえ**、気が重い。(朝日新聞 '94.3.5)

(4) だが、基本的人権の保障が民主政治にとって不可欠の前提条件である**とはいえ**、他人の人権や社会の利益を侵してまで、その尊重を求めることは認められない。(辻清明ほか「政治経済 新訂版」)

(5) 円高の影響が大きい**とはいえ**、さまざまな商品が輸入品の浸透と価格競争で値下がりしているのに対し、輸入品では代替できない公共料金の割高感が目立つ結果となった。(朝日新聞 '94.9.30)

(6) 現在の日本の中年は、世代として大きく三つに分けられます。第一は、昭和20年(1945年)の終戦時までに生まれた「戦中生まれ」です。〔略〕つまり戦中戦後の激動期は両親の庇護のもとに過した**とはいえ**、終戦直後の焼け跡闇市の光景も食料難や大家族の暮らしもうっすらと記憶し、高度経済成長の時代に若年社会人として参加した体験を持つ人々です。(経済企画庁編「平成10年版国民生活白書」)

(7) しかし、いまの経済情勢は、「水準」がまだ低い**とはいえ**、「方向」としてはすでに底を打ち、上向きに転じたと判断している。(朝日新聞 '94.7.27)

(8) 西部の山地は、大盆地をはじめ、いくつもの盆地や谷がある**とはいえ**、最大幅は1,500km前後に達し、チベット一帯に次ぐ広大な山岳地帯をつくっている。(青野壽郎ほか「高校新地理B」)

(9) 負けた**とはいえ**、サッカーを心から楽しんだ男たちの顔があった。(朝日新聞 '94.7.24)

(10) 部分的**とはいえ**、野生生物保護を目的に、米国が輸入禁止による制裁措置を発動したのは初めて。(朝日新聞 '94.4.13)

(11) 若さの盛りの十七歳**とはいえ**、一二五ccのオフロード・バイクを駆っての日本一周ツーリングは、とてつもない大仕事といえよう。(田中光二「泳ぐ男」)

(12) 現存の法隆寺は、再建されたもの**とはいえ**、南北朝様式をとりいれた飛鳥建築の様式をよく示している。(宝月圭吾ほか「詳説日本史(再訂版)」)

(13) しかし、いくら「享保の改革」の緊縮財政**とはいえ**、象一頭で幕府の土台がゆるぐとは思えないから、吉宗があきたか、幕府内で苦情でもでたのであろう。(亀井節夫「日

本に象がいたころ」)

(14) 氷河時代**とはいえ**、そのころの日本には、今日では南の暖帯に行かなければ見られないような動物相が見られ、そのころ、大阪付近にはワニもすみついていた。(亀井節夫「日本に象がいたころ」)

(15) 川藤「そんな大切な子を、近所**とはいえ**、何故、剣矢にお預けになったんです？ 言わば親代わりのあなたが」(黒武洋「オアシス」)

(16) 頼れる人がいなくて困ったなんて書いたら、彼はどんな気がするだろうか、今の自分を守るため**とはいえ**、あの岡野氏の夢を破るのは耐えがたかった。(森村桂「天国にいちばん近い島」)

(17) 架空の話**とはいえ**、この映画は停滞のめだつ地方の状況と、そこに生きる人々の屈折した心理を巧みに描き出している。(朝日新聞 '94. 2. 21)

文法

後件には、平叙文の形が普通で、疑問・命令・意志などの言い方は、かなり不自然である。敬語形としては、「とは申せ」のような形が考えられるが、現代語としては、使われなくなって来ている。その点では、「といて」「といても」などより複合辞としての熟合度が高いとも見られる。例文(10)のように、形容動詞の語幹に接続したり、例文(11)～(17)のように、名詞に直接接続する例は、「部分的だ**とはいえ**」のように間に「だ」を補うことができるので、前件は実質的には文相当である。

ノート

「A**とはいえ**B」という表現では、例文(2)のように前件Aの事柄が後件Bの事柄を補足説明するような関係になる場合と、例文(1)のように前件Aの事柄と後件Bの事柄とが別個の対立するものととれる関係の場合とがある。(1)のような場合は「といても」と置き換えることができるが、(2)のような場合、置き換えは不自然である。

関連項目

A 1 「～といて・～といても」

参考文献

藤田保幸(2000)

◇ A 3 ～としても

接続

文あるいは文相当の語句に付く。

意味・用法

「A**としても**B」の形で、前件Aのような事柄が成り立つ・あるといったん考えた場合でも、それと対立する・相反する事柄として後件Bのようなことがあることを述べる。

用例

(1) けれども、私はたとえふたたび志願の機会にめぐまれた**としても**、おそらくそれを避けただろう。(三浦哲郎「忍ぶ川」)

(2) もし神があたしの夢を盗み、天上のコンピュータグラフィクスで再現した**としても**、これほどそっくりにはできないだろう。(桜井亜美「エヴリシング」)

(3) いくら俺達が知恵を絞った**としても**、おのずと限界があるからね。(涼風涼「サイバーストーカー」)

(4) 万一気付かれた**としても**、逃げるのは容易い。(築山桂「浪速の翔風」)

(5) どのような仕方でも自然から群を切り取った**としても**、そこに「ゴミ溜」が残るのは、止むを得ず、あるいはむしろ自然なのである。(養老孟司「ヒトの見方」)

(6) 老人たちが黒い服を着ているのは、スペインの田舎の特徴だ**としても**、此の町には老人しかいないのだろうか。(岸田今日子「セニシエンタの家」)

(7) 推理作家が、殺人に手を貸すために、トリックを考えてやった、というわけだから、仮りに何とか刑事責任は逃れた**としても**、道義的責任を追及され、作家生命は絶たれるのではないだろうか？(佐野洋「無事永眠」)

(8) また、経済的な問題が制度のうえで解決された**としても**、人間は親子の基本的な愛情を無視してよいのであろうか。(中村元ほか「倫理・社会」)

(9) だから、カッコいいお気に入りのクラスメイトがいた**としても**、前記のような症状が現れていなければ、それはまだ恋とは呼べぬものでしょう。(柴門ふみ「恋愛論2 応用篇」)

(10) 日本のハイビジョン方式は、ごく近い将来の次世代テレビとしては最も優れている**としても**、欧米の推進しているデジタル方式の方が将来性があるという見方は急速に強くなっている。(朝日新聞 '94.2.24)

(11) 八百四十戸、二千四百人の村人は、標高一八〇メートルから八〇〇メートルまで、八十八の集落に分散して住む。山の管理にはいい**としても**、日常生活の不便さはいうまでもない。

(12) 「点のような星が重なるのがむずかしい**としても**、もっと大きな天体なら重なるかもしれない」と考えたのが、カリフォルニア工科大学のフリッツ・ツビッキーたちである。(野本陽代「宇宙の果てにせまる」)

(13) その方向で議論をすることはできますが、かりにできる**としても**何億年先になるかわからないからです。(野崎昭弘「人工知能はどこまで進むか」)

(14) ところが電話をかけようとして十円玉がないとき、通りすがりの人に借りる**としても**、返す約束をしなければ借りられないのです。(阿部謹也「自分のなかに歴史をよむ」)

(15) そして、今つき合っている彼が退屈だ**としても**、それ以上の相手が日本に存在するかどうかということを謙虚に考えてみるのが倦怠を解決する方法でもあるのです。(柴門ふみ「恋愛論」)

(16) 核兵器禁止は早急に望めない**としても**、核兵器実験は「死の灰」によって人類に大きな被害を及ぼすので、まず核実験を停止しようとする要望は世界の世論となっている。(辻清明ほか「政治経済 新訂版」)

(17) 一朝一夕に改善は無理**としても**、できるだけ速やかに物価引き下げに努めるべきである。(朝日新聞 '94.2.21)

(18) 容疑が事実**としても**協会の金が使われたことは絶対にない」と、こわばった表情で話した。(朝日新聞 '94.12.8)

(19) 彼らがたとえ、あたしの理解できないメカニズムで生まれてきたのだ**としても**、そんなことはどうでもいい。(桜井亜美「エヴリシング」)

(20) 山火事は人間の手が増えられずに発生することがありますから、それが人為でなく、大宇宙の神秘的な現象として信じられた**としても**不思議はないでしょう。(阿部謹也「自分のなかに歴史をよむ」)

(21) マンモス象は、シベリアやアラスカで、肉や皮や毛をつけたまま氷漬けで発見されるものもあるから、その骨や歯から有機物が発見された**としても**驚くにはあたらないという人もいよう。(亀井節夫「日本に象がいたころ」)

文法

「としても」に前接する自立語は、もっぱら用言であり、終止形をとる。テンス・アスペクトや肯定否定の表現については制限はないが、「だろう」「らしい」のようなムード表現はとらない。後件には、疑問、命令や意志・希望の表現もとれる。例文(17)のように、形容動詞の語幹に接続したり、例文(18)のように、名詞に直接接続する例は、いずれも「だ」を補うことができるので、前件は実質的には文相当である。

ノート

1. 「(よ) うと」と用法が近く、書き換えが可能なことも多いが、「(よ) うと」が、基本的に前件が成り立っても、後件の成立がそれに左右されないという、後件の成立条件を問題にする言い方なのに対して、「としても」は、まず前件の事柄がある・成り立つということを設定した上で、その場合にどうであるか、前件を前提とした事柄の関係を述べる言い方である。そこで、前件の事柄があることが前提となって初めて問題になるようなことが後件に述べられるような場合は、書き換えは不可である。例えば、「もう一度そんな機会に恵まれたとしても、辞退しただろう」と言えても、「もう一度そんな機会に恵まれようと、辞退しただろう」という言い方は不自然になる。

2. 前件には、問題になる事柄が取り上げられるが、例文(19)～(21)のように、後件にはその問題性を否定するような言い方がくるパターンもある。前件と最も根本的に相対立する事柄が述べられるわけである。

関連項目

A10 「～(よ) うと」

◇A4 ～とすれば・～とすると・～としたら

接続

文あるいは文相当の語句に付く。

意味・用法

「Aとすれば／とすると／としたらB」の形で、前件Aの内容をいったんそう考えられると設定し、それに基づく、後件Bのような帰結になるという論理関係を述べる。

用例

- (1) もし勝てるとしたら、名人にこちらを若手だと思ふ油断があったときだ。(作例)
- (2) 日本列島を人体**とすれば**、七割を占める森林は体内の水分に相当し、川は血管です。(朝日新聞 '94.3.4)
- (3) 一里が約4キロである**とすると**、箱根八里は約三十余キロになる。(作例)
- (4) すべての理論、仮説、議論は、実験や観察によって入手されたデータによって、裏

付けられている、というのが、科学における前提である以上、データに信頼性が置けない**とすれば**、科学の根底から崩れることになりかねない。(村上陽一郎「科学者とは何か」)

(5) 人口が増加しないと**すれば**、日本国民1人当たりの社会資本や住宅のストックは急速に拡大することになります。(経済企画庁編「平成10年版国民生活白書」)

(6) マストドンがアメリカの化石の象を代表すると**すれば**、ステゴドンはアジアを代表する化石の象である。(亀井節夫「日本に象がいたころ」)

(7) 音が波なら光も波。波におこる現象だ**とすれば**、ドップラー効果は光でも見られるはずである。(野本陽代「宇宙の果てにせまる」)

(8) また、途中で会社を変わる人が増える**とすれば**、賃金と生産性の関係は、年功賃金にみられるような長期的な対応ではなく、より短期的な対応が求められやすくなるだろう。(経済企画庁編「平成10年版国民生活白書」)

(9) もし、この結果が正しい**とすると**、ふつうの物質だけではすべての暗黒物質を説明できないことになる。(野本陽代「宇宙の果てにせまる」)

(10) とくに、石炭にかわるエネルギー源や工業原料として重要な石油の消費量は大きく増加し、このままその傾向がつづく**とすると**、近い将来には世界の石油資源は消費されつくしてしまうと考えられている。(鶴飼信成ほか「新しい社会 [地理]」)

(11) 宇宙が膨張している**とすると**、その過去はどうだったのか。(野本陽代「宇宙の果てにせまる」)

(12) ——「無人島に何か一つだけ持っていけると**したら**、何を持っていきますか」という質問があります。(朝日新聞 '94. 11. 24)

(13) 佐伯「この砂漠にひとりの男の絵を描く**としたら**、その男はこっちに向かって来るか、それとも去っていく後姿か、どっちだと思う？」(北阪昌人「海の中の砂漠」)

(14) この自然な暮らしが将来なくなると**したら**、その写真は貴重かもしれない。(森村桂「天国にいちばん近い島」)

(15) あゆみ「あのさ……シンデレラの話に続きがあると**したら**、どんな話だと思う？」(武田百合子「コワイ童話 シンデレラ」)

(16) 夏服は今年着た三、四枚のを持って行けばいいが、船が片道二週間**とすると**、往復まず一か月、向うで一か月…、これはレッキとした旅行だ。(森村桂「天国にいちばん近い島」)

(17) 「前の三冊が総論**としたら**、今度のは各論。(朝日新聞 '94. 4. 24)

文法

前接する自立語は、もっぱら用言であり、終止形をとる。テンス・アスペクトや肯定否定の表現については制限はないが、「だろう」「らしい」のようなムード表現はとらない。後件には、疑問、命令や意志・希望の表現もとれる。例文(16)(17)のように、名詞に直接接続する例は、いずれも「だ」を補うことができるので、前件は実質的には文相当である。

ノート

「なら」としばしば置き換え可能であるが、相手の意向・主張をふまえた「なら」の場合には、「とすれば」と置き換えることはできない。例えば、「そこまでおっしゃるなら、もう一度検討しましょう」とは言えるが、これを「そこまでおっしゃるとすれば、もう一度検討しましょう」と言うと、不自然である。「とすれば」の方が、「なら」に比べ

て、話し手がいったんそうだと設定している意味合いが表に出てくるからである。そのため、例文(3)のように、前提として定義的な事柄を述べる言い方では、「とすれば・となると・としたら」の方が自然になる。

関連項目

A 3 「～としても」

参考文献

蓮沼昭子 (1985)

◇A 5 ～というと・～といえ

接続

1. 文あるいは文相当の語句に付く。
2. 単語（主に名詞句）に付く。

意味・用法

「Aというのと/といえB」は、Aの部分に文的なものを受けるか、語的なものを受けるかといった観点からみて、次の3つの場合が考えられ、それに応じてそれぞれ機能・用法を区別できる（便宜上、ここで一括して扱う）。

(1) もっぱら疑問文相当のものを受ける場合、文脈上(あるいは、通念的に)その場面で問題となってくる疑問点を自覚的にとり上げ、以下にその説明を示そうとする、一種の自問自答の言い方になる。

(2) 述語相当のものを受ける場合、恒時条件とでもいうべき状況規定になる。

(3) もっぱら語相当のものを受ける場合、連想をひき出すキーワードをもち出すものとなる。

用例

(1) 数学者だから、計算がたいへんうまいか**という**と、けっしてそうではありません。(遠山啓「コンピューターの論理」)

(2) そのこと自体に間違いがあるわけではないが、では日本は、ヨーロッパやアメリカの辿った途をそのまま後から歩いてきたのか**と言え**ば、そうではなかった。(村上陽一郎「科学者とは何か」)

(3) それが嫌か、**という**と、私はじつは嫌ではない。(柴門ふみ「恋愛論2 応用篇」)

(4) ローマ人にとってこの競技がどのようなものであったか**という**と、基本的には神事であり、皇帝が主催する国家的・宗教的な行事にほかならない。(本城靖久「馬車の文化史」)

(5) なぜ日本のサル学が世界に冠たる学問になったか**といえ**ば、日本人はおサルを人間だと思っただけですよ(大野晋(編)「対談・日本語を考える」)

(6) アッシリアにおいても舗装された道路はあったが、神殿に向かう道路に限られていた。その構造は**という**と、底に煉瓦を敷き、アスファルト・石炭・砂の混合物で固め、その上に一メートル以上の長さの石板を敷き詰めるというものである。(本城靖久「馬車の文化史」)

(7) なぜ修道院に興味をもったのか**といいます**と、私の中学生のときの体験についてお

話ししなければならないでしょう。(阿部謹也「自分のなかに歴史をよむ」)

(8) 平安時代、貴族の仕事は**といえば**せつせと恋文を書き、夜ばいすることでした。(柴門ふみ「恋愛論2 応用篇」)

(9) しかし、届いた年賀状の方は**というと**、私と夫が連記されている場合は、百パーセント夫の名が先だ。(朝日新聞 '94. 1. 10)

(10) O A 機器に強い**といえば**、事務の部局ではひっぱりだこだ。(作例)

(11) 殿の御前だ**というと**、小姓たちはひとみを据え息を凝らして微動さえおろそかにはしなかった。(菊池寛「忠直卿行状記」)

(12) なんで**切****という**ところ邪魔が入るのか、我ながらよくわからない。(栗本薫「イエロー・マジック・カーニバル」)

(13) 「年をとる**という**と、しぼんで小さくなるという印象で見られがちですが、実際は体の中に豊かな『時と光と生命の宇宙』を作り上げてゆくことだと感じます」と小野さんは言う(朝日新聞 '94. 9. 12)

(14) このごろは、日曜**という**と雨が降る。(日本国語大辞典)

(15) 北欧**といえば**バイキング。(朝日新聞 '94. 2. 19)

(16) ジャングルとか密林**という**と、木が隙間のないぐらいにあるように感じるが、丈の高い木は枝や葉はよく茂っているけれども、森の中には広々とした空間がひろがり草ができていて、けものたちの一種のたまり場になっている。(亀井節夫「日本に象がいたころ」)

(17) ハイゼンベルク博士**といえば**、くやしい思い出がある。(朝日新聞 '94. 5. 1)

(18) 不思議**といえば**岡野氏が、私をこの処女航海船に招待してくれたことこそ不思議なのだ。(森村桂「天国にいちばん近い島」)

(19) 浮世絵風景画**といえば**、だれでも北斎と広重の二人を思い出す。(井上靖「広重の世界」)

(20) ノーベル賞**という**と、白川博士は近頃どうしているのだろう。

(21) ハーレム**といえば**、観光案内書等には“なるべく行かない方がよい場所。特に夜は絶対行ってはいけない。また女の人は昼でも行かない方がよい”とされている場所である。(さくらももこ「もものかんづめ」)

文法

(1) の用法の場合、後件は全権の疑問に対する説明・答え・感想に当たる叙述が来る。従って、命令・意志などの言い方は、現れない。(2) の用法の場合も、「～という/と**といえば**」で示される条件下で、恒常的に起こる事実が述べられ、やはり、命令・意志などの言い方は、現れない。(3) の用法では、連想の飛躍の応じて、比較的文末の言い方は自由である。

ノート

1. 例文(14)は一見単語を受けているように見えるが、「日曜だ**という**と」と「だ」を補えるから、述語相当のものを承けた例といえる。

2. 「**という**と」と「**といえば**」は、あえて言えば、例文(15)のように「A**といえば**B」といった連想関係そのものをそのまま述べるような場合は「**といえば**」が自然だという印象がある程度で、全般にその用法はほとんど重なっていると考えられる。

参考文献

藤田保幸(1987)(2000)

◇A6 ～となると・～となれば

接続

1. 文あるいは文相当の語句に付く。
2. 名詞句に付く。

意味・用法

複文を構成する接続辞としての用法と、主体を提示する連用辞としての用法があるが、前者を基本と考え、便宜上ここで一括して扱う。

1. 「Aとなると／となればB」と、複文を構成して用いられ、(1)「Aという事態になった場合にはB」、(2)「Aという事柄が成り立つことになると考えるとB」といった関係を示す。

2. 「Aとなると／となればB」と、主題を示して用いられ、Aと段階的に対比される項目を想定しながら「話がAというものの段階になった場合にはB」といったニュアンスを表すものとして用いられる。

用例

(1) それにしても飲めない**となると**お茶というものはまことに恋しいもの。(森村桂「天国にいちばん近い島」)

(2) 私だけではなく、姉まで治った**となると**、もう紛れではない。(さくらももこ「ものかんづめ」)

(3) 象は一頭でもその巨体のために大へんにかさばるものであるが、それらが大集団をつくる**となると**壮観である。(亀井節夫「日本に象がいたころ」)

(4) ただ、さすがにいくらコンピュータでも、記憶している情報を全部順番に調べると**なると**、やはりかなり時間がかかるのです。(野崎昭弘「人工知能はどこまで進むか」)

(5) 紙問屋で一人前になるには十年以上かかるし、まして独立する**となれば**資本も必要だ。(半村良「秋子の写真」)

(6) 米国では一緒に住む家がない、世話する人がいない**となれば**ホームに入るのは当然と考える人が多いという。(朝日新聞 '94.10.8)

(7) 将来、人間が宇宙で生活する**となると**人工重力が必要になると思うんですが、最低どれくらいの重力が必要なのかという問題の参考になります。(朝日新聞 '94.12.29)

(8) 「もしアメリカが、人類を容赦なく破滅させるこの新兵器の最初の使用国家**となったら**、世界の世論の支持を失うことになるでしょう。(村上陽一郎「科学者とは何か」)

(9) 各勢力が入り乱れ、国連決議の違反合戦のような状況**となったら**どう対応するのか。(朝日新聞 '94.11.17)

(10) 併給停止となって、仮に片方だけの収入**となったら**、この税金などを支払うと、いったい生活費にはいくら残ることになるだろう。(朝日新聞 '94.3.29)

(11) たとえば同好会のような組織であれば、事務局だけで十分である。だが、町内自治会**となれば**どうか。やはり政治的な機構がなければ運営が難しかろう。国家**となれば**、

言うまでもない。(朝日新聞 '94.7.26)

(12) マザコン娘においてこうである。ましてや、マザコン息子**となれば**、いわんやをや、である。(柴門ふみ「恋愛論2 応用篇」)

(13) ヘールはつづけて個人からの寄付によって口径二・五メートルの反射望遠鏡の製作に着手、一九二〇年に完成させている。これだけでは満足せず、ヘールはさらに口径五メートルの望遠鏡の製作を思い立つ。しかし、五メートル**となると**かかる費用もけたちがいである。(野本陽代「宇宙の果てにせまる」)

(14) バレンタインならば、そこに、友情以上の好意があることが暗黙の了解なのだが、クリスマス・プレゼント**となると**、よくわからない。(柴門ふみ「恋愛論」)

文法

後件には、前件のことが成り立つとした場合にどうなるかという事実についての叙述・判断及びその事実をめぐる問いがくることが普通で、命令・意志などの言い方は出て来にくい。

ノート

「となると」は、基本的に「ある事態が前提として考えられることになった場合」ということを表す言い方である。考えられる事柄は、個別的な事柄の場合もあれば、一般論的な事柄のこともあり、また、仮定的に想定されるものであることもある。

参考文献

江田すみれ (1991)

◇A7 ～と(は)いうものの

接続

文あるいは文相当の語句に付く。

意味・用法

「Aと(は)いうもののB」の形で、前件Aの事柄の成立・存在を話し手として一応認めたとうえで、それにもかかわらず後件Bのようなことがあるという関係を述べる。

用例

(1) 勝った**とはいうものの**、苦しい勝利だった。(作例)

(2) 肉類や鶏卵は国内で生産される**とはいうものの**、その飼料の大部分は輸入している。(鶴飼信成ほか「新しい社会 [歴史]」)

(3) そう思って見ていると、ヒトの腸腰筋も少し小さめ**とはいうものの**、軟らかく、旨そうな筋である。(養老孟司「ヒトの見方」)

(4) いささか部厚くなった**とはいうものの**、僅か一冊の書物の中に、彼等は世界の初まりから終末までを閉じ込めてしまったのである。(養老孟司「ヒトの見方」)

(5) こうして円の対ドル価値は、二昔前に比べて、名目で四倍近くになった**というものの**、物の購買力というその実質価値からみて、この間に果たしてどれだけ変化があったといえるであろうか。(朝日新聞 '94.7.18)

(6) [気象予報士は]小学生でも資格は取れる**というものの**、実際にテレビなどで予報を出すのは難しそうだ。(朝日新聞 '94.1.7)

(7) 暑さ寒さも彼岸まで、**とはいうものの**、ゆきつもどりつして進むのが日本の春の特徴である。(朝日新聞 '94.3.18)

(8) だが、その大半は就職説明会**とは言うものの**実は単なるポーズでしかなく、幅広く学生を採用しようとの意思がみられないものばかりだった。(朝日新聞 '94.2.28)

文法

前接する自立語のテンス・アスペクトや肯定否定の表現、ムード表現については制限はないが、後件には、命令の表現はとれない。また、意志の表現をとることもかなり不自然である。

ノート

1. 単なる「ものの」と違い、「と(は)いうものの」は、話し手がその事実を一応認めているということを明示した言い方で、話し手が表面に出た表現ということができる。従って、事実関係を客観的に報告する場合は、使いにくいことがある。例えば、「以前、調べてみたものの、分からなかった」とは言えても、「以前、調べてみた**とはいうものの**、分からなかった」というのは不自然である。

2. 「とはいえ」と置き換えられる場合が多いが、前接する自立語にムードの形が出て来ている場合は、置き換えにくい。例えば「なんとかなるだろう**とはいうものの**、冷や汗ものだ」のような場合、「とはいえ」と置き換えた「なんとかなるだろう**とはいえ**、冷や汗ものだ」のような言い方はかなり不自然である。

3. 「この合宿は、研修**とはいうものの**、実際は慰安旅行だ」のような言い方で、公称と実態のずれをいう言い方があるが、このような場合は、「いう」にまだ動詞性が残っており、「研修と**一応**いうものの」のように修飾語を付加することができるし、「～**とは**いつているものの」のような同義の形のヴァリエーションもあり得る。このような例では、「**というものに**」は、まだ複合辞として十分固定化したものとは見ないほうがよさそうである。

関連項目

A 2 「～とはいえ」、A 2 6 「～ものの」

参考文献

佐竹久仁子 (1984)

◇ A 8 ～と(は)いいながら

接続

文あるいは文相当の語句に付く。

意味・用法

「Aと(は)いいながらB」の形で、前件Aのようなことが認識あるいは主張されるのに、同時にまた対立・矛盾する後件Bのようなことがあるという関係を述べる。

用例

(1) この件については、法規上の問題はない**とはいいいながら**、なお、気に掛かることも一二ある。(作例)

(2) 財布のひもは固い**といいいながら**も、行楽シーズンにはグリーン車の利用率が上がる

というご時世。(朝日新聞 '94.9.17)

(3) バイオテクノロジーが生物を活用する**といいながら**、どこかおかしいところがある
と見られたのは、それが進歩の概念の中だけで使われてきたからなのだ。(朝日新聞 '94.
6.26)

(4) 国際理解**と言いながら**、アメリカ理解にしかになっていないのも気になる。(朝日新
聞 '94.3.7)

(5) 経済大国**といいながら**物価が異常に高く、生活水準が低い日本の「ゆがみ」を再認
識しています。(朝日新聞 '94.7.28)

(6) 安全運転**とは言いながら**、きわどいプレーも目立った。(朝日新聞 '94.5.23)

文法

前接する自立語のテンス・アスペクトや肯定否定の表現には制限はないが、「だろう」
のようなムード表現は、かなり不自然である。また、後件は、意志・命令・疑問の表現を
とりにくい。

ノート

前件と後件は、基本的に一つの事柄・対象について同時に対立・矛盾して存在する二つ
の事項を述べるものである。「と(は)いうものの」と置き換えられることも多いが、「一
つのことについて」と言いにくいような場合は、置き換えは不自然である。例えば、「よ
うやく車が来たとはいうものの、まだ出発できるわけではない」のような文を「ようやく
車が来た**といいながら**、まだ出発できるわけではない」とすると、明らかに不自然であ
る。

関連項目

A 7 「～と(は)いうものの」

参考文献

丹羽哲也(1998)

◇ A 9 ～(か)と思うと・～(か)と思えば・～(か)と思 ったら

接続

用言のスル形・シタ形(シテイル形・シテイタ形を含む)を承ける。また、名詞(ある
いは、Nダなど名詞述語)を承ける。「か」を介することも介さないこともあるが、詳し
くは文法の項を参照。

意味・用法

「A(か)と思うと／(か)と思えば／(か)と思ったらB」の形で、(1)前件Aの
出来事の成立に引き続いて、多くはほぼ同時的に、後件Bの出来事が成立するという関係
を述べる。(2)前件Aの事柄がある一方で、それとは対立するような後件Bの事柄があ
ることを述べる。ただし、「(か)と思ったら」には、この用法はない。(3)前件Aのよ
うに予想・期待されたのに対し、実際は後件Bのとおり、それとは反する事柄が成り立つ
ことを述べる。

用例

- (1) 和博のやつ、出掛けた**かと思えば**、もう戻ってきた。(作例)
- (2) 何の芸もない男が、突然「セミになります」と絶叫した**かと思うと**、次の瞬間には木に飛びついて「ミーンミーン」と鳴き始めた。(さくらももこ「もものかんづめ」)
- (3) その声がだんだんちかづいてき、しだいにはっきりとしてきた**とおもうと**、ようやく目のさめたぼくのまえに、死んだジジをこわごわ抱きしめて、しゃくりあげながら、ぼくの奥さんが呆然として立っていました。(長田弘「ねこに未来はない」)
- (4) 銀色の物体は、地上に停止した**かと思うと**、やがてゆっくりハッチが開き、中から見慣れない生物が姿を現わした。(作例)
- (5) 〔地震の〕発生時、店の近くで電話していた会社員(三二)は「近くのビルのガラスが割れて降ってきた**と思うと**、ガラガラ、ガシャガシャという大きな音がして、パチンコ店がぐしゃりと崩れた」と話した。(朝日新聞 '94.12.29朝)
- (6) 深美「(苦笑)お姉ちゃんは、いいよねえ、啓介さんみたいないい人、見付けてさ、大学卒業した**と思ったら**、さっさと結婚しちゃって」(岡田恵和「彼女たちの時代」)
- (7) ピアノの音がやんだ**と思ったら**、真弓が立っていた。(向田邦子「鮎」)
- (8) 降りていって絵までかいて説明するが、その絵がなんのことが解ってもらえない、やっと通じた**と思ったら**、こんどは向うのいう意味が解らない。(森村桂「天国にいちばん近い島」)
- (9) 政治改革のやまを越えた**と思ったら**、こんどは所得税減税の財源問題。(朝日新聞 '94.2.3)
- (10) こちらの岸近くで、小舟で釣りをしている人がある**かと思うと**、向うの岸では汀を水牛を連れて歩いている人がいる。(伊藤桂一「羊蹄甲の花の蔭」)
- (11) もっと巡回を、という声を聞く**かと思うと**、交番はいつも留守だ、という文句もくる。(朝日新聞 '94.7.7)
- (12) ピアノに向かってノクターンを弾いた**と思えば**、立ち上がってバッハの平均律を論じる。(朝日新聞 '94.7.17)
- (13) そして授業中、せっせと手紙を書き回している**かと思えば**、バイト疲れで昼寝。(朝日新聞 '94.3.14)
- (14) 屹立する大断崖の裾をたどる**かと思えば**、桃の花の咲く山蔭から滝の落ちている景がみえたりする。(伊藤桂一「羊蹄甲の花の蔭」)
- (15) 140キロ台の直球を投じた**かと思えば**、スローカーブが来る。(朝日新聞 '94.10.26)
- (16) 何せ「渡る世間に鬼はない」と言う**かと思えば**「人を見たら泥棒と思え」だ。(朝日新聞 '94.5.29)
- (17) 息子は出かけたの**かと思うと**、いるのです。(朝日新聞 '94.8.24)
- (18) 初めはサスペンス**かと思うと**不倫のにおいがあったり、核家族、夫婦の愛情のあり方も出てくる。(朝日新聞 '94.2.25)
- (19) 二歳過ぎたら少しは落ち着く**かと思えば**、ますます親の目を盗んで(としか思えない)悪さに磨きがかかる。(朝日新聞 '94.3.2)
- (20) 黄色と青の格子模様**かと思えば**、真っ赤に変わったり、まさにめくるめくようなイメージが、直接、前頭葉あたりに飛び込んでくる感じだ。(朝日新聞 '94.4.4)

(21) もっと苦勞するか**と思ったら**、意外と簡単に火がついた。(朝日新聞 '94.6.5)

(22) 商品情報とうたっているから商品知識を教えてくれるの**かと思ったら**、最後に「お求めは今すぐここへ」と電話番号が出たりする。(朝日)

(23) 同窓生からの電話**かと思ったら**、不動産の売り込みだ。(朝日新聞 '94.12.23)

(24) スケボーのようにティーン遊び**かと思ったら**、意外におじさんでも楽しめそう。(朝日新聞 '94.7.17)

文法

前接する自立語は、動詞が多い。スル形・シタ形をとる場合が多いが、アスペクト形式のシテイル形や否定の形もとれる。(1)の意味では、前接語は動作・変化の意味の語がくる。(3)の意味では、前件は必ず「かと思うと／かと思えば」のように「か」を伴う形をとる。基本的には、事柄の継起や共存、期待に反する事実などの関係を述べる言い方であり、後件には、意志や命令疑問の表現はとれない。

ノート

1. (1)の意味では、後件が前件に対して同時的・直後的に読まれる例が普通だが、(4)のように前件と後件の間隔があく例も考えられ、基本的には前件のように把握される(「思う」)事態と、後件のように把握される事態とが引き続いて起こることを述べるものといえる。そして、事態の把握・認識が瞬時のもので、それが引き続くと解されるところから、前件に継起する後件が同時的・直後的に読まれやすくなるものと思われる。

2. (3)の用法は、「(か)と思うと」「(か)と思えば」よりも、「(か)と思ったら」の方が一般的である。

参考文献

馬場俊臣(1997)

接続辞類 2・～ウ系

◇A10 ～(よ)うと・～(よ)うが

接続

動詞の未然形に付く(サ変動詞については、「～シ」の形に付く)。

意味・用法

「A(よ)うと／(よ)うがB」の形で複文を形成して、仮に前件Aのような事柄があっても、(1)それには拘束されないということを述べる後件Bを導く。(2)また、前件Aに拘束されることなく、後件Bのようなことがあることになるという関係を述べる。

用例

(1) そう思った瞬間、彼が新しい恋人となにをしよう**が**知ったこっちゃない心境に達せられます。(柴門ふみ「恋愛論」)

(2) 「君がどんな夢を見よう**が**勝手だ。」(源氏鶏太「運がよかった」)

(3) 資本主義社会ですから、どこにマンションを建てよう**が**勝手だという考えもあると思いますが、自然は簡単には元に戻らないのです。(朝日新聞 '94.4.29)

(4) 御禁制の品であらう**と**民を魅了する水煙草であらう**と**かまわぬ。(築山桂「浪速の

翔風」)

(5) たとえばチェスや将棋なら、不正な手段を使わずに規則にしたがって勝てばよいので、思考の内容は同じであろうと違っていようと問題になりません。(野崎昭弘「人工知能はどこまで進むか」)

(6) 私は読みつづける。通じようと通じまいとかまいはしない。何いってるか自分でもわからないが、ワタナベ氏は訳してくれる。(森村桂「天国にいちばん近い島」)

(7) 「たてこの命を失おうと、一度も生きてことがないよりましだわ……」(桐生操「本当は恐ろしいグリム童話」)

(8) 阿片にさえ手をださなければ、どれだけ大がかりな抜け荷をたくらもうと、<別流>には青山下野守と敵対する気はなかった。(築山桂「浪速の翔風」)

(9) たかだか煙草一本であろうと、それがただならぬ気配や予感を発散させて日常を変質させていくことがある。(春日武彦「ストーカー」)

(10) いつの船で帰ろうと、君の自由だ。(森村桂「天国にいちばん近い島」)

(11) 妻子に嫌われようと、外で好きな仕事だけやってる方がずっとラクだから、そっちを選びたいという男性も、どうぞ御自由に。(柴門ふみ「恋愛論2 応用篇」)

(12) 善治「いくら金を積もうが……この旅館は渡さんぞ」(寺田敏雄「24時間だけの嘘」)

(13) 夏海が土下座をしようが、いまさら許すつもりなどなかった。(涼風涼「サイバーストーカー」)

(14) アメリカでも黙秘権は認められていますが、いったん口を開けば、被疑者であろうと被告人であろうと、うそをつけば偽証罪になる。(朝日新聞 '94.5.18)

(15) 噂がほんとうであろうとなかろうと、何かがあったことはもはや確実だったので。(長田弘「ねこに未来はない」)

(16) 塚田の家で暮らそうがどこで暮らそうが、あたしはもう長崎にはいたくなかった。(内田春菊「ファーザーファッカー」)

(17) 女は、自分が気に入らさえすれば、相手の男に恋人がいようが妻があろうが、突進する。(柴門ふみ「恋愛論」)

(18) ここでは、物理学であろうが、植物学であろうが、専攻の領域は問われなかった。(村上陽一郎「科学者とは何か」)

(19) 紙だろうが電子メディアだろうが、文字ジャーナリズムの重要性は変わらない。(朝日新聞 '94.10.18)

(20) それは「発展的」と名づけようが名づけまいが、要するに党解体を覚悟していることでもある。(朝日新聞 '94.1.11)

(21) 「売れていようが、いまいが、ファンは特別扱いしないから楽です。(朝日新聞 '94.9.8)

(22) だが、おまえが信じようと信じまいと、とにかく俺は、おまえにいつおこうと思ったことをいったまでだ。(三浦哲郎「忍ぶ川」)

文法

例文(14)～(19)のように、前件は「Aシ(よ)うと、Bシ(よ)うと」「Aシ(よ)うが、Bシ(よ)うが」のように重ねて用いることができる。後件には、意志・希望や命令、

疑問のムード表現がとれる。例文(20)～(22)のように、「Aシ(よ)うと、Aシまいと」「Aシ(よ)うが、Aシまいが」という言い方ができる。前件のような事柄の成り立つ・成り立たないにかかわらず、すなわちどんな場合でも、それに左右されない、あるいは左右されず後件のようなことになるという言い方である。

ノート

1. 前件については、不定語を含む形で、いかなる条件に当たる前件の事柄にも後件の事柄が左右されないという言い方ができる。ところで、例文(14)～(19)のように前件は重ねて用いることが出来るが、(14)(18)(19)などは重ねた一方を落として「植物学であろうが、専門の領域は問われなかった」のようにすることはできない。不定語を含む形と同様、これらのような場合も、「いかなる条件」に当たる前件の事柄にも後件の事柄が左右されないということを、前件を任意に例示するという形で述べるものと言える。例文(16)は、こういった言い方の折衷形ということが出来る。

2. 仮定条件の言い方であり、前件に実現している事実は普通はとれない。この点の「とはいへ」などとの相違である。すなわち、「彼は、悪党だとはいへ、古い友人だ」とはいえても、「彼は、悪党だろうと、古い友人だ」とはいいいにくい。ただ、いったん事実を認めて、それを踏まえて言う場合は、「彼は、確かに悪党だ。だが悪党だろうと、古い友人だ」のように可能となる。ただし、この場合は、第2文が「だが(いかに)悪党だろうと、古い友人だ」といった意味で、それがどの程度そうであってもといった仮定的な意味に関わってくるので、可となるものと思われる。例文(9)なども、一般論的な叙述だがその種の類例と考えてよいだろう。

関連項目

A2「～とはいへ・～といっても」

◇A11 ～(よ)うものなら

接続

動詞の未然形に付く(サ変動詞については、「～シ」の形に付く)。

意味・用法

「AシヨウものならB」の形で、一つの端的な事柄が生じる状況を設定し、その時は一般にどうであるかという関係を述べる。

用例

(1) 一軒おいた隣の目覚時計の鳴りっぱなしが聞えたの、石焼芋の売り子の声が変わったのと言ひ、塩村が聞えない判らないと言おうものなら父親を音痴扱いにする。(向田邦子「鮎」)

(2) 昔なら、私がこんなことを姑にいおうものなら、「よろし。あんたもう、去になはれ。船場の家風に適わん人や」の一言で実家へ戻されてしまう。(田辺聖子「姥ごよみ」)

(3) だから、もしも、「このねこ、ねずみをとったことないんだって」なんていわれようものなら、それは、どんなねこにとっても「このねこは無能よ、軽蔑すべきよ、ねこじゃないわ」と宣告されたも同然の、耐えがたい屈辱にほかならなかったのです。(長田弘「ねこに未来はない」)

(4) 衛生面で絶対間違いがあってはならない食品メーカーの立場上、「浮ついた雰囲気」はタブーで、金ボタンのスーツなど着て**こようものなら**、上司から「今日は何のお祭りかね」といやみをいわれたものだった。(朝日新聞 '94.5.10)

(5) 簡単なパスをミスし**しょうものなら**、ブーイングのトーンが高まる。(朝日新聞 '94.11.6)

(6) 「今日の料理はうまかった」と、ほめ**ようものなら**、三日後に必ず同じものを作る我が女房。(朝日新聞 '94.1.8)

(7) 授業と授業の間の十分間の休み時間は自由時間ではなく、「次の授業の準備時間」「トイレ休憩」と位置付けられる。子供たちがその時間を利用して校庭で遊ぶ**うものなら**教師から一喝される。

文法

基本的に事柄の関係を述べる言い方になり、後件は、疑問や願望、意志・命令等のムード表現を取らない。

ノート

1. 同義的な形式として「よ(う)ことなら」があるが、あまり使用頻度は高くない。
2. 「(よ)う」が推量的だが、この点は、古典語的な言い方が複合辞の中に化石的に残存したと考えられるので、「(よ)うものなら」で一つの複合辞と考えるのが妥当であろう。

関連項目

A 28 「～ものなら」、B 1 「～ものだ」

参考文献

坪根由香里 (1996)

接続辞類 3・形式名詞転成系

◇ A 1 2 ～うえで

接続

動詞のシタ形に付く。また、動作的名詞+「の」に付く。

意味・用法

「Aシタ/ノウえでB」の形で、「AすることをすませてBする」という出来事の継起関係を表す。

用例

(1) 医薬品等の製造(輸入)承認については、当該医薬品等の有効性、安全性等について、厳格な審査をした**上で**承認を与えている。(経済企画庁編「平成10年版国民生活白書」)

(2) 従来の植民地支配にかわって、1960年代には新興諸民族の独立を承認した**うえで**、政治的、経済的支配を実現しようとする新植民主義が登場した。(土井正興ほか「三省堂世界史」)

(3) しかし、その原則に則った**上で**なお、いくつかの付加的な原則がある。(村上陽一

郎「科学者とは何か」)

(4) ところが、四月もなかばすぎた日曜日、晴子が電話を掛けた**上で**、珍しく北鎌倉の私の家を訪ねてきた。(夏樹静子「鼓笛隊」)

(5) 速度のきめ方からもわかるように、ある物体の運動のようすを知るには、座標の基準をきめた**うえで**、いろいろな時刻でのその物体の位置をしらべればよい。(大塚明郎ほか「標準高等物理 I」)

(6) 製造工程は、まずガラスびんを三一四センチに砕いた**うえで**粉砕機にかけ、直径が一ミリの百分の一程度の粒子にする。(朝日新聞 '94. 11. 16)

(7) 精米で輸入されたコメは、異物を除いた**うえで**混米した日も「調整年月日」として表示する。(朝日新聞 '94. 1. 6)

(8) したがって、年度の終わり近くの委員会では、各専攻からそうした次年度の人事の書類が多数提出された**上で**、承認の手続きを行う。(村上陽一郎「科学者とは何か」)

(9) 私たちが音楽を耳にするとき、その音楽をだれが書いてだれが弾いているのかはつきりと知った**上で**聞いていることはむしろ少ないのではないか。(朝日新聞 '94. 3. 27)

(10) バフチーンは文芸作品を解釈するとき、それが創作された時代と先行する時代のなかにその作品を位置づけて解釈しようとする傾向が一般的であるとした**うえで**、次のようにいっているのです。(阿部謹也「自分のなかに歴史をよむ」)

(11) カズオとは、五歳の娘を上海の母親に預けた**上での**「再婚」だった。(朝日新聞 '94. 5. 29)

(12) 反対票を投じた議員はみな本当に真剣に悩んだ**うえでの**決断だった。(朝日新聞 '94. 1. 22)

(13) しかし、最適の炊き方が異なる米をブレンドするという発想は、とても十分な検討を行った**上での**結論であるとは信じ難い。(朝日新聞 '94. 3. 11)

(14) そのことを承知の**上で**、「国家のなかで団結した」と言うのには、それなりの理由がある。(村上陽一郎「科学者とは何か」)

(15) 住民と合意の**上で**建設を進めることを基本にしている。(朝日新聞 '94. 1. 14)

文法

前件の述語は、必ず動作的な動詞のシタ形をとるが、漢語サ変系の複合動詞の場合、例えば「検討した上で」を「検討の上で」と言い換えられるように、「語幹+の」の形をとることもできる。後件には、意志・希望や、疑問、命令の言い方がとれる。前件と後件は同一主語になる。(11)～(13)のように、「うえでの」の形で名詞にかかる用法がある。

ノート

1. 「～のうえで」と名詞を受ける場合には、主として漢語サ変動詞を形成するような動作的な意味の名詞を受ける。ただし、動作的な意味でなら「十分な話し合いのうえで合意に達した」「十分なりサーチのうえで実行に踏み切った」など漢語名詞以外がくることもある。

2. しばしば、「タうえ／のうえ」と「で」が落ちた形になる。ただ、「うえ」という形式名詞の用法は、「うえで」よりも広く、例えば「命を助けたうえ、生活費を与えた」のように、前件の事柄の加えて後件の事柄もあった・なされたといった意味でも用いられる。すなわち、「うえで」と「で」を伴う形をとることで、複合辞としての意味が明確化

されていると言える。

関連項目

A 1 3 「～うえに」、A 1 4 「～うえは」

◇ A 1 3 ～うえに

接続

動詞のシタ形（シテイタ形を含む）に付く。

意味・用法

「A うえに B」の形で、前件 A の事柄に加えて後件 B の事柄もあった・なされたという関係を表す。

用例

- (1) 地震が起こった**うえに**、大水も出た。(作例)
- (2) そして、1929年世界恐慌が始まると、それまで世界の金融の中心となっていたイギリスでは、貿易がふるわなくなった**うえに**、ドイツの銀行の破産によってドイツに貸していた資金が回収できなくなり、その結果フランスやスイスから借り入れていた資金の返済に窮するようになった。(辻清明ほか「政治経済 新訂版」)
- (3) 議員への献金を認めた**うえに**公費助成では二重取りだ。(朝日新聞 '94.2.4)
- (4) 「バブルの崩壊で、地価が安くなった**うえに**、金利が低くなった。(朝日新聞 '94.3.27)
- (5) 「けんかで引っぱたかれた**うえに**、土下座して謝れっていわれるようなもんじゃねえか」(朝日新聞 '94.11.17)
- (6) 援助がほとんどなくなった**上に**、政府軍が激しい攻撃を加えて、今日二十一日拠点陥落、全域が制圧された。(朝日新聞 '94.8.29)
- (7) 気象庁によると、連日の晴天で地表が暖められていた**うえに**、高気圧に覆われて暖かい空気が入り込んだため、高温となった。(朝日新聞 '94.7.24)
- (8) 峰男「うるせえ！何で謝った**上に**殴られなきゃなんねえんだ」(坂東賢治「美少女 H2 ソーダマシン」)
- (9) 「搭乗手続き時間の延長は」手続き事務の自動化が進んだ**うえに**、各空港でターミナルビルの整備が進み、いちいちバスに乗って航空機まで行かなくても搭乗橋で簡単に乗れるようになったためという。(朝日新聞 '94.3.16)
- (10) 第一次選考会を欠場していた**上に**、このけがで最終選考会も不参加。(朝日新聞 '94.6.15)

文法

1. 前件・後件とも、動作的述語も非動作的述語もとれる。前接する自立語のテンス・アスペクトや肯定否定の表現については制限はないが、「だろう」「らしい」のようなムード表現はとりにくい。基本的に、事柄の関係のあり方を述べる言い方なので、後件には、意志・希望や、疑問、命令の言い方はとれない。後件に推量の言い方はとれる。

2. (1)のように、前件と後件の主語は必ずしも同一でなくてもよい。

ノート

1. しばしば「地震が起こったうえ」のように、「に」なしでも用いられるが、「うえ」は「うえで」に相当する意味でも用いられるので、「に」を伴うことで、意味が明確化されるものと言える。

2. 漢語サ変系の複合動詞を受ける場合、「うえで」であれば、例えば「検討した上で」が「検討の上で」と言い換えられるように、「語幹+の」の形をとることもできるが、「うえに」では、「検討した上に」の意味で「検討の上に」とはいえない。

関連項目

A 1 2 「～うえで」、A 1 4 「～うえは」

◇ A 1 4 ～うえは

接続

動詞のシタ形に付く。

意味・用法

「A うえはB」の形で、後件Bのような認識や意志、命令や問いかけを述べるにあたり、それが、前件Aの事柄の成立をふまえたものだという関係を示す。

用例

- (1) 当事者の近藤氏が死んだ**うえは**、私もこれ以上はこだわらない。(作例)
- (2) [中村] 鷹治郎も同じように「[人間国宝] 認定を受けた**うえは**、第二の青春。若い人に負けないで、死ぬまで燃え尽きる」と勇ましい。(朝日新聞 '94.5.21)
- (3) ご承認の**うえは**、一刻も早く実施に移していただきたい。(作例)
- (4) 私も、この事件を引き受ける**うえは**、事情は十分わかっているつもりだ。(作例)

文法

前件には「スル」形「シタ」形ともにとれる。あまり自由にいろいろは言えないが、「ご承認のうえは」のように「名詞+の」を受けることもある。後件には、判断や意志、命令や問いかけの表現が出てくる。事実描写の言い方がくるのは、不自然である。たとえば、「彼も、それを知ったうえは、無理を言わないだろう」とはいえても、「彼も、それを知ったうえは、無理を言わなかった」はかなり不自然である。前件と後件は、同一主語でなくてもよい。

ノート

ほぼ同義の形式に「以上(は)」があるが、このほうが硬い言い方である。また、「うえは」は、前件の事柄が成り立つということをふまえて後件の事柄がなされるという出来事の継起を述べるものであったが、「以上(は)」の場合、前件は状態的なものでもよい。たとえば「そのことを知っている以上は、教えてやるべきだ」とはいえても、「そのことを知っているうえは、教えてやるべきだ」というのは不自然である(「そのことを知ったうえは、教えてやるべきだ」なら可になることと比較されたい)。「以上(は)」の場合、前件の事柄が、そこで生起するか否かにかかわらず、そうしてあることをふまえて、後件の事柄がなされることをいうものと言えよう。

関連項目

A 1 2 「～うえで」

◇ A 15 ～あとで

接続

動詞のシタ形に付く。

意味・用法

時間的前後関係にある二つの出来事を、「AあとでB」の形で、時間の順序に沿って述べ、順に生じた関係を表す。

用例

- (1) 彼は、近藤氏に会った**あとで**、交通事故にあった。(作例)
- (2) ふつうの細胞分裂では、分裂で生じた嬢細胞が成長して、母細胞と同じ大きさになった**あとで**、つぎの分裂が行なわれる。(石田寿老ほか「生物 I」)
- (3) [封筒を] 受取った**あとで**開いて見ると、それは秋子の写真だった。(半村良「秋子の写真」)
- (4) たとえば道で煙草をすおうとしてマッチがないとき、通りすがりの人に「すみませんが火を貸してくださいませんか」といえば、たいてい気軽に貸してくれるでしょうし、マッチで煙草に火をつけてくれた**あとで**、「ではいつ返してくださいますか」と聞く人はまずいないでしょう。(阿部謹也「自分のなかに歴史をよむ」)
- (5) 下図のように、ニンジン低温処理をしないで長日条件においたのでは花芽がつくられないが (A)、低温処理をした**あとで**長日条件におくと花芽が形成される (B)。(石田寿老ほか「生物 I」)
- (6) 誰か車ひろってよ、六本木までと、あたりを見まわして叫んだ**あとで**沙知の姿に気づく。(山口洋子「情夫 (いろ)」)
- (7) 中国は市場経済の枠組み作りを終えた**後で**本格的な高成長路線に乗せたい意向だ。(朝日新聞 '94. 3. 10)
- (8) しかし、もし月に着陸した**後で**爆発が起こっていたら、燃料不足で私たちは生還できなかった。(朝日新聞 '94. 7. 16)
- (9) 甘い物を食べた**あとで**口の中が酸っぱく感じたことはありませんか——。(朝日新聞 '94. 7. 1)
- (10) 次女は「大人は子供が寝た**後で**パーティーするの?」。(朝日新聞 '94. 2. 15)
- (11) 例えば米国では、確かに銀行制度の維持のために銀行の救済に公的資金を投入しているが、それは倒産した銀行のためであり、それも銀行の資産等をまず処分した**後での**投入である。(朝日新聞 '94. 1. 19)
- (12) 新派が男女の別れで終わるのに対し、ここでは別れた**後での**人間関係が浮かび上がる。(朝日新聞 '94. 8. 12)

文法

前接する動詞は、「したあとで」とシタ形しかとれない。また、出来事の生起を並べて言う言い方であるので、「しなかったあとで」のような形はとれない。(11)(12)のように、「あとでの」の形で名詞にかかる用法がある。

ノート

「あとで」は、「あとに」とともに、「あと」との異同が問題にされることが多いが、「あと」「あとで」「あとに」に共通することは、いずれもいつ何時という時点を明確に指定する言い方ではなく、漠然と事柄の起こる時を示すものだという点である。それ故、「10時になったあと／あとで／あとに、家を出た」のように正確な時間規定に使うと、不自然な感じになってしまう。一方、「したあと」は、「彼は彼女に会ったあと、ずっと機嫌が悪かった」のように、後件に状态的な表現が来てもいいが、「あとで」「あとに」は、生起した出来事の時間関係を述べるものだから、「ジョギングを始めたあとで／あとに、ずっと体調がよい」とすると不自然になる。（「あとで」と「あとに」の異同については「あとに」の項参照。）

関連項目

A 1 6 「～あとに」

参考文献

馬場俊臣(1996)

◇ A 1 6 ～あとに

接続

動詞のシタ形に付く。

意味・用法

時間的前後関係にある二つの出来事を、一続きの関連あるものとしてとらえ、「AあとにB」の形で、時間の順序に沿って述べ、継起的に生じたことを表す。

用例

- (1) 彼は、食事をした**あとに**、散歩に出かけた。(作例)
- (2) ③ c の試験管を、細かくくだった氷の中に入れ、よく冷やした**後に**、だ液を b と同じ量入れる。(坪井忠二ほか「新理科 2 分野上」)
- (3) ある溶液の浸透圧をはかるときに下図 a のようになりかなり多量の水が移動した**あとに**、水面の上昇が止まり、h の値がはかれるのでは、もとの溶液にくらべてかなり薄められた液の浸透圧をはかることになる。(石田寿老ほか「生物 I」)
- (4) 公立小中学校の 1 学級当たり生徒・児童数をみると、「団塊の世代」が小中学生であった**後に**急激に減少している。(経済企画庁編「平成 10 年版国民生活白書」)
- (5) 私なら手でぬぐった**あとに**すかさず指についた汁をなめたりするのだが、彼らには貧乏性という気質はないらしく、改めて前足をなめる者は見あたらなかった。(さくらももこ「もものかんづめ」)
- (6) 「酒を飲んだ**あとに**食べたら、非常にうまい。(朝日新聞 '94.10.15)
- (7) 今飽食の時代が長く続いた**後に**、コメ自由化への道が始まった。(朝日新聞 '94.3.20)
- (8) 歩いた**後に**水泳や、サイクリングを楽しむジョイアスロンも初めて行われ、約四百人が新しい市民スポーツの催しに挑んだ。(朝日新聞 '94.11.5)
- (9) 全国大会に出場する強豪チームでも、ほとんどは勤務を終えた**後に**練習し、合宿の費用を選手が分担するチームもある。(朝日新聞 '94.12.24)

(10) 経済協力開発機構（OECD）は、原発の使用済み燃料を直接捨てる方式と、再処理してプルトニウムを取り出した**あとに**捨てる方式とを比較し、プルトニウム路線は約一〇%高いとの報告書を昨年まとめた。（朝日新聞 '94.1.9）

(11) 六十五歳以上で第一線から引退した**後に**どのようなところに住みたいかという質問に対して、「住み慣れたところ」と答えた人が一番多く、六八%だった。（朝日新聞 '94.10.3）

(12) 評価が出た**あとに**読んでもらいたいと思っていた。（朝日新聞 '94.12.20）

(13) といって、国連が改革された**あとに**、どうなるかもわからない。（朝日新聞 '94.10.20）

文法

前接する動詞は、「あとで」と同様、「したあとに」とシタ形しかとれず、また、出来事の生起を並べて言う言い方であるので、「しなかったあとに」のような形はとれない。

ノート

「あとに」が単に時間的に前後関係にある出来事を生起の順に並べて述べる言い方であるのに対して、「あとに」は、時間的に前後関係にある二つの出来事を、一連のものとしてとらえて述べる言い方である。そうした、なんらか関係あるものとしてとらえる言い方であるので、話し手が関連あるものととらえにくいような出来事を並べて述べる場合は、不自然になりやすい。例えば、話し手にとって予期し難かったような事柄の継起関係で、「使ってしまったあとで返せと言われても困る」のような場合、「使ってしまったあとに返せと言われても困る」と「あとに」を使うのは、不自然である。

関連項目

A 1 5 「～あとで」

参考文献

馬場俊臣(1996)

◇ A 1 7 ～くせに

接続

用言のスル形・シタ形（シテイル形・シテイタ形を含む）に付く。また、名詞句＋「の」に付く。

意味・用法

「Aシタ／のくせにB」と複文を形成し、逆接的な確定条件を添える形で用いられ、前件Aのようなことがあるにもかかわらず、当然期待されることとに反した後件Bのようなことをすること、その行為者に対しての非難や揶揄の気持ちを表す。

用例

(1) ただ、本当は権力が欲しい**くせに**、実力の無さのために刹那的生き方を余儀なくされた若者のスネた態度でしかないなら、それはまったく、情けない。（柴門ふみ「恋愛論 2 応用篇」）

(2) どういうわけか、若い**くせに**“ワシ”という。（森村桂「天国にいちばん近い島」）

(3) ほかの二人の嫁、それぞれ家に車はある**くせに**習おうともしない。（田辺聖子「姥

ごよみ」)

(4) さて、仔ねこをくれたのは、ぼくの先輩で、すばらしい詩をかく**くせに**ぐうたらでのんべえの詩人でしたが、マージャンをやっているとき、仔ねこが三びき生まれたので、それぞれポン、ロン、チイと名づけて、ぼくたちに結婚のプレゼントだよといって、チイをくれたのです。(長田弘「ねこに未来はない」)

(5) 夏「そんな派手な頭してる**くせに**、中身は随分ジジ臭いんだねェ」(黒武洋「オアシス」)

(6) そして、女の子が一番嫌うのが、「親しくもない**くせに**いやらし気な目でなめまわすように見る男」なのです。(柴門ふみ「恋愛論2 応用篇」)

(7) 教育熱心な**くせに**、仕事、仕事で、すべては母まかせ。(朝日新聞 '94.3.20)

(8) 彼らはカレーだかなんだか知らんが、ずいぶんおいしそうな物を食べた**くせに**、まだ私のレトルトまで気になるのか。(さくらももこ「もものかんづめ」)

(9) 「なによ、いままで鷹揚な旦那面をしてた**くせに**」(山口洋子「情夫(いる)」)

(10) 「何もしなかった**くせに**格好つけて」。(朝日新聞 '94.7.20)

(11) 深美「あんたね、社会人が起きてるっていうのに、浪人の**くせに**寝てていいと思ってるの？冗談じゃないわよ」(岡田恵和「彼女たちの時代」)

(12) 「男の**くせに**モミアゲがないのはおかしい」と指摘した編集者がいた。(柴門ふみ「恋愛論」)

(13) こんな面白いものを、専門家だけに独り占めされてはもったいない、と素人の**くせに**現代語に訳しちやおうなんて、大胆なことを考えてしまいました」(朝日新聞 '94.4.24)

(14) 「なに言ってるのよ、私に収入ないってわかってる**くせに**」(森村桂「天国にいちばん近い島」)

(15) 雄太「俺……警官やめて、この旅館継ごうかなって、思って」/フミ「あんなに嫌がった**くせに**」(寺田敏雄「24時間だけの嘘」)

文法

前接する自立語(用言)は、受け身や使役、否定、過去の言い方はできるが、「～だろう**くせに**」のようなムード表現はとれない。後件には、意志の表現がとれない。また、疑問や命令の言い方も、詰問・叱責のニュアンスでないと使いにくい。(14)(15)のように、文末で終助詞的に用いられる用法もある。

ノート

逆接の確定条件を添えて期待に反した不満を述べる点では、接続助詞「のに」と共通するところがあるが、「**くせに**」は、行為者に向けた非難の気持ちが中心になる言い方である。やっていることがつじつまの合わない期待に反したものだとは批判する言い方だから、前件と後件の主体は、基本的に同一の(非難される)行為者である。この点、「のに」の場合は必ずしも同一主体でなくてもよい。従って、「彼がやったのに、彼女は知らん顔をしている」といっても、「彼がやったく**くせに**、彼女は知らん顔をしている」とはいえない。また、批判の対象となる行為者が考えにくい自然現象の場合などには、「**くせに**」の方は使いにくい。例えば、「雨が降りだしたのに、すぐやんでしまった」といっても、「雨が降りだした**くせに**、すぐやんでしまった」とはいえない。

関連項目

A 3 0 「～ても」

参考文献

今尾ゆき子(1994)

◇ A 1 8 ～そばから

接続

動詞のスル形・シタ形に付く。

意味・用法

「Aスル／シタそばからB」の形で、前件Aの出来事が成立する同一場面で同時に、それを受けて後件Bの出来事が成立することを述べる。

用例

- (1) 聞いた**そばから**忘れていたようじゃ、とても一人前にはなれないぞ。(作例)
- (2) 真一が今川焼きを焼く**そばから**、次々と優がそれを食べて行く。(作例)
- (3) 知子は四つ葉のクローバーを見つける**そばから**花かごに入れていた。(作例)

文法

前接する動詞は、アスペクトの形式はとれるが、否定の形や「だろうそばから」のようなムード表現はとれない。基本的に、事実の生起の関係を述べる言い方なので、後件には、意志・命令の表現はとれない。

ノート

「そば(側)」という語の語義が生きていて、前件と後件の出来事の成立が同一場面で同時的であり、しかも、後件の出来事が前件の出来事と関連しそれを受けたものであるという関係になる。また、前件の出来事を承けた後件の出来事の成立が、ある程度繰り返されるような意味になるのが普通である。

関連項目

A 3 1 「～やいなや・～がはやいか」

◇ A 1 9 ～わりに

接続

用言のスル形・シタ形(シテイル形・シテイタ形を含む)に付く。また、名詞句+「の」に付く。

意味・用法

「Aスル／シタ／ノわりにB」の形で、後件Bの事柄は、前件Aのような状態・資格・立場などにあったり、行為を行ったりすることから、期待・予想される程度のものとは異なるという関係を述べる。

用例

- (1) あれでも、彼は、現実主義者である**割に**、涙もろいんだ。(作例)
- (2) けれどモテてる**割には**、いつもさえない顔をしていた。(柴門ふみ「恋愛論2 応用篇」)

(3) しかし、有料老人ホームのパンフレットはこれまでとかく、「やすらぎ」「安心」「きめこまかさ」といった抽象的な宣伝文句を羅列する**わりには**、具体的なサービス内容の説明が不十分で、トラブルの原因になっていた。(朝日新聞 '94.9.30)

(4) 三年間もお世話になった**わりには**、やっと一冊という恐るべき長期計画で非常に申しわけなくも恥かしい私ですが、また次も、気長におつきあい願いたいと思っております。(さくらももこ「もものかんづめ」)

(5) 牛は早くから農耕や食肉として役立ってきた**割に**、信仰の対象となっていることが少なく、インドで神聖視されているくらいだという。(朝日新聞 '94.6.12)

(6) 稲刈りに訪れてがっかりしたのは、苦勞した**割に**雑草がかなり生い茂っていたこと。(朝日新聞 '94.10.13)

(7) しかし、健康に良いとされている**わりには**医学的根拠があまりなく、どうにもこうにもうさん臭いのが健康食品の特色なのだ。(さくらももこ「もものかんづめ」)

(8) 理工系離れといわれる**割に**、昨年は応募が定員の十倍近い大学もあったという。(朝日新聞 '94.7.1)

(9) おんち(音痴)といわれている**割には**名調子だった。(朝日新聞 '94.12.16)

(10) 出退社時間を社員の裁量に任せるフレックスタイム制の導入が進んでいる**割に**、利用されていないことが、十一日に発表された連合総合生活開発研究所の調査結果で分かった。(朝日新聞 '94.8.12)

(11) 時計は材料が小さい**わりには**価格が高く、製品の輸送費も安いので、[工場の立地が]内陸でも不利にならない。(鶴飼信成ほか「新しい社会[地理]」)

(12) また、象はからだの大きい**わりに**臆病な動物だともいわれているが、これは臆病というより用心深いといった方がよいらしい。(亀井節夫「日本に象がいたころ」)

(13) 先をゆく子は、背のひくい**わりに**肩はばがひろく、後頭部の大きく出張った軍艦頭もぼさぼさの髪で、椎茸みたいな黒い耳が左右へひろがっている。(水上勉「森」)

(14) エキセントリックな**割りには**、意外とヤワな史郎。(大石静「アフリカの夜」)

(15) 時計、電気製品のタイマーの再設定など、面倒な**割に**効果が少ない(朝日新聞 '94.6.22)

(16) D でも、馬軍団[=中国の陸上選手団名]の場合、鳴り物入りだった**わりには**、期待の世界新は出なかった。(朝日新聞 '94.10.17)

(17) 鳥は空中を飛ぶため、骨の中まですきまがあって、陸上を歩く動物と比べて、大きさの**わりに**重さが軽くなっている。(坪井忠二ほか「新理科2分野上」)

(18) 象の口は、あの大きなからだの**わりに**小さい。(亀井節夫「日本に象がいたころ」)

(19) 脱毛症は精神的な負担の重さの**割に**、周囲の理解が得られにくい。(朝日新聞 '94.5.28)

(20) これらの工場は、生産設備は大きいですが、自動化されているので、設備の**わりに**従業員は少ない。(鶴飼信成ほか「新しい社会[地理]」)

(21) でも、軽く小さく、操作が簡単で、その**わりに**写りがいいコンパクトカメラが現れて、撮影者の層は一気に広がった。(朝日新聞 '94.11.28)

文法

前接する用言は、動詞、形容詞、形容動詞も名詞述語も(連体形の形で)あるが、名詞

述語の場合、「Nデアルわりに」は「Nノわりに」の形にもなる。述語はスル形もシタ形もとることができ、アスペクト形式や否定の形もとれるが、「だろうわりに」のようなムード表現はとれない。基本的には、事実の関係を問題にする言い方なので、後件には意志や疑問、命令などの言い方はとれない。前件と後件は、同一主語となる。

ノート

後件は前件から予想されることに反したものである点で逆接的であり、「のに」と重なる部分があるが、「のに」の場合、後件は前件から予想されること全くに反したものとされるのに対し、「わりに」は、いわば前件から予想されることが十分予想される程度にそうっていないということを述べるものである。従って、前件と後件の内容の対立は、「のに」ほど著しくはならない。それゆえ、「彼は、現実主義者であるのに、ひどく涙もろいんだ」とはいえても、「彼は、現実主義者である割に、ひどく涙もろいんだ」とはいいいにくい。

関連項目

A 2 「～とはいえ」、A 1 7 「～くせに」

◇ A 2 0 ～ところを

接続

用言のスル形・シタ形（シテイル形・シテイタ形を含む）に付く。また、名詞＋「の」に付く。

意味・用法

文を受け複文を形成する場合（接続辞としての用法）と、名詞を受け副詞的規定句を形成する場合（連用辞としての用法）とがある。前者を基本と考え、便宜上ここで一括して扱う。

(1) 「AところをB」と複文を形成して用いられ、物事が前件Aのようになっている／なる段階に至ったその時点・場面でという状況説明を後件Bに添える。(2) 「Aスル／シタところをB」と複文を形成して用いられ、前件Aとして実現に近いところまで行った事柄や本来なされるべき事柄をとりあげ、それが非実現でBのようなことになったという関係を示す。

(3) 「AのところをB」と名詞を受けて、本来「Aであるはずだが、そうでなく」という条件設定の副詞句を作る。

用例

(1) サンタモニカ湾に近い、小さなプールつきの家に夫妻を訪ねると、「公園でゲートボールをしている**ところを**、広告代理店の人にスカウトされたのです」と、写真の笑顔そのままに静子が言った。(朝日新聞 '94. 8. 12)

(2) 昨年のクリスマスの日、米国バージニア州の街に捨てられ、凍死しそうになっている**ところを**、隣でほほ笑んでいる二人に助けられた。(朝日新聞 '94. 5. 5)

(3) 最近では、同じ生徒が再び被害にあったり、自転車に乗っている**ところを**ねらわれたりもしているという。(朝日新聞 '94. 6. 16)

(4) 次にお茶っ葉に熱めの湯をかけ、ふやけた**ところを**ストッキングに入れ、患部を覆

って床に就いた。(さくらももこ「もものかんづめ」)

(5) 与党の一議員は寝過ごしていた**ところを**議会公用車の運転手にたたき起こされて間に合ったという。(朝日新聞 '94.11.16)

(6) CMに出演していた**ところを**、制作プロデューサーの目にとまった。(朝日新聞 '94.7.19)

(7) 同被告は八九年五月二十四日朝、南仏ニースに近い修道院で家族と一緒にいた**ところを**逮捕された。(朝日新聞 '94.3.17)

(8) もう少しで命を失う**ところを**、危うく助けられた。(作例)

(9) 本来なら所長が挨拶すべき**ところを**、省略して先に進めた。(作例)

(10) つまり、普通七～十万円の**ところを**、土産品と同じ扱いになって手続きが簡単だということで、日本の税関への領収書に五万円以下と書く場合が多いことを指している。(朝日新聞 '94.1.7)

(11) 「山は逃げなくとも、年齢が逃げる」と、二日行程の**ところを**、一日でせかせか歩く人もあるという。(朝日新聞 '94.8.29)

文法

複文を形成する用法では、前件で「ところを」が受ける述語は、(1)の意味の場合、スル形・シタ形・シテイル形のいずれも可である。(2)の意味の場合は、スル形でないと不自然である。基本的に、前件・後件は同一の主語になる。後件には、命令・意志の表現はとれない。(この場合、「危うく」「もう少しで」とか「本来なら」などといった副詞的規定語をつけることで、意味が明確になる)。

ノート

(1)の意味の用法がもっとも基本的と思われるが、これは、時間規定であるとともに場面説明であるという二重性のある表現である。従って、その時点での事実であっても、その場面の出来事でないようなことを述べるのには用いられない。例えば、「彼はアパートを出る時に、財布を忘れた」とはいえても、「彼はアパートを出るところを、財布を忘れた」とはいえないのである。

関連項目

B 4 「～ところだ」

参考文献

加藤理恵 (1999)

◇ A 2 1 ～ところが

接続

動詞のシタ形(シテイタ形を含む)に付く。

意味・用法

「AところがB」の形で、前件のような事柄がたまたまあった時に、後件のような事実が起こったという関係を示す。

用例

(1) 試しにインターネットで豆腐を販売してみたところが、これが予想以上によく売れ

た。(作例)

(2) 「文芸部に所属していて、小説を書いた**ところが**、テレビのシナリオみたい、と言われた」ことから、進学先を日大芸術学部の文芸学科に。(朝日新聞 '94.7.23)

(3) モーツァルトが自分の《パリ交響曲》の初演の様子を父親に伝えた手紙の中には、自分の計算した効果にパリの聴衆がどんな反応を示すか不安に思っていた**ところが**、その個所で人々が拍手をしたので胸をなで下ろしたという記述が出てくる。(朝日新聞 '94.5.15)

文法

前件は、かならず「たところが／なかったところが」とシタ形を受けて用いられる。また、動詞述語は受けても名詞・形容詞述語は受けられない。つまり「彼は忙しかった／現場の責任者だったところが、親切にも時間をとってくれた」などという言い方はできない。後件には、疑問・命令・意志・推量などの表現はとれず、基本的に「だった／した」という事実の叙述・報告の表現がくる。

ノート

1. 「ところが」は、事柄の継起関係を述べるという点では、接続助詞の「と」に近く、一般に「～したところが」は「～すると」に置き換え可能である。ただ、「～すると」のように一般論的な継起関係や想定される継起関係を述べる用法は、「～したところが」にはない。つまり、「雨が降ると、蒸し暑くなる」といっても「雨が降ったところが、蒸し暑くなる」とはいえないし、「明日になると、もっと忙しくなるだろう」といっても、「明日になったところが、もっと忙しくなるだろう」とはいえない。「ところが」は、実際に起こったことの時間的な継起関係を述べるものであって、前件・後件ともに実際に起こった事柄でなければならないのである。

2. 「ところが」には、古くは逆接の用法もあったが、現代語ではこうした使い方は認められない。ちなみに、このように「ところが」は、歴史のある言い方であって、現代語としてはやや古風な語感がある。

関連項目

A 2 2 「～ところで」

参考文献

前田直子(1994b), 靄岡昭夫(1972)「『ところが』と『ところで』の通時的考察—その逆接仮定条件表現用法の成立時期をめぐって—」(「国語学」88)

◇ A 2 2 ～ところで

接続

動詞のシタ形(シテイタ形を含む)に付く。

意味・用法

「AところでB」の形で、逆接の意味で仮定条件にも確定条件にも用いられ、前件Aのような状況があった場合でも、(1)それは特に意味を持たないということ述べる後件Bを導く。(2)あるいは、それに左右されず、後件Bの事柄はそのままである・そのようなものとしてあるという関係を述べる。

用例

(1) 推論の規則をよく覚えていた**ところで**、目標がわからなければ、使いようがありません。(野崎昭弘「人工知能はどこまで進むか」)

(2) どんなに綿密な計算をした**ところで**、前提ややり方にまちがいがあれば、それにはなんの意味もないのです。(野本陽代「宇宙の果てにせまる」)

(3) いきなり文学論をかじった**ところで**、付け焼刃じゃどうしようもないし。(柴門ふみ「恋愛論」)

(4) それは、オリの中やサーカスの象だけを、いくらよく観察してみた**ところで**よい解答はでてきそうもない。(亀井節夫「日本に象がいたころ」)

(5) こんな顔色の悪い二人が健康食品を売った**ところで**売れるはずもなく、私達は経営者共々ハチノムサシの如くフェアに挑んで、死んだのである。(さくらももこ「もものかんづめ」)

(6) 「たとえそうなった**ところで**、ぼくたちにはどうすることもできないじゃないか」(高橋三千綱「花言葉」)

(7) しかしそんな事を皆様におわかり頂いた**ところで**、この先私が一体どのように生きてゆけばいいのか、という事は誰にもわからないのである。(さくらももこ「もものかんづめ」)

(8) たとえば、生まれつきの大天才で、一瞬眺めただけでどんな難解な数式もたちどころに解いてしまう人間が、〈私の東大合格体験記〉を書いた**ところで**、庶民には何の役にも立たないでしょう。(柴門ふみ「恋愛論」)

(9) 偏東風でなく西風が吹いた**ところで**、夏につややかな頬を輝かしていた婦人の、夫も息子も帰って来はしないのであった。(三好京三「地摺りの歌」)

(10) 管理人「聞いた**ところで**ほんとのこと言うとは思えなかったからねえ」(山田洋次・高橋正圀「北の夢」)

(11) もう一度、会えた**所で**、頭、大丈夫ですかって言われるのが、オチかもしれない』(北川悦吏子「もっと、ときめきを…」)

(12) どうにか人間が上陸できた**ところで**、水一滴湧き出していない島なので、生き物といえば、住みついている数十羽のカモメ、それに、さっき話した頂の一部に自生している十数本のモミの大木と、そのそばの岩にへばりついているイワヒバだけだ。(中村正軌「嘔吐の海」)

(13) 「あなた方が怪我をした**ところで**、被害者の傷が軽くなったわけじゃなし。(夏樹静子「鼓笛隊」)

(14) 何回同じ道を走っても自動車が道順を覚えてくれないように、[コンピューターが]何万回も同じ計算や推論を繰り返した**ところで**、その結果を「いつのまにか覚えてしまう」ことはありませんし、ましてや「似たような場合に応用する」ことはできません。(野崎昭弘「人工知能はどこまで進むか」)

(15) 心情的に夫婦関係を送っている男とあらためて夫婦になった**ところで**、おそらく目新しいことなどなにもないでしょう。(柴門ふみ「恋愛論」)

(16) 景気が少々上向いた**ところで**、すぐ大学卒の就職戦線が売り手市場に変わることは望めまい。(朝日新聞 '94. 4. 5)

(17) これでは法案が通った**ところで**、「祝福される脳死移植」は望むべくもないだろう。(朝日新聞 '94. 1. 26)

文法

前接する動詞は、必ず、「たところで／なかったところで」とシタ形で用いられる。「～しても」などと違い、重ねて用いることは不自然である。すなわち、「泣いても笑っても後一日だ」とはいえても、「泣いたところで笑ったところで後一日だ」とはいにくい。

ノート

「ところで」には、場所・場面を示す用法があり、その場面で期待される事柄が意識されると、「あと一步というところで、しくじった」のように、前件の場面で期待される事柄の実現が後件のように裏切られるといった意味関係を示す用法が出てくる。さらに進んで、期待はあっても結局は実現されないと見越して考える気持ちが加わって固定化したのが、複合辞「ところで」だと考えられる。

関連項目

A 3 0 「～ても」

参考文献

前田直子 (1994b)

◇ A 2 3 ～ごとに

接続

動詞のスル形に付く。

意味・用法

「AごとにB」の形で、前件Aの事柄が行われ、生じることに応じて、後件Bの事柄も行われ生じるという関係を示す。

用例

- (1) 庄九郎は、生涯のうちで十三回姓名を変えている。変える**ごとに**身分があがった。(司馬遼太郎「国盗り物語」)
- (2) 東海道から甲州にかけてばらまかれている織田家の密偵の報告は、岐阜の信長の手に入る**ごとに**、現実性のつよいものになっていった。(司馬遼太郎「国盗り物語」)
- (3) 一般的に、コピー機には1枚コピーする**ごとに**数円単位で課金されるシステムがありますが、[略] (読売新聞 '98. 10. 21朝)
- (4) フランスの一階は日本の二階にあたる。地面と同じ高さの階は、rez-de-chausse＝土間と呼び、階段を一つのぼる**ごとに**一階、二階…と階数を数えるので、日本の場合とひとつズレることになる。(玉村豊男「パリ 旅の雑学ノート」)
- (5) 19世紀前半に、西部の発展により南北の中間地帯に新しい州ができる**ごとに**、その州で奴隷制を認めるかどうか政治問題になった。(土井正興ほか「三省堂世界史」)
- (6) しかも、十字軍は、回を重ねる**ごとに**、イタリア都市や諸国の封建領主の利害に動かされるようになり、第4回十字軍のように、教皇の意向を無視して、ベネチア商人のために、東ローマ帝国のコンスタンチノーブルを攻撃して一時占領し、ラテン帝国を建てた

こともあった（1204年）。（土井正興ほか「三省堂世界史」）

（7）幕府は諸大名の配置にはとくに苦心し、関ヶ原の戦いの直後をはじめとして、機会のある**ごとに**大名に領地がえを命じた。（鵜飼信成ほか「新しい社会 [公民]」）
てきます。（「覚えたい山野草のテクニク」）

（8）一曲弾き終わる**ごとに**、作曲家の意図や、音律についての解説が入る。（朝日新聞 '94.7.17）

（9）気温は、100mのぼる**ごとに**0・5～0・6°C下がっていき、高地には氷雪気候がみられる。（鵜飼信成ほか「新しい社会 [地理]」）

（10）一步ずつ足を踏みしめる**ごとに**、まるで磁器のかけらの上を踏むような金属的な音が靴の下で鳴った。（中村正軌「嘔吐の海」）

（11）朝鮮とは、家康のとき国交を回復してから、将軍がかわる**ごとに**慶賀の使節が来る慣例となった。（鵜飼信成ほか「新しい社会 [公民]」）

（12）……ふしぎなもので、川を一つ渡る**ごとに**、自分の体がかかるくなるような気がする。（田中光二「泳ぐ男」）

（13）年齢を重ねる**ごとに**、右脳の能力は低下する。（文藝春秋、1995、10）

（14）大学三年、べつにじたばたする気はないが、やはり日を追う**ごとに**苛立つものが強まる。（野坂昭如「沼袋ぬばたまの夜」）

文法

前接する動詞は、「させるごとに」「されるごとに」といった受身・使役等の（ヴォイスの）表現はとれるが、「しないごとに」のような否定の言い方や「したごとに」のようなテンス・アスペクトのシタ形はとれない。

ノート

1. 前件の事柄について、それがあがる程度まとまった回数なされる・生じると考えられるという了解のもとに用いられる言い方である。前件の事柄に応じて、後件の事柄もなされ、生じるという関係であるが、その前件の事柄がまとまった回数なされていくと考えられるものなので、それに応じた後件の事柄も、加算的に積み重ねられて行くものと読めるのが普通である。

2. 「ごとに」には、名詞に付いて「五分ごとに」「一雨ごとに」「会う人ごとに」などと用いる用法もあるが、この場合、「一雨ごとの暖かさ」などと、「の」を伴って連体修飾にも用いられるのに対し、動詞に接続する場合には「雨が降るごとの暖かさ」のような連体修飾の言い方は不自然である。「ごとに」は、動詞に接続する接続助詞的複合辞としては固定した一つの形式であり、名詞に接続する場合の「ごと（に／の）」とは区別して考えた方がよい。

参考文献

藤田保幸（1999）

◇ A 2 4 ～おりから

接続

動詞のスル形・シタ形（シテイル形・シテイタ形を含む）に付く。また、名詞句＋「の」

に付く。

意味・用法

「Aスル／シタ／ノおりからB」の形で、「ちょうどAのような時期であるので」という前置きの状況を表す。

用例

(1) 内外に山積する諸問題を抱えている**折から**、たった二カ月での政権放棄は、長期不況下にある国民としてはたまらないし、国際的信頼の低下を思うと、憂慮に堪えない。(朝日新聞 '94.6.29)

(2) 葬式のあり方をめぐる論議が高まっている**折から**、話題になりそうだ。(朝日新聞 '94.12.17)

(3) その夏のうだるような地上の暑さに悩まされていた**折から**、洞窟調査にさそわれた時には、一も二もなく同行を希望したのであったが、いざ現地に行ってみるといささか驚かざるをえなかった。(亀井節夫「日本に象がいたころ」)

(4) コシヒカリの産地・新潟県の中之口村農協が〔3月〕23日、ひと足早くエアドーム内で田植えをした。ドームは、〔略〕温室になっており、水田は7アールある。稲刈りは7月末ごろ。コメ不足の**折から**販売も考えているが、電機代など維持管理費がかさむ。(朝日新聞 '94.3.24)

(5) 「魚価低迷の**折から**、取った魚はすぐに加工して付加価値の高い商品をつくるのが課題だという。(朝日新聞 '94.3.24)

文法

後件には、意志・疑問の表現はとれない。命令の表現もとれないが、手紙文の決まり文句としての「～(なさって)下さい」のような言い方は、極めてよく用いられる。

ノート

1. 「～折から」は、現時点の状況を取り上げる言い方である。従って、「～の折から」のように名詞を受ける場合も、状況を表す名詞がとられなければならない。単なる時を述べた名詞を受けた「春の折から」のような言い方は明らかに不自然になる。

2. 現代語としては、手紙の末文での定型的な言い方としてよく用いられる。その場合は、定型化が進み、「くれぐれもご自愛下さい」などといった限られた表現としか結びつかなくなってきている。また、近年のていねい表現多様の傾向から、「～します折から」とていねい語の「ます」を伴う形を受けることも多い。

◇A25 ～かわりに

接続

用言のスル形・シタ形(シテイル形・シテイタ形を含む)に付く。

意味・用法

「AかわりにB」の形で、(1)ある行為をなす代償として、(2)ある行為をなす代用として、の意味を表す。

用例

(1) そのため商工業者が株仲間を結ぶことを奨励して、これに特権をあたえる**かわりに**

税をとった。(鵜飼信成ほか「新しい社会 [公民]」)

(2) 座は、保護をうける**かわりに**、公家や寺社に奉仕し、製品や貨幣を上納した。(鵜飼信成ほか「新しい社会 [公民]」)

(3) 大きな博物館を建てる**かわりに**、人の生活と生産の現場そのものを博物館として見直し、活用していこうという「エコ・ミュージアム」(生活・環境博物館)の試みが、各地で進められている。(朝日新聞 '94. 1. 22)

(4) 検地によって、農民は自分の耕作する土地に対する権利が認められた**かわりに**、きまった年貢をきびしくとりたてられるようになった。(鵜飼信成ほか「新しい社会 [公民]」)

(5) できるだけ多くの人に読まれるように、とのねらいで文章量は昨年の半分以下にした**かわりに**グラフをふんだんに採り入れた。(朝日新聞 '94. 5. 17)

(6) 米国の金融緩和期は、景気回復をもたらした**代わりに**、巨額の投機資金を生み出すミニ「バブル期」でもあった。(朝日新聞 '94. 7. 1)

(7) 一般会計予算約四十億円の村にとって、負担も大きい**代わりに**期待も大きかった。(朝日新聞 '94. 5. 20)

(8) 逆に、年金だけで生活するお年寄りとか、就業時間に縛られることの少ない主婦・学生などは、お金がない**代わりに**暇があるから、安い店をあちこち探し、かつ値引き交渉などにも時間をかけることができる。(朝日新聞 '94. 5. 27)

(9) パチンコ屋で一日中過ごす**代わりに**、子供をあやし続ける無職の男性が増えるはずである。(柴門ふみ「恋愛論2 応用篇」)

(10) これには、機械化が進んで、以前のように寒いドームで観測する**かわりに**、コントロール室でモニターを見るようになったせいもあるかもしれない。(野本陽代「宇宙の果てにせまる」)

(11) また教師が児童らをしかる**代わりに**罰金を求める傾向も父母には不評で、通知は「学校はいかなる名義や理由でも児童、生徒に罰金を科してはならない」と明記した。(朝日新聞 '94. 12. 21)

(12) M6—7クラスの地震が数回起きる**代わりに**、俗に「ビッグ・ワン」と呼ばれるM7・5—8クラスの大地震に見舞われる可能性もあるという。(朝日新聞 '94. 3. 7)

文法

前接する用言は、もっぱら意志・動作を表す動詞であるが、形容詞の場合もある。「しないかわりに」と否定形もとることができるが、「ているかわりに」といったアスペクト形式はとりにくい。(2)の意味では、「するかわりに」とル形しかない。

ノート

1. たとえば、「資金を出すかわりに、自分も参加した」という場合、(1)の意味にも(2)の意味にもとれて両義的になるが、この時「資金を出す」ことについては、(1)の「代償」の意味では実現しており、(2)の「代用」の意味では実現していないという正反対のことになる点は注意する必要がある。

2. 「かわりに」の「かわり」には、名詞としての実質性がかなり残っているように感じられるが、「あいだに」などと比べると、「そこへ行く間に」は、「そこへ行く、わずかの間に」と、さらに修飾句が加えられるのに対し、「電話をするかわりに」のような場合、「電話をする、ひとつのかわりに」などと修飾句を加えることはできず、「かわりに」が

単一の用言を受けて付加的な修飾句を形成する形式として固定化していることがうかがわれる。

◇ A 2 6 ～ものの

接続

用言のスル形・シタ形（シテイル形・シテイタ形を含む）に付く。

意味・用法

「～スル／シタものの……」の形で、事実として～ということは確かにあるが、そこから予想・期待されることとは違い……だという関係を述べる。

用例

(1) この後、尚侍に少しの逡巡が見られる**ものの**、みかどの熱い気持ちに流され、二人の関係は親密さを加えて行く。(河合隼雄「とりかへばや、男と女」)

(2) 月に一度、大好きな歌舞伎を観に行くときだって、着物こそ着替えて割烹着のかわりに羽織をつける**ものの**、頭はそのまま、まして香水なんぞ匂わせることは間違ってもなかった。(ねじめ正一「高円寺純情商店街」)

(3) また、他の「わざ」の世界での芸談からもうかがわれるように、どの世界においても「わざ」の習得は師匠の「形」の模倣から出発しはする**ものの**、究極を目指すところは「形」そのものの完璧な模倣とは異なるようらに思われる。(生田久美子『『わざ』から知る』)

(4) そう思って見ていると、ヒトの腸腰筋も少し小さめとはいう**ものの**、軟らかく、旨そうな筋である。(養老孟司「ヒトの見方」)

(5) ケイ子は「ウン」と返事をした**ものの**黙って正一の脇に立ったままである。(めじめ正一「高円寺純情商店街」)

(6) 中納言の中将に対する疑いは、中将が四の君のところ忍んでいて、あやうく中納言に見つかりそうになり、あわてて退散した**ものの**、そこに忘れていった扇のために、決定的なことになる。(河合隼雄「とりかへばや、男と女」)

(7) それに、当初、商品化の話に積極的に乗ってきたメーカーは、公には、その繊維のもつ毒性を否定した**ものの**、あの虹色の絹が何の問題も持ってないとは、決して考えていなかったのである。(篠田節子「絹の変容」)

(8) 「交通・通信」は携帯電話等の通信費が増えている**ものの**、自動車等の購入費が大幅に減少したため、支出の増加はわずかであった。(経済企画庁編「平成10年版国民生活白書」)

(9) 荘園整理は摂関家の抵抗もあって、必ずしも十分な成果をあげられなかった**ものの**、今まで摂関家の権勢にたよっていた地方豪族は、荘園整理によって公領を回復することのできた受領層とともに、摂関家の関与をうけない後三条天皇をたよるようになっていった。(宝月圭吾ほか「詳説日本史(再訂版)」)

(10) ふつうの物質とほとんど相互作用をしないために、その検出はきわめてむずかしい**ものの**、不可能ではない。(野本陽代「宇宙の果てにせまる」)

(11) 企業の規模は小さい**ものの**独自のノウハウを誇る中堅企業やすき間産業、地場産

業などが多い。(朝日新聞 '94.6.25)

文法

前接する用言は、「するものの」「したものの」の両形がとれる。また、「しないものの」「しなかったものの」と、否定の形もとれるが、「だろうものの」のような推量の形はとれない。

ノート

事実の関係を表す言い方である。そこで、「ひょっとすると彼が来るものの、問題はない」のように、前件に仮定的な内容が来るとおかしくなる。(同じ逆接的な言い方でも、「ひょっとすると彼が来るが、問題はない」ならおかしくないことと比較せよ。) また、後件には、疑問や推量の表現が来るのも不自然で、「彼に会ったものの、何も言わなかった」といっても「彼に会ったものの、何も言わなかったか／何も言わなかっただろう」というのはおかしい、命令・禁止や意志の表現が来る「彼に会うものの、何も言うな／何も言わないつもりだ」といった言い方も不自然である。

関連項目

A 27 「～ものを」、B 1 「～ものだ」

参考文献

坪根由香里 (1996)

◇ A 27 ～ものを

接続

用言のスル形・シタ形（シテイル形・シテイタ形を含む）に付く。

意味・用法

「AものをB」の形で、Aであるのが間違いないところなのに、それに反してBという関係を表す。

用例

- (1) 大人しくいうことをきいていればそれですんだ**ものを**、逃げようなどとしたから斬られたのだ。(作例)
- (2) 迷ったら、人に聞けばいい**ものを**、それがなかなかできない男なんだ。(作例)
- (3) 痛けりや痛いと言えば良い**ものを**、痛い方が効くのかも、という錯覚が私に我慢をさせてしまう。(さくらももこ「もものかんづめ」)
- (4) この若さを感謝すればいい**ものを**、サナエは例のごとく眉間に豎ジワを寄せ、「奥さま、水子供養、っていうのは大切なんですよ、このマンションの裏山に水子地蔵がありますけど、お正月には拝まれた方がええことありませんか」 などという。(田辺聖子「姥ごよみ」)
- (5) すぐに手を打てば助かるはずの**ものを**、みすみす見殺しにしてしまった。(作例)
- (6) こうやって、話が合う者同士好きで寄り集っておる**ものを**、何も傍から見て散れ、散れなどと口出しし、干渉することはないのだ。(筒井康隆「日本古代SF考」)

文法

前接する用言は、スル形、シタ形の両形がとれ、「しないものを」「しなかったものを」

と、否定の形もとれる。推量の形は、「だろうものを」のような不確実な意味のものはとりにくいが、「にちがいないものを／はずのものを」のような強い推量・必然の意味のものはとりやすい。

ノート

「するものを／したものを・」という言い方は、「するものだ。それを…」と言い換えられることが普通である（例文(1)なら、「大人しくいうことをきいていけばそれですむものだ。それを、逃げようなどとしたから斬られたのだ」と言い換えても、ほぼ同義である）。すなわち、「ものを」は、「概して、前件のようなことがいえる、それなのに（そうしなかった）」というような関係を示す形式と言える。それゆえ、「もっと早く言ってくればよかったものを」のように、文末用法で悔やむあるいは残念なといった気持ちを示すものとしても用いられる。

関連項目

A 2 6 「～ものの」、B 1 「～ものだ」

参考文献

坪根由香里（1996）

◇ A 2 8 ～ものなら

接続

動詞のスル形（シテイル形を含む）に付く。

意味・用法

「AものならB」の形で、実現可能性が低いと考える事柄を仮定して表す。

用例

- (1) 彼に会える**ものなら**、ぜひ会いたい。（作例）
- (2) この忙しさから逃れられる**ものなら**、なんだってしよう。（作例）
- (3) 奇跡がおこる**ものなら**、どうか彼女の命が助かってほしい。（作例）
- (4) できる**ものなら**今だけ私の脳と父の脳を瞬間移動させたい。（さくらももこ「もものかんづめ」）
- (5) 訳せる**ものなら**片仮名の言葉は使いたくないが、そうもゆかぬことがある。（朝日新聞 '94. 5. 14）
- (6) どうか許される**ものなら**、あなた方の子育ての手助けをほんの少しばかりさせて下さいな。（朝日新聞 '94. 8. 31）
- (7) 『やれる**ものなら**やってみろ』と言いたい」（朝日新聞 '94. 10. 31）
- (8) 一方、空襲で死んでいった人々もまた、語れる**ものなら**、訴え、要求したいことがいっぱいあるだろう。（朝日新聞 '94. 3. 10）

文法

前接する動詞は、「～できるものなら」といった可能表現か、話し手が自由にできない事柄の自然生起といったような内容の表現をとる。「～シタものなら」のようなシタ形や「～だろうものなら」のようなムード表現はとれない。後件には、意志・希望、疑問や命令の表現をとることが多い。

ノート

1. 前件と後件の時間関係は、前件の事柄が後件の事柄に先行するのが普通だが、「確実にこの土地の地価があがるものなら、今からこの土地を買っておくのだけれど」のように、後件の事柄が前件の事柄に先行するものであることもある。

2. 可能性の低いと思われることをめぐり、それでも可能性を希求して慣用用法として「できるものなら（…したい）のような言い方や「行けるものなら行こう」のような繰り返し繰り返し繰り返し表現を用いて、「やれるもんならやってみろ」というように可能性はないということを強調・誇示するような言い方もなされる。

関連項目

B 1 「～ものだ」

参考文献

坪根由香里（1996）

接続辞類 4 ・ その他

◇ A 2 9 ～ては

接続

動詞の連用形（「シテイル」の連用形「シテイ」を含む）に付く。

意味・用法

「AてはB」の形で、（1）前件Aの事柄があることを前提にすると、期待される・望ましい形と反する帰結になるという関係を表す。（2）前件Aの事柄の認識のもとで、必然的に後件Bのような判断が出てくるという関係を表す。

用例

- (1) こんなに曇**っては**、何も見えないよ。（作例）
- (2) 直接所長のところへ行**っては**、話がこじれるだけだろう。（作例）
- (3) その点を明らかにしなく**ては**、解決のメドは立たない。（作例）
- (4) 「若旦那が今のお年であんなに堅く**ては**将来が心配ですよ。〔略〕」（川口松太郎「はだか修行」）
- (5) 「予算をいただいている身で増やせ、とは言わないが、防衛予算が減る上に、一度決まった計画も見直しで毎年じりじり減らされ**ては**、事業計画も立たない」。（朝日新聞 '94. 12. 20）
- (6) こう言**ては**自慢になるが、私の主人はそんな小学生が使うようなダジャレを言うほどバカではない。（さくらももこ「もものかんづめ」）
- (7) 女の子にほめられ**ては**、ぼくだってうれしい。（作例）
- (8) それを聞いて**は**、黙ってられない。（作例）
- (9) 困ったな、行く先が判**ては**隠し切れませんので申し上げます。（川口松太郎「はだか修行」）
- (10) 〔略〕「八カ月間、お互いに努力して政権を支えてきたのに、ここまで信頼関係を壊され**ては**政権離脱しか選ぶ道はない」。（朝日新聞 '94. 4. 26）

(11) 「〔略〕 今回のこの警告を無視し、残金を支払っていただけないのなら、こちらとしましては法の力に訴えるしかございません。そうなる前にすみやかに残金を支払って下さい」……法の力まで持ち出されては、私も驚いてすみやかに郵便局へ直行するしかなかった。(さくらももこ「もものかんづめ」)

(12) あんまり頼っちゃ迷惑なのだ。(森村桂「天国にいちばん近い島」)

(13) 当時はそのくらいインパクトのある“あなた”だったのだろうが、一生の私の事まで語られちゃ、未来の私も困惑する。(さくらももこ「もものかんづめ」)

(14) 岩丸「そんなとこでそんなことされちゃ、他のお客さんが怖がって入って来れないでし(大森寿美男「夜逃げ屋本舗」)

(15) 一郎「そんな、借金なんかで死んじゃだめだよ」(大森寿美男「夜逃げ屋本舗」)

文法

前件には、否定の形もとれなる。後件には、命令、意志・希望や疑問の表現が取れない。口語的な形として「ちゃ(連濁して「じゃ」)」の形もある。

ノート

1. (1) の意味では、確定条件の場合も仮定条件の場合もあるが、(2) の意味では、確定条件しかない。(2) の意味では、必ずしも後件が望ましいことと反する内容になるわけではない。また、(2) の意味の場合、「しては」は、「した以上」と書き換えられることが多い。

2. 「ては」という形には、「その店に行ってはコーヒーを飲んだ」のような反復動作を示す用法もあるが、この場合「その店に行ってコーヒーを飲んだ」のような「は」を外した形の言い方も成り立つので、複合辞ではなく、接続助詞「て」に「は」が添えられたものと考えておく。

関連項目

A 3 0 「～ても」

参考文献

蓮沼昭子(1987)・塩入すみ(1994)

◇ A 3 0 ～ても

接続

用言の連用形(「シテイル」の連用形「シテイ」を含む)に付く。

意味・用法

「AてもB」の形で、前件Aのようなこと前提にした場合でも、後件のBとおりに、予想・期待される帰結にならないという関係を表す。

用例

(1) 椅子にあんまり深く腰かけてしまったものだから、ドアがあい**ても**、すぐに立ち上がれない。(森村桂「天国にいちばん近い島」)

(2) 大体、最近の傾向として、よその子が悪いことを**しても**、注意してやろうともしない人が多い。(澤野久雄「小さな林檎の実から」)

(3) 夏期休暇制度のせいか、車内は空いており、新聞を大きく開い**ても**他人に迷惑をか

ける心配はなかった。(石川喬司「彗星伝説」)

(4) 黒みつは、できたては薄いようにみえて**ても**冷えると濃度がつくの心配ない。「(なつかしい手作りおやつ)」

(5) 免許停止期間がすぎ**ても**、しばらくはハンドルに触れようとしなかった彼女だが、ぼちぼちまた自分の車を運転し始めた。(夏樹静子「鼓笛隊」)

(6) 「実は彼女、去年まで人事部にいまして、リサーチにかけては、こう見えて**ても**、プロなんです」(大森寿美男「夜逃げ屋本舗」)

(7) ある一つの種類の個体数が、一時期に急にふえるようなことがあ**っても**、これをおさえるような作用が起こって、もとの個体数にもどる場合が多い。(坪井忠二ほか「新理科2分野下」)

(8) いわば、象の心臓はおとなになっ**ても**発育の初期の段階あるいは原始的な形態をのこしているというのが特徴なのである。(亀井節夫「日本に象がいたころ」)

(9) 「あたし、結構強いんだ。君と飲み比べして**ても**、たぶん負けなと思うよ」(黒武洋「オアシス」)

(10) 預金の一つ一つは少ない額であ**っても**、銀行に集められると多額の資金になる。(鶴飼信成ほか「新しい社会 [歴史]」)

(11) しかしながら、職業が人間と社会とを結びつける本質的な活動である以上、いかに報酬が多く、また安定して**いても**、その職業それ自体に、誇りも喜びも、また人生の積極的価値をも見だしえないとすれば、人間は満足できないのがふつうである。(中村元ほか「倫理・社会」)

(12) 例えば、びんの中でろうそくを燃やすとき、ろうそくが残っ**ても**、火は消えてしまう。(坪井忠二ほか「新理科1分野上」)

(13) 「自分で決めたことだとは判っ**ても**、近頃少し、考えてしまう……」(北川悦吏子「もっと、ときめきを…」)

(14) 好きでも何でもない相手から一方的に愛情を注がれ**ても**、その人の内部では何の心的変化もありません。(柴門ふみ「恋愛論」)

(15) このように、受容体から神経をへて、大脳の中枢にいたるどの部分が、どのような方法で刺激され**ても**、同種の感覚を生ずることをミュラーの法則という。(石田寿老ほか「生物I」)

(16) そこで、結論からいえば、若い時に内面を磨**いても**、外面を磨**いても**、結果としてはモテるのだということである。(柴門ふみ「恋愛論」)

(17) 同行した友人は英語が堪能なので生き生きとしていたが、私はミュージカルを観**ても**買い物に出かけ**ても**全然面白くなく、ただただハンバーガーと野菜サラダを吸収する肉塊と化していた。(さくらももこ「ものかんづめ」)

(18) たとえ国家の元首が、国王であ**っても**大統領であ**っても**、実質的に見て議会が国権の最高機関であれば、代議政治が成立しているといつてよい。(辻清明ほか「政治経済新訂版」)

文法

前件は、「AシてもBシても」と重ねて用いることが出来る。後件には、意志・希望や命令の表現はとれない。

ノート

期待に反するという点では、「のに」についても同様の語感があり、その異同が問題になるが、「ても」の場合、「そんなわけで、努力しても、当然うまくいかなかった」のような言い方が可能であるのに対して、「そんなわけで、努力したのに、当然うまくいかなかった」のような言い方は不自然である。つまり、「のに」は、話し手自身のものでもある期待が裏切られたという展開を述べるものであるのに対し、「ても」は、(話し手自身のものとは限らない) 一般的に期待されるところが裏切られたという展開を述べるものと言える。

関連項目

A 2 9 「～ては」、参考 1 「～って」

参考文献

前田直子 (1994b), 今尾ゆき子 (1994), 野田尚史 (1994)

◇ A 3 1 ～やいなや・～がはやいか

接続

動詞のスル形に付く。

意味・用法

「A やいなや B」「A がはやいか B」の形で、ともに複文を形成して、前件 A の出来事が起こるとほぼ同時あるいは瞬時後に後件 B の出来事が起こるという関係を表す。

用例

- (1) 誠は彼女を見る**や否や**やみくもに走り出した。(作例)
- (2) 帰宅の電車に乗る**や否や**、ネクタイを外すそう快感はまた格別である。(朝日新聞 '94. 8. 1)
- (3) しかし、それが大気にふれる**やいなや**、見ている間に暗褐色の泥のような色にかわってしまった。(亀井節夫「日本に象がいたころ」)
- (4) なぜなら、プロ入りする**やいなや**、彼らは長髪にパーマをかけ、DC ブランドをまとい、眉も自然にフサフサしてくるからである。(柴門ふみ「恋愛論 2 応用篇」)
- (5) かれらが自由なのは議員を選挙するあいだだけのことで、議員が選ばれる**やいなや**、イギリス人民はどれいとなり、無に帰してしまう。(「中学校教科書公民」)
- (6) 「ほんとだ。すごい」と言う**が早い**か、彼女は自分の家からバケツを持ち出してきて、屋上に備え付けの水道からバケツに水を入れ始めました。そして、それほど広くない屋上いっばいに水をまき始めたのです。(朝日新聞 '94. 10. 12)
- (7) 主水は、小脇に抱えた文箱を投げ出す**が早い**か、抜き打ちに斬りかかった。(作例)
- (8) その声を聞く**が早い**か、新撰組の面々は皆立ち上がった。(作例)

文法

出来事が発生した順序関係を述べる言い方なので、前件・後件ともに述語に否定の形はとれない。後件には、意志や命令の表現はとれない。また、前件・後件ともに動作的な動詞述語をとるが、後件については、結果状態の意味のシテイル形がとれる。

ノート

1. 「するやいなや」については、「～や」というほぼ同義の表現が考えられるが、現代語としてはかなり古風な語感があり、一般的ではない。また、古くは「やいな」という形も用いられた。

2. 「するやいなや」と「するがはやいか」は、用法において非常に近接しているが、前者は後者と違って、前件と後件がもともと関連のない出来事であっても、生起が近接してなら用いることができる。「彼が出て行くやいなや電話がなった」とはいえるが、これを、「するがはやいか」を用いて「彼が出て行くが早いか電話がなった」とするのは、不自然である（「出て行く」と同時に「電話がなる」ことが予期されており、二つの出来事にもともと関連があった場合なら、自然に読める）。

関連項目

A 9 「(か) と思うと」、A 1 8 「～そばから」

参考文献

森山卓郎 (1984)

◇ A 3 2 ～にもかかわらず

接続

用言のスル形・シタ形（シテイル形・シテイタ形を含む）に付く。

意味・用法

「AにもかかわらずB」と複文を形成して用いられ、前件Aのことがあるのに、それが期待される事柄を引き出す契機とならず、後件Bのような期待に反した事柄が成り立っているという関係を述べる。

用例

(1) それにくらべて星までの距離の測定は、天文学者が二〇〇年近く前から試みてきた**にもかかわらず**、なかなかはたせずにいたことである。（野本陽代「宇宙の果てにせまる」）

(2) ふつうなら自動的に王室天文官になるポストである**にもかかわらず**、そのときは別の男性が指名された。（野本陽代「宇宙の果てにせまる」）

(3) 就業意欲は高い**にもかかわらず**、60歳定年制が多いことを反映して、日本の高年齢者の雇用環境は60歳を境にして急速に厳しいものになる。（経済企画庁編「平成10年版国民生活白書」）

(4) 総務庁「高齢者の生活と意識 第4回国際比較調査結果報告書」（1996年）によって健康に対する意識をみると、日本は世界一の長寿国である**にもかかわらず**、健康や介護に対する不安を感じている人が多い。（経済企画庁編「平成10年版国民生活白書」）

(5) つまり、親は低年齢から塾に通うことは子供にとって「問題がある」と考えている**にもかかわらず**、受験競争が激しいために、塾に子供を通わせている状況がうかがわれる。（経済企画庁編「平成10年版国民生活白書」）

(6) 二百万年前から現在にいたる、地質時代のなかでもっともあたらしい時代の研究は、人類の誕生と発展、それに地下水や地盤沈下などのように人間の生活にもっとも関係の深い問題をもつ**にもかかわらず**、戦前にあってはあまり関心がはらわれていなかった。（亀井節夫「日本に象がいたころ」）

(7) このように養育するのに時間がかかるということが、象が人になれやすく、力が強い**にもかかわらず**、ウシやウマのように家畜として普及しなかった理由でもある。(亀井節夫「日本に象がいたころ」)

(8) これらの植物群がはえていた時代は、「メタセコイアの繁栄期」とよばれているが、気候がしだいに寒冷化した**にもかかわらず**、暖帯系の植物がまだはびこっていた時代なのである。(亀井節夫「日本に象がいたころ」)

(9) この事件におけるデータの「捏造」は、まだ当該のデータが得られるような状況になかった**にもかかわらず**、当事者が、期待されるようなデータを「得たことにした」という性格のものであった。(村上陽一郎「科学者とは何か」)

(10) ハレー彗星は太陽に近づくたびに大量のガスやチリを捨てていく**にもかかわらず**、一向に痩せ細ってしまわないのは、遠日点のある太陽系の外縁部に、その補給源があることを示唆している。(石川喬司「彗星伝説」)

(11) ヨーロッパは、比較的高緯度に位置する**にもかかわらず**、一般に気候は温和である。(青野壽郎ほか「高校新地理B」)

(12) 円安**にもかかわらず**上昇幅が縮まったのは、アジア経済の減速を背景とした、原油価格の低下や、国際商品市況の下落を反映したものである。(経済企画庁編「平成10年版国民生活白書」)

(13) こんな大騒ぎ**にもかかわらず**、姉は自室で熟睡している事を思い出したので、私は慌てて起こしに行った。(さくらももこ「もものかんづめ」)

文法

前件は、述語の基本形を直接受ける「スル**にもかかわらず**」の形が一般的である。「の」を介して「スルの**にもかかわらず**」の形もとれそうだが、実際にはそうした例はほとんど目につかない。前件の述語としては、シタ形・シテイル(シテイタ)形・否定形はあらわれるが、「スルだろう**にもかかわらず**」のようにムード表現が出てくることは出来ない。なお、(12)(13)のように前件として名詞をとれるようにも思われるが、これらは「円安である**にもかかわらず**」「こんな大騒ぎである**にもかかわらず**」と補えることでもわかるように、実質的には述語相当の語句と見るべきである。後件については、疑問表現はとれるが、命令・意志表現はとれない。

ノート

「のに」と同様期待と反する事実について、不満や批判の気持ちを述べる言い方だが、「のに」と違い、文体的に硬い表現である。そして、そのことと相応じて、前件の事柄が期待される事態を導く契機になるはずなのにそうならないという関係を強く意識した言い方である。従って、前件の事柄が必ずしも期待される事態を導く契機だと読みにくいような場合は、使いにくい。例えば、「花を買ったのに、しおれてしまった」といっても、「花を買った(の)**にもかかわらず**、しおれてしまった」は不自然である。「花を買った」なら、「しおれ」ないでほしいと期待はするが、当然「しおれ」ない結果になるとは考えられないからである。

◇ A 3 3 ~のに対して

接続

動詞のスル形・シタ形（シテイル形・シテイタ形を含む）に付く。

意味・用法

「Aのに対してB」の形で、前件Aと後件Bとの対比を表す。

用例

(1) イル汗国支配下の西アジアではイラン風のイスラム文化が発達した**のにたいして**、ここでは、アラビア語中心のイスラム文化が栄えた。（「高校教科書世界史」）

(2) この経営者を含む商工業者は、国王の重商主義政策の保護を受けた大商人と、しだいに対立し、宗教上でも、前者はカルバン派（清教徒）の教えを信仰した**のにたいし**、後者はイギリス国教会に属した。（「高校教科書世界史」）

(3) ルター派がドイツ・北欧中心にひろまった**のに対し**、カルヴィン派はフランス・イギリスなど各国にひろまった。（中村元ほか「倫理・社会」）

(4) インドでは、戦後反英独立運動がひろまった**のにたいし**、イギリス労働党内閣はパキスタンを分離してそれぞれに独立を認め、イギリス連邦の構成国とした（1947年2月）。（「高校教科書世界史」）

(5) 朝鮮戦争がこのように拡大していく**のにたいし**、平和を要求する国際世論を背景にインドのネルー首相らは活発な停戦工作を行ない、1951年夏にはソ連が国連で休戦を提案し、2年間の交渉ののち、1953年7月によりやく休戦協定が成立した。（「高校教科書世界史」）

(6) 同一企業に属する25～29歳の大卒賃金に対する45～54歳の大卒賃金の比率をみると、1976年は1.23倍だった**のに対し**、95年は1.67倍に上昇しているが、日本のそれと比較して依然低い水準である（図4）。（経済企画庁編「平成10年版国民生活白書」）

(7) 企業規模別に同じ大卒会社都合退職の場合のモデル退職金支給額で比較すると、勤続5年の場合、大企業の退職金額が88万5,000円である**のに対し**、中小企業は64万1,000円とその差は約1.3倍となる。（経済企画庁編「平成10年版国民生活白書」）

(8) 勤続30年の場合は、大企業の退職金が2,600万円強である**のに対し**、中小企業では約1,290万円と約2.1倍の差となっており大企業ほど退職金において勤続年数が大きく評価されている様子がみられる（第I-2-24図）。（経済企画庁編「平成10年版国民生活白書」）

(9) 同様に、離婚後に再婚する確率は、80年には離婚経験者の約40%が再婚するという確率であった**のに対し**、95年には離婚経験者の約48%が再婚する確率となっている（図1）。（経済企画庁編「平成10年版国民生活白書」）

(10) ナウマンは、ブラキストン線の問題やそのころヨーロッパであきらかにされつつあった洪積世の氷河時代のことなどをたくみにとり入れて論旨を展開している**のに対して**、ブラウンスは地層の観察やその化石群の組み合わせというような、実証的な研究を中心に行っている。（亀井節夫「日本に象がいたころ」）

(11) 体色は、アジア象は灰色から褐色である**のに対して**、アフリカ象は暗灰褐色であるといわれているが、両者とも生活している場所でさまざまである。（亀井節夫「日本に象がいたころ」）

(12) サバンナの藪にすむアフリカ象を「ヤブ象」とよぶ**のに対して**、これらは森林地

帯にいたので「森の象」とか、耳の大きさも小さく丸みを帯びているところから「マルミミ象」などとよばれて区別される。(亀井節夫「日本に象がいたころ」)

(13) ウシ、ウマ、ヒツジの消化率が五〇～六〇パーセントである**のに対して**、象のそれは四〇パーセント足らずである。(亀井節夫「日本に象がいたころ」)

(14) 彼の捕まえたオオサンショウウオは、“オオサンショウウオの中のオオサンショウウオ”という、ややこしいほどの大物であつたらしく、普通のオオサンショウウオは七十センチくらいである**のに対し**、それは一メートル五十センチの巨体であつたと語る。(さくらももこ「もものかんづめ」)

(15) これまでは、研究の内容については「問答無用」、専門家だけが知っていればよいことであり、専門家以外は、ひたすら「研究は善」という原則に従って、それをサポートすればよい、という原理が働いていた**のに対して**、少なくとも研究内容について、専門家以外の人々にもある程度納得させられるような説明を、研究者が要求されることになるからである。(村上陽一郎「科学者とは何か」)

(16) 光球の表面温度が六千度である**のに対し**、コロナは百万度もの高温だからである。(「彗星伝説」)

(17) 家計が消費を中心に営まれる経済活動の単位である**のに対して**、工場や商店、銀行などのように、生産、運送、販売、金融などの経済活動を継続的に営んでいるところを、企業という。(「中学校教科書公民」)

(18) 第一に、人口が増加する**のに対して**、生活環境の整備がおいつかないという問題がある。(「中学校教科書公民」)

(19) 進行方向に引けば加速される**のに対し**、運動と逆向きに力を加えれば、減速の加速度が生じる。(「高校教科書物理」)

(20) ところが、古典物理学が、私たちの直観に訴えられるモデルや数学で内容を表現できる**のに対して**、残念ながら新しい理論は、直接の経験ではとらえられない事柄を対象にし、高度な数式によらなければ正しく表現できない性格を持っている。(「高校教科書物理」)

(21) イオン結晶の融解した液体が電気を通す**のに対して**、分子結晶の融解した液体は電気を通さない。(「高校教科書化学」)

文法

「対し」という、「て」が落ちた形ででも用いられる。前件・後件ともに動作的表現でも状態的表現でもとれる。後件には、ややぎこちないが、意志・命令・疑問の表現もとれる。前件と後件とが、同一主語をとることは出来ない。

ノート

1. 「のに対して」という言い方は、事柄を対比させて述べるものであるが、必ずしも前件と後件の事柄が対立・矛盾するものである必要はない。例えば、「誠が京都へ行ったのに対して、優も二日後京都へ行った」というようないいかたは可能である。

2. 類義の表現として、「する／した一方で」のような言い方が考えられるが、これは、基本的には、前件と後件の事柄の併存することを述べるものである。この場合、前件と後件が同一主語であってもよい。従って、「彼は、コンピューターを起動させる一方で、昨日からの記録を調べてみた」というような言い方が可能である。また、前件と後件は、少なく

とも同様の内容あってはならない。「太郎が京都へ行った一方で、花子も二日後京都へ行った」とはいえない。

◇ A 3 4 ～にしても

接続

動詞のスル形・シタ形（シテイル形・シテイタ形を含む）に付く。

意味・用法

「AにしてもB」と複文を形成して用いられ、前件Aの事柄があることは承認され、後件Bの事柄はそれによって無効になることなくあるという関係を表す。

用例

(1) 根本的には、ある事業をはじめるにあたって、大きな利益が見込まれる**にしても**、有害な影響があることが予想された場合、対策をじゅうぶんに考えておく必要がある。(坪井忠二ほか「新理科2分野下」)

(2) こうして、資本主義経済から景気の変動をなくしてしまうことはできない**にしても**、その波動を小さくして、おびただしい失業者を出さないようにすることは、国家が弾力的に投融資を行なうことなどによって可能である、と広く信じられるようになった。(辻清明ほか「政治経済 新訂版」)

(3) しかし、先日、銀座で、渡辺は、一瞬の幻覚だった**にしても**、それを、(見た)と、思ったのである。(源氏鶏太「運がよかった」)

(4) しかし、個々の住居址の大きさや、共同墓地に葬られた人人の副葬品の質や量に大きな差のないことからみて、集落のなかには指導者の存在や多少の分業はあった**にしても**、貧富や身分の差はほとんどなかったと考えられる。(宝月圭吾ほか「詳説日本史(再訂版)」)

(5) しかし根本的には、われわれの心の底によどむ前近代的な信仰を明らかにして、それを、払拭(ふっしょく)するのはむずかしい**にしても**、近代社会にふさわしいものに直していかなければならない。(朝日新聞 '94. 8. 12)

(6) 何か調べたり協議したりする**にしても**、一言くらい秘書からなりと連絡があってもいいはずだ。(森村桂「天国にいちばん近い島」)

(7) そのツボに“寿”などの文字がデザインされていたりしたら、床の間に飾る**にしても** 玄関に飾る**にしても**、オメダタすぎてますますもてあます一方である。(さくらももこ「もものかんづめ」)

(8) 大局は動かない**にしても** 局地的勝利はあり得た。(朝日新聞 '94. 10. 24)

(9) うそ**にしても**、もう少し気の利いたことが言えないのか。(作例)

(10) ギルドは極めて閉鎖的な組織であって、その内部にいる限り、あまり自由はない**にせよ**、生活も身分も保証されている。(村上陽一郎「科学者とは何か」)

(11) 十分ではなかった**にしる**、私は妻として、夫の意に沿うように一生懸命看病しました。(朝日新聞 '94. 4. 10)

(12) 七五三がこれだけ広まったこと**にしたって**、「晴れ着でもうけようという和服・洋服業界の商魂とは切り離せない」という指摘もあるよ。(朝日新聞 '94. 11. 8)

(13) 産業界**にしても**、ごみ問題を座視しているわけではない。(朝日新聞 '94. 2. 24)

(14) 自民党との議員の数の差はいかんともしがたく、閣僚のポストに**したって**、いいところは自民党に取られてしまう。(朝日新聞 '94. 6. 30)

(15) チェス**にしても**病気の診断**にしても**、コンピュータは与えられた規則にしたがって不器用に機械的に結論をひねりだしているのです、人間のすぐれた直観はどうていマネできない、というのです。(野崎昭弘「人工知能はどこまで進むか」)

(16) サラリーマン**にせよ**、役人**にせよ**、自分が帰属する集団には忠誠を誓うけれど、「そと」の人々へのやさしさや思いやりが乏しい。(朝日新聞 '94. 8. 14)

(17) ガム**にしろ**缶ジュース**にしろ**、製造、販売業者は売りっ放しでなく、公害に対して何らかの対策を講ずる時期ではないだろうか。(朝日新聞 '94. 8. 11)

文法

前件の述語として「したにしても」「しないにしても」といったシタ形や否定形をとることはできるが、「だろろうにしても」のようなムード表現は現れることが出来ない。

ノート

1. 前件はあり得る事柄として承認されるものだから、見方を変えれば「東京に行くにしても書き置きぐらい残すはずだ」のように、あり得る事柄を考える状況想定 of 言い方と解されることにもなる。こうした意味は、「～にしても～にしても」と列記される場合に際だち、いろいろな場合を想定して、それでも、といった文脈を形作る言い方になる。

2. 「彼にしても、そんなことは嫌だろう」「卒業論文にしても、出せばいいというものではない」等のように、「にしても」が名詞を受ける用法もある(「彼であるしても」「卒業論文であるにしても」等とは言えない)。これらは、意味としては「だって」に近く、多くの場合書き換え可能である。ただし、「だって」は「誰だって」「いつだって」のように不定語を受けることができるが、「にしても」のほうは不定語を受けて「誰にしても」「いつにしても」などとは言えない。「だって」が単に他と違わないというとらえ方で物事を取り上げるのに対し、「にしても」は物事を個別のそういうもの・そういうものとして取り上げたいと、それでも違わないというとらえ方をする言い方といえるのではなかろうか。例文(13)(14)も参照。

3. ほぼ同義の形式として、「にせよ」「にしろ」「にしたって」などがある。

4. 用法を詳しく見ていくと、前件と後件が対立する内容である場合と、一方が他方を補足するような関係である場合とがある。対立する内容であるときには、(1)のように、その背後に「大きな利益が見込めるなら、けっこうなことではないか」というような推論がなされるような場合、それと反することを述べるので、逆接的な意味合いが強く感じられるようになる。(3)のようにそうした推論が特になされないような内容である場合、前件の事柄があるということだけでは話は済まない無視出来ない関連事項が後件で述べられるという関係になる。

参考文献

戴宝玉 (1987)

◇ A 3 5 ～だけに・～だけあって

接続

用言のスル形・シタ形（シテイル形・シテイタ形を含む）に付く。

意味・用法

「だけに」は、「AだけにB」と、複文を構成して用いられ、「Aだから、それに相応することとしてB」といった関係を示す。

「だけあって」は、「AだけあってB」と、やはり複文を構成して用いられ、「Aだから、それに相応しただけの 価値があってB」という関係を表す。

用例

(1) 以前勤めていたところがなまじ一流の出版社であった**だけに**、あまり小さなところでこそと事務をとるのは、何かわびしい気もした。(森村桂「天国にいちばん近い島」)

(2) 言葉がわからない**だけ**によけい不気味である。(森村桂「天国にいちばん近い島」)

(3) 佐山は、清江の兄と世代を同じくする**だけに**、気持の通うものがあるようだった。(「羊蹄甲の花の蔭」)

(4) エンジンの音は低かったが、辺りが静寂な**だけに**、涼子の胸に響いた。(「海の蛍」)

(5) 周囲の海が暗い**だけに**、夜光虫や魚達の煌きは幻想的で、深く暗い海の底に涼子達が知らない光の国が潜んでいるように思えた。(「海の蛍」)

(6) 地域的な国際紛争は、しばしば「二つの世界」の対立の反映であったり、あるいは、長いあいだの民族的な対立であったりする**だけに**、その解決は容易ではない。(「中学校教科書公民」)

(7) 問題は重要で国の運命を左右するものである**だけに**、われわれがこのような憲法問題を考えるにあたっては、とくに慎重な態度が必要である。(「高校教科書政治経済」)

(8) 長年の仕来り**だけに**疑いもせずにつづけて来たが、このような突発事件で貸座敷全部が焼けてしまうと支払いどころの騒ぎではなくなる。(「はだか修行」)

(9) 自分で作ったへちま水で磨いている**だけあって**、叔母はわりあい色白で皺も少ない。(「姥ごよみ」)

(10) 霞ヶ浦で生れ育ったという**だけあって**飼育方もよく判っていた。(「鮎」)

(11) 「ゴールデン・レトリバーは」血統が立派な**だけあって**、歩き方もサマになっている。(朝日新聞 '94. 1. 4)

(12) 中入りの「桂」米丸は、新作派**だけあって**、現代風俗を斜に切り取り、ピリッと辛みを利かせた小話がさえている。(朝日新聞 '94. 7. 20)

文法

前接する用言は、スル形・シタ形とも可能だが、「しませに」「しませあって」のようなていねい体の形は、かなり不自然である。後件には、命令・意志などの言い方は出て来にくい。

ノート

ともに、前件の事柄が存在することを前提に、そこから後件のような相応の事実や判断が帰結するということを述べる言い方であるが、「だけあって」の方には、前件の事柄を価値あることと認めただけで、後件の帰結があるということ述べる含みがある。それ故、「相手が子供だけに、叱るわけにもいかなかった」とはいえるが、「相手が子供である」ことは、特別の価値があるわけではないから、「相手が子供だけあって、叱るわけにもいかなかった」とはいえない。

関連項目

A 3 6 「～からには」

参考文献

三枝令子 (1991)

◇ A 3 6 ～からには

接続

用言のスル形・シタ形（シテイル形・シテイタ形を含む）に付く。

意味・用法

「からには」は、「AからにはB」と、複文を構成して用いられ、「Aという事実がある以上、必然的にB」という関係を表す。

用例

(1) そして、やる**からには**、オシャレにやりたい、と、女の子は考える。(柴門ふみ「恋愛論」)

(2) 名前が出る**からには**変な作品は出せない。(朝日新聞 '94. 6. 22)

(3) 商品の生産が行なわれる**からには**、商品の買い手がなければならない。(「高校教科書政治経済」)

(4) 谷「申し訳ないんだが、来た**からには**働いてくれるかな」(坂東賢治「新・俺たちの旅」)

(5) その「よほどのこと」が起きた**からには**、どこかに誤りがあったことは明確である。(朝日新聞 '94. 5. 11)

(6) 引き受けた**からには**、外から率直な批判をするのが役割だと考えている。(朝日新聞 '94. 2. 5)

(7) しかし、「働く**からには**優良企業にしたいと思うのが当たり前」と気にしない様子だ。(朝日新聞 '94. 11. 26)

(8) 名前が出る**からには**変な作品は出せない。(朝日新聞 '94. 6. 22)

(9) というのは、情報化社会という**からには**、あらゆる組織が外に向かって開かれていなければ成り立たない。(朝日新聞 '94. 9. 7)

(10) 中野主将(四年)は「もうハンディは感じない。初出場といっても〔駅伝に〕出る**からには**五位くらいには入りたい」と意欲を見せる。(朝日新聞 '94. 10. 29)

(11) しかし、米国の副大統領までした人が公式に会って伝えた言葉である**からには**、全くの無理解や誤解に基づいていたとは思えない。(朝日新聞 '94. 7. 12)

(12) 米国で刑事事件が、陪審員による裁判に持ち込まれるのは約一割。そのさらに一割ほどに誤審の可能性があると言う。「(中略)陪審員は『法廷に引き出される**からには**、何かある』と考えがちだ。被告は概して貧しく、質のいい弁護士は雇えない」(朝日新聞 '94. 6. 1)

(13) そろってガチガチと堅い**からには**、共通の利点があるのだろうが、それがわからない。(朝日新聞 '94. 10. 9)

(14) 今度の月曜、大阪へわざわざ行く**からにゃ**、この勝負は何が何でも勝たねばなら

ん。(作例)

文法

前接する用言は、シタ形や否定の形も出て来れるが、「だろうからには」というようにムード表現が出てくることはかなり不自然である。後件には、強い意志・強い推量や義務の表現がくることが多く、命令表現も取れるが、必然的帰結を述べるものなので、疑問表現は不自然である。なお、「からには」は、「からにゃ」という話し言葉的な形がある。

ノート

類義の言い方として「からは」があるが、例えば、「聞いたからには、おれも男だ、力になろう」といっても、「聞いたからは、おれも男だ、力になろう」とは言いにくい。「AからはB」は、前件－後件の因果関係それ自体をストレートに述べる言い方で、その間に関連する内容を盛り込んでいろいろ述べるようなことが難しいようである。また、「からは」は、現代語としてはやや古風な語感がありで、日常的に使われるものではなくていえると言えよう。

関連項目

A 1 4 「～うえは」

参考文献

遠藤織枝 (1984)

参考 1 ◇ ～って

接続

動詞のシタ形（シテイタ形を含む）に付く。

意味・用法

「AってB」の形で、Aが仮定のことであれ、現実にそうになっていることであれ、いずれにせよ、(1) 前件Aがあることが特に影響を持つものではないということ、後件Bとして述べる。また、(2) 前件Aがある場合でも、その意味を問い直させるようなBという事柄があるということ、を述べる。

用例

(1) 明 「(大きく) 最後最後って、卒業した**って**別に大して変わんないだろ? …… どうせオレたち……同じ予備校行くんだし」(吉田紀子「卒業旅行」)

(2) リコ「あたしが話した**って**、どうにもならないかもしれないけど」(田淵佐奈「あの日の君にありがとう」)

(3) どうせダッチャーじいさんに喰わせる分も一緒に拵えるんだから、もう一人前増えた**って**同じこった。(中村正軌「嘔吐の海」)

(4) かすみ「ばかだねー、どう考えた**って**そうじゃん」(大森美香「美少女H 十七歳の記録」)

(5) 千恵「お姉ちゃんだ**って**弱いとこあった**って**当たり前よ」(野島伸司「101回目のプロポーズ」)

(6) 本名というのは、家庭裁判所に申し出た**って**、なかなか変えられないんだから……」(佐野洋「無事永眠」)

(7) そうなれば、私みたいな人がいっぱい来た**って**、だれも怪しみはしない。(森村桂「天国にいちばん近い島」)

(8) 誰かがふみつぶされた**って**、だれも気にとめやしない。(栗本薫「イエロー・マジック・カーニバル」)

(9) 実際、ねこを飼ってさえいなかったなら、ねこの一ぴきや二ひきいなくなった**って**それで悲しんだり、ふさぎこんだりするなんてことは、たぶんないのですものね。(長田弘「ねこに未来はない」)

(10) こう見えた**って**、いつ銀座へ戻っても食って行ける身だ」(半村良「秋子の写真」)

(11) そばで私たちの会話を聞いていた、私よりも一つ上の世代の四十過ぎの男性編集者が、「こういう漫画家と打ち合わせした**って**、ちっとも話がかみ合わないんだよな」と、嘆息をついた。(柴門ふみ「恋愛論2 応用篇」)

(12) 片山「辞めろ**って**言ってんだよ、俺だ**って**な、あんたみたいな痛めつけた**って**、ちっとも楽しかないんだよ」(岡田恵和「彼女たちの時代」)

(13) それに、じいさんをあの島から連れ出した**って**、じいさんには一人の身寄りもないんだ。(中村正軌「嘔吐の海」)

(14) そんなこといった**って**、今までだ**って**、入港の日以外は全然親切ではなかったじゃないか。(森村桂「天国にいちばん近い島」)

文法

「シタ**って**」は、「泣いた**って**、笑った**って**、どうにもならない」のように重ねて用いることもできるし、「誰がやった**って**同じことだ」のように、「誰」「何」などの不定語を含んで、すべての場合に言及するような言い方も可能である。

ノート

1. 「**って**」で区切りの見えない一まとまりの形式であるから、複合辞として扱うことは厳密には妥当ではないというべきであろう。ただ、この「**って**」を一語の(単一の)助詞とすると、促音が語頭に立つ助詞的形式を一単語として認めることになり(もちろん、そうした扱いをして不都合であるという理由はないが)、一般の日本語の音節構造からするとかなり普通でない扱いという印象がある。それ故、これが一語として素直に受け取られず、「と - て」「と - いっ - て」といった語句に由来する複合形式だとの成り立ちが意識され、そのような意味でしばしば複合辞の一つとして取り上げられることも多かったといえよう。

2. 「シた**って**」は、「シても」と大きく用法が重なっており、一般に「シた**って**」は「シても」に置き換え可能である。ただ、単に、前件の事柄に対して、後件に見るとおり予想されるような帰結にならないという関係をいう「シても」に対して、「シた**って**」の方は、前件の事柄があっても、それがそれなりの意味を持ったりせず、いわばふいになっているといった含みが感じられるようである。従って、とくにそうした含みなしに事実関係を単に述べる言い方では、使いにくいことがある。例えば、「昨日駅で彼と行き合ったが、私を見ても、彼は気づかなかった」とは言えるが、「昨日駅で彼と行き合ったが、私を見た**って**、彼は気づかなかった」は、かなり不自然である。

3. なお、この項で扱っているのは、接続助詞的な「**って**」であるが、「**って**」には、他に格助詞・係助詞的な語とすべきものがあり、「は」や「と」や「という」のような助

詞・複合辞の用法と連続する多様な用法をもっている。すなわち、「直子ってちょっとしたもんじゃない」のような主題提示の用法や「明浩が、おつかれさまって言ってたよ」のような引用句を形成する用法、あるいは「シジュウガラって鳥、見たことある？」のような「という」に近い連体用法、更には、「ますみが、君に会いたって」「なんだって！」のような伝聞や問返しを示す文末用法など、多岐にわたる用法が見られる。こうした「って」の用法と「は」や「と」や「という」などとの相違はかなり複雑であり、殊に主題を表す用法・伝聞を表す用法についての比較検討は近年盛んに論じられている。

関連項目

A 3 0 「～ても」

参考文献

前田直子 (1994b)

連用辞類 1・～二系

◇ A 3 7 ～にあたって

接続

名詞に付く。また、動詞のスル形に付く。

意味・用法

「A (する) にあたってB」「A (する) にあたりB」の形で、(1)「Aということを行う場面に当面して」という意味を表す。(2)「特に自ら何を行うと具体的には言わないが」「ある意義の認められる時・機会が来た (来る) のに当面して」という意味を表す。

用例

- (1) 開会**にあたって**、一言あいさつを述べたい。(作例)
- (2) 別れ**にあたって**、心づくしの品を送った。(作例)
- (3) 国会は、法律の制定**にあたって**しんちょうに審議し、世論を尊重して国民の意思にそう法律を制定する重い責任がある。(鶴飼信成ほか「新しい社会 [歴史]」)
- (4) 確定拠出型年金の導入**にあたって**は、従業員に対する情報開示、資産運用の選択肢の提供方法、加入者への投資教育など検討されるべき課題は多い。(経済企画庁編「平成10年版国民生活白書」)
- (5) 自然の開発**にあたって**は、地球発達史の正しい知識にもとづき、地学的事象が相互に関係しあっている事情を考慮することがたいせつである。(湊正雄ほか「地学I」)
- (6) 今後、[株価情報配信サービスの] 製品化**にあたって**は、データを流す回線の問題を解決しなくてはならない。(朝日新聞 '94.5.17)
- (7) 裁判官は、裁判**にあたって**、憲法と法律とに従うほかは、だれのさしずもうけず、良心に従い、独立して職権をおこなうこととされている(第76条③)。(鶴飼信成ほか「新しい社会 [歴史]」)
- (8) 日本労働組合総連合会(連合)が今年の春闘**にあたって**、闘争方針などをまとめた連合白書の副題だ。(朝日新聞 '94.1.6)
- (9) 村山委員長は二十八日の質疑の終わりに**にあたって**、「私と書記長は針ほどのすきも

ない。基本的考えは全く一致している」と訴え、党内対立の溝が深まることのないよう配慮を見せた。(朝日新聞 '94.5.29)

(10) 政府においては、平成9年9月、電子商取引等の推進に**当たって**の基本的な考え方や主要な課題の整理を目的として、高度情報通信社会推進本部の下に、電子商取引等検討部会が設置された。(経済企画庁編「平成10年版国民生活白書」)

(11) 仏国鉄によると、路線決定や建設工事に**当たって**の歴史的調査や事前の地質調査でもざんごうの存在は確認できなかった、という。(朝日新聞 '94.1.5)

(12) 日本民間放送連盟(民放連)によると、FM局が開局に**あたり**愛称をつけ始めたのは「J-WAVE」(エフエムジャパン)がきっかけになったという。(朝日新聞 '94.4.19)

(13) 香港紙は掲載に**あたり**、取材源の信頼度や専門家による検討などを踏まえ、文書の信頼度は極めて高いとの結論に達したとしている。(朝日新聞 '94.6.5)

(14) 用例集を作成するに**あたって**、特に新しい用例の採集に努めた。(作例)

(15) 大マゼラン雲は、私たちが宇宙を考えるに**あたって**すべての基本となる天体である。(野本陽代「宇宙の果てにせまる」)

(16) 化学の学習を始めるに**あたって**、化学とは何か、また、化学の学習にはどんな心がけが必要かを述べよう。(柴田雄次ほか「化学I」)

(17) 第六条の規定により死体から臓器を摘出するに**当たっては**、礼意を失わないよう特に注意しなければならない。(「臓器の移植に関する法律」第八条)

(18) 中間報告については、政治改革関連法を成立させるに**あたって**の与野党の覚書に盛り込まれていた。(朝日新聞 '94.4.12)

(19) はじめその〔=ひらがなの〕字体は多かったが、近世初期までにはほぼ整理され、1900年(明治33)の小学校令の実施に**あたって**今日の字体が定まった。(宝月圭吾ほか「詳説日本史(再訂版)」)

(20) ロシアは、国連の対イラク経済制裁解除にも前向きな姿勢を示しており、今回の「危機」に**あたって**も、米国やクウェートとイラクの調停役を担うことを狙っている。(朝日新聞 '94.10.13)

(21) 〔ワイツゼッカー大統領の行った演説で〕とくに有名なのが、一九八五年五月、ドイツの敗戦四十周年に**あたって**行った演説である。(朝日新聞 '94.7.9)

(22) 新聞週間に**当たって**、四人の人たちに意見を聞いた。(朝日新聞 '94.10.18)

(23) 天皇陛下は「新しい年を迎え、ともに新年を祝うことを誠に喜ばしく思います。年頭に**あたって**、国民みな幸せを祈り、世界の平和を念願いたします」とあいさつした。(朝日新聞 '94.1.3)

(24) 憲法記念日に**あたって**のアピールでは、「出発は少数与党政権であろうとも、政策判断の正しさによって国民の幅広い支持を集めるならば、政権は長命をたもつことができる」と強調している。(朝日新聞 '94.5.9)

(25) 一、歴史の転換点に**あたって**、関係者、支持者、獄中の政治犯に敬意を表明し、運動の目的を達成する決意を再確認する。(朝日新聞 '94.9.1)

(26) こうした考え方は、解決のラストチャンスに**当たって**のぎりぎりの妥協案だと確信する。(朝日新聞 '94.3.26)

(27) 国連が改組、改革される**にあたり**、日本の考え方、これから果たす役割を世界に明確にする必要がある。(朝日新聞 '94.10.14)

文法

(1) の意味では、「～にあたって」は、「～」の部分に動作・出来事的な意味の名詞を取るか、「～スルにあたって」のように動詞句も取れる。(2) の意味でも、「～にあたって」の「～」には、時・機会を表す名詞だけでなく、(27)や「新しい年を迎える」ような、その時期が来る・ある体験をする機会・時期となるといった意味の動詞述語句も取れる。

動詞句を取る場合、「～サレル／サセルにあたって」のような受身・使役の形のものはいずれも取れなくはないが、「～シナイにあたって」のような否定の形は取れない。未実現の事柄が行われる場面に当面してという言い方だから、もちろん「～シタにあたって」という形は取れない。(10)(11)(18)のように、「にあたっての」という形をとり、続く名詞にかかる用法もある。また、「にあたり」という形でも用いられる。丁寧形として「にあたりまして」という形がとれる。

ノート

1. 「A (スル) にあたってBスル」というパターンで考えると、AがBに先行する場合と、AとBとが同時的な場合とがある。BがAにはっきり先行するとよめることはない。たとえば、「今日の別れにあたって、ここで花束を贈りたい」とは言えても、「明日の別れにあたって、ここで花束を贈りたい」というような言い方は出来ない。

2. 「に際して」と意味・用法が重なるが、「Aに際してB」は「にあたって」と違って、Aの部分に動詞句をとることができない。

関連項目

A 4 8 「～に際して」

◇ A 3 8 ～にあって

接続

名詞に付く。

意味・用法

「AにあってB」の形である状況・場所の中にいることを表す。

用例

- (1) 真吾は、逆境**にあって**、なお希望を捨てなかった。(作例)
- (2) 遠い異郷の地**にあって**、仲麻呂は、次のような望郷の歌を詠んだ。(作例)
- (3) 戦場**にあっても**、一時として、彼女のことを忘れたことはなかった(作例)
- (4) 私はその渦中**にあって**急性腎炎で倒れ、一時はまわりの者は再起不能とみていたほどでした。(阿部謹也「自分のなかに歴史をよむ」)
- (5) その混乱のさなか**にあって**、おなじように人間の生きかたや社会のありかたを考察し、人間がよりよく生きるための普遍的で客観的な原理を求めて、それを真の意味の倫理思想としてうちたてた先哲があらわれた。(中村元ほか「倫理・社会」)
- (6) しかし、日本に旧石器文化が存在したということが学界では認められていなかった

当時**にあって**は、このことはほとんど黙殺されていた。(亀井節夫「日本に象がいたころ」)

(7) 「大衆の時代」**にあって**、もっとも用心しなければならないことは、人々がなだれをうって、いっせいに走りだすことである。(朝日新聞 '94. 1. 5)

(8) こうした時代の転換期**にあって**、企業は誰のために誕生し、成長し、利益をうみだしつづけるのか。(朝日新聞 '94. 10. 29)

(9) 森鷗外と夏目漱石は、明治期の日本の社会**にあって**、伝統的に育成されてきた日本人が、近代精神にめざめることの苦悩と問題とにとりくんだ作家であり、興味ある問題提起をしている。(中村元ほか「倫理・社会」)

(10) 車社会の米国**にあって**、我々旅行者に絶対欠かせないのがタクシー。(朝日新聞 '94. 7. 5)

(11) 統合が進む欧州**にあって**、中立主義が伝統のスイスは流れに加わっていない。(朝日新聞 '94. 8. 22)

(12) 寺に生まれて僧籍を得る世襲僧が多い仏教界**にあって**、中高年になってからの修行には困難もつきまとう。(朝日新聞 '94. 7. 5)

(13) このような心臓の形態は、他の哺乳動物の成獣には見られない特異性で、他のもの**にあって**は胎児の時にのみ見られる。(亀井節夫「日本に象がいたころ」)

(14) その他各藩においても西洋学術の採用に努力し、また民間**にあって**も、大坂の緒方洪庵の塾のように、すぐれた人材を輩出したところもあり、蘭学は、その後の西洋文化吸収の土台となった。(宝月圭吾ほか「詳説日本史(再訂版)」)

(15) 人口が密集する都市**にあって**は、ゴミ処理の問題一つとっても、一人ひとりの意識が改まらなければ解決しない。(朝日新聞 '94. 10. 5)

(16) 生命保険**にあって**は、血圧や非喫煙等一定の基準を満たす場合に保険料を割り引く保険の新設、損害保険**にあって**は、平成10年7月から算定会の損害保険料率の使用義務が撤廃され、被害者に対して保険金を直接給付する自動車保険の新設等の消費者ニーズに沿った保険商品の開発が行われた。(経済企画庁編「平成10年版国民生活白書」)

文法

連体修飾の用法も、丁寧の形も取れない。かなり固定した言い方で、いささかかたい文体に合うような名詞しかとりにくい。

ノート

1. 動作が行われたり、状態の存在する場所・時間を表す名詞に付くばかりでなく、「において」と同じく、事柄の関与する次元・範囲を表す用法もある。

2. 例文(1)のように、「A**にあって**」は、ある状況・場所の中にいることを述べつつ、そこから予想される事とは反する状態であるという指摘を以下に導く用法で用いられることが少なくない。この逆接的なニュアンスは「において」には見られない。

3. 公文書など極めて固い書き言葉では、例文(16)のように「**～にあっては**」が、「**～の場合**」とほぼ同義に用いられることがある。

関連項目

A 3 9 「～において」

◇ A 3 9 ~において

接続

名詞（名詞節を含む）に付く。

意味・用法

「AにおいてB」という形で、動作・作用の行われる場所、あるいは状態が存在する場面もしくは、時を示す。また、意味が一段抽象化すると、「～という点で」といったような意味で、事柄が云々される次元・範囲などを規定しても用いられる。

用例

- (1) 北アメリカ植民地の独立，フランス革命とナポレオン戦争に呼応して，ラテンアメリカ**において**も解放運動が始まった。（土井正興ほか「三省堂世界史」）
- (2) 各都道府県**においては**県民大会等を中心に次のような取り組みが広範に展開されている。（経済企画庁編「平成10年版国民生活白書」）
- (3) このような人間の自覚にもとづいて，哲学的なものの考えかたが展開されたのは，古代のギリシア**において**である。（中村元ほか「倫理・社会」）
- (4) この白亜紀には，地球上**において**気候がいちじるしく冷温化したことが知られている。（亀井節夫「日本に象がいたころ」）
- (5) 大相撲初場所は，11日から両国国技館**において**行われる。（作例）
- (6) 第三段落**において**，筆者は，前二段の論旨をいったん要約している。（作例）
- (7) 人生**において**，いつ仕事を離れ，いつ余暇を楽しみ，いつ学ぶかといった問題には多様な選択肢が用意されているべきであろう。（経済企画庁編「平成10年版国民生活白書」）
- (8) 江戸時代**においても**，京都・大阪は「上方」とよばれ，江戸とともにわが国の2大中心地の一つであった。（鶴飼信成ほか「新しい社会 [地理]」）
- (9) 現在**においては**，国際的な取引には，金に代わって国際通用力の最も大きいアメリカのドルが用いられている。（辻清明ほか「政治経済 新訂版」）
- (10) そして2010年**においては**，60歳以上の世帯の金融資産が全体の6割以上を占めることになる（付注13）。（経済企画庁編「平成10年版国民生活白書」）
- (11) 自然科学**においても**，専門化はなお激化しつつあり，研究活動もその内部に閉鎖的に閉じ込められる状態が続いている。（村上陽一郎「科学者とは何か」）
- (12) このように，化学変化**においては**，反応し合うそれぞれの物質と物質，あるいはできた物質との量の割合が，きちんとしまっている。（坪井忠二ほか「新理科1分野上」）
- (13) この現象は，オーロラとは，本質**において**異なる原理によるものだ。（作例）
- (14) 学識**においては**，智光こそ第一等と称されている。（作例）
- (15) 作る事の無いという意味**において**，これはほとんどノンフィクションと言って差しつかえない作品である。（朝日新聞 '94.11.27）
- (16) ベッドとテレビ，それに資料置場の書棚だけのシンプルな部屋。何も無いと言う点**において**，贅沢な部屋と言える。（大石静「アフリカの夜」）
- (17) 腕っぷし**においては**はたいていの男はたいていの女より強いし，感覚の鋭さ**においては**はたいていの女の方がたいていの男より優れている。（柴門ふみ「恋愛論2 応用篇」）

(18) キリスト教の教え**において**は、死は生の延長線上にあるのではなく、生の決定的な断絶とされています。(阿部謹也「自分のなかに歴史をよむ」)

(19) 孔子**において**は、心のもちかたとしては私利私欲を捨てること(克己)、人を愛し、人を思いやること(恕)、自分をあざむかないこと(忠)、他人をあざむかないこと(信)などが説かれ、これらすべての側面をうちにもつ心のもちかたと、形としての礼とを合わせた総称として仁が説かれた。(中村元ほか「倫理・社会」)

(20) 「分業の原則」が裏目にでるのは、とりわけ事務・管理部門**においての**ことである。(朝日新聞 '94. 1. 30)

(21) パネリスト、とくに宮沢さんにうかがいたいのは、ブロック化していく中における日本の役割、そして本当の国際的な意味**においての**多角的な機関の必要性についてだ。(朝日新聞 '94. 11. 22)

(22) しかし、日本やヨーロッパ**における**ベビーブームの場合は、アメリカに比べて短期間であった。(経済企画庁編「平成10年版国民生活白書」)

(23) 私は、ひとつの社会**における**人間と人間の関係のあり方の原点と、その変化が明らかになったときに、その社会が解[わか]ったことになるのではないかと考えはじめていたのです。(阿部謹也「自分のなかに歴史をよむ」)

(24) 新しいメディアの登場を機会に、これを地震や台風の災害時**における**聴覚障害者への情報伝達に使用する義務を定めてほしいと思う。(朝日新聞 '94. 6. 5)

(25) 平成9年**における**食中毒の発生状況は、事件数1,960件、患者数39,989名、死者8名であった。(経済企画庁編「平成10年版国民生活白書」)

(26) 東大入試に出た哲学の論述式問題は「近世哲学史上**における**カントの地位」。(朝日新聞 '94. 8. 5)

(27) この事件**における**データの「捏造」は、まだ当該のデータが得られるような状況になかったにもかかわらず、当事者が、期待されるようなデータを「得たことにした」という性格のものであった。(村上陽一郎「科学者とは何か」)

(28) 1気圧のもと**における**沸点を、標準沸点という。(柴田雄次ほか「化学I」)

文法

連体修飾の言い方としては、「～においての」の形も取れるが、「～における」という表現が、それに当たるものとして用いられる。「～におきまして」のような丁寧の形をとることも出来る。

ノート

場所・場面を示す言い方としては、場所を表す格助詞「で」と用法において重なるところが多いが、「において」の方が、書き言葉的で硬い表現であることは言うまでもない。また、「において」は、ある程度広がりを感じさせる場所を示すもので、地点を言う言い方とはなじみがよくないようである。「展望台の上で監視した」「頭上で爆発した」に比べると、「展望台の上において監視した」「頭上において爆発した」はすわりが悪いと感じられる。なお、時間を示す用法としても、「江戸時代において」のような幅のある時を表すのが普通で、時点を示して「12時において」のような使い方は難しい。

参考文献

野村剛史(1984)

◇ A 4 0 ～に限り・～に限って

接続

名詞（名詞節を含む）に付く。

意味・用法

「Aに限り／に限って」の形で、「A以外は別として」という意味を表す。

用例

(1) 恒星の質量は、連星のばあい**に限り**、ケプラーの法則によって求められる。（湊正雄ほか「地学Ⅰ」）

(2) 事前に申し込んだ記者やカメラマン**に限り**、大会の取材を認めようというもので、サミットやオリンピック並みの対応だ。（朝日新聞 '94.12.1）

(3) 栄典の授与は、現にこれを有し、又は将来これを受けるものの一代**に限り**、その効力を有する。（「日本国憲法」）

(4) 走行は営業運転終了後の深夜**に限り**、一週間に二日、各一往復程度を予定している。（朝日新聞 '94.11.8）

(5) 観光客をねらって、来年の五月一日から九日までの連休中と、七月二十四日から九月六日までの夏休み期間**に限り**、稚内と小樽から、サハリン南部のコルサコフまで、計二十便程度が就航する。（朝日新聞 '94.11.18）

(6) 本来なら、遅刻は認めないのだが、今回**に限り**、大目に見よう。（作例）

(7) 先着10名様**に限り**、記念品を贈呈致します。（作例）

(8) 病欠および忌引の場合**に限って**、追試を行う。（作例）

(9) なぜだか荷物の多いとき**に限って**、雨が降る。（作例）

(10) うちの子**に限って**、めったなことをするはずがない。（作例）

(11) イギリス人は、アジアでオランダ人との競争に敗れ、すでに来航しなくなっていたので、オランダ人と中国人だけが長崎の港**に限って**貿易を許されることとなった。（鶴飼信成ほか「新しい社会 [公民]」）

(12) 化石のうちで、広い地域にわたり、特定の地層**に限って**産出するため、その化石によって地層の年代を定めることができるものを、示準化石（または標準化石）という。（湊正雄ほか「地学Ⅰ」）

(13) しかし、14Cの半減期は短いので、この方法は、せいぜい4万年前までの新しい年代のもの**に限って**有効である。（湊正雄ほか「地学Ⅰ」）

(14) おまけに、よくわからないシロモノ**に限って**高い。（さくらももこ「もものかんづめ」）

(15) 二人の恋愛**に限って**は、常に晴子が彼をリードしていた。（夏樹静子「鼓笛隊」）

(16) 本当は暗いくせに表面明るく振る舞ってる人間**に限って**、暗い人間を忌み嫌ったりするものです。（柴門ふみ「恋愛論」）

(17) 裕美子の声『なんで、今日**に限って**、こんなもの……（持ってるのよ）』（北川悦吏子「もっと、ときめきを…」）

(18) そして、自分が浮気している男**に限って**、恋人の行動に疑い深かったりします。

(柴門ふみ「恋愛論」)

文法

連体修飾の形はとりにくい。「に限りまして」のように丁寧形は取れる。

ノート

1. 限定の副助詞「だけ」と意味・用法が近く、相互に置換出来ることが多いが、「Aに限り／に限って」は、「A」以外を排除する言い方をすることで「A」以外がこれに当てはまらないということを暗に述べる表現であるのに対して、「Aだけ」は、“唯一Aが”という言い方で「A」を特に取り立てる言い方だと言える。従って、当該項目（「A」）以外のものが意識されにくいような表現においては、「Aに限り／に限って」は、使いにくい。例えば、「アウトラインだけ出来上がった」とはいえても、「アウトラインに限り出来上がった」というのは、いささか不自然である。この場合、「アウトライン」の完成という事実それだけが述べられているのであって、それ以外は、まだ問題になっていないのである。

2. 例えば、「なぜだか荷物の多いときに限って雨が降る」は、「～限り～」とは言い換えにくい。このように、「に限り」と「に限って」とは、必ずしも表現的に同価値ではない。従って、「に限り」と「に限って」とは相互に置き換えが出来ないこともしばしばある。「に限り」と比べると、「に限って」には、対比の意味が強く出るものと思われる。

関連項目

A 4 1 「～に限らず」

◇ A 4 1 ～に限らず

接続

名詞（名詞節を含む）に付く。

意味・用法

「Aに限らず」で、「Aは他に類例もあってこれだけではなく」という意味を表す。

用例

(1) 学校**に限らず**、集団というのは何らかの抑圧があるものだ。(さくらももこ「もものかんづめ」)

(2) この法則 [=オームの法則] は電熱線**に限らず**、電流が流れる導線について広く成り立つ。(坪井忠二ほか「新理科1分野下」)

(3) このようなしくみは筋肉**に限らず**、他の器官の活動にも適用される。(石田寿老ほか「生物I」)

(4) 石油**に限らず**多くの資源を輸入にたよらねばならない資源のとぼしい国として、これからどのように進んでいくのかをあらためて考えなおす必要がある。(鶴飼信成ほか「新しい社会 [歴史]」)

(5) この話は、彼**に限らず**、みんな知っていることだ。(作例)

(6) この店は、ウイーク・デー**に限らず**、土曜も日曜もやっている。(作例)

(7) 子供**に限らず**、大人だって、こんなことを時には考えるものだ。(作例)

(8) 儒学・国学・蘭学**に限らず**、一般に学問の普及はめざましく、18世紀からは、各

藩では藩学を設けて家臣の教育機関とし、民間では寺子屋がひらかれて、日常生活に役立つ簡易な教育がおこなわれた。(宝月圭吾ほか「詳説日本史(再訂版)」)

(9) 意欲のあるなしに**限らず**、弁当屋はもうすぐ廃業です。(朝日新聞 '94.3.6)

(10) [キオスクの] 語源はトルコ語ともペルシャ語ともいわれているが、ヨーロッパでは、**駅に限らず**広く街角の新聞売店、スタンドの愛称として定着している。(朝日新聞 '94.6.28)

(11) CDの音質の冷たさ、貧弱さを指摘する声は、オーディオマニアに**限らず**、決して少なくなかった。(朝日新聞 '94.1.27)

(12) 「マウスピースはボクシングに**限らず**、歯をかみ合わせて力を出すスポーツには有効。(朝日新聞 '94.6.4)

(13) コメに**限らず**、品種改良は農業や園芸に不可欠で、新品種づくりは日本でも盛んだ。(朝日新聞 '94.3.19)

(14) それぞれの地域が、地域の人たちとともに育て、生きてゆく、自分たちのためのJリーグ。サッカーに**限らない**、幅広いスポーツの在り方を求めてゆくんです。(朝日新聞 '94.2.15)

文法

(14)のように、「に限らない」という連体修飾の形もあるが、あまり使用されないようである。丁寧の形も、じっさいには使いにくい。

ノート

「だけではない」という言い方としては、「のみならず」等が考えられるが微妙に用法が異なる。「のみならず」の場合、「するのみならず／したのみならず」と、動詞句を受ける用法が可能だが、「に限らず」にはこうした用法はない。また、名詞を受ける場合でも、「に限らず」は、“範囲はこれだけでない”ということ述べるのに重点があるのに対して、「のみならず」は、“それに加えて更に”と以下と列記されるものを取り上げる点に重点がある。それ故、問題になる人・ものを並べ立てて言う場合は、「山崎氏のみならず井上氏も来た」とはいえても、「井上氏に限らず山崎氏も来た」という言い方は不自然である。「来た」ということにあてはまるのが何か問題になっているわけではないからである。

関連項目

A80 「のみならず」

◇A42 ～に応じて・～に応じ

接続

名詞(名詞節を含む)に付く。

意味・用法

「Aに応じて／Aに応じ」の形で、基本的には「Aにうまく合うようにして・Aにうまく合うような形で」という意味を表す。

用例

(1) 信長は、家臣それぞれに、その働き**に応じて**恩賞を与えた。(作例)

(2) 学力に**応じて**、適切な指導をする。(作例)

(3) 人間はいつまでも若いままではない。年齢に**応じて**、それなりの仕事の仕方がある。(作例)

(4) 共同制作番組は、参加局が一定の比率に**応じて**基金を出し合う方式。(朝日新聞 '94.9.17)

(5) 国会議員の年金は議員を辞めたときの歳費の額に**応じ**、原則としてその三分の一が支給される。(朝日新聞 '94.2.15)

(6) お父さんが作る簡単離乳食、赤ちゃんの発達段階に**応じた**あやし方、遊び方、しつけ、病気の時の対応などを具体的に説明。(朝日新聞 '94.4.4)

(7) ボーナスは試合の活躍に**応じた**褒賞金として支払われ、昨年が約七百四十万円だった。(朝日新聞 '94.2.25)

(8) また、一般の主なカードは、利用に**応じた**点数制で還元サービスをしているが、最近、その点数から地球環境などに寄付することができるようにしたところもある。(朝日新聞 '94.1.22)

(9) 光が弱いときには、二酸化炭素の濃度を変えても光合成の速度はほぼ一定であるが、光が強い場合には、濃度の増加に**応じて**増加する。(石田寿老ほか「生物 I」)

(10) 中間報告は、幼児一人ひとりの発達の特性に**応じ**、より行き届いた教育を推し進めるため、三十五人学級が適当だとした。(朝日新聞 '94.11.18)

(11) スケールメリットを生かして、地域特性に**応じた**きめ細かな住宅づくりも期待できる。(朝日新聞 '94.5.11)

(12) 人間の個性は千差万別であるから、その人に**応じて**、適所適材の生かし方を考えなければならない。(作例)

(13) 魚類・両生類・ハ虫類・甲カク類・頭足類などでは、動物がとどまっている場所(底面)の明るさや色に**応じて**体色を変えることがある。(石田寿老ほか「生物 I」)

(14) 当時の寺院は深山幽谷の山地に建てられることが多いため、室生寺のように伽藍も地形に**応じて**自由な配置で建てられた。(宝月圭吾ほか「詳説日本史(再訂版)」)

(15) 骨が地中に埋められると、そこの化学的な条件に**応じて**さまざまな化学作用がおこなわれるが、極端に酸性の状態以外では、無機成分はのこりやすい。(亀井節夫「日本に象がいたころ」)

(16) 潮せきは、ふつう 1 日に 2 回の干満があり、潮流もそれに**応じて**向きをかえる。(湊正雄ほか「地学 I」)

(17) 学校を設置しようとする者は、学校の種類に**応じ**、監督庁の定める設備、編制その他に関する設置基準に従い、これを設置しなければならない。〔「学校教育法」第三条〕

(18) また、客に酒の上手な飲み方を勧め、好みや用途に**応じ**アルコール度の違う酒を紹介する。(朝日新聞 '94.8.19)

(19) 在宅サービスについては、利用者の状況や地域の実情に**応じ**、訪問介護(ホームヘルプサービス)、日帰り介護(デイサービス)、短期入所生活介護(ショートステイ)等を適切に組み合わせて総合的に提供することが重要であるが、〔略〕。(経済企画庁編「平成 10 年版国民生活白書」)

(20) 国会の慣行が外交にも影響を与えかねない事態が相次いでいることから、羽田氏

は〔略〕代表質問でも「大臣の海外出張は、国会開会中のいかに問わず必要性和頻度が高まっている。基本的には必要に**応じ**、海外出張ができるよう改革を提唱する」と主張していた。(朝日新聞 '94. 9. 19)

(21) 施政方針は「そもそも予算に盛り込んだ内容に沿って説明する性格であり、地味にならざるを得ない」(政府高官)にしても、官僚による原案に沿って、改造断念の記者会見前に作られたもので、状況変化に**応じて**の手直しはされていない。(朝日新聞 '94. 3. 4)

(22) 捜査側が得た情報に基づいて捜査方針を変更したの**に**応じて、自白内容も変わってきた。(朝日新聞 '94. 12. 1朝35 [941201165])

(23) 円高の進展などで、国内メーカーに中国や東南アジアに生産拠点を移す動きが加速しているの**に**応じて、都市銀行なども「アジア重視」の姿勢を強めている。(朝日新聞 '94. 1. 9朝9 [940109054])

文法

連体修飾の形としては、例文(6)～(8)(11)のように、「に**応じた**」という言い方が普通であるが、(21)のように、「に**応じて**の」という形も不可能ではない。丁寧形も可能である。

ノート

用例のように、「に**応じて**」で問題にされることは、量的に計れる差異と見られるものが多い。そうした場合、見方を変えれば、「に**応じて**」とは、以下に述べられる事柄が適切になされるように決めるための尺度となるものを取り上げていると見ることも出来る。ただし、例文(9)以下のように、量的な差異だけが取り上げられるわけではない。

◇ A 4 3 ～にかけても・～にかけて

接続

名詞(名詞節を含む)に付く。

意味・用法

「Aにかけて(も)」の形で、以下のことの実現が譲れない根拠として意識されるものを、取り上げて表す。

用例

- (1) 警察のメンツ**にかけても**、必ず二十面相を逮捕せよ。(作例)
- (2) 必ずこのなぞは解いて見せる、じっちゃんの名**にかけて**。(「金田一少年の事件簿」)
- (3) メンツ**にかけても**これ以上の造反を出せない渡辺派も幹部が一人ひとりをチェックし「もう出ない」と強調していた。(朝日新聞 '94. 1. 21)
- (4) メンツ**にかけても**全国最小の県都から脱却したいとの悲願が行政側にみえる。(朝日新聞 '94. 11. 16)
- (5) 二場所連続の全勝優勝で、堂々と横綱にかけあがろうとする貴乃花と、十一場所も一人横綱を張ってきた意地**にかけて**、ライバルに土をつけたい曙。(朝日新聞 '94. 11. 21)
- (6) 自らの誇り**にかけて**、巨人を倒そうという選手が、まだまだ数多くいる。(朝日新聞 '94. 8. 31)

(7) 25球で沈んだ先発槇原の救援は、プライド**にかけて**、失敗するわけにはいかなかった。(朝日新聞 '94.10.9朝23) [「槇」の字、原文は=]

(8) 大英帝国の名誉**にかけて**公使暗殺を阻止しようとするスコットランド・ヤードの敏腕刑事の集団。(朝日新聞 '94.8.17)

(9) 予算審議は急ぎたいが「首相の責任ある対応がない限り、国会の権威**にかけて**正常化は困難」と党の対応を正当化する内容で、各議員が地元に戻る週末、有権者に説明する参考資料だ。(朝日新聞 '94.3.17)

文法

「にかけての」のような連体修飾の形をとることは、難しい。「にかけても」の係っていく述語は、意志や命令の表現が取れる。「にかけて」と「も」を伴わない形も取れる。

ノート

1. 「にかけても」でとりあげられるものは、メンツ・名誉・信用とかいった主体の社会的な体面に関わるものにほぼ限られる。「にかけても」は、主体が不退転の決意をもっていることを述べる言い方であり、何を意識することが、日本人を不退転の決意に至らしめるのかがといった心性がこのようなことから伺われるのかもしれない。

2. 「神にかけて、誓います」あるいは「天地神明にかけて」のような言い方があるが、この場合の「かけて」は「言葉に出して言う」意味の古語「かく」から来たものかと思われる。この項で扱っている「～にかけて(も)」は、むしろ「賭ける」といったニュアンスにつながるものであり、これとは別に考えるべきだろう。「神にかけて」は、類例といえる言い方もほとんど無く、これで一つの慣用表現と見るのがよい。

参考文献

薦原伊都子 (1984)

◇ A 4 4 ~にかけては

接続

名詞に付く。

意味・用法

「Aにかけては」の形で、それをめぐって競合したり比較した場合、高く評価されるような事柄Aをとりあげる。

用例

(1) 私は舌戦**にかけては**、四十ぐらいの嫁に負けはしないのだが、ヘリクツだけは嫌いである。(田辺聖子「姥ごよみ」)

(2) 矢沢さんらは夙作り**にかけては**ベテランだが、失敗して大切な作品を壊しては、と何度も試し張りを繰り返した。(朝日新聞 '94.10.21)

(3) 政治の発信地は、いうまでもなく北京だが、おしゃれ**にかけては**わが街と、上海人は胸を張る。(朝日新聞 '94.12.18)

(4) [高橋由一は] 絵**にかけては**極めて真摯(しんし)だったことが遺作からわかる。(朝日新聞 '94.8.23)

(5) 「テニス**にかけては**抜きんでいる。ほかのことでは、時に問題だと思われるほど、

点が低くても、ね」(朝日新聞 '94.2.20)

文法

1. 「AにかけてはB」のパタンで、Bには、高い評価・よい評価の表現がくる。「長唄にかけては名人級だ」といっても、「長唄にかけては素人以下だ」のような言い方はもちろん不自然である。

2. 「～かけての」のような連体修飾の言い方は、かなり難しい。「にかけては」の形で、「にかけては」が係っていく述語句は、高い評価やそれを伺わせる状態を述べる表現である。命令表現などは、基本的にとりにくい。「暗算にかけては、自信をもっている」とは言えても、「暗算にかけては、自信をもて」というのは、かなり不自然である。

ノート

「に関しては」「かけては」と一部用法が重なるところがあるが、「かけては」が取り上げるのは、高い評価を受けるような事項に限られ、また、動作・行為的な意味でとれる事項でなければならない。そのため、高い評価を受けることであっても、「学歴に関しては、彼はトップ・クラスだ」と言っても「学歴にかけては、彼はトップ・クラスだ」というのは、かなり不自然である。

参考文献

蔦原伊都子 (1984)

◇ A 4 5 ～に比べて

接続

名詞(名詞節を含む)に付く。

意味・用法

「Aに比べてB」の形で、Bという点で比較する対象としてAを取り上げる表現。

用例

- (1) 菜穂子は、弘実**に比べて**ずっと長身だ。(作例)
- (2) ドイツ語は、英語**に比べて**スペリングが簡単だ。(作例)
- (3) 火星旅行は、月へ行くの**に比べて**何倍もの困難が伴う。(作例)
- (4) これをだ液腺染色体といい、その生物に見られるふつうの染色体**にくらべて**、長さ・太さとも70～150倍の大きさがある。(石田寿老ほか「生物I」)
- (5) アジア象**にくらべて**、アフリカ象はその生活環境がかなり変化にとみ、分布範囲も広い。(亀井節夫「日本に象がいたころ」)
- (6) スリムな人**にくらべて**、太った人のほうがふつう走るのが遅いように、質量の大きな粒子ほどその速度は遅い。(野本陽代「宇宙の果てにせまる」)
- (7) 太陽が明るいのは、ほかの恒星**に比べて**特に地球に近いためである。(坪井忠二ほか「新理科2分野上」)
- (8) ホウレンソウは、本来の冬物**に比べて**夏物は、ビタミンB2は多いが、ビタミンCは少ないことが分かった。(朝日新聞 '94.11.26)
- (9) しかし、北海道は広いこともあって、本州よりの西部**にくらべ**、東部に行くのはまだまだ不便である。(鶴飼信成ほか「新しい社会[地理]」)

(10) また、中年世代になったベビーブーマーは、若いときに**比べ**健康に関心を持ちはじめたことからフィットネスクラブなどの健康維持・増進産業への需要も高まっているとみられる。(経済企画庁編「平成10年版国民生活白書」)

文法

基本的に、「AはBに比べて……だ」という比較の言い方で用いられる。従って、述語には比較の尺度となる性質・状態を述べる述語がくる。(9)(10)のように、「て」を伴わない、「に比べ」という形もある。

ノート

1. 「に比べたら」「に比べると」といった形式も、同様に用いられるが、これらの方がなお述語等との結び付きに自由度があり、複合辞としては必ずしも固定化していない。たとえば、これらは、「その仕事をするのに比べたら、留守番でも我慢しますよ」とか「その仕事をさせられるのに比べると、留守番でもよしとすべきだ」のように、比較の尺度を示す述語と結び付かない用法も可能である。

2. 格助詞「より」と意味用法が重なる部分が多いが、「に比べて」は相対的に比較を表す用法だけしかもたず、選択の用法はない。従って、「お茶よりコーヒーがほしい」とはいえるが、「お茶に比べてコーヒーがほしい」とは言えない。

◇ A 4 6 ~に関して

接続

名詞(名詞節を含む)に付く。

意味・用法

言語・思考行動の対象・内容や、検討・評価がなされる観点を示す。

用例

(1) ガリレイはどのようにものが落下するかを実験的に調べ、落下の場合の速さの変化(加速度) **に関して**、はっきりした理解をもつようになったのである。(坪井忠二ほか「新理科1分野下」)

(2) この点 **に関して**、もう一つだけ、物理学者からの引用をしよう。(村上陽一郎「科学者とは何か」)

(3) 英国から、スコットランドのネス湖の怪獣、いわゆるネッシー **に関して** 興味深い報道があった。(朝日新聞 '94.3.15)

(4) フィギュアスケートの採点 **に関しては**、従来、自国の選手に有利な採点をする審判が目立つなどの問題が指摘されていた。(朝日新聞 '94.2.23)

(5) 日本旅行業協会には昨年度、海外旅行 **に関して** 約二百件の苦情があった。(朝日新聞 '94.5.24)

(6) 実のところ人間の生と死 **に関して** 私自身はあまり深く考えたことはないのです。(朝日新聞 '94.1.17)

(7) この法律に定めるもののほか、審議会の組織及び運営 **に関し** 必要な事項は、政令で定める。(「農業基本法」第二十九条)

(8) 日本政府は、これまで軍縮 **に関し**、化学兵器禁止条約づくりや核実験の全面禁止に

向けて積極的な外交を進めてきた。(朝日新聞 '94.9.2)

(9) とりわけ「倫理」という分野は、科学研究者の内部でも、あるいは外部社会との間の関係のなかでも、極めて重要な切り口であるという認識と、それ**に関して**の私なりの多少の蓄積があった。(村上陽一郎「科学者とは何か」)

(10) 私**に関して**の事実を、今私が語るなら、腰が痛いという事だけである。(さくらももこ「もものかんづめ」)

(11) 以前、看護にかかわりのない友人に国家試験問題を見せたところ、難しい医学専門用語は別として、看護**に関して**のかなりの問題が解けてしまった。(朝日新聞 '94.5.17)

(12) 住民移転**に関して**の最大の問題は、このプロジェクトにおいては「土地には土地を」の政策が採用されていない点である。(朝日新聞 '94.8.8)

(13) 次子「すいません、ドレッシング**に関する**アンケートをお願いしたいんですが」(岡田恵和「彼女たちの時代」)

(14) ケプラーはチコ・ブラーエの観測結果を整理して、惑星の運動**に関する**3つの法則を発見した。(湊正雄ほか「地学I」)

(15) 技術**に関する**職能集団は、人間が技術を社会的に利用し始めたころからすでに何らかの形では存在するようになったと考えられる。(村上陽一郎「科学者とは何か」)

(16) このように、介護をめぐる不安、介護費用**に関する**心配によって、多くの人は必要以上に貯蓄し、消費を抑えている可能性がある。(経済企画庁編「平成10年版国民生活白書」)

(17) 私は〔中原〕中也**に関する**限り、全詩集、書簡集、母親の手記、恋人長谷川康子の手記、友人たちの証言に至るまで殆ど目を通していった。(柴門ふみ「恋愛論2 応用篇」)

(18) しかし、宇宙**に関する**根本的な問いに答えるには、だいたい望遠鏡の倍率が足りなかった。(野本陽代「宇宙の果てにせまる」)

文法

「に關しまして」と丁寧の形がとれる。連体修飾の言い方としては、(9)～(12)のように、「に關しての」の形も、(13)～(18)のように、「に關する」とそのまま連体形にした形もとれる。

ノート

1. 類義の複合辞として「について」が挙げられ、意味は概ね重なるが、「について」の方が一般的である。また、「に關して」の方が、対象・内容の取り上げ方にも幅を持たせた言い方で、いわば「關わることについて」というように周辺的な事にも言及するような含みを感じられる。そのため、“まさしくそのこと”というような取り上げ方をすることは、用にくいことがある。例えば、「その事実について目をそらしてはならない」と言っても、「その事実**に關して**目をそらしてはならない」というのは、やや不自然である。

2. 「に關して」は、発言・思考行動を意味する動詞述語に係ることが多いが、さらに、そういった述語が「～ヲ」などの補語を伴った形とも結び付くことがある。そうした場合、「に關して」で取り上げられた事項と、補語として取り上げられた事項には、一種の所属関係が認められることが多い。例えば、「心臓移植**に關して**可能性を検討する」のような例で、この場合、「～**に關して**」と「～**を**」で取り上げられた事項の間には、「心臓移植

の可能性」のような所属関係が見て取れる。

関連項目

A 5 3 「～について」

参考文献

佐藤尚子 (1990)

◇ A 4 7 ～に先だって・～先立ち

接続

名詞（名詞節を含む）に付く。

意味・用法

「Aに先だってB」の形で、事柄AをBの事柄がなされるのに先行してなされるものであるとして示す。

用例

- (1) 開会に**先立って**、所長の挨拶があった。(作例)
- (2) 初演曲の演奏に**先立って**、作曲者のプレ・トークがあった。(作例)
- (3) フォーラムに**先立って**午後零時半から、親子で楽しめる音楽フェスティバルがある。(朝日新聞 '94. 11. 21)
- (4) 映画公開に**先立って**内容を審査した映倫管理委員会は数カ所のセリフの修正を指導した。(朝日新聞 '94. 3. 18)
- (5) 上演に**先立ち**、日本語のほか、英語とフランス語で演目のほかに舞台上で役柄、衣装、化粧、音楽など歌舞伎の基礎知識を解説する。(朝日新聞 '94. 6. 24)
- (6) 高速増殖炉の実用化に**先立ち**、ウランとプルトニウムを混合した燃料(MOX燃料)を現在の原子力発電所でも利用することとしている。(朝日新聞 '94. 8. 27)
- (7) 東京高裁が判決に**先立ち**示した和解案では、国と地元自治体、住民代表からなる協議機関の設置を勧告した。(朝日新聞 '94. 5. 7)
- (8) 社会党としては財源としての増税問題を協議するの**に先立って**、福祉計画などの策定を求める考えを明らかにした発言だ。(朝日新聞 '94. 2. 16)
- (9) 十九日から同分野の交渉が本格化するの**に先立ち**、日本側が「成果」を強調する狙いがあるとみられる。(朝日新聞 '94. 9. 17)
- (10) 山崎氏が講演するの**に先立って**、国歌が吹奏された。(作例)
- (11) 先のジャカルタでのA P E C (アジア太平洋経済協力会議) 首脳会議に**先立って**の日中首脳会談。(朝日新聞 '94. 11. 26)

文法

「Aに先立って」の「A」には名詞がくるのが自然であるが、(8)～(10)のように、「(～が)～するの**に先立って**」という名詞節の形のものを取り取ることもできる。「先立ちまして」のような丁寧の形をとることも可能だと思われる。

ノート

1. 「に先だって」は、いささか物々しい言い方であり、それ故「Nに先だって……」という言い方で問題にされる前後する二つの事柄は、儀式やイベントといった何らかの公

けごとの的なものでなければ不自然になる。例えば、「彼は、外出に先立って、お茶を飲んだ」などという私的な出来事の前後関係を述べるのに、このような言い方は不自然である。

2. 連体修飾の形は、例文(11)のように「先立っての」の形が普通である。「出会うに先立つ予感」などと、「先立つ」の形もあり得るが、むしろ「Aニ先行スル・先ニ起コルB」のような動詞としての実質的な意味がはっきりしてくるので、こうした例は複合辞と考えるほうがよいだろう。

関連項目

A 3 7 「～あたって」、A 4 8 「～際して」

◇ A 4 8 ～に際して・～に際し

接続

名詞に付く。また、動詞のスル形に付く。

意味・用法

「Aに際し(て)」という形で、「Aということを行う時に」「Aということが行われる・おこる時に」という意味を表す。

用例

- (1) 大坂城代は、その赴任**に際して**妻子の同行を許される。(築山桂「浪速の翔風」)
- (2) 出発**に際して**、諸注意を述べる。(作例)
- (3) 元来この〈二重拘束〉理論は、ベイトソンがその共同研究者たちとともに、現代の代表的な精神疾患と目される分裂病の解明**に際して**、その中心モデルとして提出したものである。(中村雄二郎「術語集」)
- (4) 後者はその仕事**に際して**、原則上、そのための特別の材料や道具を手に入れることができるし、それらをどこにも求めることができる。(中村雄二郎「術語集」)
- (5) 化学変化**に際して**は、質量保存の法則が成立する。(柴田雄次ほか「化学I」)
- (6) そこで今回のハレー彗星の接近**に際しても**、一部にパニック症状が起こりはじめている。(石川喬司「彗星伝説」)
- (7) 南部は戦争**に際して**、イギリス・フランスの支持を期待していたが、1862年9月、リンカンが奴隷解放宣言を発表すると、合衆国内外の世論は北部に同情を示し、イギリス・フランスも不干涉の態度をとるにいたった。(土井正興ほか「三省堂世界史」)
- (8) ラテンアメリカ諸国では独立**に際して**、土地制度などの改革が行なわれなかったため、独立後も封建的な大地主勢力が政権を握っていた。(土井正興ほか「三省堂世界史」)
- (9) もし、紀代の言ったように、葉書の場合に、ちゃんと説明がつくのならば、電話**に際しても**、同じようにできるのではないだろうか。(佐野洋「無事永眠」)
- (10) また科挙を行なう**に際して**は朱子学を国学に定めた。(土井正興ほか「三省堂世界史」)
- (11) この問題に限らず、政府は物事を決める**に際して**、利害関係者を意思決定機関に加えがちだ。(朝日新聞 '94.2.1)
- (12) 豊原隆太郎TBS広報部長の話 失われつつある伝統ある「漂海民」を紹介する**に際して**、いくつかの状況設定や注文などはなされているが、それが現実の“海のサマ族

”の姿をゆがめて伝えているとは考えていない。(朝日新聞 '94.9.9)

(13) [イスラエルの] 建国**に際し**、アラブ系住民との対立がたえず、現在でもパレスチナ問題として紛争の根はつきない。(青野壽郎ほか「高校新地理B」)

(14) 十字軍の直接的契機になったのは、セルジュークトルコの小アジア占領**に際し**、東ローマ皇帝が教皇ウルバヌス2世に救いを求めたことにあった。(土井正興ほか「三省堂世界史」)

(15) 公団は建て替え**に際し**、所有している団地の土地を時価で買ったものとして再評価して新家賃を決める。(朝日新聞 '94.9.28)

(16) 一九三〇年代の世界不況**に際し**、米国のルーズベルト大統領はケインズ理論に基づいてニューディール政策を実行した。(朝日新聞 '94.1.7)

(17) 報告書によると、脱出**に際し**、客室乗務員は手荷物を機内に残すよう大声で指示したが、乗客の約二割は持ったまま滑り降りていた。(朝日新聞 '94.12.2)

(18) 代表者会議は、執行部が大会などで決められた方針を具体化する**に際し**、地方組織の意見を聴くために随時開く。(朝日新聞 '94.11.24)

(19) 秦(しん)の始皇帝を殺すべく出発する**に際し**、易水のほとりで見送る人々に訣別(けつべつ)の詩として残した。(朝日新聞 '94.12.4)

(20) クーベルタンは近代五輪として復活させる**に際し**、この二の舞いを演じまいと、アマチュアリズムをI O Cの基本理念とした。(朝日新聞 '94.7.4)

(21) 消費者利益の確保のためには、取引**に際しての**計量の適正化を図る必要がある。(経済企画庁編「平成10年版国民生活白書」)

(22) 難民の生活実態や、援助活動**に際しての**問題点、治安や衣食住など援助関係者の生活環境などについて、調査する予定だ。(朝日新聞 '94.8.2)

(23) それは、大気圏突入**に際しての**技術的困難性ばかりでなく、たとえ、それが成功したとしても、地球表面における着地点が大幅にずれて、北緯三十六度三十分、西経百七度零分附近、つまりそこは、米国ニュー・メキシコ州の高地沙漠地帯で、アルバカーキの僅かに北、ロス・アラモスとサンタフェとの間になるとン連のコンピューターが弾き出したのだ。(中村正軌「嘔吐の海」)

文法

連体修飾の形は、例文(21)～(23)のように、「に際しての」という形をとる。例文(13)～(20)のように、「て」を伴わない「に際し」という形も用いられる。名詞を受ける場合、「Aに際して」は、「A」の部分には動作・出来事的な名詞がくる。

ノート

1. 「Aに際してBする」という場合、AとBは同時的か、AがBに先行するという関係になる。

2. 「にあたって」と意味・用法が重なる部分があるが、「にあたって」の方が当事者としてその行為に主体的にかかわるという意味が表立つ言い方であり、主体的に受け止めるのではない、たまたまの自然の出来事の生起の場合は、「際して」は使えても、「あたって」は使えない。例えば例文(6)のような場合「ハレー彗星の接近に際して」と言っても「ハレー彗星の接近にあたって」とは言えない。

関連項目

A 3 7 「～にあたって」

◇ A 4 9 ～に至っては

接続

名詞に付く。動詞のスル形に付く。

意味・用法

「Aに至っては」の形で、話題になっている一連の事柄の中から、特に注目される・問題になる事柄Aを取り上げて、以下にどのような点で注目される・問題になるのかを述べる表現。

用例

(1) しかし、貴族の邸宅にはまだ草葺き・板屋根が多く、一般農民**に至っては**、堅穴式住居のなかで、地面に草たばやむしろを敷いて住むありさまであった。(宝月圭吾ほか「詳説日本史(再訂版)」)

(2) 戦後生まれの娘は「今どき軍歌なんて」と、あきれているし、孫たち**にいたっては**、まったく無関心で、何の歌か聞こうとしない。(朝日新聞 '94.12.6)

(3) すぐに紹介できる老人病院は三十カ所ほど開拓してある。関東だけでなく、山梨、静岡県に及ぶ。それでも早くて一カ月、待機者が多い病院は入院まで一年もかかる。[略] 特別養護老人ホーム**にいたっては**三、四年待ちもざらだ。(朝日新聞 '94.3.8)

(4) 再処理が難しいとされるプラスチック類については、発泡スチロールトレーは五％しか分別されておらず、ペットボトル**にいたっては**三％と極めて少ない。(朝日新聞 '94.5.17)

(5) しかし、延長保育を実施している保育所は私立で八・八％、公立**にいたっては**二・三％しかない。(朝日新聞 '94.1.20)

(6) このごろの大学生の学力低下は深刻で、分数の掛け算・割り算も満足に出来ない者も少なくない。微積分**に至っては**、十分に理解している者が何割いるか怪しいところである。(作例)

(7) 今期の田野村八段の活躍はめざましく、名人戦にも出場し、勝率は八割、対局数**にいたっては**、全棋士中トップである。(作例)

(8) いままでの民主党にしろ、自由党にしろ、ずいぶん立派な党名であると思うのに、その党名にふさわしい政治も行ってくれなかった人たちが、反省する色もなく離合集散し、新しい党名で出直そうとするなどはもってのほかだと思うのに、党名を公募するという**にいたっては**、新党の底意も知れるようである。(朝日新聞 '94.11.13)

文法

(8)のように、動詞のスル形に付く場合もある。連体修飾の形は用いられない。「にいたりましては」という丁寧の形は、有り得るが、あまり用いられないと思われる。「にいたっては」の後には、どうであるのかの事実描写が述べられるのであり、疑問や命令・意志の表現はとれない。

ノート

1. 「に至っては」は、一連のものから一つをとりあげて主題とする言い方であり、一

連のものが示される文脈がなければ、用にくい。「事故の発生件数は、最近、増え続ける一方だ。」とは言えても、「事故の発生件数に至っては、最近、増え続ける一方だ」と単に言うのは不自然になる。

2. 関連して、「事ここに至っては」のような言い方があるが、進退窮まって何ともしようのない場面に至ったことをいうもので、これだけで一まとまりの慣用句と扱うべきであろう。

関連項目

A 6 5 「～ときたら」

◇ A 5 0 ～に至るまで

接続

名詞に付く。

意味・用法

「～から～に至るまで」と、「～から」を伴う形で、あるいは、「～に至るまで」の形で、一連の物事が（どこから）どこまで及ぶのか、その範囲を示す。

用例

- (1) 鷗外から田中小実昌に**いたるまで**、バライティナーに富んだ短編小説を網羅している。(作例)
- (2) 引き出しから、机の下、本棚の裏に**至るまで**、くまなく捜したが見つからなかった。(作例)
- (3) 〔略〕江戸時代の百姓一揆から現代に**至るまで**民衆の異議申し立ての歴史をまとめている。(朝日新聞, 2000年5月25日朝)
- (4) また、雪の重みにたえる家屋を建てたり、道路や屋根の除雪から、医療・教育に**いたるまで**、この地方の人人の生活にとって、雪は大きな障害になっている。(鶴飼信成ほか「新しい社会 [地理]」)
- (5) 西日本の交通網は、鉄道のほか、道路・海上・航空に**いたるまで**、大阪に集中しているので、大阪を中心とする経済圏の交通の便はよい。(鶴飼信成ほか「新しい社会 [地理]」)
- (6) この二つの文化圏では、食物の好みやことば、その他葬式の仕方に**いたるまで**、かなりの違いがあります。(阿部謹也「自分のなかに歴史をよむ」)
- (7) 私は中也に関する限り、全詩集、書簡集、母親の手記、恋人長谷川康子の手記、友人たちの証言に**至るまで**殆ど目を通していた。(柴門ふみ「恋愛論2 応用篇」)
- (8) 地内(浅草公園内)で生活する者は一流の本店はもとより小さな茶店に**至るまで**一日に一度は必ずお詣りに行く。(川口松太郎「はだか修行」)
- (9) カトリックのミサにのっとっているが、ショスタコービチ風の管弦楽からロック、ジャズに**いたるまで**二十世紀の音楽を織り込んでいる。(朝日新聞 '94. 10. 11)
- (10) こういう寓話(ぐうわ)自体は、オーウェルからゴダールに**いたるまで**、わりとよくあるものだからそんなにコワクはない。(朝日新聞 '94. 3. 15)
- (11) 体に入って悪さをする細菌などを食べてくれるマクロファージ(大食細胞)は、

下等動物から人間に**いたるまで**、生体防御の主演のひとつ。(朝日新聞 '94.7.13)

(12) 会社の会議や学校の授業、果ては医療**に至るまで**、自宅でパソコンのキーを一つ押すだけで済むそうです。(朝日新聞 '94.10.4)

(13) ビデオジャーナリスト(映像記者)と呼ばれ、撮影から取材、編集、スタジオ解説**に至るまで**一人でこなす。(朝日新聞 '94.7.30)

(14) 直美の結婚には、親兄弟**に至るまで**反対した。(作例)

(15) 農村はすみずみ**に至るまで**不景気におちいり、農産物の価格の下落はひどかった。(宝月圭吾ほか「詳説日本史(再訂版)」)

(16) したがって発癌性のあるウィルスが、細胞内でどのように振る舞うかが、細部**に至るまで**明らかになれば、癌の機構解明は半分以上できたとさえ言えるはずであった。(村上陽一郎「科学者とは何か」)

(17) 十七日の主張・解説面「いま何が問われているのか」の「日本とアメリカ」(ブラッドレー米上院議員)は村山政権、日米関係から安保体制**にいたるまでの**米国人のクールな目による論評で読みごたえがあった。(朝日新聞 '94.8.7)

(18) 蘭学(らんがく)の始まりから近代の洋学**に至るまでの**学者を網羅した、武内博編著『日本洋学人名事典』(一八、〇〇〇円)が柏書房から刊行された。(朝日新聞 '94.7.17)

文法

例文(17)(18)のように、「(Aから) Bに至るまでの」と、連体修飾の形を取ることができる。丁寧形は用いられない。

ノート

一見、「(Aから) Bまで」という助詞の用法を強調した言い方のようにも思えるが、「(Aから) Bまで」のように、単に時間・場所の範囲を示す言い方では用いにくい。例えば、「満員電車のなかで、大阪から京都までずっと立っていた」「3日から15日まで国立博物館で開催されている」といった例を、「満員電車のなかで、大阪から京都に至るまでずっと立っていた」「3日から15日に至るまで国立博物館で開催されている」とするのは、不自然である。

関連項目

A 5 8 「～にわたって」、A 5 9 「～にかけて」

◇ A 5 1 ～に従って・～に従い

接続

動詞のスル形に付く。また、名詞に付く。

意味・用法

「Aに従ってB」「Aに従いB」の形で、Bで表される事柄がAと連動していることを表す。

用例

(1) このように、実在の気体では圧力が高くなる**にしたがって**ボイルの法則からのずれが起こる。(柴田雄次ほか「化学I」)

(2) 地球内部は、層状構造をしており、平均的には中心にいく**に従って**、密度がしだいに増加する。(湊正雄ほか「地学 I」)

(3) ヨーロッパの戦線では、はじめ優勢であったドイツが、連合軍の体制が整備する**に従って**劣勢となっていく。(宝月圭吾ほか「詳説日本史(再訂版)」)

(4) 時々、山へ行くが体重が減る**にしたがって**登るのが楽になった。(朝日新聞 '94.1.14)

(5) 国際化が進む**に従って**、英会話学校の数も急増しており、総数は全国で八千校とも一万校とも言われる。(朝日新聞 '94.3.27)

(6) また封建社会がくずれる**に従い**、人間の自我の自覚がはじまり、日清戦争前後には封建道徳からの解放と個人の自由とを基調とする北村透谷の「文学界」一派のロマン主義があらわれた。(宝月圭吾ほか「詳説日本史(再訂版)」)

(7) だが、市場経済化が進む**に従い**、経済格差の拡大、中央と地方の対立など様々な問題が起きている。(朝日新聞 '94.8.22)

(8) しかし、高校の水準が上がる**に従い**、短大志望者が減る誤算もあった。(朝日新聞 '94.9.26)

(9) 年を重ねる**に従い**、一抹の寂しさを感じるようになりました。(朝日新聞 '94.8.28)

(10) 私が警戒するのは世界がますますブロック化される**に従い**、暗黙裏に保護主義を考慮してしまうことだ。(朝日新聞 '94.11.22)

(11) 時間の経過に従って、人々の表情にも変化が見られるようになった。(作例)

文法

前接する動詞は、否定、過去の言い方や、「～だろうに従って」のようなムード表現はとれない。後件には、意志、疑問や命令の言い方がとれない。「～にしたがうN」「～にしたがってのN」といった連体修飾の形は言いにくい。

ノート

「につれて」とほぼ同義だが、時の経過を表すような場合には、「したがって」よりも「につれて」のほうが使いやすい。

関連項目

A 5 5 「～につれて・～につれ」

◇ A 5 2 ～に対して・～に対し

接続

名詞(名詞節を含む)に付く。

意味・用法

- (1) 述語句の動作・行為の向けられる対象を取り上げて示す。
- (2) 以下で述べられる事物が割り当てられたり、代価・お返し等として与えられることになる対象を取り上げて示す。
- (3) 以下で述べられる事物と対照される事物を取り上げて示す。

用例

- (1) 彼女は、審議会からの質問**に対して**的確に答えた。(作例)
- (2) 当時、M侯爵婦人は、国王**に対して**大きな影響力があった。(作例)
- (3) アルバイト1名**に対し**、時給800円を支払う。(作例)
- (4) 激励の電報**に対して**お礼の手紙が送られた。(作例)
- (5) ペルシアの侵入**にたいして**、ギリシアでは約30のポリスが力を結集して戦った。
(土井正興ほか「三省堂世界史」)
- (6) 太陽の南中高度が変化するのは、地球の公転する面(公転面)**に対して**、地軸が傾いているためである。(坪井忠二ほか「新理科2分野上」)
- (7) 取調べ**に対し**、私はテープを売ったのであり、恐喝ではない、単なる商取引きだ、と主張したが、刑事は、「そういうのを、法律上では、恐喝というんだ」と、ばかにしたように言い捨てた。(佐野洋「無事永眠」)
- (8) これらの行政権の行使は、閣議を通じて行なわれるが、その決定について、内閣は国会**に対し**連帯責任を負わなければならない。(辻清明ほか「政治経済 新訂版」)
- (9) それらの一つ一つ**に対して**Bの指し手がやはり五通りずつあるとします。(野崎昭弘「人工知能はどこまで進むか」)
- (10) 外相は、「日本が国際社会から受けたさまざまな恩恵**に対して**、一定の責任を果たすことから逃げるわけにはいかない。(中略)」と述べ、常任理事国になることも選択肢のひとつだとの考えを示した。
(朝日新聞 '94.8.30)
- (11) ワシントン会議の結果、アメリカ・イギリス・日本・フランス・イタリアの五大国の主力艦の比率を、米・英各5**に対して**日本3、仏・伊各1・67とした(ワシントン海軍軍縮条約)。(宝月圭吾ほか「詳説日本史(再訂版)」)
- (12) 中年世代と若年世代の人口比でみると、55年には中年世代1人**に対し**若年世代が1.67人、75年には1.44人という割合であったが、95年は同0.95人となり、若年世代の割合は、この20年間に急に減少している。(経済企画庁編「平成10年版国民生活白書」)
- (13) 降水量**に対し**、高温で蒸発量が多い期間の長く続く乾燥の激しいところを乾燥地域といい、砂漠と、その周りのステップとに分かれる。(青野壽郎ほか「高校新地理B」)
- (14) 次に、失業者のうち長期失業者の割合(1年以上)を日米で比較してみると、日本が19.5%**に対し**、アメリカは9.3%である(図3)。(経済企画庁編「平成10年版国民生活白書」)
- (15) 男子学生**に対して**、女子学生は、むしろ至って活発である。(作例)
- (16) これから先地上に生まれ出でるであろう、われわれの未だ見ぬ子孫、何代も後に生きているであろう将来の「人間」**に対して**の責任を負っているという明確な意識こそが重要なのである。(村上陽一郎「科学者とは何か」)
- (17) そうするのが守**に対して**の仁義だと思った。(向田邦子「鮎」)
- (18) 本国の経済危機の元凶とされる日本**に対して**の本格的な経済情報活動は、すでに始まっている。(朝日新聞 '94.1.23)
- (19) 企業収益が四期連続落ち込むのは確実だが、その中で、各社が株主**に対して**の配当をどうするか、注目される年になりそうだ。(朝日新聞 '94.1.13)
- (20) 何をやってくるかわからない相手**に対して**の自己防衛では、禁じ手を多くしては

意味がない。(朝日新聞 '94.3.9)

(21) 1919年、パリでドイツなどに**たいする**講和会議が開かれ、ベルサイユ条約が調印された。(土井正興ほか「三省堂世界史」)

(22) また、平成7年1月に発生した阪神・淡路大震災をきっかけに、ボランティアをはじめとするNPOに対する社会的な関心が急速に高まり、その支援のため、NPO**に対する**法人格付与の必要性が強く主張されるようになった。(経済企画庁編「平成10年版国民生活白書」)

(23) 「それは、**ぼくに対する**愛情というより、おまえが傷つけられたことに対する怒りなんじゃない？」と、男に思われてしまう嫉妬です。(柴門ふみ「恋愛論」)

(24) 絶対王政**に対する**不満が高まってくると、人間の理性にもとづいて、古い制度を批判し、人間の解放をめざす啓蒙思想が発達した。(鶴飼信成ほか「新しい社会[公民]」)

(25) この思想は、地質学者ライエルの『地質学原理』(一八三〇～三三年)によって、「天変地異説」**に対する**「斉一説」として確立された。(亀井節夫「日本に象がいたころ」)

文法

連体修飾の言い方としては、「に対する」と連体形を取る形も「に対しての」と「の」を伴う形も取れる。「に對しまして」のような、丁寧形も可能である。「Aに対して」の「A」の部分には、「(Aが) Bするのに対して」のように、名詞節の形も取れるが、(3)の用法で名詞節がを受ける場合は、節対節が対照される一種の複文を形成するものとして、別(A33「～のに対して」)に扱う。

ノート

1. (1)の用法では、基本的には格助詞「に」の用法と重なり、相互に置換可能なことが多いが、「に対して」は、いわば「に」の表す格関係をより強調した形で明確化するものと言えよう。従って、「に」ではややあいまいな場合などには、「に対して」が選ばれることになる。

2. 「に対して」は、上記のように格助詞「に」と用法が重なるが、上記と一見似ていても、感情を引き起こす契機を示す「に」の場合などは、置き換えが不自然になる。すなわち、「幽霊に驚く」の「に」を「に対して」と置き換えて「幽霊に対して驚く」と言うのは、極めて不自然である。

3. (2)の用法では、「について」と重なるところがあり、「アルバイト1名に対し、時給800円を支払う」は、「アルバイト1名について、時給800円を支払う」としても同義である。しかし、「について」は具体的な数量の対応関係を述べる場合にしか使えない。例えば、数量が明示されていない「激励の電報に対してお礼の手紙が送られた」を「激励の電報についてお礼の手紙が送られた」とすることはできない。

関連項目

A33「～のに対して」、A53「～について」

参考文献

山下明昭他(1993)・金仙姫(1990)(1992)・佐藤尚子(1983)

◇A53 ～について

接続

名詞（名詞節を含む）に付く。

意味・用法

言語・思考行動の対象・内容や、検討・判定・評価がなされる観点・指標を示す。

用例

- (1) いろいろの金属**について**調べた結果、水中でのイオン化傾向の大きさの順は次のようである。（柴田雄次ほか「化学Ⅰ」）
- (2) 第Ⅱ部では、まず、1997年度を中心に、家計を取り巻く経済社会の動向について概観し、特に消費、住宅の動向**について**分析した。（経済企画庁編「平成10年版国民生活白書」）
- (3) リンネの分類は、任意にえらんだ形態上の特徴をもとにして、哺乳動物では歯の形態**について**注目したものであった。（亀井節夫「日本に象がいたころ」）
- (4) T君は小学校五年の時、私にアインシュタインの相対性原理**について**説明してくれた。（柴門ふみ「恋愛論2 応用篇」）
- (5) 第八条 この法律は、左の各号の一に該当する事業又は事務所**について**適用する。（「労働基準法」）
- (6) 札差し上州屋徳兵衛殺しの一件**につき**、吟味致す。（作例）
- (7) アインシュタイン**について**言えば、すでに明らかにしたように、彼の書いた大統領宛の書簡が、直接原子爆弾製造計画を始動させることになった、という解釈には留保が必要になろう。（村上陽一郎「科学者とは何か」）
- (8) この法則は電熱線に限らず、電流が流れる導線**について**広く成り立つ。（坪井忠二ほか「新理科1分野下」）
- (9) 本純「じゃ次は卒業旅行**について**ですが、箱根の温泉か那須高原のペンション、どちらかに決めたいと思います。意見がある人はお願いします」（金子ありさ「美少女H2卒業旅行」）
- (10) だから一つ一つの事柄**について**判断を下すこと**については**、このようなモデルでできるだろうし、人間の脳にも似たようなシステムが組みこまれているのではないか、という説があります。（野崎昭弘「人工知能はどこまで進むか」）
- (11) 1869年にメンデレーエフは当時知られていた63種の元素**について**周期表をつくり、このことをはっきり示した。（柴田雄次ほか「化学Ⅰ」）
- (12) そのような人口の高齢化は、老後の生活資金のあり方**について**新たな課題を生み出す。（経済企画庁編「平成10年版国民生活白書」）
- (13) このように当時のヨーロッパ各国の学者たちは、アジアの化石の象**について**大きな関心を示すようになり中国の化石の象の研究も、ほぼ同じころに開拓された。（亀井節夫「日本に象がいたころ」）
- (14) 近頃流行の「人工知能」**について**、なるべく広範囲の方々に正しい見識を持っていただくというのが本書のねらいなのですが、市民セミナーでは標題が『コンピュータは人間を超えるか』であったのに、最後のまとめがはっきりしていなかったのも、加筆にたいへん苦労したのもでした。（野崎昭弘「人工知能はどこまで進むか」）
- (15) ただし、坑内労働その他命令で定める健康上特に有害な業務の労働時間の延長は、

一日**について**二時間を超えてはならない。(「労働基準法」)

(16) 少なくとも現在は、どんな装置をつくってどんな観測をすれば宇宙の謎に迫れるのか**について**、かなり明確な予測をたてることができるからである。(野本陽代「宇宙の果てにせまる」)

(17) 中年世代である50代が何を目的に貯蓄しているか**について**、この30年余りの変化をみると、老後に備えて貯蓄をする人の割合が増加してきている。(経済企画庁編「平成10年版国民生活白書」)

(18) 田地に課せられる租は、田1反**につき**稲2束2把をおさめるもので、収穫の3%程度と考えられ、それほど重いものではなかった。(宝月圭吾ほか「詳説日本史(再訂版)」)

(19) そこには、大量殺戮兵器がわれわれの手に入ったということ**についての**、人間としての恐れや危惧は全く感じられない。(村上陽一郎「科学者とは何か」)

(20) そこには生と死**についての**、人間の考え方の大きな変化があったといわなければなりません。(阿部謹也「自分のなかに歴史をよむ」)

(21) まず患者さん**についての**いろいろなデータをタイプライターから打ち込んでやるのです。(野崎昭弘「人工知能はどこまで進むか」)

(22) 物質1g**についての**熱容量、つまり物質1gの温度を1度変化させるために必要な熱量を、比熱とよぶ。(大塚明郎ほか「標準高等物理I」)

(23) さらに、薬事監視員が医薬品等の製造・輸入・販売等**につき**、所要の監視・取締りを行っている。(経済企画庁編「平成10年版国民生活白書」)

(24) 第二十四条 国は、農業の発展及び農業従事者の地位の向上を図ることができるように農業に関する団体の整備**につき**必要な施策を講ずるものとする。(「農業基本法」)

(25) 世界の人口は約3.6億と推定され、南極大陸を除いた平均人口密度は2.7人程度(1km²**につき**)(1970年)となる。(青野壽郎ほか「高校新地理B」)

文法

「につきます」と丁寧の形がとれる。連体修飾の言い方としては、「につく」とそのまま連体形にした形はとれないが、「についての」と「の」を伴った形をとって用いることが出来る。

ノート

1. 類義の複合辞として「に関して」が挙げられ、意味は概ね重なるが、「に関して」の方が書き言葉的な語感があり、対象・内容の取り上げ方にも幅を持たせた言い方だといえる。

2. 「について」は、発言・思考行動を意味する動詞述語に係ることが多いが、さらに、そういった述語が補語を伴った形とも結び付くことがある。そうした場合、「について」で取り上げられた事項と、補語として取り上げられた事項には、一種の所属関係が認められることが多い。例えば、「大学教育について現状を報告する」のような例で、この場合、「について」と「を」で取り上げられた事項の間には、「大学教育の現状」のような所属関係が見て取れる。

3. また、「について」は、「漢字の誤り一つについて減点1点」のように「ごとに」の意味を表すことがある。

4. 「につき」の形は、以上のような「について」のヴァリエーションとして用いられ

るほか、「絶対安静につき、面会謝絶」のように「のため」といった理由の意味でも用いられるが、いずれもかなり硬い書き言葉という語感がある。

関連項目

A 4 6 「～に関して」

参考文献

佐藤尚子 (1990)・蔦原伊都子 (1984)・三井正孝 (1993)

◇ A 5 4 ～につけて・～つけ

接続

動詞のスル形（シテイル形を含む）に付く。

意味・用法

(1) 「AするにつけてB」という形で、「AすることをひとつのきっかけとしてBする」という意味を表す。

(2) 「何かにつけて」「何事につけて」のように不定的な名詞句をうけて、「何か・何事かがあるとそのたびに」といった意味を表す。

用例

(1) 「嬉々として学校へ通う子どもたちの姿を見る**につけて**、彼らの将来の幸福のために、正しい憲法の知識を持たせる唯一の機会が著者に与えられたことに感激を覚えた」(朝日新聞 '94. 5. 2)

(2) こうした後遺症を見る**につけても**、バブル経済とその崩壊過程で金融システムが受けた打撃をなぜもっと早めに防止できなかったのだろうか、と思う。(朝日新聞 '94. 4. 2 1)

(3) 街に、局員四人の明るく親切な郵便局がある。局長が率先して「いらっしやいませ」と笑顔で迎えてくれ、ほかの郵便局にはない温かさがある。〔中略〕明るいあいさつや思いやりが影をひそめ、どちらを向いても殺伐としている昨今、ひとことのあいさつや少しの親切に救われることが多い。それが、トゲトゲしい世の中にいくぶんでも潤いをもたらすに違いないと思う**につけても**、希少価値のある郵便局だ。(朝日新聞 '94. 8. 12)

(4) 血液型も違い、移植を受けても助かる状態ではなかった患者に移植を強行したのは、薬効をみるための生体実験に等しい。〔中略〕移植医療には反対ではないが、今回のいきさつを見る**につけても**、脳死者を死体と位置付けるような今の臓器移植法案が成立したら、患者は何をされるかわからない。(朝日新聞 '94. 1. 5)

(5) 日本人は何か**につけて**、自分たちの行為を「特殊」だとして「反省」する。(朝日

(6) 人は喜び**につけ**悲しみ**につけ**、酒を友にします。(朝日新聞 '94. 12. 25)
新聞 '94. 12. 18)

文法

連体修飾の形はあまり使われないが、(2)の用法で「何かにつけての頼み事」のような言い方は可能である。

ノート

1. 「雨に、風につけても思い出づるふるさと」(文部省唱歌「ふるさと」)のような、

通常の名詞を受ける用法は、現代語ではあまり用いられなくなっており、例文(6)のような慣用的なものを除き、あまり用いられない。

2. 本来は、「～をきっかけとして」といった意味が基本かと思われるが、(2)の用法では、「きっかけ」といった意味はやや希薄になっているようである。

関連項目

A 2 3 「～ごとに」

◇ A 5 5 ～につれて・～につれ

接続

動詞のスル形に付く。また、名詞に付く。

意味・用法

「Aにつれ(て) B」という形で、2つの異なる動作や状況が連動していることを表す。

用例

(1) 恒星の色は表面温度に対応しており、低温では赤色であるが、高温になる**につれて**青色になってくる。(湊正雄ほか「地学 I」)

(2) 台風は中心付近の風速がきわめて大きく、中心から遠ざかる**につれて**、しだいに風が弱くなる。(坪井忠二ほか「新理科 2 分野下」)

(3) 写真技術が進歩し、感光乳剤の感度があがる**につれて**、よりかすかな天体が「見える」ようになっていった。(野本陽代「宇宙の果てにせまる」)

(4) ところが、将棋は取った駒がまた使えますから、終盤に近づく**につれて**可能な手が減るどころか増えてしまうのです。(野崎昭弘「人工知能はどこまで進むか」)

(5) しかし、戦争が長びく**につれて**、日本では兵力や物資が不足し、ロシアでも、皇帝の専制政治に反対する革命運動がおこって、両国とも戦争をつづけることが困難になった。(鶴飼信成ほか「新しい社会 [公民]」)

(6) この抵抗力 F の大きさは、雨粒が速さを増す**につれて**、大きくなる。(大塚明郎ほか「標準高等物理 I」)

(7) 北海道の開発が進む**につれて**、石狩炭田などの炭鉱や、鉄・銀・銅などの鉱山の経営がさかんにおこなわれた。(鶴飼信成ほか「新しい社会 [地理]」)

(8) 遠征の不成功の中で、教皇の権威がしだいに失われていく**につれて**教会はその統制を強化するために、西ヨーロッパ内部での異教徒や異端にたいする圧迫を強めた。(土井正興ほか「三省堂世界史」)

(9) 原子力の利用は、その仕方いかんによっては、人類すべてが繁栄するが、もし核兵器戦争を起せば、全人類が滅亡することがわかる**につれて**、世界の人人の間には、運命をともにするという連帯感さえも生じつつある。(辻清明ほか「政治経済 新訂版」)

(10) バロックの大聖堂に近づく**につれて**、よみがえってきたのはこの土地独特の空気である。(朝日新聞 '94.11.6)

(11) 大切にされる**につれて**体のほうも人間並みになってきたのか、肥満が原因の“成人病”や関節異常などの障害が増えている。(朝日新聞 '94.5.20)

(12) [略] 会社の規模が大きくなる**につれて**、社員の士気を高めるのは難しくなりま

せんか。(朝日新聞 '94.12.14)

(13) 行政サービスを地方に移す**につれて**、地方の自主財源も増やさねばならない。(朝日新聞 '94.7.2)

(14) 山野草を竜眼石や坑火石につけて育てると、自然を縮小した雰囲気が出て、時間がたつ**につれ**、趣が出てきます。(「覚えたい山野草のテクニック」)

(15) 今後、中年世代が「会社」から引退し、「純消費者」となっていく**につれ**、趣味などを同じくする消費者同士としての仲間、グループも広範に形成されるようになるであろう。(経済企画庁編「平成10年版国民生活白書」)

(16) 米国においては、社会の指導的立場にある人の方が、米国が二十一世紀に向かう**につれ**、最も重要な関係はアジアとの関係であるとの意識が強い。(朝日新聞 '94.1.9)

(17) しかしながら、日を追う**につれ**、当初の理念は現実政治に埋没し、政治手法は手あかのついた永田町方式に傾斜していくように見える。(朝日新聞 '94.4.3)

(18) ベイヤー指数が知られる**につれ**、自分だけが見つけた穴馬は減った。(朝日新聞 '94.12.14)

(19) 輸入米になじみが出てくる**につれ**、自由米の値段は急落するのではないか(朝日新聞 '94.3.25)

(20) 今後、税負担が重くなる**につれ**、納税者の監視は一段と厳しくなるだろう。(朝日新聞 '94.10.4)

(21) ブリは、成長**に連れて**呼び名が変わる。(朝日新聞 '94.12.16)

(22) 不安な社会のなかでは、元禄のころのように人生をまじめにみつめる態度はうすくなったが、教育の普及**につれて**文化は庶民のあいだにもひろまった。(鶴飼信成ほか「新しい社会 [公民]」)

(23) 家庭の年中行事はあまたあるが、その内容と意味は家族関係の変化**につれ**どう変わってきたのか。(朝日新聞 '94.2.3)

(24) 稲作によって生産が高まると、食物のたくわえもでき、それ**につれて**、人人のあいだに貧富のちがいができてきた。(鶴飼信成ほか「新しい社会 [公民]」)

(25) 世界最大のニューヨークの市場は、米国の景気回復**につれ**昨年から好調で、年明け早々には新高値をつけた。(朝日新聞 '94.1.21)

文法

1. 前接する動詞は、否定、過去の言い方や、「～だろくに連れて」のようなムード表現はとれない。後件には、意志、疑問や義務を表す言い方がとれる。

2. 前接の名詞は、変化を表すものとする。「それにつれて」のような表現においても「それ」が変化を表す事柄を指す。

3. 連体の形である「に連れる」「に連れての」はやや言いにくい。

ノート

「に従って・に従い」とほぼ同義だが、時の経過を表すような場合や名詞に接続する用法は、「したがって」よりも「につれて」のほうが使いやすい。

関連項目

A 5 1 「～に従って・～に従い」

◇A56 ～にとって・～にとり

接続

名詞（名詞節を含む）に付く。

意味・用法

「AにとってB」という形で文の内容を規定する形で用いられ、「AにとってB」が係っていく文の内容として述べられる個別的な判断・とらえ方をする主体を表す。

用例

(1) 技術的な問題(拡大・縮小や、ゆがみ、雑音など)はいろいろありますが、コンピュータ**にとって**「原理的に不可能」とはいえませんが。(野崎昭弘「人工知能はどこまで進むか」)

(2) サンデーたち**にとって**、ハッブル定数をめぐる論争はこれがはじめてのことではない。(野本陽代「宇宙の果てにせまる」)

(3) だから、女の子たち**にとって**チョコレートは、不用の品である。(柴門ふみ「恋愛論」)

(4) 中世の人びと**にとって**いちばん大切なことは、モノではなく、多くの友をもつことでしたから、モノはそのために必要だったのです。(阿部謹也「自分のなかに歴史をよむ」)

(5) 自分たちの手で日本の化石象を掘り出したよろこびは、参加したもの**にとっては**、一生、忘れることのできないものであった。(亀井節夫「日本に象がいたころ」)

(6) こうして、今日では、教育をうける権利は、たんに子供たちだけでなく、社会人であるおとな**にとっても**たいせつなものとなるようになった。(鶴飼信成ほか「新しい社会 [歴史]」)

(7) 憧れの対象の存在とは、あなた**にとって**だけ気持ちのいいことであり、憧れられている当人にとってはうとうとしいことであるかもしれません。(柴門ふみ「恋愛論」)

(8) 何よりも、他国にどう思われるかということ以前に、日本人自身**にとって**さえ、訳のわからない国になってしまうだろう。(朝日新聞 '94. 11. 28)

(9) 現在のわたし**にとり**、「新時代」とは冷戦終結以後のことであり、「旧時代」とは冷戦時代のことである。(朝日新聞 '94. 10. 31)

(10) 球団**にとり**、現在の首位は計算外だった。(朝日新聞 '94. 10. 1)

(11) 留学生**にとり**「住の問題」はもっとも深刻である。(朝日新聞 '94. 3. 7)

(12) 「みなさんもここで表彰されるのは記念すべきことですが、私**にとりまして**も、今日は記念すべき日になりました」(朝日新聞 '94. 4. 9)

(13) 新聞、雑誌やラジオ、テレビなどのマスメディアは、国民の「知る権利」**にとって**重要なはたらきをする。(鶴飼信成ほか「新しい社会 [歴史]」)

(14) したがって、チーム＝ワーク**にとって**なによりも必要とされるのは、チームを優先させようとする連帯性に満ちた人間関係である。(中村元ほか「倫理・社会」)

(15) 現代に生きるわれわれ**にとっての**思想的課題はなんだろうか。(中村元ほか「倫理・社会」)

(16) スズムシ**にとっての**ゴミが、私にとってはごちそうだったのだ。(さくらももこ「もものかんづめ」)

(17) 子供**にとって**みれば、親はどっちも好きなんです。(朝日新聞 '94.6.4)

(18) むしろ都会の住民**にとって**みれば、これ以上農村から人が流れこんできたら、都会の環境が悪くなるばかりですから、農民に農村にとどまってもらうために税金を使うことは歓迎なのです」。(朝日新聞 '94.7.18)

文法

「にとり」という言い方も、いささかぎこちないがなお可能である。連体修飾の言い方としては、「にとる」とそのまま連体形にしては用いられないが、「にとつての」という形でなら可能である。「にとりまして」という丁寧の形も取れる。とらえ方をする主体という立場を強調した言い方として(17)(18)のように「～にとってみれば」という形もある。

ノート

「にとつて」が係っていくのは、判断的な内容の文である。単なる出来事を叙述する文には結びつかない。「私にとって、夜が明けた」のような言い方は、比喻でもない限り不自然である。

参考文献

野村剛史 (1984)

◇ A 5 7 ～によって・～により

接続

名詞（名詞節を含む）に付く。

意味・用法

(1) 物事を引き起こしたり行ったりする契機・抛り所・手段・所以となる事物や人を表す。

(2) 物事のありようを区別する基準・尺度となるものを示す。

用例

(1) 「玉を懐いて罪あり」は、森鷗外**によって**訳された。(作例)

(2) このように、価格が絶えず上下に変動すること**によって**、いわばそれがバロメーターとなって、社会の生産量はおのずから社会の需要に対して調節される。(辻清明ほか「政治経済 新訂版」)

(3) ナウマン象と人類との関係は、日本では野尻湖底の発掘**によって**あきらかにされてきた。(亀井節夫「日本に象がいたころ」)

(4) わたしたちの生活は、生産**によって**ささえられているだけでなく、生産と消費のなかだちをするこの商業のはたらき**によつても**ささえられている。(鶴飼信成ほか「新しい社会 [歴史]」)

(5) ドイツではルターが1517年、人は信仰**によって**のみ救われると唱えて、法王や教会が、免罪符という札を信者に乱売して金を集めているのに抗議した。(鶴飼信成ほか「新しい社会 [公民]」)

(6) もともと資本の蓄積過程に生じる弊害から労働力ひいては労働者の生活を守ろうとする保護方策は、ただそれだけ**によつて**は、じゅうぶんな効果を上げることはできない。(辻清明ほか「政治経済 新訂版」)

(7) セドラ將軍らを力で追い出すことはできても、そのあとの国民生活の安定、向上というハイチの国づくりが、**武力によっては**達成できないことは、ソマリアの経験でも学んだはずだ。(朝日新聞 '94.8.11)

(8) 地上の2地点から流星を同時に観測すること**により**、その高さを求めることができる。(湊正雄ほか「地学Ⅰ」)

(9) 突然変異はその後の研究**により**、遺伝子そのもの**の変化による**もの(遺伝子突然変異)と、染色体の異常**による**もの(染色体突然変異)との2種類あることがわかった。(石田寿老ほか「生物Ⅰ」)

(10) 金属は、その種類**によって**イオンになりやすさに差がある。(柴田雄次ほか「化学Ⅰ」)

(11) 先カンブリア時代の岩石は、火成岩の絶対年数**によって**、3～6期の年代に区分することができる。(湊正雄ほか「地学Ⅰ」)

(12) 金属の電気抵抗はこのように物質**によっても**違うし、導線の長さや断面積にも関係がある。(坪井忠二ほか「新理科1分野下」)

(13) 公共の福祉の内容も、職業や地位の相違**により**、違った意味に解釈する可能性も少なくない。(辻清明ほか「政治経済 新訂版」)

(14) 家庭裁判所では、まず調停委員などが、当事者の意見を聞いて話し合い**による**解決をすすめ(調停)、それでも解決できないときはじめて、判断(審判)を下すことになっている。(鶴飼信成ほか「新しい社会[歴史]」)

(15) 「推論」、「常識」、「直観」のうちで、コンピュータ**による**自動化を考えるとときにいちばんとつきやすいのは、意外かもしれませんが、「推論」です。(野崎昭弘「人工知能はどこまで進むか」)

(16) 豊かになった以上、相手国に迷惑を及ぼす輸出**によつての**成長は許されず、内需主導型の経済構造への転換が模索された。(朝日新聞 '94.7.8)

(17) いずれにせよ保護政策は、農産物価格と税金**によつての**消費者から農業部門への所得の移転を意味している。(朝日新聞 '94.11.3)

文法

連体修飾の形は、「による」と連体形をとる形が普通だが、「によつての」と「の」を伴う形も、不可能ではない。丁寧形はとりにくい。「～により」という形も、やや硬い印象があるが、とることは出来る。

ノート

物事を引き起こす契機・所以を示す用法の一環として、受身文の動作主を示す用法がある。これに関して、助詞「に」などとの使い分けは、さまざまに論じられて来た。たとえば、はっきりしたところでは、“生産”的な(物を生み出す)意味の動詞の受け身の場合、「によつて」を用いなければならない。しかし、「によつて」か助詞「に」か等の選択は、なお規則的に割り切れない部分もあり、むしろ、現代語として揺れのある部分とも言える。また、「に」に比べた場合、「によつて」は書き言葉的であるがゆえの物々しい語感があり、それがこうした選択に影響してくる場合もある。例えば、「彼のカバンがコソ泥に盗まれた」のような場合、「コソ泥によつて」とするのはいささかそぐわないが、事柄が大仰なことの場合は、「中園家の秘宝が怪人二十面相によつて盗まれた」のようないいかた

も不自然ではない。

参考文献

寺村秀夫（1982）・松田剛丈（1986）・細川由紀子（1986）・佐伯哲夫（1987）

◇A58 ～にわたって・～にわたり

接続

名詞に付く。

意味・用法

「(Aから) Bにわたって(わたり)」という形で用いられ、以下の事柄が認められる空間的もしくは時間的範囲を表す。

用例

- (1) 日本全土**にわたって**、激しい空襲が行われた。(作例)
- (2) ローマ帝国は、広い地域**にわたって**、さまざまな民族を支配するために、法律を整え、各地に都市を建設した。(鶴飼信成ほか「新しい社会 [公民]」)
- (3) 天球の全面**にわたって**、約100個の球状星団が発見されている。(湊正雄ほか「地学I」)
- (4) 国は、前条の目標を達成するため、次の各号に掲げる事項につき、その政策全般**にわたり**、必要な施策を総合的に講じなければならない。(「農業基本法」第二条)
- (5) アリは1830年代に2度**にわたって**、シリア領有をめぐる、トルコと戦った。(土井正興ほか「三省堂世界史」)
- (6) そこで元は、1274年(文永11年)と、1281年(弘安4年)との2度**にわたり**、大軍を送って、北九州へ攻めてきた。(鶴飼信成ほか「新しい社会 [公民]」)
- (7) 便箋三枚**にわたって**一気に書いた。(森村桂「天国にいちばん近い島」)
- (8) ギリヤーク人の人々は、沿海州から樺太西部**にわたって**広く居住していた。(作例)
- (9) 労働基準法には、その第1条から第7条**にわたって**7項目の根本原則が示されている。(辻清明ほか「政治経済 新訂版」)
- (10) 乾燥アジアは、西アジアまたは西南アジアあるいは中東ともよばれ、アフガニスタンからトルコ**にわたり**、インドの2倍余りの面積を占めている。(青野壽郎ほか「高校新地理B」)
- (11) 三日間**にわたって**、新入生合宿が行われた。(作例)
- (12) 平安時代に、350年**にわたって**死刑が廃止されたことなどは、仏教の慈悲の精神が日本人の道徳意識に影響をあたえた具体的なあらわれであるとみることができる。(中村元ほか「倫理・社会」)
- (13) 一方、それまで多年**にわたって**流入した大陸文化は、ほぼ一通り消化され、そのうえに立って、日本の風土や人情・嗜好にかなったものが自然につくりだされてきた。(宝月圭吾ほか「詳説日本史(再訂版)」)
- (14) インド・イラン・アラビアの物語を集めた『千夜一夜物語』は、8世紀から16世紀**にわたって**まとめられた。(土井正興ほか「三省堂世界史」)
- (15) ニューヨーク・タイムズの日曜版は普通の四、五倍の厚さで、各分野**にわたって**

の分冊はいたれり尽くせり。(朝日新聞 '94.7.3)

(16) 日本は一層の開放と自由化を自ら進めることによって将来にわたっての信頼を確立しつつ、政治・安保面でも積極的な役割を担って欲しい。(朝日新聞 '94.5.29)

(17) こうして日本は、資本主義の発達しつつある世界の動きから孤立していることはできなくなり、200年あまりにわたる鎖国は終わった。(鶴飼信成ほか「新しい社会 [公民]」)

(18) このように、貨幣が統一されたことは、全国にわたる商業の発達をたすけた。(鶴飼信成ほか「新しい社会 [公民]」)

文法

「Aに(わたって/わたり)」の形では、「A」に範囲全体をいう名詞が取られる。「AからBに(わたって/わたり)」と「から」を伴う形では、範囲を区切る両端となる語句が取られる。「(Aカラ)Bに(わたる/わたっての)」と、連体修飾の形は取れるが、「(Aカラ)Bにわたりまして」という丁寧の形はやや冗漫で使いにくい。

ノート

1. 「から」を伴う形では、「AからBにかけ(て)」と意味が近くなるが、「AからBにわたって」が、範囲の広がり全体を問題にする言い方なのに対して、「AからBにかけ(て)」は、起点と終点を指示する言い方である(そのため、「にかけて」には、「日本全土にわたって」のような範囲全体をいう名詞を取る用法はない)。

関連項目

A 5 9 「～にかけて」

参考文献

森田良行(1977)『基礎日本語』角川書店

◇ A 5 9 ～にかけて・～にかけ

接続

名詞に付く。

意味・用法

「AからBにかけ(て)」という形で用いられ、以下の事柄が認められる空間的もしくは時間的範囲を起点と終点で示す。

用例

- (1) 関東から西日本にかけて、ぐずついた天気が続きそうです。(作例)
- (2) 夜中から明け方にかけて、雷が鳴り続けた。(作例)
- (3) 玄関から門のところにかけて、足跡が残っていた。(作例)
- (4) 頬のところから顎にかけて、大きな刀傷がある。(作例)
- (5) シベリアからヨーロッパにかけてマンモス象の分布は広く、クロマニヨン人たちの狩猟の対象となっていた。(亀井節夫「日本に象がいたころ」)
- (6) 1921年(大正10年)から翌年にかけて、アメリカのよびかけで、ワシントン会議が開かれ、海軍を縮小する条約が結ばれた。(鶴飼信成ほか「新しい社会 [公民]」)
- (7) 東北自動車道も栃木県から岩手県にかけ、一部上下線とも不通になった。(朝日新

聞 '94. 2. 22)

(8) 明治の末から大正**にかけ**、多くの女性雑誌が創刊された。(朝日新聞 '94. 1. 23)

(9) 中央アジアからウクライナ**にかけて**は、ステップと砂漠からなる乾燥地域がみられ、農牧業や工業・都市が発達している。(青野壽郎ほか「高校新地理B」)

(10) 元禄年間を中心とする17世紀末から18世紀の初め**にかけて**は、都市の町人の社会から、新しい文化が生まれた。(鵜飼信成ほか「新しい社会 [公民]」)

(11) アルプス山麓からドナウ川沿岸**にかけての**丘陵地や盆地は重要な農業地域である。(青野壽郎ほか「高校新地理B」)

(12) 前漢末から後漢**にかけての**儒学は、古典(五経)の注釈(訓詁学)と、迷信による漢王朝の権威づけ(讖緯説)がさかんだった。(土井正興ほか「三省堂世界史」)

(13) 稲のルーツは、ブータンあたりから中国の南西部**にかけた**地域というのが従来の説で、五年ほど前までは私もそう思っていた。(朝日新聞 '94. 9. 22)

(14) 一九九三年から九四年**にかけた**激動の「政治の季節」に、現役の政治家の著作が次々とでた。(朝日新聞 '94. 11. 2)

文法

「AからBにかけての」あるいは「AからBにかけた」と、連体修飾の形が取れる。また、「AからBにかけまして」という丁寧の形も取れる。

ノート

1. 「AからBにかけ(て)」は、「AからBにわたって(わたって)」と意味が近くなるが、「AからBにかけ(て)」が起点と終点を指示する言い方であるのに対して、「AからBにわたって」は、範囲の広がり全体を問題にする言い方である。そのため、「にかけて」には、「日本全土にわたって」のような範囲全体をいう名詞を取る用法はない。

2. 時間は、点的に区切って示すのが普通なのか、「から」を伴う用法では、「夜中から明け方にかけて」のように「AからBにかけ(て)」が普通で、「夜中から明け方にわたって」のような使い方は稀である。

関連項目

A 58 「～にわたって」

参考文献

葛原伊都子(1984)

◇A 60 ～によっては・～によらず

接続

名詞(名詞節を含む)に付く。

意味・用法

「A～によってはB」の形で、Aがどうであるかを基準としてそれがBが成り立つ条件にあてはまる場合は、という意味の規定句を作る(基準を示す「よって」の用法と連続するものと言える)。「～によったら」「～によると」のような形もありそうだが、今日ではやや使いにくくなっている。また、「AによらずB」という形で、Aを基準とせず、という意味の規定句も用いられる。

用例

- (1) 値段**によっては**、あなたにお譲りします。(作例)
- (2) 人**によっては**、そんなかすかな物音が気になることもあるらしい。(作例)
- (3) 理由の如何**によっては**、ただでは済まないぞ。(作例)
- (4) 大雅堂の絵は、年代**によらず**お引き取りします。(作例)
- (5) ただし、ガラスの厚さ**によっては**、網戸が入らなくなったりする場合もあり、最初にきっちりと採寸してもらうのが大切だ。(朝日新聞 '94.2.10)
- (6) なりゆき**によっては**暴動でも起りかねない勢いである。(森村桂「天国にいちばん近い島」)
- (7) しかし、大きさが同じ力でも、加える向き**によっては**、ばねがのびることもあればちぢむこともある。(大塚明郎ほか「標準高等物理 I」)
- (8) 原子力の利用は、その仕方いかん**によっては**、人類すべてが繁栄するが、もし核兵器戦争を起こせば、全人類が滅亡することがわかるにつれて、世界の人人の間には、運命をともにするという連帯感さえも生じつつある。(辻清明ほか「政治経済 新訂版」)
- (9) また、年**によっては**、大雨やひでりなど気象上の大きな変化があつて、災害の原因の一つともなる。(鶴飼信成ほか「新しい社会 [地理]」)
- (10) もちろん目で見たように写すのが大原則だが、時と場合**によっては**、明るめに撮った方がより情感を生かせることもあるし、暗めの表現の中で、質感を際立たせることもある。(朝日新聞 '94.1.30)
- (11) 同省は今後、対象の製品を拡大していく方針だが、無料かかなり安い値段で粗大ゴミを回収・処理している自治体もあり、業者がいくらで回収するか**によっては**、住民の負担増につながる恐れもある。(朝日新聞 '94.1.25)
- (12) 父親は、見掛け**によらず**物分りのいい人で、わたしの話に嘘がないとわかると、市からここまでの料金は自分が払うと伝えてくれました。(三浦哲郎「お菊」)
- (13) 交渉の成否**によらず**、自動車分野で制裁カードを切ってくる」というものだった。(朝日新聞 '94.10.18)
- (14) 「片働きだけが基本という思い込みをなくし、家族の形態**によらず**能力を発揮できる職場作りを考えるときのなのですが」。(朝日新聞 '94.5.3)

文法

連体修飾の形はとれない。丁寧形は、「～によりましては」のように可能である（「～によりませず」はややぎこちない）。文末に対しては、特別の制約はかけない。意志・命令・疑問や詠嘆の言い方も文末にとれる。。

ノート

1. 「～によっては」と類義的な表現として、「～次第では」という言い方が考えられるが、これは、以下のことの決まる・起こるの条件として“～がどうであるか”を問題にする言い方である。った意味の表現である。従って、何かが決定する・生起するというような内容が以下に来ない場合は、「～次第では」は用いられない。例えば(2)のように、以下が決まる・起こるといった内容でない場合、「人次第では、そんなかすかな物音が気になることもあるらしい」などとはいえない。

2. 「～によらず」と類義的な表現として、「～を問わず」という言い方が考えられる

が、これは、「～が、どれ・どうであっても、区別なく」といった意味である。かなり重なるところもあるが、まず、用法の点で「男女を問わず」「春・夏・秋・冬を問わず」などと、問題となる項目を具体的に列記する用法があり、こうした言い方は「～によらず」ではできない（「男女によらず」「春・夏・秋・冬によらず」などとはいえない）。また、「～によらず」は、「～を基準とせず（／が基準とならず）」という意味であるが、「～を問わず」は、“基準”というような含みはない。「彼は相手を問わず電話をかかけまくっている」のような場合、“誰彼かまわず”という無差別ぶりが際だって、特に基準云々といった問題は意識されない状況と解せられるので、「彼は相手によらず電話をかかけまくっている」という言い方は、自然とは言えないようである。

3. 「～によらず」では、「見かけによらず」（＝見カケカラ想像サレルノト違ッテ）のような言い方もあるが、類例を作ることが困難であり（「表情／言葉によらず」で“表情／言葉カラ想像サレルノト違ッテ”という意味には使えない）、この形で慣用句化しているものというべきだろう。慣用句的な関連表現では、「事によると」「事によったら」（＝ヒョットスルト）のような言い方もある。なお、これらの場合、「事によれば」の形はかなり不自然である。

関連項目

A 6 8 「～を問わず」

◇ A 6 1 ～によれば・～によると

接続

名詞（名詞節を含む）に付く。

意味・用法

「Aによれば」「Aによると」の形で、情報を提示する言い方で用いられ、その情報の出所を表す。

用例

- (1) 2 3 日のロイター通信**によれば**、同日未明某国でクーデターが起こったらしい。（作例）
- (2) 西田氏**によれば**、直美はまだ彼の死を知らないそうだ（作例）
- (3) 「徒然草」**によれば**、「平家物語」の作者は信濃前司行長である。（作例）
- (4) 噂**によると**、教員養成系大学・学部の再編は避けられないらしい（作例）
- (5) 中国の古い歴史書**によれば**、紀元前後、倭（日本）は100あまりの国に分かれていたという。（鶴飼信成ほか「新しい社会 [公民]」）
- (6) 白書**によると**、日本の漁業生産で最も多いマイワシの漁獲が、急減している。（朝日新聞 '94. 4. 19）
- (7) 現代の高校生がどのような悩みをもっているかを調査した結果**によれば**、高校生の大半がなんらかの悩みをもっていることがわかる。（中村元ほか「倫理・社会」）
- (8) 例えば、貯蓄広報中央委員会「貯蓄と消費に関する世論調査」（93年）**によると**、70代以上では60%の人が「子供等になるべく多くの財産を残してやりたい」と回答している。（経済企画庁編「平成10年版国民生活白書」）

(9) カントによれば、自らの理性によって確立した道徳法則に自発的に従うことが自律(真の自由)であった。(中村元ほか「倫理・社会」)

(10) 同博士らによると、九二年は北半球の大気中のメタン濃度がわずかながら低下、放出量が一千万トンほど減った計算になった。(朝日新聞 '94.3.9)

(11) 計算によれば、全体の電気容量は、個々のコンデンサーの電気容量の和に等しい。(大塚明郎ほか「標準高等物理 I」)

(12) 労働省の推計によると、これからの二十年間で、三十歳未満の労働力人口は約二百八十五万人減る。(朝日新聞 '94.3.10)

(13) 姉の話によれば、物凄く痛い注射をうたれ、赤外線らしき光線をあてるという治療を受けたらしい。(さくらももこ「ものかんづめ」)

(14) 蝶の生息環境は狭まるばかりだが、蝶研究者らの話によると、近年はツマキチョウ、ウスバシロチョウ、ウラギンシジミなどがやや勢いを盛り返しているという。(朝日新聞 '94.3.25)

(15) 筆者の想像によればこれはきっと、SF連中に対する哀れみ、及びその連中がそのような文壇片隅的つぼで全体何をしておるのかという知的好奇心によるものであったのだろう。(筒井康隆「日本古代SF考」)

(16) 予想によると、高知と長崎に上陸した桜前線は、三月二十五日に横浜市や高松市、宮崎市、鹿児島市にひろがる。(朝日新聞 '94.3.4)

(17) 共生とは、著者の定義によれば《その定住国で民族的諸権利を平等に受け、定住国の文化・社会・経済・政治の発展に寄与する義務をともに負い、その権利を主張できる生き方》だ。(朝日新聞 '94.10.9)

(18) アボガドロの法則によると、1モルの気体は同温・同圧ではすべて同じ体積を占める〔略〕。(柴田雄次ほか「化学 I」)

(19) 聞くとところによると、試食魔とは試食品ばかりを食べ歩く特定の人物の事で、このデパートには三人現れるという。(さくらももこ「ものかんづめ」)

(20) 伝説によれば、あるとき怒りにかられたアルキメデスは、放牧地の家畜に関するひどくむづかしい整数論の問題を作ったという。(朝日新聞 '94.9.18)

(21) 一説によると、ラテン語への執着からの離脱の最初の兆候は、一四世紀にヨーロッパを席卷したペストによって、知識人の間にも多数の犠牲者が生まれ、大学のスタッフにも補充の危機が生じたところにあるという。(村上陽一郎「科学者とは何か」)

(22) ハンブルクのある司法官の証言によりますと、盗人が捕らえられて、裁判を終え、刑期をつとめたあと釈放される前に、右手をあげて神の前で二度と盗みをしないと誓わなければなりません。(阿部謹也「自分のなかに歴史をよむ」)

文法

丁寧の形としては「によりますと」という言い方が可能である。「によれば／よると」は、情報の出所を示す言い方であり、そのため、知識・情報を表明する文にしか結びつかない。

ノート

「によれば(／よると)」は、情報価値のある情報を提示する言い方と言える。それ故、誰でも共有出来て情報価値の乏しいような情報源を取り上げて言うのは、普通は不自然で

ある。例えば、「世間の常識によれば、日本は温帯に属する」というのは、自然ではない（「世間の常識では、日本は温帯に属する」なら可であることと比較されたい）。

連用辞類 2・～ト系

◇A62 ～として

接続

名詞（名詞節を含む）に付く。

意味・用法

問題にする人・物事などの位置づけを示す。どのような位置づけかで、資格・立場・部類・行為の意義づけなどを表わすと下位区分される。

用例

- (1) 今日は、山崎氏が相談係**として**待機している。（作例）
- (2) 教授は、その学生を指導教官**として**叱った。（作例）
- (3) 将軍は、彼を賓客**として**扱った。（作例）
- (4) 葉山は、別荘地**として**知られている。（作例）
- (5) 彼には、所長**として**決定権がある。（作例）
- (6) 友人**として**君から忠告しろよ。（作例）
- (7) 十分な手当をもらっている以上、彼も義務**として**相応に働かなければならない。（作例）
- (8) お礼**と致しまして**、館林うどん詰め合わせをお送りします。（作例）
- (9) これは、上官**としての**命令だ。（作例）
- (10) その態度は、かつての指導教官に対するもの**として**、いささか失礼だ。（作例）
- (11) もはや、彼に異を唱える者は一人**として**いなかった。（作例）
- (12) 社会の一員**として**生活していくためには、一定の水準の知識や技術を身につけておかなければならない。（鶴飼信成ほか「新しい社会 [歴史]」）
- (13) マス＝メディア**として**最初にあらわれたのは書物や新聞などの印刷メディアであり、つぎにラジオやレコードなどの音メディア、つづいて映画やテレビのような映像メディアである。（中村元ほか「倫理・社会」）
- (14) また、祝い事に欠かせない赤飯、冬至に食べるあずき粥は、どちらも魔よけとか厄よけ**として**食べられてきましたが、これもとても理にかなっています。（「なつかしい手作りおやつ」）
- (15) 言うまでもなく、一九世紀末には、物質の究極的な単位**として**「原子」という概念が確立し、それは文字通り、「それ以上分割できないもの」という意味をもつべきものと考えられるに至った。（村上陽一郎「科学者とは何か」）
- (16) 酢酸は、分子中の1個の水素原子が水素イオン**として**電離するので酸性を示す。（柴田雄次ほか「化学 I」）
- (17) 東西に離れる典型的なエクスクラフェンであったが、民族的な対立から、1972年に東パキスタンがバングラデシュ**として**分離独立した。（青野壽郎ほか「高校新地

理B」)

(18) ショウジョウバエの白眼のものは、野生種の赤眼から遺伝子突然変異**として**生じたものである。(石田寿老ほか「生物I」)

(19) 段丘地形、とくに海岸段丘ができる原因**として**、ふつう、海面の下降か土地の隆起が考えられる。(湊正雄ほか「地学I」)

(20) その結果**として**、生物はある一つの目的に向って進化するという目的論や生氣論、あるいは機械論におちいることにもなった。(亀井節夫「日本に象がいたころ」)

(21) 日本の工業は、明治になってから、富国強兵政策の一つ**として**、政府の力で近代化された。(鵜飼信成ほか「新しい社会[地理]」)

(22) 若い女性の理想の結婚相手の条件**として**よく挙げられるのが「一流大卒、身長一七〇センチ以上、一流企業にお勤め」です。(柴門ふみ「恋愛論」)

(23) このとき空気の振動に伴う圧力の変化をマイクロホンなどでとらえてしらべてみると、振動数の大きい音波ほど、耳は高い音**として**感じていることがわかる。(大塚明郎ほか「標準高等物理I」)

(24) 衣裳もシンプルだし、官庁勤めというところが、キャリアウーマン**として**かっこいいと思ったのだ。(柴門ふみ「恋愛論2 応用篇」)

(25) 西部のチロール地方は、風景がすぐれ、独特の風習とともに観光地**として**名高い。(青野壽郎ほか「高校新地理B」)

(26) 第一、何もかも私と同じ感覚の人間なんて(男でも女でも)、いまだかつてたった一人**として**お目にかかったことがない。(柴門ふみ「恋愛論」)

(27) われわれの音楽業界の中に、たくさんのジャンルがございませけれども、ふだん、やはり地味なジャンルと**いたしまして**、ジャズの世界と、もう一つはクラシックの世界もそれに入るかと思えます。(朝日新聞 '94.1.19)

(28) 長い髪にこだわる男性は、イメージ**としての**女性をまだ追っかけている若い人間といえるでしょう。(柴門ふみ「恋愛論」)

(29) それは同時に、そうした遠い将来における人類の住家**としての**地球環境全体にも及ぶ責任ということにならざるを得ない。(村上陽一郎「科学者とは何か」)

文法

丁寧形として「としまして」「と致しまして」の形もある。「～としての」と連体修飾の形で用いることもできる。

ノート

1. 文中に現れる名詞句の位置づけになる場合と、述部の表わす行為の位置づけ・意味づけになる場合とがある。前者の場合、位置づけできるのは、基本的にガ格・ヲ格の名詞句及びこれらに準ずるニハ格(所有・経験主体)・カラ格の名詞句に限られる。従って、「～として」でこれら以外の名詞句の位置づけはできない。例えば、ニ格名詞句を位置づけて「引越し先として板橋に移った」などということとはできない。

2. 例文(10)や「彼は日本人としてやや大柄な方だ」「資金としてはこれだけで十分だ」のように、状態形容詞を述語とする文に現れると(もちろん「～として」は主格の位置づけをいうものともいえるが)、述語のような程度判断がなされる基準・観点をいうものになる。

3. 「一つとして…ない」「一人として…ない」などと否定と呼応する副詞句を形成して、全否定の用法で用いられる。ちなみに、必ず「一つ・一人・一度」など、取り上げられる数は1である。関連する表現に「二度と…ない」などという言い方があるが、この場合は、取り上げられる数は必ず2（以上）になる。

関連項目

A 6 3 「～としては・～としても」

参考文献

馬小兵(1997a)(1997b)

◇A 6 3 ～としては・～としても

接続

名詞に付く。

意味・用法

「Aとしては／としてもB」の形で、Aにあたる人物や組織が、その立場に立っていうと、Bである」という意味を表わす。

用例

- (1) 私**としては**、国立大学の民営化には絶対反対だ。(作例)
- (2) そのように処理してくれれば、当方**としても**異存はない。(作例)
- (3) 君**としては**、今後どうするつもりなのかね。(作例)
- (4) 公正取引委員会**としても**、それ以上のことはできないのだ。(作例)
- (5) 「流通を担っているわれわれ**としては**これまで、扱っている商品のブランドを売り込む方がずっと大切だと思ってきました。(朝日新聞 '94.8.20)
- (6) ほんなら女房が電話に出てな、『お姑さんとこと、お義兄〔にい〕さんとこと、いったいどっちへ年賀に伺えばいいんですか、政府が二つあるような、いえ投票所が二か所あるようなもんで有権者**としては**去就に迷うんです』と切口上で言いよった。(田辺聖子「姥ごよみ」)
- (7) 日本**としては**、素直にその批判に耳を傾けてみる価値があるのではないか。(朝日新聞 '94.8.10)
- (8) このことは私ども、昭和初めの生まれの者**としましては**物足りなかった。(朝日新聞 '94.10.26)
- (9) 今回のこの警告を無視し、残金を支払っていただけないのなら、こちら**としましては**法の力に訴えるしかございません。(さくらももこ「もものかんづめ」)
- (10) 私**としても**あんなに面倒くさい物を、もう二度と使う気にはなれなかった。(さくらももこ「もものかんづめ」)
- (11) 「集団的自衛権の行使は認められていないという解釈のうえで、防衛庁**としても**現行の憲法解釈を堅持すべきだと考えている」(朝日新聞 '94.5.12)
- (12) 会社**としても**苦しい選択だった」と話す。(朝日新聞 '94.6.1)
- (13) この報道で新聞協会賞を受けるだけに、私ども**としても**自らを律して今後の報道にあたりたいと思います」という趣旨のコメントを発表した。(朝日新聞 '94.9.8)

文法

丁寧形として、「としましては・としましても」「と致しましては・と致しまして」の形もある。連体修飾の形で使うなら、「私としての気持ちです」のように、「としての」の形での用法がそれに相当するだろう。言い切り述語と呼応し、文末には意向の表明・疑問・詠嘆といった言い方が来るが、命令や「～しよう」のような意志表出の言い方はとれない。

ノート

1. 「としては／としても」でとりあげられる当事者の立場に立って、その立場から言うという言い方である。従って、「としては／としても」でとりあげられる者は、感情移入がある程度可能なものでなければならない。例えば、「誰かとしては、きっと反対だろう」とか「見知らぬ男としては、我慢ならないだろう」といった言い方は、不自然である。

2. 従属節の中では「として」の形をとるので、「としては／としても」を一つの形式とせず、「として」のとりたて形とすべきだとの説もあるが、「君としてしたいことを教えてくれ」のような言い方はかなり不自然で、従属節の中で「として」の形をとるという観察には、問題がありそうである。意味の明確な分化に応じて、「としては／としても」が主題を表わす一つの固定した形式として確立して来たものと見るのが、むしろ穏当かと思われる。

3. 近年、若年層の一部に「僕的にはそれがベストだ」「気持ち的にもわかる」などという言い方が見られるが、こうした「的には／的にも」はこの種のものに限らず「として＋は／も」のものも含めて「としては／としても」と意味として非常に近く、書き換え可能であることが多い。

関連項目

A 6 2 「～として」

参考文献

馬小兵(1997a)(1997b)

◇ A 6 4 ～といえども**接続**

名詞に付く。

意味・用法

名詞句を受けて「AといえどもB」と以下の述部に係る言い方で、“それがAであるという並々ならぬこと、もしくは、軽く扱われそうなことであってもそれに左右されることなくBということである”という関係を示す。

用例

- (1) どのような悪人といえども、法の下には平等に裁かれる。(作例)
- (2) たとえ怪人二十面相といえど、この警戒網を突破することは難しいだろう。(作例)
- (3) いかなる大戦略家と言えども、兵力の絶対的な差は如何ともしがたいのだ。(作例)
- (4) 大山十五世名人といえども、鬼神ではない。持ち時間の切迫から、大切な局面でつ

い見落としを出した。(作例)

(5) だが、いかにハッブル宇宙望遠鏡**といえども**、それほど遠くの銀河のなかのセフェイドを分解することはできない。(野本陽代「宇宙の果てにせまる」)

(6) しかしまた、国の法律**といえども**、地方公共団体が地方自治の本旨から見て当然有していなければならない自治権を侵害してはならない。(辻清明ほか「政治経済 新訂版」)

(7) 毎年、選手の入替わる高校野球では、“常連校”**といえども**戦力の維持は難しい。(朝日新聞 '94.6.19)

(8) 紙相撲**といえども**様々な展開がある。(朝日新聞 '94.2.5)

(9) 内容が安かろう悪かろうでは、格安ツアー**といえど**消費者からいずれ嫌われるだろう。(朝日新聞 '94.2.21)

(10) プロレスは個人スポーツ**といえども**、会社と選手契約をしている以上、レスラーは企業の歯車のひとつ。(朝日新聞 '94.7.3)

(11) キャンペーンの趣旨は分かるけど、ぬいぐるみ**と言えども**、おりの中に閉じ込めるのは、動物愛護の精神に反する気もするんだけどなあ。(朝日新聞 '94.6.10)

文法

「といえど」と、「も」の落ちた形でも用いられる。丁寧形はない。漢文訓読系の古典語では、文を受けて「当たらずといへども、遠からず」のように用いることができたが、現代語では、文を受ける用法はない。

ノート

1. 漢文訓読系のやや硬い言い方で、現代語では、もっぱら書き言葉でのみ見られる言い方といえる。

2. 「といえども」も、何らかの意味でレベルの高い極端な問題事例を考えてそれでも以下のことは成り立つということを用いた表現である。従って、極端でないものを取り上げるのは不自然になる。例えば、「気安い仲だから、あの人も協力してくれよう」とはいえども、「気安い仲だから、あの人**といえども**協力してくれよう」は不自然である。“気安い仲”の「あの人」は、別段「協力」に関して問題になる極端にレベルの高い存在とは考えられないからである。

3. 類義表現として「だって」が考えられ、上記の用例についても「といえども」→「だって」の書き換えはいずれもうまくいくが、「だって」は、特に極端にレベルの高いものを取り上げる言い方ではなく、いわば“以下の事柄に当てはまるもののひとつである”ということを述べる言い方である。従って、特にレベルの高い事柄を取り上げない用法もあり、そんな場合は逆に、「といえども」への書き換えはできない。例えば、「私**だ**って気にはなっている」といっても、「私**といえども**気にはなっている」という言い方は不自然である。

参考文献

山田孝雄(1935)『漢文の訓読によりて伝へられたる語法』

◇ A 6 5 ～ときたら

接続

名詞に付く。

意味・用法

「AときたらB」の形で、主題提示の形式として用いられる。AがBであることを、並々ならないことだという気持ちで取り上げる言い方である。

用例

- (1) あのおしゃべり男**ときたら**、全くとんでもないやつだ。(作例)
- (2) 「男の論説委員**ときたら**、まるで妖怪(ようかい)だ」(朝日新聞 '94.6.25)
- (3) 近頃の学生**と来たら**、常用漢字もまともに書けないんだ。(作例)
- (4) ママは、ありのままのあたしを愛そうとはせず、自分の完璧な理想像にあたしを近づける努力ばかりをしてきたわ。そして、ママの完璧主義**ときたら**、モンスターみたいなもので、それに気づいていないのは、ママだけ。(森捨子「望郷」)
- (5) オッペル**ときたら**たいしたもんだ。(宮沢賢治「オッペルと象」)
- (6) こうしたピアニストと筋力、というか腕力、という時私が反射的に思い出してしまうのが、アンドレ・フォルデスというピアニストである。彼はハンガリーの生んだ大ピアニストの一人で、日本にも何度か演奏に来たことがあるが、その堂々とした体躯**ときたら**いつもピアノの方が小さく見えるほどだった。(中村絃子「ピアニストという蛮族がいる」)
- (7) 四十余年前の夏目八十郎**ときたら**、辻道場の下男や女中が、「仁王さま」と、よんでいたほどの、堂々たる偉丈夫であった。(池波正太郎「剣客商売・おたま」)
- (8) なぜって、ぼくは農場でいつもねずみたちを追いかけていたのだし、ねずみっていったって、そいつら**ときたら**ねことほとんど同じぐらいでっかいねずみだったのですから。(長田弘「ねこに未来はない」)
- (9) 生まれつきボーっとしている私が、日常生活に夢までとり入れて生きた時期であるから、そのボーっとし具合**ときたら**、水族館の水槽の中をグルグル泳ぐマグロのようであった。(さくらももこ「もものかんづめ」)
- (10) まあ、どっちもどっちだけど、岩手県出身、資産なし、出版社勤務**ときたら**、もう最悪だもんね。(景山民夫「LIFE IS CARNIVAL」)
- (11) 旅先であり、しかも徹臭く狭い部屋**ときては**、いかに超越した自然詩人といえども、なかなか寝つけない。(小林信彦「ちはやぶる奥の細道」)

文法

述部には、「ときたら」でとりあげられた主題についての事実叙述や価値判断が示される。命令・意志・疑問などの言い方は、普通は見られない。「ときたら」で取り上げられる主題は、単一の名詞句だが、これに連続する言い方として、(10)(11)のように、名詞句を列記する表現も見られる。

ノート

1. 「ときたら」は、しばしば“否定的な述定(よくない意味の述語)”を導く言い方だとされるが、例文(5)～(9)のように必ずしも、述語がネガティブな悪い意味になるとは限らない。「Aときたら」で取り上げられるAが、よい意味であれ悪い意味であれ述部で述べられる事柄について、並々ならないこととして問題にする点に本質がある。

2. ほぼ意味の等しい複合辞として、「ときては」「ときた日には」があるが、前者は、少なくとも現代語としては使用がまれになっていると見られ、例文(11)のように、列記的

な言い方に見られるくらいである。また、後者は、多分に口語的で書き言葉にはまれである。

関連項目

参考2 「なんて」

参考文献

藤田保幸(1992)

◇A66 ～といい～といい

接続

名詞（名詞節を含む）に付く。

意味・用法

「AといいBといいC」で、Cといえるものとして、具体的にAもBも挙げられることを示す。

用例

- (1) 弘実**といい**菜穂子**といい**全く口のへらない奴らだ。(作例)
- (2) 「黄色い色**といい**、四角な形**といい**、もうカステラとそっくりなのです」。(朝日新聞 '94.2.6)
- (3) レガートに歌うところ**といい**、イン・テンポでの盛り上がり**といい**、今日の演奏は全く見事だった。(作例)
- (4) 臨場感**といい**、感動**といい**、なんとといっても生中継だ。(朝日新聞 '94.2.24)
- (5) 例えば駅売店の土産物ひとつをとっても、その包装紙の微妙な色彩感**といい**、ていねいな包み方**といい**、外国ではよほど高級な店でないとなかなか味わえないものである。(朝日新聞 '94.5.6)
- (6) ビジュアル的にも、上を向いた短い鼻**といい**、少しめくれあがった唇**といい**、セクシースターの条件を見事にクリアしている。(柴門ふみ「恋愛論2 応用篇」)
- (7) ドナルド・キーンさんの膨大な『日本文学の歴史』**といい**、ガードナーさんの『目録』**といい**、海外でこういうものを読む人、利用する人がいて、つくる人がいるということに、あらためて目をみはる思いだ。(朝日新聞 '94.6.4)
- (8) ドイツからの大型新人二人を迎え、「新生」ぶりを見せつけたかったところだが、パスの精度**といい**守備**といい**、悪すぎた。(朝日新聞 '94.7.31)
- (9) イスラエル占領地へブロンで二月二十五日に起きた、パレスチナ人に対するユダヤ人入植者の銃乱射事件は、礼拝中という状況**といい**、犠牲者の数**といい**、衝撃的であった。(朝日新聞 '94.3.3)

文法

「AといいBといい」と必ず反復して用いる。「AといいBといい(、あるいは、)Cといい…」のように、3つ以上重ねることもできる。ていねい形や連体修飾の形は考えられない。「AといいBといい」という規定句の形成する関係には、2つのタイプのものがある。すなわち、①例文(1)(2)のように「AといいBといい～だ」と、A・Bが述語に対して並列的に主語となっていると言えるような関係の場合と、②例文(3)(4)のように「Aと

いいBといい、～」で、A・Bが文中の名詞句についての具体的な中身を示しているような関係の場合とがある。①の場合、述語は基本的に名詞述語になる。

ノート

類義的な表現として「AもBも」が考えられ、上記①の場合には、かなり近くなって来る。実際、例文(1)の「AといいBといい」は、「AもBも」に書き換え可能で、両表現は互換性が高い。しかし、単に並列的に列記する「AもBも」とは異なり、「AといいBといい」の場合は、一つ一つを詠嘆・感心の気持ちであげつらうようなニュアンスがあり、そのような息が感じられないときは、「AもBも」は「AといいBといい」に書き換えられない。例えば、「納税も投票権の行使も国民の義務だ」を、特別な文脈なしに「納税といい投票権の行使といい国民の義務だ」としては、不自然である。

関連項目

A 6 7 「～といわず～といわず」

◇ A 6 7 ～といわず～といわず

接続

名詞に付く。

意味・用法

「AといわずBといわずC」の形で、AとかBとかに限定されず全般にわたってCであることを表す。

用例

- (1) 今や林家の台所は、ヤシの実が、**棚といわず床といわず**、あふれ出んばかりである。(森村桂「天国にいちばん近い島」)
- (2) 夜になると今度はヤブ蚊の襲来で、**顔と言わず手足と言わず**したたかやられた。(作例)
- (3) 朝**といわず夜といわず**いつでもパソコンにかじりついている。(作例)
- (4) 障子**といわず壁といわず天井**といわず落書きだらけだ。(作例)
- (5) 出家・在家**といわず**、誰もが興味津々だった。(作例)

文法

「AといわずBといわず」と必ず反復して用いる。「AといわずBといわずCといわず…」のように、3つ以上重ねることもできる。丁寧形や連体修飾の形は考えられない。「A・Bといわず」のような言い方もできたらしいが、現代語としては稀である。

ノート

1. 「AといわずBといわず」と限定しないことを言うことによって、限定できない広い範囲・全体にわたることを示す表現である。それ故、「どこも」「だれも」「いつも」などすべてを意味する語句が、以下に明示されることが多い。
2. 「AといわずBといわず」も「AといいBといい」も、結果としてAもBも該当することになるから、その意味では、似ていると言えなくない。しかし、「AといいBといい」が当てはまる具体例を2つ挙げるのに対し、「AといわずBといわず」は2つの具体例を挙げてそれに限定しない(それをももちろん含む)ことを言うことによって、該当する

ものはあくまでもそれらに止まらない広い範囲にわたるといふ含みを示す言い方である。従って、「AといわずBといわず」→「AといいBといい」の書き換えは、(意味が厳密には、ずれるにせよ) 比較的 unnatural ではないが、「AといいBといい」→「AといわずBといわず」は、含みとしての意味が加わるだけに、unnatural になることが多い。「助さんとい格さんとい、ほんとに堅物だな」を「助さんといわず格さんといわず、ほんとに堅物だな」とすると、かなり unnatural であろう。

関連項目

A 6 6 「～といい～といい」、A 6 8 「を問わず」

連用辞類 3・～ヲ系

◇ A 6 8 ～を問わず

接続

名詞に付く。

意味・用法

「Aを問わずB」の形で、「Aが、どれ・どうであっても、そのことに左右されずにBである」という意味を表す。

用例

- (1) 道ですれちがったとき、あるいは電車のなかで目が合ったとき、必ず男女を**とわず**ほほえみをかかず習慣が今でものこっているのです。(阿部謹也「自分のなかに歴史をよむ」)
- (2) 洋の東西を**問わず**、歴史に名を残す人物は一癖も二癖もある。(朝日新聞 '94. 3. 20)
- (3) 風邪は老若男女を**問わず**、だれしも一度はかかる身近な病気です。(朝日新聞 '94. 11. 26)
- (4) 連歌は、南北朝時代には公家・武士を**問わず**流行したが、室町時代になるとその歌集にもすぐれたものがあらわれた。(宝月圭吾ほか「詳説日本史(再訂版)」)
- (5) やる気のある人なら、もちろん県内か県外かを**問わず**、アルバイトに来てもらいたいと思っています。(作例)
- (6) 一九九二年一月一日に施行された改正証券取引法では、あらかじめ約束がなされているか否かを**問わず**、顧客に生じた証券取引による損失を証券会社が補てんした場合には、証券会社の役職員は罰せられることになった。(朝日新聞 '94. 6. 20)
- (7) 応募作品はプロ、アマを**問わず**、未発表のオリジナルに限る。(朝日新聞 '94. 12. 9)
- (8) 敵味方を**問わず**、国内外の戦争犠牲者全体の霊を同時に祭って追悼することこそ大きな犠牲を生じた大戦を反省するあかしともなります。(朝日新聞 '94. 8. 27)
- (9) 首から上に当てたら、理由のいかんを**問わず**、「即退場」と規則改正した方がすっきりしている。(朝日新聞 '94. 5. 12)
- (10) 地域を**問わず**国民の一人一人が豊かさを肌で実感できるようにするためには、生

活の利便の向上に直結するような生活関連資本をより一層充実したものにしていかなければなりません。(朝日新聞 '94. 3. 4)

(11) A 最近では、フキはビニールハウスでも栽培されており、フキノトウは季節を**問わず**に手に入るようだ。(朝日新聞 '94. 3. 10)

(12) 円高や高い地価・人件費などは、業種を**問わず**に価格差の原因になっていることが分かったが、公的規制や取引慣行については、業種によって価格への影響に差が出た。
(朝日新聞 '94. 11. 30)

文法

連体修飾の形も丁寧の形も取れない。「を問わずに」という言い方もあるが、状態副詞的に述語に係るという性格が際立ってくるようである。

ノート

1. 「にかかわらず」という言い方と、意味用法において近いところがあるが、「Aを問わず」は、Aの部分に「どうなるか」のような不定的な節を取りにくい。例えば、「結果がどうなるかにかかわらず、最後まで見届けることにした」とはいえるが、「結果がどうなるかを問わず、最後まで見届けることにした」というのは不自然である(堅い文章後的な言い回しでは、「理由の如何を問わず、処罰した」のように、この種の不定的な節相当のものをとることはあるが、現代語の通常の言い方では、難しい)。

2. 上記のことで分かるが、「Aを問わず」の、Aの部分で問題にされるのは、あり得る選択項として意識されるものであり、「を問わず」とは、問題にする事項が、その選択項のどれだとなっても、そこのとに左右されずという言い方なのである。

◇ A 6 9 ~をよそに

接続

名詞(名詞節を含む)に付く。

意味・用法

「AをよそにB」の形で、「Aのような物事・事柄に対して、あたかもよそごとであるかのありよう・姿勢を取ってBする」という意味を表す。

用例

(1) また、農民や都市貧民の苦しみ**をよそに**、暴利を得る富商も現れてきた。(鶴飼信成ほか「新しい社会 [公民]」)

(2) 日本や西側先進国の景気低迷**をよそに**、中国経済はめざましい勢いで発展している。
(朝日新聞 '94. 3. 15)

(3) そんな私の想い**をよそに**、陽のあたる神社で式は無事に行われた。(さくらももこ「もものかんづめ」)

(4) 泥水の処理に追われる大人たちの憂鬱(ゆううつ)**をよそに**、はしゃぐ子供たちの明るい笑い声が聞こえてきそうです。(朝日新聞 '94. 8. 24)

(5) 周囲の心配**をよそに**、子どもたちは「クマがいるなら見てみたい」。(朝日新聞 '94. 9. 8)

(6) 円ドル相場の波乱**をよそに**、欧州通貨間の相場は安定している。(朝日新聞 '94. 1

1. 4)

(7) 改革のかけ声**をよそに**、役人天国は健在のようだ。(朝日新聞 '94. 11. 26)

(8) 長編ものは巻を追うごとに動きが鈍るとの出版界の常識**をよそに**、一、二巻とも十萬部を突破、このほど出た第三巻の出足はさらに快調という。(朝日新聞 '94. 10. 9)

文法

「をよそに」という形で、以下に導かれるのは、「よそに」している当人の有り様の描写の表現である。有り様を問いたず疑問の表現は出て来得るが、命令や意志の表現は、現れない。

ノート

1. 「をよそに」の形で取り上げられるのは、基本的に問題視すべき（あまりよくない）事柄である。そして、多くの場合、当人が関係があってもおかしくないのに、他人事であるかのように振る舞える事柄である。問題な事柄であっても、当人が関係ないものと考えられる事柄や、他人事のようにとても振る舞えないような事柄を、こうした言い方で取り上げるのは不自然である。例えば、「貞子の突然の事故死をよそに、吾郎は家で仕事していた」とか「多額の借金をよそに、善之は競馬場通いを続けていた」などという言い方は成り立たない。

2. 「AをよそにB」という形で、に導かれるBの部分には、「よそに」している当人の無関心な振る舞いに当たる内容が述べられる。例文(1)のように、好ましくない内容が出でくる場合も、例文(2)のように必ずしもそうでない場合もある。無関心、必ずしも不都合とはいえないこともあるのである。

◇A70 ～をはじめ

接続

名詞（名詞節を含む）に付く。

意味・用法

(1) 「AをはじめB、C（…）」といった形で、Aを代表例とする並列接続の名詞句を形成する。

(2) 「AガXスルノをはじめBガ（Xシ、Cガ）Xスル」といった形で、「AガXスル」ことを記述の最初として類例的な事態を列記する複文を形成する。

用例

(1) きまってヒロちゃんの弟たち**をはじめ**、近所の五、六人の少年たちがその場に群がって、ガヤガヤ騒ぎながら、手伝いをさせてもらうのです。(生田久美子『わざ』から知る)

(2) 政令指定都市では、一九九六年度に川崎が撤廃したの**をはじめ**、横浜、神戸、大阪、名古屋、札幌、先代の各市がすでに撤廃している。(朝日新聞、二〇〇〇、五、二〇、朝)

(3) 恒例の忘年会の余興では、橋本氏が詩吟を披露するの**をはじめ**、村田氏と余田氏が息の合った漫才を演じる予定だ。(作例)

(4) 乃木大将の殉死の直後に書かれた「阿部一族」**をはじめ**、「渋江抽斎」「高瀬舟」その他の歴史小説も、「かのように」というような小文も、彼の人間探究の課題を深くつ

つんでいてわれわれにせまるものをもっている。(中村元ほか「倫理・社会」)

(5) 現在、国民の大部分はヒンズー教徒であるが、イスラム教をはじめ、キリスト教・シーク教・仏教も多くの人人によって信仰されている。(青野壽郎ほか「高校新地理B」)

(6) ニューカレドニア島は、世界第2位のニッケルをはじめ、クローム・鉄・マンガンなどの鉱産物があり、日本からの移民も活躍している。(青野壽郎ほか「高校新地理B」)

(7) この動きは、たちまち京都・大阪・神戸・名古屋・東京をはじめ各地にひろがり、米騒動とよばれる、全国的な民衆の運動になった。(鶴飼信成ほか「新しい社会 [公民]」)

(8) そして、日本をはじめ連盟を脱退する国が相次ぐに至り、国際政治上の力を失っていった。(辻清明ほか「政治経済 新訂版」)

(9) また、中年世代をはじめ多くの人々が、自分や配偶者が虚弱・病気がちになったり、痴呆や介護を必要とする状態になることに対して不安を抱いている。(経済企画庁編「平成10年版国民生活白書」)

(10) 政府もこれまでに、公害対策基本法を制定したのをはじめ、公害対策の法律やしくみを整えてきた。(鶴飼信成ほか「新しい社会 [歴史]」)

(11) オムツをはじめ、残飯、缶、ビンなどのゴミはすべて袋に詰めて持ち帰る。(朝日新聞 '94.8.7)

(12) WHOなどによると、英国が一九六五年、電波メディアからたばこCMを排除したのをはじめ、米、仏、独、イタリア、カナダもテレビCMを禁止している。(朝日新聞 '94.5.28)

文法

名詞句形成の場合、「AをはじめB」と2項になる場合もあるが、「AをはじめB、C…」と3項以上が並べられることが多い。その場合、「AをはじめBやCや…」のように「や」が合わせて用いられることもある。前件には、「の」を介して「スル/シタのをはじめとして」の形もとれる。

ノート

1. 並立助詞の「や」と近い働きをするが、項目の取り上げ方に、軽重がある。すなわち、「ヒロちゃんの弟たちや近所の五、六人の少年たち」は「近所の五、六人の少年たちやヒロちゃんの弟たち」と入れ替えることもできるが、「ヒロちゃんの弟たちをはじめ近所の五、六人の少年たち」は「近所の五、六人の少年たちをはじめヒロちゃんの弟たち」と入れ替えては不自然になる。「をはじめ」とまず取り上げられるのは、代表例・まず注目される例なのである。

2. 類義的な表現として、「をはじめとして」という言い方がある。意味的には、ほぼ等しいものになるが、文法的にはいささか相違が出てくる。たとえば、「橋本氏をはじめ村田氏や余田氏」は、一まとまりの名詞句を形成し、それ故、「余興を演じる橋本氏をはじめ村田氏や余田氏」と全体として連体修飾を受けることが出来るが、「橋本氏をはじめとして村田氏や余田氏」では、一まとまりの名詞句を形成できず、全体として連体修飾を受けることは出来ない(「余興を演じる橋本氏をはじめとして村田氏や余田氏」とすると、修飾句は「橋本氏」にしか係らない)。「をはじめとして」は、「 α を β として」という副詞的な規定句を形成する表現の一ヴァリエーションであり、そこから更に「をはじめ」という並立助詞相当の形式が派生したものと見られる。

◇ A 7 1 ～を通じて

接続

名詞（名詞節を含む）に付く。

意味・用法

「Aを通じてB」の形で、

- (1) Aを媒介・仲立ちとして、
- (2) Aの期間ずっと、
- (3) A（のそれぞれ）にわたって総体として、といった意味の修飾句になる。

用例

(1) 新聞情報を電子メディア**を通じて**送り届ける電子新聞の研究が、アメリカで広がっている。（朝日新聞 '94. 1. 24）

(2) アジアでは、とくに黄河流域に発達した漢民族の文化が周辺の諸国に流れてゆき、日本もまた多くの影響を受け、さらに中国**をつうじて**インドの文化の影響を受けた。（宝月圭吾ほか「詳説日本史（再訂版）」）

(3) 江戸時代には、各地の産物はおもに大阪に送られ、ここの商人の手**をつうじて**、全国に売買された。（鶴飼信成ほか「新しい社会〔地理〕」）

(4) 知るだけでなく、音楽**を通じて**心の交流ができ、それが将来、何らかのお役に立てば、と財団発足を思い立ちました。（朝日新聞 '94. 6. 29）

(5) 中世**を通じて**平均寿命は三十歳くらいでした。（阿部謹也「自分のなかに歴史をよむ」）

(6) 1994年**を通じて**休刊や廃刊に至った雑誌は約100点。（朝日新聞 '94. 12. 29）

(7) 中小メーカーなら冬季だけの仕込みも、ここでは、機械化されて四季**を通じて**行われている。（朝日新聞 '94. 11. 29）

(8) 人が生涯**を通じて**離婚する確率は、1980年では約33組の夫婦に1組の割合だったものが、95年には約25組に1組の割合まで上昇している。（経済企画庁編「平成10年版国民生活白書」）

(9) その後も着実に加点し、創立五十年で、春夏**を通じて**初めての甲子園出場を決めた。（朝日新聞 '94. 7. 30）

(10) 七年以上に及ぶウルグアイ・ラウンド**を通じて**、政府がコメ市場の開放を拒否してきたのは、いうまでもなく国内完全自給の原則によるものだが、これも部分開放の受け入れで、論理的な根拠を失った。（朝日新聞 '94. 4. 15）

(11) また、税制面では、活力ある豊かな福祉社会の実現を目指し、国・地方**を通じ**厳しい状況にある財政の体質改善に配慮しつつ、所得、資産、消費のバランスのとれた税体系を構築することが不可欠であります。（朝日新聞 '94. 7. 18）

(12) 「泣く女」「闘牛」「ミノタウロス」「磔刑（たっけい）」の四つのテーマ**を通じ**、ピカソの個人的な愛と苦悩が、バスク地方の小さな町の悲劇と結びつきます。（朝日新聞 '94. 7. 29）

(13) こうした、スポーツ**を通じて**の親善はかなりあると私は思っている。（朝日新聞

'94. 4. 4)

(14) これまでは、年間**を通じて**の平均値が基準（一リットル当たり〇・一ミリグラム）を下回ればよかったが、新水質基準では、一度でも基準を超えた場合は違反となり、オーバーした状態が続くと給水停止に追い込まれることになる。（朝日新聞 '94. 4. 29）

(15) サッカー関連番組**を通じて**のイメージソングは、バブルガム・ブラザーズの「GET GOOD GET GOD」に決まった。（朝日新聞 '94. 5. 20）

文法

連体修飾の形としては、「を通じての」と「の」を伴って用いられるが、これ自体が連体形的な形をとって「を通じる」のように使うことは出来ない。

ノート

1. 「をとおして」と類義的で、かなり用法が重なる部分があるが、「を通じて」は、視覚的な媒介物については使えない。

2. 「を通じて」は、取り上げられるものとかかわるプロセスが意識される意味合いが強い。(1)の意味で、例えば例文(4)(13)の場合なら、「音楽」「スポーツ」という具体的な体験のかかわりの中でということが意識されようし、(3)のような意味も、“取り上げられる一つ一つを押さえていってそこから全体として”といったニュアンスが基本にあると言える。

関連項目

A 7 2 「～をとおして」

参考文献

国広哲弥(1979)「トオル・トオス・ツウジル」(柴田武編『言葉の意味2 辞書にかいてないこと』(平凡社)所収)・村田年(1993)

◇ A 7 2 ～をとおして

接続

名詞（名詞節を含む）に付く。

意味・用法

「Aを通してB」の形で、

- (1) Aを媒介・仲立ちとして、
- (2) Aの体験を経て、
- (3) Aの期間・広がりで見えて、という意味の修飾句になる。

用例

(1) 現在でも都市についてその面がまったく無視されているわけではないけれども、それが考えられる場合も、新しい観点**をとおして**の上のことである。(中村雄二郎「術語集」)

(2) そして『ビッグバンの発見』で扱おうとする宇宙論は、現代の自然科学という枠組み**を通して**捉えられた宇宙像であって、あくまで一つの宇宙論である、と佐藤氏はい言っている。(中村雄二郎「術語集」)

(3) とり上げられたいろいろな術語を自分の理解**をとおして**それぞれ五ページのなかで捉えなおそうとする本書の試みでは〔略〕(中村雄二郎「術語集」)

(4) そこでは、地下深くに掘ったトンネル**をとおして**、遠くの高台から地下水をオアシスの集落に導いている。(鶴飼信成ほか「新しい社会 [地理]」)

(5) ほんまもんでない大阪弁がテレビ**を通して**全国にまき散らされている現状を嘆く。(朝日新聞 '94. 1. 19)

(6) しかし、国王は、役人**を通して**、農民などを支配し、重い税金をかけた。(土井正興ほか「三省堂世界史」)

(7) その看病**を通して**、私は父の上に、ひとりの人間が尋常に死んでゆくさまを、つぶさにみることができた。(三浦哲郎「忍ぶ川」)

(8) むしろそれは、それぞれの節目において、象徴的な死と再生**を通して**脱皮していく働きである。(中村雄二郎「術語集」)

(9) 野球**を通して**学んだことは、山ほどある。(朝日新聞 '94. 8. 12)

(10) 南北朝の動乱**を通して**成長していった守護大名は、しだいに領国支配を強化してゆくが、なかには一人で数カ国の守護をかね、幕府の要職について、政治的にも経済的にも強大な権力をふるうものもあらわれた。(宝月圭吾ほか「詳説日本史 (再訂版)」)

(11) パ・リーグでは七、八月**を通して**雨で流れたのがわずか1試合 (二十六日現在)。(朝日新聞 '94. 8. 26)

(12) 19世紀の前半**をとおして**、資本家は選挙法の改正と自由貿易主義の実現をめざした。(土井正興ほか「三省堂世界史」)

(13) 正確には、1日の長さは少し変化するが、1年**を通して**平均した長さは、年によって変わらない。(坪井忠二ほか「新理科2分野上」)

(14) 小学校、中学校**を通して**私のように父が戦死した子供は一クラスに二、三人はいた。(朝日新聞 '94. 8. 25)

(15) なによりもうれしいのは植物**を通して**の友人ができることで、苗の交換のほか、新しい情報が入手できる楽しみがあります。(「覚えたい山野草のテクニク」)

(16) WHO**を通して**の今回の特効薬購入は、その費用で賄われた。(朝日新聞 '94. 9. 6)

文法

連体修飾の形としては、「をとおしての」と「の」を伴って用いられるが、これ自体が連体形的な形をとって「をとおす」のように使うことは出来ない。

ノート

1. 「通す」という動詞に由来することから、“何かを通過・経由させてその先へ”という原義が意味の分化にに効いているようで、「何か」媒介となるものを取り上げたり、「通過・経由」の体験・期間・広がりの問題にしたり、といったような用法が見られる。

2. (1) の意味では、しばしば「を通じて」との意味用法の異同が問題になるが、「ガラスをとおして外を見る」といっても「ガラスを通じて外を見る」となどはいえないし、「法医学の観点をとおして検証する」といっても「法医学の観点を通して検証する」とはいえない。つまり、“はっきり何かを視覚的に介して”といった場合や“ものを考える何かの視点・見方”を介してというような場合は、「をとおして」しか使えないといえる。

また、「通じて」と比べて、“何かを媒介として”どうであるのかという結果面に焦点の当てられる言い方である。

関連項目

A 7 1 「～を通じて」

参考文献

国広哲弥(1979)「トオル・トオス・ツウジル」(柴田武編『言葉の意味2 辞書にかいてないこと』(平凡社)所収)・村田年(1993)

◇ A 7 3 ～をめぐって

接続

名詞(名詞節を含む)に付く。

意味・用法

「AをめぐってB」の形で、やりとり・対立がなされる懸案事項・問題点・争点となる事柄を示す。

用例

- (1) 竹島の領有権をめぐって、日韓両国の間で協議がなされた。(作例)
- (2) シンポジウムでは、特に教育基本法の改正をめぐって、徹底した討論を行ってほしい。(作例)
- (3) 身代金の分配をめぐって、犯人グループの中で仲間割れがあったらしい。(作例)
- (4) 中海干拓中止の問題をめぐって、県と国との間に覚書が交わされた。(作例)
- (5) 住民投票の是非をめぐって、町中が騒然としている。(作例)
- (6) 帝国主義の政策をとるヨーロッパ諸国は、植民地や勢力範囲をめぐって、はげしく対立した。(鶴飼信成ほか「新しい社会 [公民]」)
- (7) 封建制度が崩壊する現実を前にし、それにかわる政治体制はどうあるべきかをめぐって、多くの知識人がいわゆる「百家争鳴」の言論活動を展開した。(土井正興ほか「三省堂世界史」)
- (8) 宇宙背景放射の発見をめぐって、ノーベル賞はだれに与えられるべきか、という議論が一九七八年にあった。(野本陽代「宇宙の果てにせまる」)
- (9) 真偽やその正体をめぐってこの六十年間、世界のメディアが盛んに報道し、日本の湖でも同じような怪物の目撃談が相次いだ。(朝日新聞 '94. 3. 15)
- (10) これらの問題をめぐってこれからの日本をどのように考えていったらよいか。(鶴飼信成ほか「新しい社会 [歴史]」)
- (11) パソコンゲームソフトの有害図書類指定を巡っての司法判断は、初めて。(朝日新聞 '94. 1. 25)
- (12) 以後、ユーラシア内陸の歴史は、東アジア世界と西アジア・東地中海世界とを結ぶ通商ルート^①をめぐっての、遊牧民系国家と農耕民系国家との対立を主軸として展開される。(土井正興ほか「三省堂世界史」)
- (13) 雇用、仕事をめぐる環境が変化している中で、次の中年世代である若年層の意識にも変化がみられる。(経済企画庁編「平成10年版国民生活白書」)
- (14) サンデーたちにとって、ハッブル定数をめぐる論争はこれがはじめてのことではない。(野本陽代「宇宙の果てにせまる」)

文法

連体修飾の形としては、「をめぐっての」「めぐる」の両形が用いられる。丁寧形として、「をめぐりまして」といった言い方は可能である。

ノート

「をめぐって」は、立場を異にする者の間でやりとり・対立がなされる際に、そこで問題となる事柄を取り上げて示す言い方である。それ故、「をめぐって」が係っていく述語（述部）は、立場を異にする者の間でのやりとり・対立の行為・状況を意味するものでなければならない。(10)も「立場」の取り方を問題にするものと言える。問題となる事柄を取り上げる言い方では、「について」「に関して」なども考えられるが、これらの場合、“立場を異にする者の間で”という意味は特にない。従って、「エイズ・ワクチンの開発について（／に関して）共同研究を行う」とはいえても、「エイズ・ワクチンの開発をめぐって共同研究を行う」という言い方は不自然である（ちなみに、「エイズ・ワクチンの開発をめぐって国際的な競争が行なわれている」なら可）。

◇ A 7 4 ～をもって

接続

名詞（名詞節を含む）に付く。

意味・用法

「AをもってB」の形で、

- (1) Bのことをするために用いる手段・方法・概念を示す。
- (2) Bのことがなされる時点・段階を示す。

用例

- (1) コウモリやクジラは、音響定位といって、自分で超音波を発信し、その反響を聞くことを**もって**、われわれの視覚の変わりとしている。(養老孟司「ヒトの見方」)
- (2) 文化は伝播だけでは説明できず多発性を**もって**説明される。(原広司「集落への旅」)
- (3) この楠正雪、楠流の軍学を**もって**、紀州公のご下間にあずかる身である。(作例)
- (4) もともと民主主義の本質は、寛容の精神を**もって**、自分と異なった見解が成立するということを認め、最善の解決法を客観的根拠にもとづいて見いだそうとするものである。(中村元ほか「倫理・社会」)
- (5) 「歴史の父」といわれるヘロドトスは、物語的にペルシア戦争の経過をしるし、ツキディデスは批判的精神を**もって**、正確なペロポネソス戦争の歴史をかいた。(土井正興ほか「三省堂世界史」)
- (6) この人権宣言の背景には、長い歴史をとおして人類が血と労苦とを**もって**たたかいてきた人権思想がある。(中村元ほか「倫理・社会」)
- (7) 抽選結果は当選はがきの発送を**もって**代える。(朝日新聞 '94.9.29)
- (8) 星間ガスとかチリという可能性もないわけではないが、それならいまの技術**もって**すれば観測できるはずである。(野本陽代「宇宙の果てにせまる」)
- (9) 本日**もって**、大阪本店を閉店とする。(作例)
- (10) だが、スターテレビとBBCの関係悪化で十七日**もって**BBCニュースは北東

アジア（中国、台湾など）向け放送を中止、日本でも受信できなくなった。（朝日新聞 '94.4.25）

文法

「もちまして」のように、丁寧の形は可能である。連体修飾の言い方は、用いられない。

ノート

1. 格助詞「で」と、用法が重なるところがあり、「をもって」から「で」へ書き直しても、概ね不自然にはならない。しかし、「で」の方が用法がもちろん広く、「で」から「をもって」への書き直しは、必ずしもうまく行くとは限らない。例えば、理由を表す「で」の場合など、「風邪で休んだ」を「風邪をもって休んだ」とするのは、明らかに不自然である（むしろ、理由なら「でもって」だと自然になることが多い）。

2. 「をもって」は、時点の用法もあるが、基本的には、以下のことをするために利用するものを取り上げて示す言い方である。

関連項目

A 7 8 「～でもって」

参考文献

山田孝雄(1935)『漢文の訓読によりて伝へられたる語法』

◇ A 7 5 ～を介して

接続

名詞に付く。

意味・用法

連絡の仲立ちとなるものを取り上げて示す。

用例

(1) 和博は、知人**を介して**、探偵事務所に連絡を取った。（作例）

(2) 羽田氏は「首相の顔が見えないのが、国民の政治に対する一番の不満でしょう」と、もっとメディア**を介して**政治家が語る機会をふやす必要があると指摘。（朝日新聞 '94.7.23）

(3) 過去の主要な書物五十万点を電子テキストの形で蓄積し、通信回線**を介して**提供する巨大なデータベースの構築を山口さんは夢想する。（朝日新聞 '94.6.1）

(4) 末梢神経**を介して**刺激が送られる。（作例）

(5) 大脳皮質のこれらの領域は、下位中枢**を介して**おこる本能行動などを調節したり、本能行動よりさらに進んだ知能行動（p・127参照）を支配するところである。（石田寿老ほか「生物I」）

(6) 倭の邪馬台国女王卑弥呼との間に、帯方郡**を介して**外交交渉があったのは、このころである。（土井正興ほか「三省堂世界史」）

(7) 人には、ペストにかかったネズミなどの血を吸ったノミ**を介して**うつる。（朝日新聞 '94.10.1）

(8) 高橋さんは一昨年十月ごろ、飼い犬の預け先を探していた際、自宅近くの動物病院**を介して**上田容疑者と知り合った。（朝日新聞 '94.2.3）

(9) 通訳**を介しての**会話でしたが、そこには言葉以上に心で分かり合える何かがあったのです。(朝日新聞 '94. 6. 16)

(10) <股関節> 骨盤と大たい骨の骨頭が、軟骨**を介して**接している部位。(朝日新聞 '94. 2. 6)

(11) 国境もなく、固有の文化をもたない南極**を介しての**結び付きなればこそ、互いの文化の違いにも理解が深まる、というのが博士の考えのようだ。(朝日新聞 '94. 4. 8)

文法

連体修飾の形としては、「を介しての」の形が普通である。「を介しまして」という丁寧の形も可能である。

ノート

「連絡の仲立ちとなるもの」を示す言い方で、例文(10)(11)のような例も広く“連絡”という点では十分あり得るといえる。また、「～を通じて」「～を通して」と置き換え可能なこともある。例えば、例文(2)のメディアを介して政治家が語る…」は「メディアを通じて」としてもほぼ同義的である。しかし、同じ仲立ちでも「～を通じて」は発信者と受信者をつなぐ情報の通道的なものをいう言い方であるのに対し、「～介して」は発信者と受信者をつとりつぐ、別個にある第三の存在といったものをとりあげる言い方である。その点幾分ずれるところもある。例えば、「インターホンを通じて呼びかける」と言っても、「インターホンを介して呼びかける」はいささか不自然である。

関連項目

A 7 1 「を通じて」、A 7 2 「をとおして」

◇ A 7 6 ～を駆って

接続

名詞に付く。

意味・用法

「Aを駆ってB」の形で、「Aというその時の物事の流れを利用してBする」という意味を表す。

用例

- (1) 勝ち越した勢い**を駆って**、敢闘賞まで獲得した。(作例)
- (2) 余勢**を駆って**、中原にまで進出した。(作例)
- (3) しかし、その勢い**をかって**、昨年十二月の議会選で政界に打って出ようとしたのが、つまずきのもとだった。(朝日新聞 '94. 5. 21)
- (4) 雑誌界も国際ビジュアルニュースを狙った「ビューズ」(講談社)、「マルコポーロ」(文芸春秋)、「バート」(集英社)などがバブル経済の余勢**を駆って**創刊された。(朝日新聞 '94. 11. 19)
- (5) 旧連立側「圧勝」の余勢**をかっての**行動だ。(朝日新聞 '94. 10. 5)

文法

用法が限られて来ており、「(シタ／スル) 勢い／余勢を駆って」という言い方がほとんどである。その意味では、むしろ、連語成句的な慣用句とした方がよいかもしれない。

連体修飾の形として「を駆っての」があるが、あまり用いられない。

ノート

1. 「馬を駆って急を告げる」のように、「を駆って」で「を走らせて」の意味に用いる言い方もあったが、この言い方では「駆る」にまだ実質的動作を表す動詞の意味が認められ、複合辞と扱うべきではないだろう。

2. 関連して、「に駆られて」という言い方で、「Aという感情にせきたてられて」という意味の表現もある。この「駆られて」もやはりまだ動詞的というべきだろう。この場合、Aには「不安」「焦燥」「危機感」など好ましくない意味の感情を表す名詞がくる。

連用辞類 4 ・ その他

◇ A 7 7 ～からして・～からすれば・～からすると

接続

名詞（名詞節を含む）に付く。

意味・用法

(1) 「Aからして」「Aからすれば」「Aからすると」の形で、「Aに基づいて考えれば」という意味を表わす。

(2) 「Aからして」の形で、「まず何よりAが（／を／に）といった協調的な意味で使われる。「Aからすると」「Aからすれば」には、こうした用法はない。

用例

- (1) この手口**からして**、玄人の仕業だな。(作例)
- (2) 見かけ**からして**、おそらく銀行か証券会社のサラリーマンだろう。(作例)
- (3) 日本の土地や労賃の高さ**からして**、コメの内外価格差をゼロにするのは無理だが、縮小へ努力している姿勢を見せないと、国内外の支持は得にくい」(朝日新聞 '94. 7. 8)
- (4) そのうえ、近年急増している新幹線通勤は、九一年度の一日一万八千人強の実績**からしても**、すでに二万人は超えているものと見込まれ、本来の都市間輸送のほかにも、新しい役割を果たすことになってきた。(朝日新聞 '94. 10. 8)
- (5) むしろ、激情は結婚生活を破滅に導きかねない要因であるということを、私自身の経験**からして**、また、周囲のカップルを見回して気づくに至ったのであります。(柴門ふみ「恋愛論」)
- (6) 彼女の証言の内容**からすると**、必ずしもそのとき容疑者に殺意があったとは考えられない。(作例)
- (7) 順番**からすれば**、今度は当然庶務二課の担当だ。(作例)
- (8) 反対の声がなかったことからすれば、一応認められたのだな。(作例)
- (9) ちなみに、人間の腸は四一七メートルと身長三倍前後とみられており、比率**からすると**、オタマジャクシよりだいぶ短い。(朝日新聞 '94. 6. 17)
- (10) 年二十兆円を越す日本の医療費**からすると**、たばこ半減で年二兆円が浮くことになる。(朝日新聞 '94. 5. 22)
- (11) 過去の例**からすると**、むしろ、大きな期待は禁物であろう。(朝日新聞 '94. 2. 11)

(12) 二年半ほど前、社説で「『寄付の文化』を育てよう」と訴えた立場**からすると**、大変うれしい話だ。(朝日新聞 '94.8.22)

(13) ただ、症状と経過**からすると**、別の病気のこととも考える必要があるかもしれません。(朝日新聞 '94.3.27)

(14) これは国際連盟にはなかったことで、規約上**からすれば**、国際連合は、平和維持機構としては、連盟よりもたしかに強力である。(辻清明ほか「政治経済 新訂版」)

(15) ワトソンが、そうした振る舞いを、こだわりもなく書いているということは、従来の科学者と称される人々の感覚**からすれば**、あまり理解のできないものだった。(村上陽一郎「科学者とは何か」)

(16) 身分上は甲乙の差はないが、経済力**からすれば**とうてい打ち打ちできない。(辻清明ほか「政治経済 新訂版」)

(17) 国民の常識**からすれば**、ある企業が政治家にひそかに金を渡し、行政の筋を曲げるよう働きかけるのは、汚職以外の何物でもない。(朝日新聞 '94.4.3)

(18) 銭湯の水風呂でクロールの練習をするなんて、そもそも親のしつけ**からして**なっていないよ。(作例)

(19) TDL、TDLといったって、だいたい私は、そのディズニー・ランドとは何かということ**からして**よく知らないのだ。(作例)

(20) 腹の立つ話でも穏やかに話すところ**からして**、シンの強い人なのである。(朝日新聞 '94.6.24)

(21) PL法というのはその名前**からして**必ずしも一般消費者にとって分かりやすいものではない。(朝日新聞 '94.4.24)

文法

判断の手掛かりを示す規定句となって、以下に判断内容としての叙述を導く。命令や意志・希望・詠嘆などの言い方は以下に来ない。

ノート

「～からすれば」には、「その点は、組合派の人たちからすれば異論のあるところだ」のような用法も見られる。この「組合派の人たちからすれば」は「組合派の人たちにすれば」としてもほぼ同義であり、この種の「～からすれば」は立場・考え方の主体を表す「～にすれば」の形の一つのバリエーションと考えられる。

関連項目

A 6 1 「～によれば」

◇ A 7 8 ～でもって

接続

名詞（名詞節を含む）に付く。

意味・用法

格助詞「で」の強調形で、基本的には「AでもってB」の形で、「Aを手段・方法としてBする」という関係を示す。

用例

- (1) 仕方がないから、金づち**でもって**穴を開けて、中をのぞいてみたんだ。(作例)
- (2) 理屈ばかり言ってないで、行動**でもって**示したまえ。(作例)
- (3) とりわけ、現代の権力担当者は、多数の支持という一見「民主的」な装い**でもって**自らを正当化する。(朝日新聞 '94.5.4)
- (4) 歌舞伎役者ならではの顔立ちで、顔**でもって**存在感を出す、役を見せる役者は彼でもう最後だろう」とその死を惜しんだ。(朝日新聞 '94.3.26)
- (5) 毒々しい抗議**でもって**、毒を制することができるか。(朝日新聞 '94.3.31)
- (6) 「私は曲をゆっくりとシンプルな美しさ**でもって**演奏します。(朝日新聞 '94.6.8)

文法

「でもって」の形以外では、丁寧形もなく、連体修飾の形もない。

ノート

1. 「で」の強調形ということで、口頭では、手段・方法以外の用法にも拡大して用いられる傾向がある。「彼は病気で**でもって**寝ている」とか、「母は入り口のところで**でもって**隣のおばさんと立ち話している」とさえもいえなくはないようである。接続詞「それで」を強調して「**でもって**どうしたのさ」などという言い方も耳にする。こうした「で」を強調する「**でもって**」のような言い方は、意外に新しく、明治以降勢力をもち始めたようで、方言差はあるものの、一部ではなお用法を広げつつあるのかもしれない。

2. ちなみに、辞書には「彼は秀才**でもって**、スポーツマンだ」のような言い方が記載されているが、断定の助動詞連用形・中止法としての「で」が、「**でもって**」と強調される例は、今日では珍しいようである。

参考文献

山田孝雄(1935)『漢文の訓読によりて伝へられたる語法』

◇A79 ～どころか

接続

名詞的な語句あるいは文相当の節(述語句的なものも含む)に付く。

意味・用法

「AどころかB」という形で、Aを否定し、Aを基準に見て高レベルであれ低レベルであれ、レベルの違うBを引き合いに出してくる表現である。

用例

- (1) 優勝争い**どころか**、四位につけるのがやっとだった。(朝日新聞 '94.10.29)
- (2) ビール**どころか**、アルコールをいっさい置いていない。(朝日新聞 '94.12.29)
- (3) パソコン**どころか**ワープロさえ使ったことがない。(作例)
- (4) 私たちの太陽は、かつて考えられていたのとは異なり、宇宙の中心**どころか**、天の川銀河の中心ですらなかったのである。(野本陽代「宇宙の果てにせまる」)
- (5) 二束三文**どころか**、こんな本、値段になりませんね、と軽蔑(けいべつ)したような顔でにらまれる。(朝日新聞 '94.10.25)
- (6) 隣に越してきたのは日本橋ではちょっとしられた大店の呉服屋だそうだが、主人が引っ越しのあいさつに来る**どころか**、使用人さえ寄こさなかった。(作例)

(7) 政府が重要な資料を公開しない**どころか**、文書の存在そのものを隠したりしてきたためだ。(朝日新聞 '94. 5. 27)

(8) 家事を苦しめない**どころか**、日常的に楽しむコツを知っている。(朝日新聞 '94. 10. 4)

(9) ところが、将棋は取った駒がまた使えますから、終盤に近づくにつれて可能な手が減る**どころか**増えてしまうのです。(野崎昭弘「人工知能はどこまで進むか」)

(10) というのも、興味深いことには、書いている著者には、そういう場面でも、どこかでそのスポーツ感覚のような雰囲気があって、こうした振る舞いに、それほどの罪悪感もない**どころか**、むしろ当たり前で、楽しんでいるようにさえ思われるからである。(村上陽一郎「科学者とは何か」)

(11) 千恵「〔略〕あんたもホントお人よしねえ。敵に塩おくる**どころか**本人おくっちゃってるんだから」(野島伸司「101回目のプロポーズ」)

文法

「AどころかB」で対比されるのは、節対節の場合もあれば、語(名詞)対語(名詞)の場合もある。「どころか」という言い方は、事実を確認する疑問文においては使えるが、命令文においては現れず、意志表現においても用いにくい。

ノート

「～どころか」という言い方は、話し手において、対比される項目間に段階的な序列が意識されており、それに基づく表現ということが出来る。例えば、将棋を話題にして、「彼は、駒の動かし方を知っているどころか、アマチュア初段の実力者だ」といったことが言われることがあろうが、この場合、「駒の動かし方を知っている」ということを基準にして、これを否定したうえ、ずっとプラス方向(高いレベル)に位置付けられる「アマチュア初段の実力者だ」ということが是とされた言い方である。また、「彼は、駒の動かし方を知っているどころか、そもそも将棋というものの存在を知らないのだ」というようなことがいわれることもあろうが、この場合は、「駒の動かし方を知っている」ことを基準に、これを否定して、ずっとマイナス方向(低レベル)に位置付けられる「将棋というものの存在を知らない」ということが是としてとり上げられている。このように、「AどころかB」は、「Aどころか」でとり上げられる事柄を否定し、これに対し、プラス方向であれマイナス方向であれ、隔絶したレベルにある事柄Bを是としてとり上げる言い方といえる。

参考文献

服部匡(1995)

◇A80 ～のみならず

接続

名詞に付く。また、用言のスル形・シタ形(シテイル形・シテイタ形を含む)に付く。

意味・用法

「AのみならずB」の形で、「Aに加えて更にB」という意味を表す。

用例

(1) 研究会には、幹事の山崎氏**のみならず**井上氏や相澤氏も来た。(作例)

(2) キュビエは、断片的な化石の骨や歯から、もとの動物を復元することも提唱したが、かれのおこなった復元が、後になって、完全な骨格の発見によって裏づけられることもあったので、声望は非常に高く、その影響は学界のみならず一般の人々にも広くおよんでいた。(亀井節夫「日本に象がいたころ」)

(3) 今日、工業化・都市化の波は、先進国のみならず世界各地の発展途上国にも一様におしよせ、文化・文明の質を画一化しつつある。(中村元ほか「倫理・社会」)

(4) このことは、アメリカでは、若年世代のみならず中年世代でも比較的転職が多いことを示している。(経済企画庁編「平成10年版国民生活白書」)

(5) しかも近所の銭湯のみならず、フラリと行った町でも見つけ次第、ひとつ風呂あびて帰ってきたりする、もはや銭湯研究者である。(さくらももこ「もものかんづめ」)

(6) 教育は、企業のみならず、国全体の将来のために不可欠の投資である。(朝日新聞 '94.3.19)

(7) 他人のみならず、運転者自身にとっても危険なことをもっと認識し、夕方になったら点灯することを徹底してほしい。(朝日新聞 '94.11.12)

(8) 犯人は、現金五十万円を奪ったのみならず、店番をしていた岩坪さんを絞殺してマンションに放火した。(作例)

(9) この演奏会では、ペンデレツキの新作協奏曲が初演されるのみならず、ソリストとして、ペルガメンシコフ他3人の世界的チェリストが共演するはずだった。(作例)

(10) それらの樹は、一本一本太さも肌の色もまがり方も変っているのみならず、私の眼の高さぐらいのところに大きなコブをもっていたり、あるいは一の枝が裂けて、幹の一部が洞穴のようになっていたり、[略](水上勉「森」)

(11) もし、これが本当だとすると、日本政府は米国の意図するところを全く理解していないのみならず、日本国民の利益を考えていないことになる。(朝日新聞 '94.3.1)

(12) 東アジアでは、隋王朝が6世紀末に中国本土の南北分裂を統一したのみならず、北辺への領域拡大に乗り出し、それを継いだ唐王朝によって、東アジア全域の諸種族を包含する世界帝國的支配体制がつくりあげられた。(土井正興ほか「三省堂世界史」)

(13) 我が国が過去の一時期に行った侵略行為や植民地支配は、国民に多くの犠牲をもたらしたのみならず、アジアの近隣諸国等の人々にも今なお大きな傷跡を残しております。(朝日新聞 '94.9.30)

(14) 憂えるべきは、それが単に社会党の死を意味するのみならず、日本政治全体の死にもつながりかねないということである。(朝日新聞 '94.5.3)

文法

「のみならず」は、名詞を取り上げて列記するだけでなく、「～スル／シタのみならず」といった用言述語句を取り上げる用法もある。後者の場合、「～シナイ(／シナカッタ)のみならず」と否定の形のものも取れるが、「～スルダロウのみならず」のような推量の形のものには取れない。

ノート

「のみならず」は「ばかりか」と用法においてかなり重なるが、「のみならず」が、命令や意志の文中でも使えるのに対し、「ばかりか」は、使えない。例えば、「地震計のみならず金属探知機も持参せよ／用意しよう」とはいえるが、「地震計ばかりか金属探知機

も持参せよ／用意しよう」とはいえない。なお、「のみならず」はやや固い文章語という語感があり、口頭語では用いられない。

関連項目

A 4 1 「～に限らず」

◇ A 8 1 ～とは

接続

1. 単語等ことばとして云々されるものという意味でとりあげられた語句に付く。
2. 文あるいは文相当の事柄を表す語句に付く。

意味・用法

「AとはB」の形で、

- (1) Aという言葉を取り上げて、その意味を説明する叙述であるBを導く。
- (2) そこで当面する発言や出来事(=A)を取り上げて、それに対する判断・評価・所感(=B)を述べる叙述を導く。

用例

- (1) 「ムラサキ」とは醤油のことである。(作例)
- (2) 連星とは、2個の恒星が万有引力で引きあい、共通重心のまわりを公転しあっている体系である。(湊正雄ほか「地学I」)
- (3) 国民総生産とは、いろいろな産業が、1年間に生産した生産物やサービスの総額から、二重計算をさけるために、原材料その他の中間生産物の額を差し引いて、新しくその年に作り出されたものだけを国民経済全体について合計したものである。(鶴飼信成ほか「新しい社会[歴史]」)
- (4) アイススタシーとは、これらの地かく・マントルを構成する岩体が、重力に対してつりあいを保っているという考え方である。(湊正雄ほか「地学I」)
- (5) 初恋とは突然にやってくる台風のようなものです(柴門ふみ「恋愛論2 応用篇」)
- (6) 「実存が本質に先だつとは、この場合なにを意味するのか。(中村元ほか「倫理・社会」)
- (7) わたしたちも、資源の浪費をしていないか、ほんとうの豊かさとはなにかをみなおさなければならない。(鶴飼信成ほか「新しい社会[歴史]」)
- (8) ご存じのように、どこも図書購入費などは限られており、私が見た学校の中には、図書室とは名ばかりで、あまりに古い物が置かれているなど、図書室そのものが、本を読む雰囲気にはほど遠かったりするところもありました。(朝日新聞 '94.11.2)
- (9) 「帰りたい」とはけしからん。(作例)
- (10) くどくど言い訳するとは情けない。(作例)
- (11) 梅に鶯とは美しいね。(作例)
- (12) いや風流じゃ、風流じゃ。白刃固めの御案内とは近頃なかなか風流じゃ。(佐々木味津三「旗本退屈男」)
- (13) 「この野郎」とは何だ。(作例)
- (14) 音楽に国境はないとは素晴らしい。(作例)

(15) 明日が引っ越しだ**とは**忙しいね。(作例)

(16) 嘘をつく**とは**けしからん。(作例)

(17) 今回、わけあって再び「汚れちまった悲しみに」を読み返したのだが、これほど近代的リズム感をもった詩人が、昭和初期に存在した**とは**驚きである。(柴門ふみ「恋愛論2 応用篇」)

(18) それを生み落としたのが、生活給型の今の所得税の仕組み**とは**皮肉なてん末だ。(朝日新聞 '94.2.10)

(19) 今も四万株を持っている社員の妻は「みんなが損したんだから、とあきらめていたが、銀行だけが抜け駆けしていた**とは**腹立たしい」。(朝日新聞 '94.12.10)

(20) 子猫が、自分の飼い猫数匹とけんかしたため、「おとなの猫とけんかする**とは**生意気だ」とスリッパで顔をなぐったという。(朝日新聞 '94.7.7)

(21) 今時停電**とは**おかしいと思っていたら、ヒューズが飛んだという。(朝日新聞 '94.2.16)

(22) 霞が関まで歩いても三十分余り、大使館や名門私立学校、高級マンションが並ぶ超一等地なのに、官舎の家賃は民間相場の十分の一以下。住人からは「物価は高いし住みづらい」といった声も聞かれるが、端からみれば、安い家賃でこんな場所に住める**とは**うらやましい限りだ。(朝日新聞 '94.5.10)

文法

(1) の用法の場合、「とは」が受けるのは、説明されるべき語句であり、名詞扱いされるものである。従って、「寿司屋で言う『ムラサキ』とは醤油のことである」のように、連体修飾を受けることができる。(2) の用法の場合、「とは」が受けるのは、当該場面で出会う発言の引用や、そこで出会う出来事を示す表現である。これらは、名詞扱いされるものではなく、「今言った『帰りたい』とはけしからん」「さっきしたくどくど弁解するとは情けない」のように、連体修飾を受けると不自然になる。出来事を話し手が示す場合、「とは」が受ける表現には、シタ形などはとれるが、「来るだろう(よ)とは意外だ」のように、推量の言い方や終助詞などが現れることはできない。

(1) の用法では、「とは」に対する述部には、言葉の定義・説明の言い方がくる。(2) の意味では、事柄をとりあげる品定め文になるから、事柄についての判断・感情を述べる述語がこなければならぬ(基本的には、モノの性質や身体的感覚などを言うような状態述語は不可である)。

ノート

(2) の用法の場合にいろいろな問題があるので、以下こちらについて述べる。

1. 評価の対象となる事態・事柄内容を指し示すのが、(2) の用法の「トハ」である。従って、「おや、尾頭付きとは豪勢だね」のような場合、「尾頭付き」は、一単語であっても、話し手の発見を表わす一語文的な事柄表現であり、この「トハ」の表現は、(2) の用法の一例と言える。

2. 意外でないような事柄は、「トハ」でとりあげられない。「あのヒゲの男が言語学をやっているとは別に不思議でない」のような言い方は不自然になる。

3. この意味の「トハ」は、そこに既にあるとみなされる事柄と出会い、それをうけとめて評価や所感を導く表現といえる。従って、話し手が自由に設定できる仮想の事柄は、

「トハ」にはとれない。「万一にも、再度不勉強で落第してしまうとは情けない」などということは不自然である。また、事柄を受け止めず拒絶するような述語をとると不自然となる。例えば、「さよならも言えないとは、私、いやよ」のような言い方は、やはり不自然である。

4. 当面するものと意識されない事柄は、「トハ」でとりあげられない。「明後日、ゴミを出すとは面倒だ」のような先の話を取り上げるのは、不自然である。

5. (2) の用法の「トハ」の場合、類義の表現として「ナンテ」が考えられるが、「ナンテ」については、上記2～4のような表現的な特徴は見られず、上記で不自然とした例は、いずれも、「ナンテ」に書き換えると自然になる。

関連項目

参考2 「なんて」

参考文献

藤田保幸 (1995b) (2000)

連体辞類・接尾辞類

◇A82 ～という・との

接続

1. 文あるいは文相当の語句に付く。
2. 単語（主に名詞句）に付く。

意味・用法

「AというN」と連体修飾に用いられて、Nの具体的な内実を示す同格的な関係を形成するのが基本である。「AとのN」も同様だが、用法に制約がある。また、「AというN」には、「という発言がなされるようなN」といった提喩的とでも言うべき関係を形成することもある。

用例

- (1) 佐藤氏が帰ってきた**という**知らせに、一同どよめいた。(作例)
- (2) 誠実に生きる**との**言葉を肝に銘じた。(作例)
- (3) その点でこの白書は、過去の統計数値によって裏付けられたことを報告する白書の伝統から逸脱した部分がある、**との**批判を受けるでしょう。(経済企画庁編「平成10年版国民生活白書」)
- (4) 一方、20歳未満の青少年は、「親と子供の会話、ふれあいが少ない」**との**回答が他の項目に比べて多い。(経済企画庁編「平成10年版国民生活白書」)
- (5) 「そうかそうか、歓迎してくれるのか」と呑気に構えていたところ、「新人の皆さんには、全員一曲ずつ歌を披露してもらいますから、明日は覚悟しておいて下さい」**との**指令が下った。(さくらももこ「もものかんづめ」)
- (6) 日本新聞協会などから「女性が乗りやすいバイクを」**との**要請を受けていた。(朝日新聞 '94.4.16)
- (7) 菜穂子は、またやってしまった**という**思いに呆然と立ちすくんだ。(作例)

(8) 二度と彼女に会わない**との**決心は固かった。(作例)

(9) レム睡眠だとか、体は休んでいるのに頭は働いているだとか、そういう科学的根拠がありそうな事を、具体的に説明されるともう信頼度百パーセント、あなたの胸に飛び込ませて下さい**という**気分になる。(さくらももこ「ものかんづめ」)

(10) 遠ざかるエルバーフェルトの町をみながら、私はほんとうにドイツに来ているのだ**という**感を深くしました。(阿部謹也「自分のなかに歴史をよむ」)

(11) 私の「鈍感さ」を悟らせてやろう**という**有り難い親切心だったに違いない。(村上陽一郎「科学者とは何か」)

(12) 東西対立は1950年に朝鮮戦争が始まると頂点に達し、世界には第三次世界大戦がおこるのではないかと**いう**不安が強まった。(鶴飼信成ほか「新しい社会 [歴史]」)

(13) 識者の間では、景気は今年是一段と厳しくなる**との**予測も多い。(朝日新聞 '94. 1. 1)

(14) 実験が成功した**という**事実を、当局はひた隠しにしていた。(作例)

(15) 彼は、額に手をやる**という**癖がなおらない。(作例)

(16) 当局は首都を前橋に移す**との**計画を発表した。(作例)

(17) そのため、自国の産業に打撃が大きい**という**理由で、日本からの輸入を制限しようとする国もふえてきた。(鶴飼信成ほか「新しい社会 [歴史]」)

(18) これが熱のエネルギーが流れ込んで、温度が上がった**という**状態である。(大塚明郎ほか「標準高等物理 I」)

(19) セキツイ動物は、背骨がある**という**共通点があるが、外形や生活のしかたなどは、かなりちがっている。(坪井忠二ほか「新理科2分野上」)

(20) 原子の大きさといっても、原子がそれぞれ殻を持ったようなきまった形をしている**という**意味ではない。(大塚明郎ほか「標準高等物理 I」)

(21) アダム＝スミス以来19世紀中ごろまでのイギリスでは、世界貿易が発達するためには、各国がいろいろの制限を撤廃して、貿易を自由にしなければならない**という**自由貿易論が唱えられた。(辻清明ほか「政治経済 新訂版」)

(22) さらに、二酸化炭素濃度の増加などの要素から、二十一世紀の気温の推移を予測したところ、十年で約〇・三度上昇する**との**結果が得られた。(朝日新聞 '94. 4. 28)

(23) 日本では、陸上で象の化石が発見される**という**だけでも珍しいことであるが、瀬戸内海の海底からは、「竜骨」で知られているように、おびただしい量の象の化石が発見されている。(亀井節夫「日本に象がいたころ」)

(24) お盆になると燈籠流しをする**という**習慣が続いている。(作例)

(25) 仮に社会全体で長寿化**という**変化があった場合、それに伴って就業期間が伸びなければ、引退後の期間が長くなるが、このことは年金財政の収支バランスを変えることになる。(経済企画庁編「平成10年版国民生活白書」)

(26) しかし、財政規模が大きくなりすぎると、物価の上昇や租税負担の増加**という**マイナスもおこる。(鶴飼信成ほか「新しい社会 [歴史]」)

(27) 卑弥呼は使いを魏の都へ送り、魏の皇帝から、親魏倭王**という**称号と、そのしるしの金印を授けられ、また、銅鏡100枚など、たくさんの贈り物をおくられた。(鶴飼信成ほか「新しい社会 [公民]」)

(28) 明治の末年まで浅草の広小路に下総屋**という**呉服店があった。(川口松太郎「はだか修行」)

(29) 米国内のアジア系住民は、よくアジア系米国人 (Asian Americans) **という**言葉を使う。(朝日新聞 '94. 1. 9)

(30) この問題を考えるにあたって、私たちは一般的に用いられている文明、文化**という**概念を新たに吟味しなければならないでしょう。(阿部謹也「自分のなかに歴史をよむ」)

(31) 文明という概念は、一八世紀**という**西欧近代の産物であるが、《civilize》という語のもともとの意味は、「人為化する」ことである。(村上陽一郎「科学者とは何か」)

(32) ところが中国語**という**のもたいへんな言葉でありまして、ちょっと長いセンテンスになったら、コンピュータが六十何通りか翻訳してしまうのだそうです。(野崎昭弘「人工知能はどこまで進むか」)

(33) 吉行さん**という**のは、詩人の吉行理恵さんのことです。(長田弘「ねこに未来はない」)

(34) 山本**という**男がわざわざたずねて来た。(作例)

(35) さすがに、やばい**という**顔の丈一。(君塚良一「グッドニュース」)

(36) 腰から落ちた鬼塚は、「エッ」**という**表情を見せた。(朝日新聞 '94. 4. 4)

(37) 帳簿を調べていて、おや**つ****という**記述が目についた。(作例)

(38) 不連続きで、奴ももう神も仏もない**という**有り様だ。(作例)

文法

「という」には、まず、例文(1)～(24)のように文的な語列を受けて用いられる場合と、例文(25)～(34)のように語を受けて用いられる場合とがある。いずれも、「という」で示される内容が、被修飾名詞の具体的内実といえるような関係である。語列を受ける場合、「という」が発言や思考を意味する名詞に係って、発言や心の内の発言の内容を具体的に示すタイプのもので、何らかの事柄を意味する名詞に係って、その事柄の内容を具体的に示すタイプのものである。一般に、前者の場合「という」は必須だが、後者の場合は「という」を落としても支障ないことが多い。また、「との」が使えるのは、基本的に前者のような関係の場合だけである。連体修飾における「という」の挿入の可否及び必須か任意かの問題については、多くの研究がある。

ノート

1. いわゆる内の関係の連体修飾(「おやじがサンマを焼く」←→「サンマ を焼くおやじ」)のように関係づけることができ、文の一要素が被修飾名詞として出て来たと見られるタイプの連体修飾)に「という」が入ると、一般に伝聞の形式となる。例えば、「サンマを焼くというおやじ」は「サンマを焼くといわれるおやじ」と同義であろう。この項で問題にしている同格的な関係を形成するが「という」現れるのは、名詞を受ける場合か外の関係(上記のように対応づけられないタイプのもの)の場合である(ただし、外関係とされるものの中にも「という」が挿入できないものもある)。

2. 「山本がわざわざたずねて来た」ではなく、「山本**という**男がわざわざたずねて来た」とあえてするのは、相手が「山本」を知らない場合、相手の知らない情報項目を会話に導入するためだとされる。「という」には、こうした機能もある。

3. いささか特殊なものとして、例文(35)～(38)のような言い方がある。これらは、「顔」

「表情」「記述」「有り様」の具体的な内実が度のようなのかを示すために、そうした「顔」「表情」「記述」「有り様」を目にしたら口にしような発言をひいて、それらが具体的にはどのようなのかを提喩的にうかがわせるものといえる。

関連項目

A 8 3 「といった」

参考文献

寺村秀夫(1980)・中島孝幸(1990)・藤田保幸(1991)

◇ A 8 3 ～といった

接続

1. 文あるいは文相当の語句に付く。
2. 単語（主に名詞句）に付く。

意味・用法

「AとといったN」と連体修飾に用いられて、Nの具体的な内実を唯一それだけとするのではなく、幅を持たせて示す関係を形成する。

用例

- (1) 都知事は、首都を東京から移転する**と**いった話はナンセンスだと強調した。(作例)
- (2) 日本の法曹人口は、諸外国と比べて極端に少なく、国民が司法に距離を感じる大きな原因になっている**と**いった批判がある。(朝日新聞 '94. 11. 18)
- (3) 気の毒なことをした**と**いった思いが、彼の脳裏から去らなかった。(作例)
- (4) 高齢者がいつまでも働くため、若年者の雇用の場が少なくなったり、若者の創意や工夫が抑えられたりする社会になるのでは、**と**いった心配もあろう。(朝日新聞 '94. 11. 1)
- (5) 当直医が誤って筋弛緩剤を投与した**と**いった事実は、まだ確認されておりません。(作例)
- (6) 橋の工事の積算ミスで、一万二千円ですむのに六百七十万円と計算していたとか、死亡後も年金を払い続け、回収できない額が四十九億円にのぼる**と**いった、あきれんばかりの事例が今度も並んでいる。(朝日新聞 '94. 12. 20)
- (7) 初めは、公害の被害者が公害をもたらした企業に賠償を求める**と**いったかたちで始まった住民運動は、公害裁判をとおして、企業や国、地方公共団体の責任を追及するというかたちで進められるようになった。(鶴飼信成ほか「新しい社会 [歴史]」)
- (8) 肉屋に行くと、おばさんがまず子どもの口のなかにソーセージを一切れほうりこんでから、注文を聞く**と**いったありさまでした。(阿部謹也「自分のなかに歴史をよむ」)
- (9) 私がいくつか目にした離婚のケースは、女が妥協して結婚し、ある日突然、夫に対するぬぐいがたい嫌悪感に襲われ、別れる、**と**いった例です。(柴門ふみ「恋愛論」)
- (10) 善とはなにか、幸福とはなにか、個人の幸福か社会全体の幸福か、善と幸福とはどのような関係にあるのか、**と**いった課題は、人間にとって永遠に解きがたいものであるかも知れない。(中村元ほか「倫理・社会」)
- (11) 彼女の場合は、かつての指導教官でいまは研究仲間でもある夫の、公私にわたる

支えがあるからかもしれないが、女性だからなんとか、**と**いった力みはほとんど感じられない。(野本陽代「宇宙の果てにせまる」)

(12) 西田氏も、さすがに疲れたのか、座り込んで、わしゃもう知らぬ**と**いった表情だ。
(作例)

(13) そして、あいかわらず片眼だけつぶって、ケーキなんか下らないよ**と**いった顔つきでぐったりと寝そべっているサブロー。(長田弘「ねこに未来はない」)

(14) 判ってはいたが母が期待するような実直な人間にはなれず、煙草は喫う酒は飲む**と**いった、手のつけられない高校生だった。(半村良「秋子の写真」)

(15) 文学論**と**いった教養がいったいどれだけ人に必要かは私にはいえません。(柴門ふみ「恋愛論」)

(16) 盗聴**と**いった違法な活動に公金が使われ、それが暴露されて慰謝料まで税金で賠償する羽目になったことに、納税者が理解を示すのは難しいだろう。(朝日新聞 '94.9.7)

(17) 森山博士は、研究所では、エイズ・ワクチン開発**と**いった重要な仕事に取り組んでいるそうだ。(作例)

(18) イギリス、デンマーク、ドイツ**と**いった国では、社会福祉が充実している。(作例)

(19) 多人種社会のカリフォルニアではスシ同様、カリフォルニア風のタイ料理や中華料理、イタリア料理**と**いった「折衷料理」がトレンドィーな食事として流行している。(朝日新聞 '94.12.29)

(20) しかしながら、凍土地帯もアスファルト層も発達していない日本では、象の化石といえ、いずれも骨、臼歯、牙**と**いった断片的なものによって代表されるのがふつうである。(亀井節夫「日本に象がいたころ」p.118)

(21) 〔略〕中世の人びとは村や町、あるいは家**と**いった小宇宙のなかで生活していましたが、いつも不安と恐れにとりまかれていました。(阿部謹也「自分のなかに歴史をよむ」)

(22) 世の中のイノセント指向は、朝シャン、口臭予防剤の流行**と**いった清潔ブームにもつながっているのかもしれない。(柴門ふみ「恋愛論」)

(23) 「団塊の世代」が小学生となった時には1956年の「もはや戦後ではない」時期になっており、その頃から、テレビ、電気洗濯機、電気冷蔵庫**と**いった当時「三種の神器」といわれた耐久消費財が家庭へ急速に普及していく変化を経験した。(経済企画庁編「平成10年版国民生活白書」)

(24) 二つ年上のいところである私は、晴子にとっては心の許せる手ごろな話し相手**と**いった存在で、彼女は私と喋りたくなれば、勤めを持つこちらの事情などにはほとんどお構いなしに、北鎌倉に住む私を、鶴沼の自宅へ呼んだ。(夏樹静子「鼓笛隊」)

文法

「**と**いった」には、例文(1)～(14)のように文的な語列を承けて用いられる場合と、例文(15)～(24)のように語を承けて用いられる場合とがあり、“幅を持たせて示す”という意味的特徴からくる表現上の制約を別にすれば、基本的には「**と**いう」と同様である。

ノート

1. “幅を持たせて示す” 言い方なので、「A**と**いったN」のAとNとが全く同一の指

示物を指すことをただ言う場合は、このような言い方はできない。例えば、「堤という男」「日本文法研究会という会」のような単なる同格表現は、「堤といった男」「日本文法研究会といった会」としては、不自然である。

2. “幅を持たせて示す” 言い方であることから、しばしば例示的に読まれる。例えば、例文(17)(18)は、他にもあるがすべて尽くさず、いくつかの例をあげたようにとれるだろう。しかし、(23)や「春夏秋冬といった季節」というような言い方ができることから、「AといったN」が、必ずしもいくつかの例だけをあげる例示の言い方とは言えない。基本は、すべてを尽くす尽くさないにかかわらず、幅のあるものとしてとり上げる言い方ということである。

3. “幅を持たせて示す” という意味から、当該事項を多くのものの中の一つとして扱う含みが生じ、そこから、ぞんざいに扱うというニュアンスも派生する。「少年法改正は冤罪を増加させるといった意見（は事実誤認だ）」という言い方は、「少年法改正は冤罪を増加させるといった意見（は事実誤認だ）」に比べ、その「意見」を無価値・どうにもならないものとして扱っている印象が出ているように感じられるだろう。

関連項目

A 8 2 「～という・～との」

参考文献

藤田保幸(1986)(2000)

参考 2 ◇ ～なんて

接続

1. 名詞的な語もしくは語相当の語句に付く。
2. 文あるいは文相当の語句に付く。

意味・用法

「Aなんて」の形で、(1) Aを1例としてとり上げる、(2) Aをそれだけとして指し示さない含みを持たせてとり上げる（婉曲）

しばしばAを否定的に評価したり、忌避・敬遠する気持ちでとり上げる、といったニュアンスが感じられることが多い。

用法としては、(イ) 主題を表わす「は」に通じる、話題・テーマをとり上げる用法、(ロ) 引用助詞「と」「とは」に通じる用法、(ハ) 連体用法、(ニ) 格助詞・副詞類に下接する副助詞的用法がある。

用例

- (1) いくらでも良い酒はありますよ。胡蝶の里**なんて**、いかがですか。（作例）
- (2) やあ、いらっしやい。ちょうどいまいたところなんです、コーヒー**なんて**お飲みになりませんか？（作例）
- (3) 良之**なんて**、いつももったいぶってばかりいるじゃないか。（作例）
- (4) 広見「会社のまわりの定食屋**なんて**オヤジ臭くって」（林宏司「愛してるってゆうてえな」）
- (5) 彼女に「私が悪かったのよ」**なんて**とり継られたら、僕だって困ってしまうよ。（作

例)

(6) 私も、根が単純だから、「それもそうか」**なんて**思ってたんです。(作例)

(7) 送ってくれない方がいいんだ**なんて**言っちゃったけど、本当いうと淋しかったんだ。
(森村桂「天国にいちばん近い島」)

(8) 「いやあ、こんなにたいへんだと最初からわかっていたら、観測をはじめよう**なんて**考えませんでしたよ」と、カリフォルニア州にあるリバーモア研究所のチャールズ・アルコックはいう。(野本陽代「宇宙の果てにせまる」)

(9) 禁煙だ**なんて**大げさに考えず、気楽に構えているせいか、不思議に禁断症状はありません。(朝日新聞 '94.7.30)

(10) 「子供をベントで送り迎えしているのに、保育料はただ**なんて**」。(朝日新聞 '94.2.9)

(11) 裕一「誰でもそうだよ。相手の立場にたつてものを考える**なんて**、なかなか出来ない」(田淵佐奈「あの日の君にありがとう」)

(12) 突然、見ず知らずの人に好きといわれても、その瞬間、突然好きになる**なんて**ありっこない話です。(柴門ふみ「恋愛論2 応用篇」)

(13) しかし、だんな様の母校への留学**なんて**すてきではありませんか。(朝日新聞 '94.1.17)

(14) あゆみ「ママ、いつも言ってたじゃない。シンデレラは王子様と結婚しました、めでたしめでたし、**なんて**、あれはウソだって。それからが大変なんだって」(武田百合子「コワイ童話 シンデレラ」)

(15) 今まで頑張ってきたのに、「やめたい」**なんて**どうしたんだ。(作例)

(16) ここに書いてある内ヶ崎有里子**なんて**名前に、何か心当たりはありませんか。(作例)

(17) フィビヒ**なんて**作曲家、聞いたことないぞ。どこの人だ。(作例)

(18) そういえば、私の故郷徳島は狭い町なので、A子が断わった見合い相手が彼女の親友のB子に回ってきた、**なんて**話を聞いたことがある。(柴門ふみ「恋愛論」)

(19) ヤクザ映画を観て、その気になって、肩をいからせて映画館を出てきた男が、ショーウィンドウのガラスに映った自分の姿を見て、夢から醒めてしまうのと同じように、競技場から出てきた恋人同士が、相手を見て夢(=恋)から醒めてしまう、**なんて**こともあるかもしれないから。(柴門ふみ「恋愛論」)

(20) たまには気晴らしに、例えば栃木の烏山に**なんて**行ってみてはいかがですか。(作例)

(21) こんな時に、自然に**なんて**振る舞えないわ。(作例)

(22) あいつと**なんて**、死んだって結婚しないわ。(作例)

文法

(イ)(ハ)の用法では、名詞を受ける。(ロ)の用法では、文や名詞以外の語・語句も受ける。(ニ)の用法では、格助詞ニ・ヘ・デ・ト・カラ・マデや副詞的修飾語に下接して用いる。「～ガ」「～ヲ」に添えられる場合は、格助詞ガ・ヲが消え、「なんて」の形になる。「なんて」が否定的な意味の述語と結びつくと、否定・忌避のニュアンスがはつきりする。

ノート

1. 「なんか」は、「なに」＋「か」の転とされ、その成り立ちについての意識から複合辞として扱われることもあるが、現代語としては構成要素に分解できない一つの形として感じられるので、複合辞としないほうがよからうが、ここでは、参考として掲げておく。

2. 基本的には、例示の意味が本来だろうが、一例として類例のあるものという取り上げ方をするとところから、幅を持たせ和らげたという意味が出てくるし、また、類例のあるものという扱いは、多くのものの中の一つとして軽んじて扱っているというニュアンスも出てくるものと思われる。こうした意味は、截然と分かれているのではなく、連続的に見るべきものと言える。

3. 引用句「～と」は、発言や思考を意味しない動詞とも結びついて、例えば「おはように入って来た」のような構造をとれるが、「なんて」でも「おはようなんて入って来た（ものだから、驚いた）」のように、基本的には同様の構造が作れる。

3. 「とは」には、「AはBだ」と、事柄や発言を取り上げて評価や所感を述べる用法があるが、「なんて」にも例文(7)のように同様の用法がある。また、こうした用法で「とは」に取り上げられるのは、発言だけではなく、「この忙しいのに、早退したとはけしからん」のように、出来事を表現した語句も取られるが、同様に「なんて」も「この忙しいのに、早退したなんてけしからん」といった言い方は可能である。なお、「AなんてBだ」にくらべると「AとはBだ」という言い方の方が、出来事・発言にその場で直面したという切迫感の強い表現になる。

4. (ハ)の副助詞的用法では、動詞に添えられる場合、例えば「会う(／会わない)」なら、「会ったりなんてする(／しない)」のようにつけられる。

関連項目

参考1「って」、A81「とは」、参考3「なんか」

参考文献

山田敏弘(1995)・藤田保幸(1995b)(2000)

参考3◇ ～なんか

接続

名詞に直接付く。また、副詞句や「名詞＋格助詞」に付く。

意味・用法

「Aなんか」は、(1) Aを一例としてとり上げる、(2) Aをそれだけとして指し示さない含みを持たせてとり上げる(婉曲)、といった意味で用いられる。

しばしば、Aを否定的に評価したり、忌避・敬遠する気持ちでとり上げる、といったニュアンスが感じられることが多い。

用法としては、(イ)主題を表わす「は」に通じる、話題・テーマをとり上げる用法、(ロ)名詞句・副詞句に添えられる副助詞的用法がある。

用例

(1) 新人の活躍が目立ちますね。丹羽六段**なんか**、今期の台風の目になりそうですよ。
(作例)

- (2) 有香「パチンコ**なんか**、いつからするようになったの？」(大石静「アフリカの夜」)
- (3) いや、突然と思うのは私の心がぼんやりとしているからで、ついこの間までは、人生五十年と観じて日本人は生きていたはずだし、郷里の先輩正岡子規さん**なんか**三十五歳で死んでいる。(朝日新聞 '94.6.21)
- (4) 姉の直美が来ていて、みどり、好美とケーキ**なんか**食べている。(岡田恵和「彼女たちの時代」)
- (5) おまえ**なんか**、大嫌いだ。(作例)
- (6) 初めは『かまどに**なんか**金をかける必要はない』という年寄りたちを説得するのが大変でした。(朝日新聞 '94.8.23)
- (7) 耕平「とにかく払う金**なんか**ないんだ、帰ってくれ！」(山田洋次・高橋正圀「北の夢」)
- (8) 淳子「フフ、あたしのこと**なんか**、きっと忘れてると思います、俊ちゃん……(と窓から中庭を眺める)」(武田徳久「屋根裏のガラスの靴」)
- (9) これで決まるなら、国会**なんか**必要ない。(朝日新聞 '94.2.1)
- (10) だから、もう時間**なんか**気にしないでゆっくりお休みなさい。(朝日新聞 '94.6.30)
- (11) 涙**なんか**見せないような、そんなムードを持っていた男が、タオルを顔にあてて体を震わせた。(朝日新聞 '94.8.22)
- (12) そんなところでうろうろしていると、リポーターや新聞記者**なんか**がわっと押し寄せてくるぞ。(作例)
- (13) 「あれがですか、あんな景色、ハワイ**なんか**とくらべりゃ問題にならんでしょ。(森村桂「天国にいちばん近い島」)
- (14) でも、当時は、ビートルズとか、エレキギター**なんか**は、不良の音楽といわれ、学校でお昼休みに曲をかけた放送部の生徒が、職員室に呼び出されてしかられるありさまでした。(朝日新聞 '94.12.18)
- (15) 東京から**なんか**も、随分の人出があったらしい。(作例)
- (16) 緑 「そんなもんバッグに**なんか**入れる訳ないじゃん(と言いつつ、バッグの中を見て)あった！」(大石静「アフリカの夜」)
- (17) 浩作「葬式すまして、すぐ会社へ**なんか**行けないよなあ」(山田太一「それからの冬」)
- (18) 「『おにぎりは、おふくろの味の代表格。外で**なんか**買うものではない』という常識が客にも私たちにもあって、味の研究を怠っていました」(朝日新聞 '94.9.10)
- (19) 釣りに**なんか**、行ってみようかと思ってき、こんな格好してるのさ。(作例)
- (20) うち**なんか**でも、お伊勢参りのことはいろいろ話してたんだよ。(作例)
- (21) アームウオーマーは、「外出前や帰宅直後に、外出着のままちょっと台所に立たなくちゃあ、というとき**なんか**に重宝ですよ」。(朝日新聞 '94.3.10)
- (22) だけど、宇宙の美しい対称性の象徴である反物質を、兵器**なんか**には使わないでほしいね。(朝日新聞 '94.3.17)
- (23) ばか、竹槍**なんか**で、歯が立つかよ。(作例)
- (24) こんなボートでアメリカへ**なんか**渡ろうというのか。(作例)

(25) このまま手ぶらで**なんか**帰れないよ。(作例)

(26) アメリカ**なんか**では、女の重役、社長、編集長なんて珍しくなくなった。(朝日新聞 '94.7.26)

(27) 「あの、オーストラリアか**なんか**へは行けないんでしょうか」(森村桂「天国にいちばん近い島」)

(28) だいたい、初対面の者同士が遠慮しながらトランプ**なんか**をやったって、面白いわけないのだ。(さくらももこ「もものかんづめ」)

文法

(イ)の用法では、名詞を受ける。(ロ)の用法では、副詞には下接して用いられる。名詞＋格助詞には、「釣りなんかに」「釣りになんか」と間に入っても下接しても用いられる(ただし、「～ガ」「～ヲ」に下接する場合は、格助詞ガ・ヲが消えて、「なんて」の形になる)が、意味によっては、微妙に制約がある場合もある。更に、「東京からなんかも」のように、係助詞「は」「も」が下接することも出来る。

ノート

1. 「なんて」は、「など」＋「とて」の転とされ、その成り立ちについての意識から複合辞として扱われることもあるが、現代語としてはもはや構成要素に分解できない一つの形と感じられるので、複合辞としないほうがよからうが、ここでは参考として掲げておく。

2. 意味としては、「なんて」と非常に近いものがあるが、用法のうえでは、はっきりした違いがある。まず、「なんか」には、「と」「とは」に通じる引用助詞的な用法とそこから派生する終助詞的用法はない。例えば、「無抵抗の人を殺すなんて」とはいえても「無抵抗の人を殺すなんか」とは言えない。一方、「なんて」は副助詞的用法では、“名詞＋格助詞”に下接することしかできず、また、その後に更に係助詞を下接させることもできない。例えば、「東京からなんかも」はいえても「東京からなんても」ということはできない。名詞に直接ついて後に格助詞を伴えることからもうかがえるように、「なんか」には、名詞類について意味を添え、名詞的なまとまりを拡張する接尾語的な性格があるといえる。従って、「(Aは) Bなんかだ」と名詞的述語句を形成することもできる(「(Aは) Bなんてだ」とはいえない)。

3. 基本的には、「なんて」同様、例示の意味が本来だろうが、そこから、婉曲の意味や否定的扱い・忌避・敬遠といった意味も派生すると考えられ、それらは連続的に見るべきものと言える。

4. 口頭語では、現代の若年層において、「なんか」が用いられるようなところで、「とか」という言い方が用いられるという事実が観察される。「お茶なんか飲まない」「彼なんか素敵じゃない」というところを、「お茶とか飲まない」「彼とか素敵じゃない」といった言い方が見られるようになっている。

関連項目

参考2 「なんて」

参考文献

山田敏弘(1995)

参考 4 ◇ ～ならでは

接続

名詞に付く。

意味・用法

「Aならではだ（／の）」の形で用いられ、A以外では見られない、ほかに例のないものであるという評価の意を示す。

用例

- (1) これほどの細工は、名人五代目光逸**ならでは**のものだ。(作例)
- (2) このあたりの水際立った対処の仕方が、彼**ならでは**だね。(作例)
- (3) 仮に社会党と自民党が組んでも不思議でないような状況が出てきたのも、この時代**ならでは**だ。(朝日新聞 '94.6.25)
- (4) キャラクターづくりのうまさは、ディズニー**ならでは**である。(朝日新聞 '94.7.22)
- (5) こんなおとぼけで議員を選ぶ余裕があるのも、高福祉の国**ならでは**、かも。(朝日新聞 '94.9.25)
- (6) 面会に来た人がおやつをホットプレートで作ってみんなと一緒に食べられるのも小人数**ならでは**。(朝日新聞 '94.4.7)
- (7) もちろん大学**ならでは**の基礎研究を軽視すべきでない。(朝日新聞 '94.4.26)
- (8) 映画でも、演劇でも創(つく)り出せないテレビドラマ**ならでは**の世界。(朝日新聞 '94.11.2)
- (9) ピラミッドのようなズリ山(ボタ山)がそびえ、炭鉱で働く人たちの住宅(炭住)がならんでいるのは、炭鉱**ならでは**の風景である。(鶴飼信成ほか「新しい社会[地理]」)
- (10) どうせこんな療法は、我が清水市の茶所**ならでは**の迷信だろうと思い、たいした期待もせずに一夜は過ぎた。(さくらももこ「もものかんづめ」)

文法

「ならではだ」は、一見、形容動詞のような状態性述語を形成するように見えるが、「極めて彼ならではだ」のように程度の修飾語を取るのも不自然であり、状態性述語というより、評価的な述語句を形成するものといえる。このように「ならでは」は、「だ」を伴って述語句の語幹を形成するのであるので、いわば、語構成要素的なものである。付属語的なものを複合辞というなら、これは厳密には複合辞とはいえない(あくまで、ここでは参考として掲げておく)。

ノート

「ならでは」は、他では例のない独自のことであるということを使う言い方だが、そこには通常「それだけのことがある」「さすがである」というようなプラス評価・称賛・納得のニュアンスが伴われる場合が多い。それゆえ、他では例のない独自のことであっても、よくないことについてや特にプラス評価・称賛の気持ちが伴わないような場合について用いるのは、かなり不自然である。たとえば、「いろいろカラオケも聴いてきたが、このような下手な歌は、全く彼ならではだ」などという言い方は、違和感がある。確かに(10)のような例があるが、通常表現を逆手にとった皮肉な言い回しという感がある。

第二部 助動詞的複合辭

名詞複合系

◇B1 ～ものだ

接続

基本的に、用言のスル形・シタ形（シテイル形・シテイタ形を含む）に付くが、詳しくは文法の項参照。

意味・用法

「ものだ」の形で、(1) 本来の有り様・性質を述べる、(2) 当為の事柄を述べる、(3) 過去の事柄を回想して述べる、(4) ある事柄を詠嘆的に述べる、といった用法で用いられ、また、(5) 語り手が解説的な立場に立って述べるという姿勢を示す用法もある。

用例

- (1) 年をとると、どうしてもあちこちにガタが来る**ものだ**。(作例)
- (2) この様な時は、よくミスを犯す**もので**、一層の注意が必要だ。(作例)
- (3) 真理とは、元来単純である**ものだろう**。(作例)
- (4) 人間には『向き』『不向き』がある**ものだ**。(さくらももこ「もものかんづめ」)
- (5) 飼っていたねこがいなくなってしまったすぐあとのねこ好きのたちいふるまいというやつには、どこかそんなふうなところがある**ものです**。(長田弘「ねこに未来はない」)
- (6) 学校に限らず、集団というのは何らかの抑圧がある**ものだ**。(さくらももこ「もものかんづめ」)
- (7) 世の中にはバカバカしくてウソか本当かわからないような話がある**ものだ**。(さくらももこ「もものかんづめ」)
- (8) そんな純粹で情熱的な恋が、振り返ると一個か二個、必ずある**ものです**。(柴門ふみ「恋愛論2 応用篇」)
- (9) 実際、物語や童話を読んでしばらくたつと、その物語や童話のなかの登場人物がじぶんたちの生活のなかにほんとうに出没してくるような気のすることが、誰れにだってある**ものです**。(長田弘「ねこに未来はない」)
- (10) 誰だって小学生時代、クラスの男子の中で好きな奴と嫌な奴がいて、その好きな奴の中でとりわけお気に入りの男の子がいる**ものです**。(柴門ふみ「恋愛論2 応用篇」)
- (11) 長生きすると、いろんなことを知る**ものである**。(田辺聖子「姥ごよみ」)
- (12) 瀬戸内海に面した明石の西八木海岸では、よく化石の骨が採集されることがあるが、海岸に露出している崖をさがしてもなかなか見つかる**ものではない**。(亀井節夫「日本に象がいたころ」)
- (13) 目上の人にあったら、こちらから挨拶する**ものだ**。(作例)
- (14) 病人は、ベッドでおとなしく寝ている**もんだ**。(作例)
- (15) やれやれと思って座敷に座ったら「そこが嫁の座る場所か」と一言。恐らくこの言葉を私は一生忘れないでしょう。また「年寄りの世話は嫁がする**ものだ**」という言葉も。私は夫の妻ではなく、親の世話をする女なのでしょくか。(朝日新聞 '94.2.3)
- (16) 職業意識が高まる中で結婚観でもシングル志向が目立ち、「結婚は当然する**ものだ**」との意見については、「かなり近い」「やや近い」あわせて肯定派が三九%なのに対

し、「結婚はしなかったらしなかったでいい」への共感も三一%あった。(朝日新聞 '94. 5. 26)

(17) わたしたちにだって、好きなねこを飼う自由ぐらいあるという**もの**だわ。(長田弘「ねこに未来はない」)

(18) 不倫の鉄則は、社内で絶対気づかれないこと。これができぬくらいなら、最初っから足をつっこむ**もの**ではない。(柴門ふみ「恋愛論」)

(19) 昔は、この辺りまで砂浜が広がっていた**もの**だ。(作例)

(20) これが一昔前なら、世間体を気にしないではいられなかった**もの**だ。(作例)

(21) 佐山も、この刺繍には一緒に感心して、「非売品でなければ、あなたに買ってあげたいところですが、たぶん、ぼくら三人分の有金を合わせても買えない値段でしょうね」といって、一緒に笑った**もの**だった。(伊藤桂一「羊蹄甲の花の蔭」)

(22) 当時の私は、ちょっとどこかへ出かける時も“もしかしたら恋のチャンスがあるかも”などと胸をふくらませてイソイソと歩いていた**もの**である。(さくらももこ「もものかんづめ」)

(23) よくもそんなことが言えた**もの**だ。(作例)

(24) 困った**もの**だね、お宅の直美にも。(作例)

(25) 手品みたいなことがよくもできる**もの**だな。(作例)

(26) へんな会もある**もの**だ。(田辺聖子「姥ごよみ」)

(27) 東京地検特捜部では、丸山代議士のビーグル社からの受託収賄の容疑が固まったとして、逮捕に踏み切った**もの**だ。(作例)

(28) 先月来姿を見せなかったウッドストック大統領が、昨日の建国記念式典に久しぶりに姿を見せた。重病説も流れたなか、その健在ぶりをアピールした**もの**だ。(作例)

(29) チャーリー候補は声明を発表し、彼がこの度の任期をもって議員を引退する**もの**と伝えた。(作例)

文法

接続は、(1)(2)の用法の場合、動詞については、スル形・シテイル形ともに受ける。形容詞については、連体形を受ける。形容動詞については、「～デアル／ナ」の形を受ける。体言について、「～デアル」の形を受ける。シク形は受けない。(3)の場合、シタ形(動詞の場合は、シテイタ形も)のみを受ける。(4)では、以上のような制約はなく、動詞については、スル形・シテイル形・シタ形、形容詞については、スル形・シタ形、形容動詞については、「～デアル／ナ／デアッタ」の形、体言については、「～デアル／デアッタ」の形を受ける。(5)の用法では、動詞のスル形・テイル形・シタ形を承ける。動詞以外は、承げにくいようである。基本的に「ものだ」は、「～もので」のような連用中止の形も、「～ものだった」「～ものだろう」のような過去・推量の形もとれるが、連体修飾では使われない。ただし、(4)の用法では、「～ものだ」の形で言い切りでしか使われない。

ノート

1. 「～ものだ」は、「一般的に～だ」という意味を基本とするものと見られ、その意味・用法は、これをもとにして説明できそうである。物事の有り様が一般的に～だと述べるところから、もともとそういうものだとする(1)の用法が出て来るし、その状況下で

人の行為は一般的に～だとするところから、そうすべきだとする(2)の用法が出て来ると考えられる。(3)は、過去においては～であったと変わらず一般的に思い起こす気持ちの言い方であり、(4)は、～というのは自分だけの思っていない一般的なことだと詠嘆の意味を強める言い方といえる。(5)は、そうした意味自体は抜け落ちてしまって、「ものだ」と二股的に語ることに見られる説明・解説の姿勢を殊更とっていることを明示する用法なのだろう。

2. 「ものだ」に対する否定の言い方として、「ものではない」が考えられるが、否定の言い方があるのは、(1)(2)の用法の場合に限られる。

3. 以上のとおり、(2)として「当為」の用法があるが、ふつう「当為」を表わすとされる「べきだ」「なければならない」と違って、「ものだ」に、一般論としてそうであるところから、一般的に当然そうすることが必要だという言い方である。従って、個別的な事柄に関して「当為」を表わすことはできない。例えば、「これからすぐ君が行くべきだ／行かなければならない」とは言えても、「これからすぐ君が行くものだ」というのは、不自然である。

4. 「というものだ」という言い方もある。これは、「待てば海路の日和あり、というもんだ」などのように世間で知られた諺・格言などを引いて、一般にそういうがそのとおりだと、共感した注意喚起する言い方である。転じて、例文(17)のように自らの主張・是とする考え方を一般的で当然のこととして強く打ち出し、注意を喚起する形で用いられる。

関連項目

B 4 1 「～べきだ」、B 4 2 「～なければならない」

参考文献

坪根由香里 (1994a)

◇ B 2 ～はずだ

接続

接続は、動詞については、スル形・シタ形・シテイル形ともに受ける。形容詞については、スル形・シタ形ともに受ける。形容動詞については、「ダッタ／デアッタ」の形(シタ形)は受けても「ダ」の形(スル形)は受けず、それに代えて、「健康なはずだ」のように、連体形の「ナ」を受取るのがふつうである(また、「～であるはずだ」のような形は不可ではないが、かなりぎこちない)。体言を受取る場合、「のはずだ」と、「体言＋ノ」の形を受取る。

意味・用法

「Aはずだ」で、話者がもっている知識からして、「Aということだ」とする話し手のとらえ方を表す。「はずだ」に対する否定の形としては、「はずがない」「はずはない」といった言い方があり、Aというような推論が決して成り立たないということを述べる強い否定的な言い方である。

用例

(1) 明日になれば、応援が来る**はずだ**。(作例)

(2) 人は、成長過程において、必ず親とぶつかる時期がある**はずだ**。(柴門ふみ「恋愛論 2 応用篇」)

(3) もし、銀河が宇宙の膨張だけにしただって運動しているならば、これらの銀河の距離と後退速度のあいだに直線的な関係がある**はずだ**。(野本陽代「宇宙の果てにせまる」)

(4) 遺伝子が生物の形質を形づくっていくには、それぞれの形質の基礎になる物質をつくっていく過程がある**はずである**。(石田寿老ほか「生物 I」)

(5) 各々の人々の各々の事情の数だけ、各々の恋がある**はずだ**。(柴門ふみ「恋愛論」)

(6) もう少しよく考えれば、気が付いた**はずだ**。(作例)

(7) 確かトキは、法律によって保護されている**はずだ**。(作例)

(8) 盆踊りは夏のものとは決まっている**はずである**。(三好京三「地摺りの歌」)

(9) 客は待っている**はずですから**、こちらから呼びにいくまでもないと思っていたのですが、玄関からは誰も出てくる気配がありません。(三浦哲郎「お菊」)

(10) ガリレイは、この差は空気の影響によるものと考え、空気がない状態では重さに関係なく、すべての物は同じように落下していく**はずだ**と推論した。(大塚明郎ほか「標準高等物理 I」)

(11) 喜び上手は悲しみ上手でもある**筈だ**。(向田邦子「鮎」)
聞 '94. 1. 1)

(12) 今日の担当は、森山医師の**はずだった**。(作例)

(13) 3回転ジャンプを八度跳ぶ**はずだったが**、二度失敗。(朝日新聞 '94. 2. 26)

(14) 死んだ**はずだ**よ、お富さん、生きていたとは、お釈迦様でも知らぬ仏のお富さん・…。(山崎正「お富さん」)

(15) 母は、「眠りながら暗記できるんなら、あんたは毎日居眠り授業してるんだから、テストだって満点とっていい**はずでしょ**。(さくらももこ「もものかんづめ」)

(16) 何か調べたり協議したりするにしても、一言くらい秘書からなりと連絡があってもいい**はずだ**。(森村桂「天国にいちばん近い島」)

(17) 育児がものすごくおもしろい仕事なら、男性が女性からその仕事をとりあげた**はずである**。(柴門ふみ「恋愛論 2 応用篇」)

(18) 日本固有の遺物である**はずだった**埴輪(はにわ)が韓国で多数出土した。(朝日新聞 '94. 5. 20)

(19) 本来なら、彼が挨拶する**はずだった**。(作例)

(20) 校正の仕事がなければ、8月末には完成する**はずだった**。(作例)

(21) 警視庁の面々に、このなぞが解ける**はずがない**。(作例)

(22) なるほど安い**はずだ**。この豆腐、賞味期限ギリギリだよ。(作例)

(23) 豊かな**はずの**米国で子供の二〇%が国の貧困ライン以下にある。(朝日新

(24) 日本ではめったに起きない**はずの**プレート内地震がなぜ二年続いて起きたのか。(朝日新聞 '94. 10. 31)

文法

「はずだ」自体は、言い切りにも、また「はずで」と中止形にも用いられ、「はずだった」のような過去形も可能である。連体形は、「はずの」の形をとる。「はずだろう」のような、推量を重ねる言い方は不可とはいえないが、あまり用いられない。

ノート

1. 話し手が、もっている知識からコレコレであると認識・理解していると ころを述べる言い方である。一面で、「にちがいない」に近いが、「にちがいない」はあくまで、その可能性が非常に高い(ただし、確認はされていないが)という推量を述べるのに対し、「はずだ」は、自分のもっている知識を前提とする以上、当然コレコレということになるという話し手の内においては確かな認識・理解をいう。つまり、話し手においては、所有する知識から、当然そうだと信じられていることが述べられるのである。従って、(14)のように「死んだはずだよ、お富さん」とは言えても、「死んだにちがいないよ、お富さん」などというのはおかしい。思いがけず生きていた人を前に、それに反して自分の知識では「死んだ」と信じていたということを言うのは意味のある発言だが、生きていたという事実を前にして、今更「死んだ」可能性が非常に高いなどと推量することは無意味なのである。

2. 「はずだった」とすると、しばしば事実はそうならなかったという反実仮想の意味が出てくる。この場合、「本来なら」「校正の仕事がなければ」のように、あり得た別の状況ではという条件規定が来ると、この意味がはっきりする。

3. 例文(22)のように、「はずだ」で、事実について納得する言い方が見られる。この用法では、「Aのはずだ、だ(から)」のように、そのように納得する理由が必ず示される。この用法は、「だ(から)」という知識が得られることによって、Aであるのも当然だという認識をもったことを、倒置・強調的に述べたものといえる。

4. 上記3の納得の用法や否定の「はずがない」の場合には、「はずだ」「はずがない」は「わけだ」「わけがない」と近いものとなり、一般に書き換え可能である。

関連項目

B 2 3 「～にちがいない」、B 8 「～わけだ」

参考文献

野田尚史(1985)

◇ B 3 ～つもりだ

接続

動詞のスル形・シタ形(シテイル形・シテイタ形を含む)に付く。

意味・用法

「Aつもりだ(／で／の)」といった言い方で、(1)主体がAのような意向をもっている意、(2)主体がAのような自意識をもっている意、(3)話し手がAのような意味付けをしている意味を表す。

用例

(1) 明日になったら電話する**つもりです**。(作例)

(2) 山崎丈庵の過去についてのより詳しい調べを、鴉に頼む**つもりだった**。(築山桂「浪速の翔風」)

(3) いま、アパートからツユ子が出て来て、出逢いがしらにばったりぶつかったら何と云う**つもりだろう**。(向田邦子「鮎」)

(4) わたしは、この際、前社長の意向をあくまで尊重していく**つもりだ**。(源氏鶏太「運がよかった」)

(5) 叔母など、九十になっても宝塚歌劇の娘さんと張り合う**つもりで**いるではないか。(田辺聖子「姥ごよみ」)

(6) はじめは文明の利器は使わない**つもりだった**が、今では石油コンロ、ランプ、そして小型ラジオのお世話になっている。(朝日新聞 '94. 2. 16)

(7) 日帰りの**つもりだった**が、途中で車が込んで、湯ヶ島から引返すころには夜になっていた。(夏樹静子「鼓笛隊」)

(8) 自分が本当に目指すのは、競技の勝敗ではないことはわかっている**つもりだ**。(朝日新聞 '94. 9. 16)

(9) 順平は親としてあたりまえのことをしただけという**つもりだった**が、それが孤立の因になってしまった。(藤原審爾「風とまる」)

(10) そういえば「まだ若い**つもりだった**のに、座席を譲られて寂しい思いをした」と、ある老人が新聞に投書したのを読んだことがある。(朝日新聞 '94. 1. 27)

(11) 本人はそんな**つもりではない**だろうが、子どもたちに確かな遺産を残し続けている父に心から感謝している。(朝日新聞 '94. 7. 28)

(12) ヒントにならないように、句読点を省いたり、旧仮名遣いを改めたりしていますので、原文に忠実とはいえませんが、本質的なところは変えていない**つもりです**。(野崎昭弘「人工知能はどこまで進むか」)

(13) 本人は少ししか塗っていない**つもりでも**、化粧映えする顔の人は厚化粧と思われたりするものです。(柴門ふみ「恋愛論」)

(14) 無線や電話の技術者を志していたので、新聞社はほんの「腰かけ」の**つもりだった**。(朝日新聞 '94. 10. 25)

(15) そのうち、見ているだけの**つもりだった**親たちの方がムキになってしまい、子どもたちから「がんばってね」と逆に励まされた。(朝日新聞 '94. 8. 7)

(16) なにげない質問の**つもりだった**が、目の前から突然笑顔が消え、会話が途切れた。(朝日新聞 '94. 3. 7)

(17) 大きなおなかをかばいながら、あるいはベビーカーを押しながら、人通りの中を歩いて、理解していた**つもり**の弱者の立場を実感した。(朝日新聞 '94. 12. 29)

(18) 今度の二泊旅行は、その全快祝いの**つもりです**。(三浦哲郎「忍ぶ川」)

(19) ここのところのメロディーは、ヒタタキが鳴いている**つもりです**。(作例)

(20) 私も蚕のさなぎになった**つもりで**、身を硬くして眠った。(さくらももこ「もものかんづめ」)

(21) 「〔前略〕だまされた**つもりで**一度行ってみては」と語る。(朝日新聞 '94. 12. 30)

(22) 独立会社のような**つもりで**経営してもらおう。(朝日新聞 '94. 9. 17)

文法

有情物主語で「Aは～Bする／しない**つもりだ**」のように未実現の動作を意味する述語につく場合には、(1)の意向の意味になる。有情物主語でも、「AはBである／の**つもりだ**」「AはBしている**つもりだ**」のような状態性述語や「した**つもりだ**」のような既に動作が実現した意味の述語につく場合には、(2)の自意識の意味になる。無情物主語の

場合や有情物主語でも主体Aが、その意図が問題にされない対象物のような存在として扱われた場合、「AがBである／のつもりだ」「AがBしているつもりだ」のような事柄を外側から叙述する言い方につくときは、(3)の話し手の意味付けの意味になる。例えば、(20)のような例の場合、自分になろうと意図してなったのではなく、自然と自分がそうなったという意味の言い方と読まれるから、自らを意図の問題とならない対象物扱いした言い方と考えられ、(3)の意味と解するのがよいだろう。

ノート

「つもりだ」は、意志表現という点では「(よ)う」と類義的だが、基本的に「つもりだ」は、そのような意向を持っているという事実を述べるものであり、「(よ)う」と違って、一人称以外の主語も取れる。また、「(よ)う」は、実現に向けての意志表明であり、事柄を実現させると主張する言い方なのに対し、「つもりだ」には、そうした積極的な実現主張の含みは必ずしもない。従って、「明日そこに行こう。ただ、事情によっては行けないかもしれない」と言うのは、かなり不自然だが、「明日そこに行くつもりだ。ただ、事情によっては行けないかもしれない」とは言える。

関連項目

B 1 5 「～ことにする」

参考文献

◇ B 4 ～ところだ

接続

動詞のスル形・シタ形（シテイル形・シテイタ形を含む）に付く。

意味・用法

(1) 「～スルところだ」の形で、ある動作がなされる・ある出来事が引き起こされる直前の段階であることを示す。「するところだった」となると、特に仮定文脈に支えられなくても、反実仮想の意味で読まれることがある。

(2) 「～シタところだ」の形で、ある動作がなされた・ある出来事が引き起こされた直後の段階であることを示す。

(3) 「～シテイルところだ」の形で、ある動作・出来事が進行中の段階にあることを示す。

(4) 「～シテイル／～シテイタところだ」の形で、現時点まである動作・出来事が進行中の段階にあったことを示す。

なお、「(もし)～なら」などといったはっきりした仮定の文脈のもとでは、「ところだ」「ところだった」ともに反実仮想の意味になる。

用例

- (1) ちょうどよかった。これからミーティングを始める**ところだ**。(作例)
- (2) 前田教授は、これから大学院の講義を始める**ところだった**。(作例)
- (3) むこうの入口の方へ行こうとしたとき、運のいいことに、ちょうど青木氏夫妻が出てくる**ところではないか**。(森村桂「天国にいちばん近い島」)
- (4) これでめでたしめでたしと**いいたいところだ**が、そう簡単にいかないのが宇宙相手

の苦しいところである。(野本陽代「宇宙の果てにせまる」)

(5) 教師に何か言われて「わかりました」と言うべき**ところで**「心得ました」などと答えてしまう。(朝日新聞 '94. 10. 14)

(6) 危なかった。危うく死ぬ**ところだった**よ。(作例)

(7) 私は事故現場などを見るのを非常に恐れているので、ヤジ馬が集まっている場所には近づかない事になっているが、上京してから三回か四回くらい、「もう少しで見てしまう**ところだった**」というニアミスがあり、改めて都会の恐怖を感じている。(さくらももこ「もものかんづめ」)

(8) 私がもし役人なら、株でしっかりもうけさせてもらっても知らん顔する**ところだ**。(柴門ふみ「恋愛論」)

(9) 昨夜はあやうく「午前様」になる**ところでした**。(朝日新聞 '94. 3. 5)

(10) これが独裁政権時代なら、銃殺される**ところだ**。(作例)

(11) さっき落雷があった**ところで**、雨はまだ続いていた。(作例)

(12) 宇宙の化学的進化の研究はやっとはじまった**ところである**。(野本陽代「宇宙の果てにせまる」)

(13) 香りが出てきたら、玉ネギを加えていたため、透き通った**ところで**ナス、ズッキーニ、ピーマンを加え、軽く塩、コショウを振り、いためる。(朝日新聞 '94. 8. 22)

(14) B T B 緑色液を加えた塩酸 1 0 c m 3 水酸化ナトリウム水溶液は、少しずつ加え、液の色が緑色になった**ところで**やめる。(坪井忠二ほか「新理科 1 分野下」)

(15) 山口さんから電話があった**ところです**。(作例)

(16) 注意されなければ、思わぬミスをした**ところだった**。(作例)

(17) 彼は、今レッスンを受けている**ところだ**。(作例)

(18) もしそうならば、あまりつきまとうのはかえって迷惑だろう。妻もちょうどサンドイッチを食べ終えて部屋に戻ろうとしている**ところだった**。(阿刀田高「夜間飛行」)

(19) 左の絵は、藤原頼通が、じぶんの屋敷で天皇をもてなしている**ところである**。(鶴飼信成ほか「新しい社会 [公民]」)

(20) 市場では、ちょうどレタスの箱を下ろしおわったあのトラックが、すぐにも農場に帰ろうとしている**ところでした**。(長田弘「ねこに未来はない」)

(21) それから、管楽器や歌や、その他の楽器と組み合わせた演奏会にしても面白いなと思っている**ところです**。(朝日新聞 '94. 12. 19)

(22) 実は、病院ではすぐにきてくれということだったが、ちょうど行楽日和の土曜日の午後で、近くの町のタクシーはみな出払っていて困っていた**ところだ**。(三浦哲郎「お菊」)

(23) 連絡がなければ、いつまでも待っている**ところだった**。(作例)

(24) いつもなら一カ月以上も早く決まりがついている**ところだ**。(朝日新聞 '94. 2. 2)

(25) 新入閣の自民党閣僚の一人から「野党のまま、あと一、二回予算編成をやられたら、自民党は干上がってしまう**ところだったよ**」と聞いた。(朝日新聞 '94. 7. 1)

(26) 奇遇だね、君の噂をしていた**ところだった**よ。(作例)

(27) 彼女も、本来なら、早々にその男と結婚していた**ところだった**。(作例)

(28) 約束の五時より十分遅れて私が玄関前に着いた時、晴子がちょうど庭伝いに出て

きた**ところだった**。(夏樹静子「鼓笛隊」)

(29) 「主人があんな死に方をしなかったら今頃は、その社長机に向っていた**ところで**したのね。」(源氏鶏太「運がよかった」)

(30) ここは、何が何でも頑張ると**ころだ**。

(31) 何と言っても、ここは、一肌脱ぐべき**ところだぜ**。

文法

「Aところだ」の形で、動詞のスル形・シタ形・シテイル(シテイタ)形を受けるが、否定の「シナイ/シナカッタ」の形や「ダロウ/ラシイ」のような推量の形は受けられない。「ところで」のように、連用中止の形はとれるが、「ところでない」と、これ自体を否定形にすることはできない。また、連体修飾については、例えば「これから帰るところだったY氏を引き留めた」というのは違和感がないが、「これから帰るところの(／である)Y氏を引き留めてくれ」などという言い方は、不可ではなかろうが、かなりぎこちないように感じられる。つまり、「ところだったN」の形は自然であるが、「ところの(／である)N」の形は一般的ではない。

ノート

1. (12)(13)のように、「Aところだ」で、“Aが要請される場面・段階だ”という意味を表わすことがある。この意味では、「すべきところだ」「するはずのところだ」「しなければならぬところだ」等、事柄の当否・必然性に関する判断の言い方も受けるし、「する／しないところだ」と肯定・否定ともに受ける(ただし、シタ形は受けない)。こうした場合、基本的に“ここは”“この度は”といった「～ところだ」に対する主語というべき語句がでてくるのがふつうで、その点、まだこの意味の「ところだ」は、文末形式的としての複合辞になりきっていないようである。

2. (1)の用法では、事柄の進展を見越して、次にコレコレのことがなされる直前の段階・場面だということを用いる言い方である。言わば、話し手が事実の筋書き・シナリオを先読みして、次にこうなる(その直前だ)という言い方である。そこで、話し手が予測しにくいような事柄についてこうした表現は使いにくい。一般的に言って、意志的行為についてはこの言い方が使えるが、無意志的出来事については、使いにくいことがある。例えば、「彼は出掛けるところだ」とはいえども、「ちょうど雨が降るところだ」とはいえない。意志的行為は、行為者の意志を先読みできるが、無意志的出来事については、特別の条件でもなければ、成り行きを忖度しにくいと理解されるからであろう。ただし、状況的に話し手がこれから何が起こるのかあらかじめ知っているような場合は、無意志的出来事についても、「～ところだ」という言い方は可能である。実験を説明して、「これから新型爆弾が爆発するところだ」などという言い方は、不自然ではない。

3. 「ところだった」の形をとっても、(1)の場合と異なり、(2)(3)(4)では、形式それ自体としては、反実仮想の意味ははっきり持たないようである。つまり、「気をつけろ。ケガするところだったぞ」とはいえども、「気をつけろ。ケガしたところだったぞ」は、明らかに不自然である。「気をつけろ。ケガしている／してたところだったぞ」も、「したところだった」ほどではないが、十分自然とはいえない。(2)(3)(4)が、反実仮想の意味になるには、仮定であることが文脈的に明示されている必要があるといえる。

4. (3) の場合、類義的な言い方として、「している」のままで、進行中を表わす言い方が考えられる。例えば、「彼はレッスンを受けているところだ」に対して、「彼はレッスンを受けている」は、確かに類義的である。しかし、「彼は2時間前からレッスンを受けている」といっても、「彼は2時間前からレッスンを受けているところだ」というのは、かなり不自然である。「しているところだ」は、ある段階にあり続けているということと言うのが基本で、過去からもしくは未来への継続には光を当てない表現なのであろう。

関連項目

B 1 8 「～ばかりだ」、B 3 6 「～(よ)うとする」

参考文献

森山卓郎 (1984)

◇ B 5 ～一方だ

接続

動詞のスル形に付く。

意味・用法

「Aする一方だ」で、Aするという変化・動きがどんどん度合いを増して、とどまるところがないということを述べる。

用例

- (1) 度重なる不祥事で、政治への不信感は募る**一方だ**。(作例)
- (2) こうした中で、単行本が文庫になるまでの期間は短くなる**一方だ**。(朝日新聞 '94. 9. 4)
- (3) 働いていないからお金はへる**一方である**。(森村桂「天国にいちばん近い島」)
- (4) 未熟児の数は近年増加する**一方だ**という。(朝日新聞 '94. 5. 12)
- (5) 男B「ほっときゃ利息がふえる**一方だ**よ、それじゃこっちも困るから、毎日うちの若い者をよこすことになりますけど」(山田洋次・高橋正圀「北の夢」)
- (6) 不況で、銀行の預金利息を始め、金利は下がる**一方だった**。(作例)
- (7) その論文はつねに新鮮で鋭い出来だったが、先輩に絶交状を送ったり出入りを差し止められたり、彼は孤立する**一方だった**。(朝日新聞 '94. 1. 22)
- (8) ゴジ「しじみが少し回復したらしいけど磯焼けで昆布は減る**一方だ**し町全体がしみりしてるってよ」(倉本聰「もう呼ぶな、海!」)
- (9) 教員採用は、年々狭き門になる**一方で**、採用試験対策も焼け石に水だ。(作例)
- (10) このところ、インターネット・ビジネスは儲かる**一方で**、笑いが止まらない。(作例)
- (11) このころ、毎年のように不作のため、米価はあがる**一方で**、そのうえ政治上の混乱を反映して世相も陰悪となり、長州征伐の最中に大坂や江戸で打ちこわしがおこり、農村でも世直しをとこなえる農民の一揆がしきりにおこった。(宝月圭吾ほか「詳説日本史(再訂版)」)
- (12) [娘は]一人娘で、私が昔いた商社に勤めているが、女房が死んで以来、帰宅が遅くなる**一方で**、同じ家に住んでいながら、父娘が顔を合せる時間はきわめて少なかった。

(石川喬司「彗星伝説」)

(13) 九〇年代になって景気とともに落ち込む**一方だった**観光客を呼び戻そうと、観光当局や旅行業者が努力してきたハワイだが、「円高」の勢いを得た今夏の盛況が起爆剤になるのかどうか——観光客に熱いまなざしが注がれている。(朝日新聞 '94.8.8)

(14) 苦しくなる**一方の**資金繰りにうんざりした丸山社長は、なんと狂言強盗を思いついた。(作例)

(15) インフレで、かさむ**一方の**用紙代、印刷費。(朝日新聞 '94.7.1)

(16) 深刻になる**一方の**ゴミ問題は、家庭や職場で皆が考えねばならない時期にきている。(朝日新聞 '94.11.14)

(17) 工場排煙は、約二十年前の四日市公害判決以来、削減対策が進んだが、大都市圏での主に自動車排ガスによる窒素酸化物(N_O_x)問題は深刻化する**一方だ**。(朝日新聞 '94.1.20)

文法

「一方だった」と過去形もとれ、「一方で」と連用中止の形、「一方である」「一方であった」「一方の」と連体修飾の形も取れる。「一方でない」といった否定の形はとれない。

ノート

1. 計量出来る変化を意味する動詞を受けて、その変化・動きがどんどん進んで行くことをいう。(10)のような言い方もできるが、一般に、あまり望ましくない変化について言うようで、「このところ、菜々子は、美しくなる一方だ」などという言い方は、不可ではないかも知れないが、あまり使わない。

2. 類義的な表現として、「ばかりだ」という言い方があるが、これは「ただある動作を続ける・ただある出来事が続く」といった意味で、必ずしも変化・動きが度合いを増すという場合だけではなく、広く行為・出来事が変わり映えもなく続けられることをいう。

「一方だ」と重なるところもあるが、例えば「和博はうろうろ歩き回るばかりだった」とは言えても、「和博はうろうろ歩き回る一方だった」とは言えず、また、「歩き回っているばかりだった」のようにテイル形をとる言い方も「一方だ」ではできない。用法の重なりは、一部分にしか過ぎない。

3. 関連して「防戦一方だ」のように動作・状態を表す漢語名詞に「一方」が結びつき、「ひたすら～する」「もっぱら～である」のような言い方があるが、かなり固定した言い方で、いろいろな名詞を受けてあまり自由に用いることはできないようである。

関連項目

B 1 8 「～ばかりだ」

◇ B 6 ～どころではない

接続

名詞に付く。また、用言のスル形・シタ形(シテイル形・シテイタ形を含む)に付く。

意味・用法

何らかの事柄・事物・物事のありようを取り上げて、事態・話はそのようなことをしたり、云々しているレベルに止まるものではない、ということを述べる。

用例

(1) しかし、今朝の正一は寝ている**どころではありません**。(ねじめ正一「高円寺純情商店街」)

(2) こうなっては、もうバケツリレー**どころではない**。(ねじめ正一「高円寺純情商店街」)

(3) もう団欒のひとつき**どころではありません**。(三浦哲郎「忍ぶ川」)

(4) いくら説明しても解ってくれず、新しいビザをもらう**どころではない**。(森村桂「天国にいちばん近い島」)

(5) ごみの処理は「ただ」**どころでない**。九〇年度の国全体のごみ処理経費は一兆三千八百億円で、一人当たり一万二千二百円になる。(朝日新聞 '94.2.14)

(6) 自分の台所が火の車で、人のこと**どころではない**のに、ヨソの会社に説教たれる。(朝日新聞 '94.1.8)

(7) あれは、とても眠気を催す**どころではない**冷え冷えとした霜枯れ時の、しかも、真っ昼間の出来事として――と、北国の海岸都市でタクシーの運転手をしている幼馴染みの六造は語る。(三浦哲郎「お菊」)

(8) 福岡県の男性地方公務員(四一)は、いじめで勉強**どころでなかった**小、中学生時代を「どれほど悔やんだことか」と書く。(朝日新聞 '94.12.15)

(9) 慣れない農作業と子育てに追われ、絵**どころではなかった**。(朝日新聞 '94.9.15)

(10) N 「一緒にきてくれとおやじはあわてたが、歳末商戦の真只中で俺は忙しくてそれ**どころではなかった**」(倉本聰「もう呼ぶな、海!」)

(11) しかし、現代社会において、家族は社会集団としての意味を失う**どころではなく**、むしろ現代人の「生きがい」の中心となりつつある。(中村元ほか「倫理・社会」)

(12) 仕事はなかなか捗らず、しかも思いがけず、平成五年度からは、新しい職場全体の責任を持つ立場にもなって、無論その仕事の求める忙しさは、とても研究**どころではなくな**った。(村上陽一郎「科学者とは何か」)

(13) わたしは、思い当たるふしがある**どころではない**のです。(三浦哲郎「忍ぶ川」)

(14) いやあ、こわい**どころじゃなかった**よ。もうすこしで、死ぬところだった。(作例)

(15) 服部氏のことなら、知っている**どころじゃない**よ。十数年来の親友だ。

(16) 松本さんは「相手の車は七〇キロ**どころではない**猛スピードだった」と、納得できなかった。(朝日新聞 '94.2.1)

(17) この車の揺れは、田舎のバス**どころではなかった**のである。(朝日新聞 '94.11.17)

(18) 「悲しむ**どころではなく**、一年間で一〇キロやせました」(朝日新聞 '94.10.26)

文法

「どころではなく」と連用中止の形がとれる。連体修飾にも使える。

ノート

用例のように、「Aどころではない」で「A」をそんなことではない・してられない、と否認する意味になる場合が多いが、例文(13)～(18)のように、「A」について、その程度では済まないとし、「A」であること・Aの水準をクリアすることそのものは必ずしも

否認しない意味になることもある。基本的には、「A」というようなことでは、物事は片付かないということをいう言い方なのである。

関連項目

A 7 9 「～どころか」

参考文献

服部匡 (1995)

◇ B 7 ～ほかない・～より（ほか）ない・（ほか／より）仕方（が）ない・～より仕様がな

接続

動詞のスル形（シテイル形を含む）に付く。

意味・用法

「Aほかない」「Aより（ほか）ない」「A（ほか／より）仕方（が）ない」「Aより仕様がな

用例

- (1) ハシを通ってはいけないとおっしゃるのだったら、真ん中を通る**よりない**でしょう。
(作例)
- (2) そうか。それでは、いうことを聞く**ほか仕方がない**な。(作例)
- (3) こんな夜遅くでは、何か食べ物といっても、コンビニにでも買いに行く**より仕方なかった**。(作例)
- (4) 今度は、学部長が説明する**ほかなかろう**。(作例)
- (5) ここまで来ては、もう努力**よりほかない**ですね。(作例)
- (6) 私はもちろん持ってないし、母の持っているのは借金だけとなると、どこかで算段する**ほかない**。(森村桂「天国にいちばん近い島」)
- (7) 恐竜などのような絶滅したものの復元は、その生活の姿をまったく推定にたよる**ほかない**のであるが、象のようなばあいには現生のものとの比較によって、復元できる。(亀井節夫「日本に象がいたころ」)
- (8) ヒット・オペラを聴きたければ劇場に行く**ほかなかった**時代、ラジオやCDの役割をになったものに、ハルモニウムジークがあった。(朝日新聞 '94. 5. 29)
- (9) 早く戻って兵を替えての正攻法に出る**より仕方がない**。(朝日新聞 '94. 10. 30)
- (10) 日本で生活できなければ、もどって来る**より仕方がなからう**。(森村桂「天国にいちばん近い島」)
- (11) 最後は何かギリギリの感じで、突っ走る**より仕様がなくな**っちゃったようなところもありました。(朝日新聞 '94. 8. 29)
- (12) 万策尽き果てて、もはや直美は、泣く**より仕様がな**かった。(作例)
- (13) こんな仕事でも続けているより**ほか仕方もなく**、何の希望ももてない毎日だった
(作例)
- (14) うろたえる**よりほかない**人々に何が出来るか。(作例)

(15) 文化を経済よりも下位のものとしてとらえる国家や地方公共団体や企業は、右肩上がりの経済成長が永遠に続くと思える哀れなドン・キホーテという**ほかない**。(朝日新聞 '94.10.2)

(16) 聞く者たちはそれが本音であることを知っているが、失言の度に「真意がよく伝わらなかった」とか「発言を撤回する」とか言い逃れるに至っては、この程度の人間だったかと笑ってしまう**よりほかない**。(朝日新聞 '94.5.12)

(17) この危機を乗り切るには、政府のリーダーシップによって、経済体質を輸出依存型から内需型へ根本的に転換する**ほかない**。(朝日新聞 '94.7.5)

(18) しかし、産業的な見地からは、労働組合を公認しようとする法律が、1925年前後からしばしば立案されながらも、結局、機が熟するのを待つ**ほかなかった**。(辻清明ほか「政治経済 新訂版」)

(19) 自己の職責に対する自覚を著しく欠いているという**ほかなく**、犯行の動機に酌量すべき点はない。(朝日新聞 '94.5.30)

(20) きまじめな一群は先生の講じる科目を学ぶことがすなわち大学の勉強であると素直に信じて疑わず、いつしか大学院へでも入院する**ほかない**つぶしのきかぬ体にされてゆく。(朝日新聞 '94.7.28)

(21) 残念ながら、そういう苦い現実を受け入れる**ほかない**時期が近づいている。(朝日新聞 '94.2.22)

(22) 大蔵省は、大量の辞退者を生んだ理由について「投資家の判断が下されたと理解する**より仕方ない**」(理財局)としている。(朝日新聞 '94.10.14)

文法

複合的な文末形式として、形の上でいくらかヴァリエーションがあり、1.「～する(／している)よりない」、2.「～する(／している)ほかない」、3.「～する(／している)よりほかない」、4.「～する(／している)より仕方(が)ない」5.「～する(／している)ほか仕方(が)ない」6.「～する(／している)よりほか仕方(が)ない」のようなパターンが考えられる(なお、「仕方」の部分は「仕様」などの言い方も可)。「～する(／している)」と動詞を受けるが、(5)のように、「～する(／している)」の部分に複合サ変動詞を形成できる動作的な意味の漢語名詞の語幹が入る形もある。「～よりなく(て)」のような連用中止の形も、また、連体修飾にも用いられ、過去形や推量の形もとれるが、これを否定する「～よりなくはない」などという言い方は用いられない。「～よりありません」「～よりないです」といったていねい形も、可である。

ノート

1. しばしば、「～するより他に方法がない」といった意味と説明され、主体的に選択出来る手段の問題とばかり見られがちだが、「成り行きとして～するよりほかにない」というような、主体的に選べるとばかりはいえないやむを得ない状況・成り行きについてということもある。特に「～するより仕様がなくて」と「仕様」を用いた形では、後者の意味になることが多いようである。

2. 類義表現として、「～せざるを得ない」が考えられるが、これは、「(状況からして)なにかをすること・何かがなされることが避けられない」という言い方である。あくまで、何かを“する”こと・何かが“なされる”ことが問題になる。しかし、「～よりない」は、

有り得る・選択出来ることが～だけだということで、有り得る・選択出来ることの中には、“する”ことばかりでなく“しない”ことも入ってくる。そこで「こうなったらもう何もしないでいるよりない」と言うことも可能であるが、「～せざるを得ない」のほうは、もちろん「何もしないでおらざるを得ない」などとは言えない。また、「～せざるを得ない」という言い方では、何者かの行為でなく何らかの出来事の生起が不可避だということも言えるが、「～よりない」では、出来事の生起は云々できない。つまり、「このままだとかなりの被害者が出ざるを得ない」とはいえても「このままだとかなりの被害者が出るよりない」とは言えない。

関連項目

B 4 0 「～ざるを得ない」

参考文献

張麗華 (1984)

◇ B 8 ～わけだ

接続

用言のスル形・シタ形（シテイル形・シテイタ形を含む）に付く。

意味・用法

「Aわけだ」の形で、何らかの事実や判断・思考を踏まえて、その結果・帰結としてAという事実や判断・思考があるということを述べる。

用例

(1) しかし、計画をスタートさせて見ると、スポンサーがさっさと降りてしまった。山本氏としては、自力で『神智学大全』を刊行しなければならなくなった**わけだ**。(作例)

(2) この材質なら、確かに縦方向の負荷が3トンでも大丈夫です。象が踏んでも壊れなかった**わけです**。(作例)

(3) ようやく原稿を送って、それから上京した。昨日東京で一泊して、今朝こっちへきた**わけだ**。(作例)

(4) 国立大学・教育学部を巡る状況は確かに容易なりません。下手をすれば、学部自体がなくなってしまう**わけです**。(作例)

(5) これは、一言で言えば、戦後政治の見直しだ。五五年体制下での政治の生み出したさまざまな矛盾や弊害を含め、その功罪を見直そうという**わけだ**。(作例)

(6) もし愛情がなくても子供が育つのなら、子育て用の自動装置だって作れる**わけで**、何が一番大切かよく考えて見るべきでしょう。(作例)

(7) ご不審は、ごもっともですが、他に引き受ける人もいなかったなので、わたしがやっていた**わけです**。(作例)

(8) すると、あの男が言う**わけです**。「僕が、先生のご意向を一番よく知っているんだ」とね。(作例)

(9) これで晴子とは貸し借りなしの五分五分という**わけだ**。(夏樹静子「鼓笛隊」)

(10) 極端に言えば、「店に三割引きで売られそうだ」とメーカーが思えば、「三割増し」に定価を設定しておけばいい**わけだ**。(朝日新聞 '94.5.13)

(11) 「ああ、網では獲れない場所だ、だから、俺は密漁者という**わけだ**よ」(黒岩重吾「海の蜆」)

(12) 偉大なる高さの目標でも、簡単に手に入れてしまったのでは、その人の自信にならない**わけです**。(柴門ふみ「恋愛論」)

(13) 結局、いろいろ経験を積んでいくうちに、コンピュータ屋が医学を習ってコンピュータを使うよりも、やはりお医者さんになるべく直接教えてもらったほうが早いということがわかってきた**わけです**。(野崎昭弘「人工知能はどこまで進むか」)

(14) 画一的なビジョンをつくってもそれはほんの入り口でしかない**わけです**。(朝日新聞 '94.5.2)

(15) つまり外国に門を閉ざしては生きていけない**わけでしょう**? だったら外国人に対しても心を閉ざしてはいけない、と思う。(朝日新聞 '94.4.26)

(16) 純平「でも、明日は仕事だろ? 今日も一日つきあわせちゃった**わけだし**……」(吉田紀子「卒業旅行」)

(17) わけを聞けば何でもないので、魚は足の代わりにヒレを持つ脊椎動物で、人類は始めは陸上で脊椎動物の先祖だった**わけだから**、進化の点では、人間は陸上の四足動物よりも魚に近いということらしい。(向田邦子「鮎」)

(18) 恋人になってしまえば、こんどはその関係を維持することに神経を使わねばならない**わけで**、結構それは面倒臭かったりする。(柴門ふみ「恋愛論」)

(19) 精密検査の前日は、腸の中をカラップにしておく必要があるという**わけで**、病院で渡された特別なレトルト食品だけしか食べる事ができなかった。(さくらももこ「もものかんづめ」)

(20) いくら食べてもいい**わけでは**ありません。(「なつかしい手作りおやつ」)

(21) 星間ガスとかチリという可能性もない**わけでは**ないが、それならいまの技術をもってすれば観測できるはずである。(野本陽代「宇宙の果てにせまる」)

(22) 私は今、氷に埋れていた動物が生存していた時代から、気候には変化がなかったと想像する**わけでは**決してない。(亀井節夫「日本に象がいたころ」)

(23) 別に何がおかしい**わけでも**なかったが、笑い声もまじって話がはずんでいた。(向田邦子「鮎」)

文法

否定を受けて「～しないわけだ」とはいえるが、推量の言い方を受けて「～するだろうわけだ」などとはいえない。また、「という」を介して「～するというわけだ」といった言い方もできる。この場合、そのままでは「わけだ」につながらない意志・希望・命令・疑問の形を受けて「～しよう／したい／しろ／するかというわけだ」のような言い方も可能である。連用中止の形はとれるが、連体修飾の形はとれない。「～わけか」のような疑問の言い方も、出来ないことはないが、一般的ではない。

ノート

1. なんらかの事実や思考・判断を踏まえて、そこから、考えを進めて行って至りつく結果・帰結として、ある事実や思考・判断を述べる言い方である。必ずしも、論理的推論のようなことではなく、事実の成り行きを追ったり事柄を掘り下げたりなど、さまざまなレベルで考えを進めることの結果・帰結をいうものといえる。

2. 「のだ」との異同が問題にされる。基本的には、「わけだ」は、結果・帰結の言い方なので、その種の文脈で使われる「のだ」とは互換性が高く書き換えも容易だろうが、また、「のだ」は“背後の事情”とか“実情”を示すとされ、事柄を“実際のところは”と開示するようなニュアンスを読み取ることができないような場合には、「わけだ」→「のだ」の書き換えは不自然になる考えられる。微妙な点では、なお検討が必要である。なお、もちろん「～というわけだ」のような言い方では、「わけだ」→「のだ」の書き換えはできない。

3. 「わけだ」は、結果・帰結の言い方としたが、(9)のように、何らかの事実・思考からの結果・帰結とはいえない言い方で使われることがある。これは、話し手が物事を語って聞かす姿勢を示す用法とでもいえるべきものだから、押し付けがましい語感があるなどとして、あまりよい印象はもたれていないようである。

関連項目

B 9 「～わけがない」、B 10 「～わけにはいかない」

参考文献

奥田靖雄 (1992)・北川千里 (1995)・尹相実 (1995)

◇ B 9 ～わけがない

接続

動詞のスル形・シタ形（シテイル形・シテイタ形を含む）を受ける。形容詞のスル形・シタ形を受ける。形容動詞の場合、「～である／な」の形・「～であった」の形を受ける。“名詞＋断定の助動詞”については、「～である／の」の形・「～であった」の形を受ける。

意味・用法

「Aわけがない」で、Aとは考えられないと強く否定する言い方になる。

用例

- (1) ウソをつけ。田野村さんがそんなこと**わけがない**。(作例)
- (2) 多勢に無勢で勝てる**わけもなかった**。(作例)
- (3) 何いってんだ。この爺さんが、水戸の御老公様である**わけがない**。(作例)
- (4) そんな奇跡が起こる**わけもなく**、結局喜之は落第した。(作例)
- (5) 帰ってくる**わけもない**人をいつまでも待っていたところで、しかたないでしょ。(作例)
- (6) 「コンピュータが人間を超える**わけがない**」と確信している人がいます。(野崎昭弘「人工知能はどこまで進むか」)
- (7) ゴジ「いくらお前だって3'40”が限界だ。5分なンてお前息のつづく**わけがない**」(倉本聰「もう呼ぶな、海!」)
- (8) だからといって、数百ヘクタールに及ぶ大面積での開発が、環境や景観に悪影響を及ぼさない**わけがない**。(朝日新聞 '94.9.4)
- (9) 自分の子だから少しはよそさまの子供より出来がいい筈、といううぬ惚れを持ちながら、他人を押しつけて最前列へ出て行くほどの能力などある**わけがない**と、はじめから

きめてかかっていた。(半村良「秋子の写真」)

(10) むろんどこの馬の骨だかわからない男に、たった一人の娘をやれる**わけがない**。

(藤原審爾「風とまる」)

(11) これだけ国際機関やジャーナリストが入り込んでいる状態で、大量殺害が起きていたら目撃されない**わけがない**。(朝日新聞 '94. 10. 31)

(12) ジグソーパズルを箱ごとゆすっても、完成する**わけがない**。(朝日新聞 '94. 5. 18)

(13) だが、軍による給油がいつまでも続く**わけがなく**、混乱が悪化しそうだ。(朝日新聞 '94. 7. 8)

(14) 「財源から見て〔整備新幹線に〕着工できる**わけがない**ことは運輸官僚もわかっているはず。〔中略〕。大蔵省内ではここにきて、予算担当幹部の間でこんな声すら聞こえてくる。(朝日新聞 '94. 12. 3)

(15) そう思うと腹が立ち、「レトルトも、けっこうイケルよ、うん」と言ってやったら、母が「おいしい**わけない**じゃん、そんなもん」と言い放った。(さくらももこ「もものかんづめ」)

(16) 風子(笑う)「私にそんなことできる**わけない**じゃない」(倉本聰「もう呼ぶな、海!」)

(17) 山岡「余計なお世話かもしれないけどさ、営業部の上の人達、君のことあんまりよく思っていないんじゃないかな、じゃなきゃ食品なんか回す**わけない**もん、男でもしんどいんだからさ」(岡田恵和「彼女たちの時代」)

(18) 「あら、また大きくなったんじゃない」「三十過ぎて背が伸びる**わけない**だろう。お母さんが小さくなったんだよ」(朝日新聞 '94. 4. 3)

(19) 学校現場も少しずつ変わりつつはあるが、社会というのはそう早く変化する**わけもなく**、年齢に背を押されて、私は母になった。(朝日新聞 '94. 1. 1)

文法

「わけもない」の形もある。連用中止の形、連体修飾でも用いられ、「～わけがなかった」と過去形でも用いられる。

ノート

1. 「わけ」は、名詞として。もともと「事情・いきさつ・理由」などといった意味があったが、この否定表現も、成り立ちとしては「(～である・～する)理由・事情がない」といった意味から来ている。

2. 「わけがない」は「はずがない」と非常に近い意味であり、一般に言い換え可能である。ただ、「はずがない」が、どちらかというところ「(論理的必然性として)～とは考えられない」といった語感があるのに対し、「わけがない」は、上記のように「(～と考えられる理由がないから)～とは考えられない」といった原義をうかがわせるところがあるように感じられる。例えば、親しい男女間で、一方がいたずらをして「怒った?」と問うのに、「怒るわけないよ」と答える方が、「怒るはずないよ」より一般的で親しげなように思われる。相手に対して、怒ると考えられる理由、つまり、悪く思う気持ちはないということの直接表明になるからだろう。一般に、しかし、ほとんど違いが表立つことはない。

3. なお、「はずがない」の場合、「警視庁の面々に、このなぞが解けようはずがない」などと「～しようはずがない」という言い方が可能だが、「わけがない」では、「～シヨ

ウわけがない」などという言い方はできない。

関連項目

B 2 「～はずだ」

参考文献

奥田靖雄 (1992)

◇B 1 0 ～わけにはいかない

接続

動詞のスル形（シテイル形を含む）に付く。

意味・用法

「Aわけにはいかない」で、状況からしてAということをする事は出来ないということを用いる。

用例

(1) しかしまあ、そう信じてくれてるものを、今さら取り消す**わけにはいかない**。(森村桂「天国にいちばん近い島」)

(2) 国内で商品を買うときには、その国の貨幣を使えばよいが、外国から商品を買うときは、じぶんの国の貨幣で支払う**わけにはいかない**。(鶴飼信成ほか「新しい社会[歴史]」)

(3) なん種類もある通信系統をいつでも生かしておくためには、いつときでも電力を絶やす**わけにはいかない**んだ。(中村正軌「嘔吐の海」)

(4) しかし、ひとたび火がついてしまったものは、なかなか消す**わけにはいかなかった**。(森村桂「天国にいちばん近い島」)

(5) その様子を見て私は、約三十年前の丸山真男さん（東大名誉教授）の卓見を思い出さない**わけにはいかなかった**。(朝日新聞 '94. 7. 26)

(6) 文科系の出身者が、「私は科学技術は何も判りません」と澄ましている**わけにはい**かなくなっている。(村上陽一郎「科学者とは何か」)

(7) ある物質が何かということを探るとき、毒物もあるので、むやみに味をみて調べる**わけにはいかない**が、食物で、もしすっぱい味がしたらその食物には酸がふくまれていると考えてよい。(坪井忠二ほか「新理科1分野下」)

(8) いつまでも駐車場にしておく**わけにもいかない**ので、別の新しい案を作ることになるかもしれない。(朝日新聞 '94. 4. 5)

(9) 絞りの調節はカンに任せる**わけにはいかず**、露出計には電気が必要だ。(朝日新聞 '94. 3. 9)

(10) 神社の境内の池で、地蔵をぬらすと雨が降るといふ言い伝えがあるが、文化財を水につける**わけにもいかず**、代わりに村人三人が池に入った。(朝日新聞 '94. 8. 20)

(11) 一度、墓として手を合わせた石を、無縁になったからと河原にほうり出す**わけにはいかない**ようなものです」(朝日新聞 '94. 10. 31)

(12) しかし、本格的に債券売買で収益を得ようとすれば、リスク回避のためにも、デリバティブ取引を避ける**わけにはいかない**状況になっている。(朝日新聞 '94. 11. 13)

(13) とはいえ官僚が代役を務める**わけにはいかない**問題もある。(朝日新聞 '94. 4. 23)

(14) 私としては、これらの根拠も「否定もできないが、無条件に受け入れる**わけにもいかない**、抽象的な学説」として退けたいと思います。(野崎昭弘「人工知能はどこまで進むか」)

(15) こうなると日本だけが安く自由に石油資源を使うという**わけにはいかない**。(鶴飼信成ほか「新しい社会 [歴史]」)

(16) しかし、インフォームド・コンセントがしっかりと根づくためには、単に医師と患者の間の信頼関係さえよければよい、という**わけにはいかない**。(朝日新聞 '94.1.22)

(17) しかし、何もかも「政府頼み」という**わけにはいかない**。(朝日新聞 '94.4.9)

文法

非意志的な動作を表す動詞にも結びつく。「～わけにもいかず」と連用中止の形もとれ、連体修飾も不可ではない。

ノート

1. 「～というわけにはいかない」という言い方で、「～という」であり得る状況を示し、そのように物事が進まないという言い方が出来る。この場合、「という」に引かれるのは文や動詞句とは限らず、「ジェット機でひとつ飛びというわけにはいかない」とか「ビールで一杯というわけにはいかない」のように状況を象徴的にいろいろな形の語句がとれる。

2. 「～するわけにはいかない」は、述語句としては、必ず意志をもった主体を主語として、その主体が状況としてあることが出来ないということをいう言い方である。無意志的な主体を主語として、出来事の発生がありえないというような場合には、用いられない。たとえば「雲一つない日照り続きでは、大型台風が襲来するわけにはいかないな」などとはいえない。しかし、(1)のような「～というわけにはいかない」という言い方では、「雲一つない日照り続きでは、大型台風が襲来するというわけにはいかないな」といった言い方が可能である。

関連項目

B 8 「～わけだ」、B 1 3 「～ことができる」

コト系

◇ B 1 1 ～ことだ

接続

活用語のスル形(形容動詞は「～ナ」の形も)や名詞+「の」などに付くが、詳しくは文法の項を参照。

意味・用法

「Aことだ」の形で、(1) 当為の事柄を述べる、(2) 希求される事柄を述べる、(3) ある事柄の有り様をそれとして認める気持ちを込めて述べる。

用例

(1) ぐずぐずしていないで、すぐに出掛ける**ことだ**。(作例)

(2) 泳ぎがうまくなりたければ、まずは水に親しむ**ことで**、組織だった練習はそれから

だ。(作例)

- (3) 上位に入選するためには、一にも二にも練習すること**だった**。(作例)
- (4) いつでも筆記用具ぐらいもっていること**だね**。(作例)
- (5) 敵を利するものは敵の手に陥る前に徹底的に破壊すること**だ**。(中村正軌「嘔吐の海」)
- (6) それには、まずリーダーたちが目指す国家・社会像をはっきり語り、改めて「この指止まれ」と呼びかけること**だ**。(朝日新聞 '94. 1. 5)
- (7) とにかく会ってみること**だ**。(森村桂「天国にいちばん近い島」)
- (8) 亮介「まあ、あれだな、啓介君なら大丈夫だと思うけど、こんな世の中だ、仕事は大変だ、どんな仕事でもな。せめて家に帰った時ぐらい、仕事忘れてリラックス出来るようにしてやること**だ**なあ」(岡田恵和「彼女たちの時代」)
- (9) ーでも、もう起きてしまったことだし、幸いどうにか落ち着きそうなのだから、あんまり自分を苛めないこと**だ**わ」(夏樹静子「鼓笛隊」)
- (10) 売れないなら、値段を下げること**だ**。(朝日新聞 '94. 3. 12)
- (11) 愛されたいなら、不完全で無防備な自分をさらけ出すこと**です** (柴門ふみ「恋愛論」)
- (12) 何事にも動じないこと**だ**。(作例)
- (13) 分かってもらいたければ、何より簡潔明快であること**だ**。(作例)
- (14) 引退したんでは、結局なにもできなくなるさ。とにかく現役であること**だよ**。(作例)
- (15) まず、この仕事が片付くこと**だ**。(作例)
- (16) もうお帰りとは、慌ただしいこと**です**な。(作例)
- (17) 今何時だと思ってるんだ。ほんとに迷惑なこと**だ**。(作例)
- (18) 困ったこと**で**、何と言っていいやら、言葉がありません。(作例)
- (19) 彼の泣き上戸は相変わらずで、どうにも世話の焼けること**だった**。(作例)
- (20) また夕立か。よく降ること**だね**。(作例)

文法

接続は、(1) の場合、動詞のスル形(シテイル形を含む)を受ける。動詞を受けるのが一般的である。また、形容動詞・体言(+だ)の形を受けることもある。形容動詞については、「～である／な」の形、体言については、「～である」の形で受ける(形容詞も受けられるのかもしれないが、実際に例は考えにくいようである)。シタ形は受けない。

(2) の場合も、(1) に準じる。(3) の場合、動詞のスル形に加えて、形容詞・形容動詞を受ける。形容詞については連体形、形容動詞については「～である／な」の形で受ける。体言(+だ)は受けられないようである。基本的に「ことだ」は、「～ことで」のような連用中止の形も、「～ことだった」「～ことだろう」のような・過去・推量の形もとれるが、連体修飾では使われない。

ノート

1. 「ものだ」という言い方が、“一般性”を基本に考えられるのに対して、「ことだ」の方は、“個別性”を基本に考えられるのではないかと思われる。すなわち、「～ことだ」の用法は、「個別的なこととして(=今ここでは)～だ」という意味を基本とするものと

見ることで説明できそうである。つまり、「今ここでは～だ」とそこで採るべき事柄を指示するところから(1)の用法が出てくるし、それが主体的に選べとれない自由にできないことであれば、(2)の用法になる。また、「今ここでは～だ」と確認することが(3)の用法だともいえるのである。

2. 従って、「当為」といっても、「～ものだ」が一般論的にそうすべきとするのに対し、「～ことだ」は、「今ここでは」そうすべきという言い方であり、個別的な指示としてつかえる。「いいから、急いで行くものだ」とはいえないが、「いいから、急いで行くことだ」とはいえるのである。

3. なお、(1)の用法の否定の言い方として、「～ことはない」が考えられ、例えば「なにも無理することはない」のように用いて、「～する・である必要はない」といった意味を表わせる。(2)の用法の否定の言い方としても、「～ことはない」が使えるようで、「なにもこんな日に客なんか来ることはないのに」などと用いて、「～するのはありがたくない」といった気持ちを表わす。これらの「～ことはない」は「～ことがない」の形には言い換えられないが、「～ことはない」には、もちろん「～ことがない」の形に言い換え可能な「～する・した・である機会・経験がない」といった意味の言い方もある。

4. 「～という」を付した「～ということだ」という言い方で、伝聞の意味にも、また、そこで問題になるなんらかの具体的な事柄の実情・本質を解説する言い方にも使われる。例えば、「このあたりも秋になったということだ」という場合、「天気予報で言っていたが、このあたりも秋になったということだ(=なったそうだ)」のような言い方とも、「虫の音が聞こえるようになった。このあたりも秋になったということだ」のような言い方とも解せられるのである。

5. ちなみに「まあ、おかしな話だこと」のように、「こと」が文末で話し手のつくづくそう思う気持ちを表すような言い方で用いられることがある(女性語的な表現といえる)。この場合、「～だこと」と終止形を受けることからわかるように、これは「～ことだ」の「だ」が省略された形ではなく、「こと」がこの形で終助詞化したものと考えべきである。

関連項目

B 1 「～ものだ」、B 1 2 「～ことがある」、B 1 4 「ことになる」、B 1 5 「ことにする」

◇ B 1 2 ～ことがある

接続

用言及び「名詞＋断定の助動詞」のシタ形に付く。

意味・用法

「A ことがある／あった」という言い方で、過去に経験されたことがあることをいう。

用例

- (1) ここには一度来た**ことがある**。(作例)
- (2) 彼は、かつて国立国語研究所にいた**ことがある**のかね。(作例)
- (3) 父親は外交官で、フランスで長く暮らした**ことがある**。(朝日新聞 '94.10.14)

(4) 実際、私は、これからの日本が世界に知的貢献をするのであれば、それはノーベル賞受賞者を増やすことにはない、と断言してよいとさえ考えている。「ノーベル賞受賞者はもう要らない」という主旨の講演を行った**こともある**。(村上陽一郎「科学者とは何か」)

(5) かつて、戦場において、象が戦象として使われ、今日の重戦車のような役割りを果たしていた**ことがあった**。(亀井節夫「日本に象がいたころ」)

(6) 小学生時代涼子は父母に連れられ四国に行った**ことがあった**。(黒岩重吾「海の蜚」)

(7) ゼミナールの最中に研究室の電話が鳴った**ことがありました**。(阿部謹也「自分のなかに歴史をよむ」)

(8) 昭和の初期に、ある料理研究家がこれらの食べ合わせを自ら試食し、中毒のおそれはないと発表した**ことがある**そうだ(朝日新聞 '94.8.31)

(9) シラードは、かつてベルリンで一緒に研究した**ことのある**アインシュタインを「利用」しようと思いついた。(村上陽一郎「科学者とは何か」)

(10) 村長選に立った**ことのある**人もいるが、多くはこれまで選挙とは無縁の人。(朝日新聞 '94.12.1)

(11) 仕事が早く終わった**こともあって**、田野村氏はいつもより早く帰宅した。(作例)

(12) 彼の学校は男子校だが、制度の改正で今年から家庭科が必修になった。実習でジャムを作った**こともあって**、料理への関心が深まったようだ。(朝日新聞 '94.6.23)

文法

連用中止の形も、疑問や推量の形もとれ、連体修飾でも使われる。また、「～ことがあった」と過去の形もとられる。否定の形は、「～ことがない」になる。

ノート

1. 「～ことがある」には、「今でも、田沢氏のことが話題になることがある」のように、「～スルことがある」の形で、ときどきそうした体験をすることをいう言い方があるが、こうした例では、「田沢氏のことが話題になることが、今でもある」のように、「～ことが」と「ある」との間に修飾語を挿入することができる。この意味の場合には、複合辞としないほうがよいようである(この項で扱った“過去の経験”の意味の例でも、「～ことが」と「ある」との間に修飾語を挿入することができなくはないように思える場合があるが、例えば「ここには、かつて来たことがある」を「ここには、来たことがかつてある」とすると、相当不自然であり、この意味の場合には、ある程度「～ことがある」の複合辞としての固定化は進んでいるものと思われる)。

2. 過去の経験を表わす「～したことがある」と類義の表現としては、「～している」も、過去の経験を表わることができるものとされ、ある程度相互に書き換えも出来る。しかし、「～したことがある」の場合、過去のある時点でそのようなことが経験されたことを言うだけで、それが現在とのかかわりでどう意義づけられるかについての含意はない。一方、「～している」は、“現在に意味をもつ過去の出来事を言う”などといわれ現時点とのかかわりが意識されがちである。とりわけ「彼は滋賀大学を卒業している」のように経歴として現在に意義をもっていたり、「去年は経済学部が公開講座を担当している」のように現時点と対比される場合は、それが際立って来て、「～したことがある」との書き換えは、はっきり出来なくなる(つまり、「彼は滋賀大学を卒業したことがある」「去年は経済学部が公開講座を担当したことがある」ということはできない)。

3. 「～することはない」の形で、「～する必要はない」の意味になる言い方がある。ただし、この場合は、「ことがない」の形はとれない。

3. 「～する／したこともあって」と中止法で使われると、“～する／したことも一つの理由で”というような理由表現になる。この場合も、「ことがあって」の形はとれない。

関連項目

B 1 1 「ことだ」、B 1 2 「ことがある」、B 1 5 「ことにする」

参考文献

高橋太郎(1994)

◇ B 1 3 ～ことができる

接続

動作的な意味の動詞のスル形（シテイル形を含む）を受ける。「研究する」「連絡する」など“漢語＋する”型の動詞の場合は、語感の漢語の部分を受けて、「研究ができる」「連絡ができる」などの言い方も可能である。

意味・用法

「Aスルことができる」の形で、Aということを実現することが可能であるという意味を表す。

用例

(1) 高さを調節できるシャワー用のいすを使えば、入浴代わりに自宅で体を洗う**ことができる**。(朝日新聞 '94. 1. 9)

(2) 地下のマグマの温度は直接測定することはできないが、実験室内で岩石をとかすことによって、推定する**ことができる**。(湊正雄ほか「地学 I」)

(3) 花が咲かない枝は、そのままさし穂に使う**ことができます**。(「覚えたい山野草のテクニック」)

(4) 長男が生れ、やっと自分の家を建てる**ことができた**。(半村良「秋子の写真」)

(5) ものの二時間余で十数種のキノコを見つける**ことができた**。(朝日新聞 '94. 1. 27)

(6) 月は、表面では重力が小さいので、大気や水蒸気をとどめておく**ことができない**。(湊正雄ほか「地学 I」)

(7) 土星より遠い、天王星・海王星・めい王星は肉眼では見る**ことができない**。(坪井忠二ほか「新理科 2 分野上」)

(8) 私はこのニュースをどうしても信じる**ことができなかった**。(村上陽一郎「科学者とは何か」)

(9) 長い年月の間に積もり積もった不満が、ここにきて一気に噴き出してきたとみる**ことができよう**。(朝日新聞 '94. 10. 24)

(10) また、CDの伴奏部分を普通の音量のまま、音声部分だけを小さく再生する**ことができ**、カラオケも楽しめる。(朝日新聞 '94. 8. 30)

(11) また、原子力の発見と開発によって、人間は巨大なエネルギーをわが手におさめる**ことができた**が、それとともに、地球上の全人類を破滅させることのできる力をもわが手ににぎった。(中村元ほか「倫理・社会」)

(12) 鎌倉幕府は、2度にわたるモンゴル襲来の危機をきりぬける**ことができた**が、幕府や御家人の負担も大きかった。(鶴飼信成ほか「新しい社会 [公民]」)

(13) ハブ空港になる**ことができれば**、航空便が集中し、利便性が増す。(朝日新聞 '94.8.30)

(14) サラエボで取材した同紙記者に託された手紙を読んだサマランチ会長は深く感動し、「近くサラエボを訪れる**ことができた**ら、会って勇気づけたい」と話している。(朝日新聞 '94.2.15)

(15) 固体では、分子は自由に動きまわる**ことができず**、れんがを積み重ねたように規則正しく並んでいる。(柴田雄次ほか「化学 I」)

(16) 結果、コメ備蓄には多大なエネルギーコストがかかり、財政的にもコメ備蓄量を増やす**事が出来**ずに、今回の緊急輸入の事態を招くことになったと思われる。(朝日新聞 '94.3.1)

(17) もっと多くの観測がおこなわれ、得られたデータを慎重に解析し、それらが一致したのちでなければ、天文学者は胸をなでおろす**ことができ**そうもない。(野本陽代「宇宙の果てにせまる」)

(18) シャプレイが天の川の地図を描く**ことができた**のは、この望遠鏡のおかげである。(野本陽代「宇宙の果てにせまる」)

(19) このように、陸上動物のからだの大きさは、その体重を支える**ことができる**筋肉や骨の力学的な強さによって限界点があり、無限大の大きさをもつことができない。(亀井節夫「日本に象がいたころ」)

(20) 夫婦のそれぞれが結婚前の自分の姓を名乗る**ことができる**仕組みを、選択的夫婦別姓制度という。(朝日新聞 '94.7.14)

(21) 学歴以外に価値あるものを発見する**ことができた**私は、三年前に比べてひと回り大きくなったように思う。(朝日新聞 '94.2.6)

(22) このようなときに、ナポレオンが現れ、外国の軍隊を次次に破り、商工業者や土地をもつ**ことができた**農民などの支持をうけて、1804年には皇帝の位についた。(鶴飼信成ほか「新しい社会 [公民]」)

文法

連用中止の形も、疑問や過去・推量の形もとれ、連体修飾でも使われる。否定の形は、「～ことができない」になる。

ノート

1. 現代日本語の可能表現の代表的な形式である。現代語の可能表現としては、「読める」「話せる」「書ける」などの可能動詞の表現があるが、「～ことができる」との違いは、可能動詞が内的能力の点で可能であることをいうのに対して、「～ことができる」は、外的条件の点で可能であることをいうとする見方がある。つまり「最近、年のせいか、あまり酒が飲めなくなった」という方が、「最近、年のせいか、あまり酒を飲むことができなくなった」より自然だなどということからもそれがうかがわれるというのである。確かにそのような傾向がなくはないが、むしろ、現代語では、そうした区別はあまり感じられず、「～ことができる」が広く一般に用いられるようになって来ているようである。

2. 可能表現のシタ形については、解釈の可能性が二つで出くる。「～ことができた」

に関しても、例えば「読むことができた」の場合、「読むことを成し遂げた」という解釈と「読む能力を持っていた」という解釈がありうる。いわば、前者は完了的な読み、後者は過去時制としての読みと言えるだろう。

関連項目

B 3 9 「～得る」

参考文献

久野暲 (1974)

◇ B 1 4 ～ことになる

接続

名詞+「である／であった」に付き、また、用言のスル形・シタ形（シテイル形・シテイタ形を含む）に付くが、詳しくは文法の項参照。

意味・用法

「Aことになる」の形で、(1) Aという事柄が実現する成り行きになる、(2) Aという事実認識や了解・解釈が成り立つ、といった意味を表わす。

用例

- (1) このままでは、本学の教育学部は改革の嵐の中で消滅する**ことになる**。(作例)
- (2) 王子様はシンデレラと結婚する**ことになりました**。(作例)
- (3) 相談の結果、我々は外で待っている**ことになり**、いままでここでこうしていたのだ。(作例)
- (4) どうせこの店を継ぐ**ことになる**お前だ、二十両ぐらいなんとかならねえはずがないだろう。(作例)
- (5) 生体リズムは外界と接触しなければ「二十五時間サイクル」の時計に従おうとするので、毎日一時間ずつ後ろにずれていく**ことになる**。(朝日新聞 '94. 1. 15)
- (6) これにより総資産で全米十位の銀行が誕生する**ことになる**。(朝日新聞 '94. 1. 29)
- (7) 人口が増加しないとすれば、日本国民1人当たりの社会資本や住宅のストックは急速に拡大する**ことになり**ます。(経済企画庁編「平成10年版国民生活白書」)
- (8) そこで、町外れに駐車場をつくってバスを中心部から締め出し、観光客には電車か船を利用してもらう**ことになった**。(朝日新聞 '94. 5. 3)
- (9) やっと熱がとれ、痛みもおさまって、十三日目に私は退院する**ことになった**。(森村桂「天国にいちばん近い島」)
- (10) 奥州ではこののち、後三年の役で義家とむすんだ藤原清衡が平泉を中心に全盛をきわめ、基衡・秀衡と三代の栄華をむかえる**ことになった**。(宝月圭吾ほか「詳説日本史(再訂版)」)
- (11) 大統領はこの日、経済社会情勢に関する演説をする**ことになっていた**。(朝日新聞 '94. 7. 17)
- (12) 「それがね、ニューカレドニアってね、遠い島へ行く**ことになった**んだけど」(森村桂「天国にいちばん近い島」)
- (13) テレビのドキュメンタリー番組で、スペインの生んだ詩人、ヒメネスについて取

材することになって、わたしは此の隣町、モゲールに、三日前から来ていた。(岸田今日子「セニスイエンタの家」)

(14) 一国の黒字があまり大きくなると、他の国々の赤字がそれだけふえる**ことになり**、国際的な経済の均衡がみだされることになる。(鶴飼信成ほか「新しい社会 [歴史]」)

(15) 自分の寿命が長いと考えれば、働いて勤労収入のある時期に、それだけ多く貯めるか、あるいはそれだけ長く働く**ことになる**だろう。(経済企画庁編「平成10年版国民生活白書」)

(16) 九七年から、消費税率が5%に引き上げられる**ことになった**が、これには異論が相次いだ。(朝日新聞 '94.10.29)

(17) またカルテが患者の目に必ず触れる**ことになれば**、医師のカルテ記載がますます簡略化する心配もある。(朝日新聞 '94.2.21)

(18) 今の中年世代は、本格的な高齢社会で老後を迎える**ことになる**初めての世代である。(経済企画庁編「平成10年版国民生活白書」)

(19) 登山は観光旅行と違い、ちょっとした判断の差で死ぬ**ことになる**危険なスポーツであることを忘れるような、登山を観光旅行と混同させる業者がいます。(朝日新聞 '94.8.22)

(20) 体調を崩し、残念ながらホテルで結果を待つ**ことになった**家族に、最高の贈り物ができた。(朝日新聞 '94.2.18)

(21) 牧師館のおじさんとクリスマスを過ごす**ことになった**キャロラインが、怖い家政婦の目をくぐり、街の子ゴビーと内証でネコのお産を助ける。(朝日新聞 '94.12.18)

(22) そこにいたのが、磯村さんじゃないとすると、犯人は高山だった**ことになる**。(作例)

(23) ネアンデルタール人は、ヨーロッパ・中東にしかいなかったから、彼らは原田尾人の祖先ではありえない**ことになる**。(河合信和「ネアンデルタール人と現代人」)

(24) いい加減にしておこう。これ以上食い下がっていると、我々の方が悪い**ことになる**だろうしな。(作例)

(25) 父親が読み終わるまで、家族は新聞を開いてはいけない**ことになっている**が、新聞に入っているチラシだけは母親が関に抜いて見てもいい**ことになっている**のだった。(ねじめ正一「高円寺純情商店街」)

(26) 哺乳類としてのヒト、という観点は、結局、比較解剖学的なヒトのとり扱い、という**ことになろう**。(養老孟司「ヒトの見方」)

(27) つまり、いくら夢にまで見た豪華なウエディングドレスを着たところで、傍らに最愛の男性がいなければ、アナタはそのドレスを本当に味わった**ことにならない**のです。(柴門ふみ「恋愛論2 応用篇」)

(28) エントロピーの法則、つまり熱力学の第二法則 [略] によって不可逆的な無秩序の増大が物理的に運命づけられているため、閉鎖系のなかで永久運動はありえないという**ことになる**わけだ。(中村雄二郎「術語集」)

文法

接続は、(1) の場合、動作的な意味の動詞のスル形・シテイル形ともに受ける。(2) の場合、動詞については、スル形・シテイル形・シタ形・シテイタ形ともに受ける。形容

詞については、スル形・シタ形を受ける。形容動詞については、「～デアル／ナ／デアッタ」の形を受ける。体言について、「～デアル／デアッタ」の形を受ける。連用中止の形も、疑問や過去・推量の形もとれ、連体修飾でも使われる。

ノート

1. (2) の意味の場合、例えば「犯人は高山だったということになる」のように「という」を介する形がとれる（更に、「N+ダ（／ダッタ）」を受ける形については「ダ」が落ちて、「…Nということになる」という形もとれる）。逆に言えば、「という」を介する形をとることで、(2) の意味であることがはっきりすると言える。

2. もっとも、(2) の意味の場合でも、未完了の「スル形」を受ける場合、未完了のことについてそうであるとする事実認識や解釈が成り立つとなると、実際にそうなるという推論も生じやすく、(1) の意味と区別しにくくなりがちである。

3. 「～ことになっている」とシテイル形がとれるが、基本的に「～ことになっ」た結果としての物事の進み方や事実認識がそのままになっているという意味になる。また、それが反復的なものと解せられるときは、いつもそうなりと決まっている・そういう事実認識が成り立つといった意味になる。しかし、後者の、いつもそういう事実認識が成り立つという(2) の意味の「～ことになっている」は、結局一般論として「～ことになる」という言い方をした場合と、あまり違わない意味になってくる。例えば、「推理小説では、大抵一番怪しくない人物が真犯人であるということになっている」は、「推理小説では、大抵一番怪しくない人物が真犯人であるということになる」としても、ほぼ同じ意味と解せられるだろう。

4. また、「～ことになる・なっている」に対しては、「～ことに（は）ならない・なっていない」という否定の形が考えられる。(1) (2) いずれの意味の否定にもなる。

関連項目

B 1 1 「～ことだ」、B 1 5 「～ことにする」

◇ B 1 5 ～ことにする

接続

名詞+「である／であった」に付き、また、用言のスル形・シタ形（シテイル形・シテイタ形を含む）に付くが、詳しくは文法の項参照。

意味・用法

「Aことにする」で、(1) あることを行うことに決める、(2) 事実上Aということだとの立場をとる・想定にする、という意味を表わす。

用例

- (1) 電子レンジを買い替えることにした。(作例)
- (2) しばらくは、外国へでも行って、ゆっくり過ごすことにしろ。(作例)
- (3) 朝は、黒砂糖を食べることにしている。(作例)
- (4) ダイエットのために食べないことにしたカツカレーが、ふと無性に食べなくなった。(作例)
- (5) 力のはたらき方を表すのに矢印を用い、矢の長さで力の大きさを、矢の向きで力の

向きを示す**ことにする**。(坪井忠二ほか「新理科1分野上」)

(6) そこで、日本の子供たちがどのくらい家事を手伝っているかを**みてみることにする**。(経済企画庁編「平成10年版国民生活白書」)

(7) 私は、電話は極力使わない**ことにしている**。(朝日新聞 '94.1.18)

(8) 私は疲れたので、もう寝てしまう**ことにした**。(森村桂「天国にいちばん近い島」)

(9) 私はいろいろ悩んだのですが、思いきって東京に帰る**ことにしました**。(阿部謹也「自分のなかに歴史をよむ」)

(10) 文部省は眼鏡をかけている子の裸眼視力検査を省略する**ことにした**という。(朝日新聞 '94.4.26)

(11) 「直観的判断」については、いろいろむずかしい問題がかかわってきますので、あとの章でとりあげる**ことにしたい**と思います。(野崎昭弘「人工知能はどこまで進むか」)

(12) 消費者団体の中には「結果的には使ってよいことになる農薬を決めるのではなく、原則的に使わない**ことにしてほしい**」との主張が根強いが、同省は「今後も指定農薬を増やすことで検査の網の目を細かくしたい」と説明する。(朝日新聞 '94.2.17)

(13) 今はとりあえず新横綱誕生を祝福し、来場所の雄姿を待つ**ことにしよう**。(朝日新聞 '94.11.24)

(14) 丈一「ジョーか！ それいいな。おれのこと、ジョーって呼ぶ**ことにしな**。明日のジョーみたいでいいじゃんか」(君塚良一「グッドニュース」)

(15) 警察庁は十日、バイク(原動機付き自転車)やオートバイなど二輪車の運転免許制度を全面的に見直す**ことにし**、その検討に入った。(朝日新聞 '94.6.11)

(16) 正解は少しあとに述べる**ことにして**、さきに比喻についてもうちよつと議論をしておきましょう。(野崎昭弘「人工知能はどこまで進むか」)

(17) そのドイツ語夏季講習を受ける**ことにしたが**、通うには遠すぎる。(朝日新聞 '94.10.27)

(18) 新食糧法は制度上も自主流通米を中心にすえる**ことにした**から、組織もスリムにしようというわけだ。(朝日新聞 '94.12.18)

(19) 例えば、最初の二ケタを都道府県番号、次の二ケタを市区町村、その次の三ケタを丁目まで細分化する**ことにすれば**実にわかりやすく、覚えやすい。(朝日新聞 '94.12.24)

(20) 入荷したコメを、申し込んだ人数で割る**ことにした**結果、三月は一世帯四キロずつになった。(朝日新聞 '94.3.10)

(21) 高木氏は在任七年で辞める**ことにした**理由として、「前社長も七年だった」ことを挙げている。(朝日新聞 '94.5.19)

(22) わたしは、何も見なかった**ことにしよう**。後はよろしく頼む。(作例)

(23) セットでは、玄関は、普通より大きい**ことにしますか**。(作例)

(24) シスターも退屈らしいから、君、お父さんが牧師であった**ことにして**、彼女の世間話に付き合っやってくれ。(作例)

(25) わたしも、Eメールが使える**ことにして**はいるが、ほんとは、機械オンチなんだ。

(26) 大五郎「とにかく俺は聞かなかった**事にする**からな。この問題はお前らだけで解決しろ」(坂東賢治「新・俺たちの旅」)

(27) どうしても休まなくてはならないときは、叔父や叔母が死んだことにした。(朝日新聞 '94. 11. 13)

(28) 良美「この事件は、誤解だったことにしない？」(寺田敏雄「24時間だけの嘘」)

(29) [前略] アサヒビールは、今年一月から地方メディアへの広告出稿の内容、タイミシングは七十九の支店、支社で決めることにさせた。(朝日新聞 '94. 11. 8)

文法

接続は、(1) の場合、動作的な動詞のスル形を受ける。(2) の場合、動詞については、スル形・テイル形・シタ形ともに受ける。形容詞については、スル形・シタ形を受ける。形容動詞については、「～デアル／ナ／デアッタ」の形を受ける。体言について、「～デアル／デアッタ」の形を受ける。いずれの場合も、連用中止の形も、疑問、意志、希望、命令や過去・推量の形もとれ、連体修飾でも使われる。

ノート

1. (1) の意味の場合のみ、「～ということにする」と「という」を介する形がとれる。逆に言えば、「という」を介する形をとることで、(2) の意味であるということがはっきりすると言える。「そこへ行くことにした」という場合は、そう意志決定したとも、そういう建前であるようにしたともとれるが、「そこへ行くということにした」と、後者の読みに決まってくる。

2. 「～ことにしている」とテイル形がとれるが、基本的に「～ことにし」た結果の意志決定や立場の取り方が継続している意味になる。また、それが反復的なものと解せられるときは、いつもそうすると決めている・そういう立場を取っているとといった意味になり、いつもそうすると決めているということから、更に、それをいつも実行していると読まれることにもなる。それ故、「～ことにしている」は、しばしば習慣を表わすなどとされるのである。

3. また、「～ことにする・している」に対しては、「～ことに(は)しない・していない」という否定の形が考えられるが、否定の言い方ができるのは、やはり(2) の意味の場合のみである。「東京に行くことにはしていない」といえば、建前としてそのようなことを言ったりはしていないなどといった意味にしかならないだろう。

関連項目

B 1 1 「～ことだ」、B 1 4 「～ことになる」

副助詞複合系

◇ B 1 6 ～までだ・～までのことだ

接続

動詞のスル形・シタ形(シテイル形・シテイタ形を含む)に付く連体形に付くが、詳しくは文法の項参照。

意味・用法

(1) 「Aスルまでだ／Aスルまでのことだ」の形で、問題の物事に対してはAするということが対処として用意されているということを指摘して述べる。しばしば、Aするこ

とで問題の物事に対しては十分だ、問題の物事は片づくという気持ちを伴うことが多い。

(2) 「Aシタまでだ／Aシタまでのことだ」の形で、あくまでA以上の意図・意味のあるものではないという意味を表わす。

用例

(1) もしも、言うことを聞かなかつたら、腕力に物をいわす**までだ**。(作例)

(2) 来ないというのなら、こちらが乗り込む**までのことだ**。(作例)

(3) では仕方がない。先生がお会いくださるというまで、ここで待っている**までのことだ**。(作例)

(4) あくまで仮定の話を行った**までのこと**で、他意はない。(作例)

(5) なに、ちょっとからかってみた**までよ**。(作例)

(6) プロ歌手は、なによりも自らの声で何かを表現しようとしているはずである。聞き手としては、歌詞の字幕など必要はない。耳をとぎすませて歌手の声を受けとめる**までだ**。

(朝日新聞 '94.3.6)

文法

(1) の意味では、意志的な行為を表わす動詞のスル形・テイル形を受ける。(2) の意味では、一般に意志的な行為を表わす動詞のシタ形・テイタ形を受ける。言い切りで用いられることがふつうで、「～までで／までのことだ」のような連用中止形もとれなくはない(もつとも、(1) の意味では稀だろう)。過去・推量の形もとれるが、否定にはならない。また、連体修飾では用いられない。

ノート

1. (1) の意味の用法については、類義的な言い方として「～だけだ／だ けのことだ」が考えられる。例えば、例文(1)は「もしも、言うことを聞かなかつたら、腕力にものをいわすだけだ」としても、ほぼ同義である。しかし、「～だけだ／だけのことだ」は、「～スル・～ニナル以外のことはない」といった広い意味を基本とするもので、そこから「そうすることで十分だ」との意味が派生してくるので「～までだ／までのことだ」に近づくが、それにとどまらず、より広い用法で用いられる。例えば、「何があっても彼を信じるだけだ／だけのことだ」「あとは、返事を待つだけだ」といった用法では、「～だけだ／だけのことだ」は「～までだ／までのことだ」には書き直せない。

2. 「～までだ／までのことだ」という述部に対しては、「～は」という主語は立てられない。主語が立つのは、例文(2)のような総記(“問題となるものうち～の方が”という含みが出る用法)の「～が」の場合に限られる。

3. (2) の意味の用法については、類義的な言い方として「～に過ぎない」が考えられるが、この言い方は、基本的に「物事はそれ以上のものではない」という判断を述べるもので、意志的な動詞にとどまらず無意志的な動詞も受けることができ、例えば、「ちょっと余震が来たに過ぎない」などということが可能である。その点で、意志的な行為の行為意図がこれこれの程度だと説明する「～までだ／までのことだ」とははっきり異なっている(「ちょっと余震が来たまでのことだ」は不自然である)。

関連項目

B 1 7 「～までもない・～までのこともない」、B 2 5 「～に過ぎない」

◇B17 ～までもない・～までのこともない

接続

動詞のスル形に付く（シテイル形も不可ではなからうが、スル形にするのが自然である）。

意味・用法

必要を満たすために、そのレベルまでの行為を行わないでも（あるいは、出来事が起こらないでも）十分であるという意味を表わす。

用例

- (1) そんなことは、いちいち報告する**までもない**よ。(作例)
- (2) わざわざ手紙を書く**までもない**。電話で十分さ。(作例)
- (3) 台風が来る**までのこともない**さ。ちょっとひどい夕立が降れば、もうこの辺りは水浸しだよ。(作例)
- (4) それぐらい調べる**までもなく**お見通しだ。(作例)
- (5) マスメディアが患者のプライバシーを大切にすべきことは、いう**までもない**。(朝日新聞 '94.2.19)
- (6) 無論、日本人であれば辞書にあたる**までもない**。(朝日新聞 '94.7.31)
- (7) 客は待っているはずですから、こちらから呼びに行く**までもない**とっていたのですが、玄関からは誰も出てくる気配がありません。(三浦哲郎「お菊」)
- (8) 足の跡も残っていたので、ビデオで確認する**までもなかった**と説明した。(朝日新聞 '94.1.13)
- (9) 病院へ行く**までもなく**、あめなど甘い菓子類を与えると症状が治まる場合もよくあります。(朝日新聞 '94.8.7)
- (10) サッチャーやレーガンの例を見る**までもなく**、長く政権を維持することで国際的な発言力も強まる。(朝日新聞 '94.4.9)
- (11) 郵政省に指摘される**までもなく**、これは自ら反省すべきことがらだ。(朝日新聞 '94.4.13)
- (12) ありきたりの物語が、凡庸な語り口で描かれた映画なら、ここで紹介する**までもない**ことである。(朝日新聞 '94.12.16)
- (13) しかし、こうした国々では、患者の知る権利は議論する**までもない**前提だ。(朝日新聞 '94.6.17)
- (14) 核兵器の脅威はいまさら申す**までもない**。(朝日新聞 '94.6.15)
- (15) なぜなら、途上諸国の国づくり・人づくりを支援する国が多ければ多いほど良いことは論ずる**までもない**からだ。(朝日新聞 '94.9.2)
- (16) 住宅需要は、いう**までもなく**、人口の増減の影響を飾る。(経済企画庁編「平成10年版国民生活白書」)
- (17) 日本人からみれば、そんなことは他国からいわれる**までもなく**、自明のことである。(朝日新聞 '94.7.7)
- (18) お祭り好きを喜ばせるように出来ているのはいう**までもなからう**。(朝日新聞 '94.9.9)

(19) 「作家としての漱石」論が中核をなすことはいうまでもないだろう。(朝日新聞 '94.1.9)

(20) もちろん、言うまでもないが、そのような成文化された倫理規定などあるわけではない。(村上陽一郎「科学者とは何か」)

(21) 事故の悲惨さはいうまでもないが、悲劇の教訓に学んで、空の安全技術が築かれてきたこともまたひとつの現実だ。(朝日新聞 '94.5.2)

文法

「～まで(のこと)もなかった」と過去の形でも用いられ、連体修飾の形や「…なければ」といった条件の形はとれる。連用中止の形で用いると、並列・列記といった関係でなく、条件規定的な係り方になる。

ノート

1. 類義的な表現として、「～する必要がない」が考えられるが、こちらが単にそうすることは無用のことだとするのに対し、「～するまでもない」の類は、当該の必要を満たすためにそこまでしないでよいという含みの言い方である。従って、“当該の必要を満たす”ということが特に意識されない場合は、用いにくい。例えば「あんな奴に会う必要はない」とはいえても、特別の文脈なしに「あんな奴に会うまで(のこと)もない」というのは、不自然である。

2. 何らかの行為がなされる・出来事が起こる必要を云々する言い方である。従って、動詞であっても状態を表すものとは結びつかない。

3. 「言うまでもない」の場合、結びつきがいつそう強まり「自明のことだ」「もちろんだ」といった意味を表す一語の単語に近づいていると感ぜられる。

4. 例(3)のように、出来事が起こることの必要を云々する言い方も確かにできるが、こうした言い方は、かなり制約のあるものらしい。たとえば、「宝くじが当たるまでもない。今の貯金で十分やれる」というような言い方は、不自然と言ってよかろう(恐らく、具体的な何かを引き起こすという因果関係がはっきりしていなければ、この種の言い方は不自然になるものと見られる)。

◇B18 ～ばかりだ

接続

動詞のスル形・シタ形(シテイル形・シテイタ形を含む)に付くが、詳しくは文法の項参照。

意味・用法

(1) ある動作がなされた・ある出来事が引き起こされてから、時間がほとんど経っていない時点であるということを示す。(2) ある動作しか行わない・ある出来事しか起こらないということを示す。

用例

(1) たった今、東京から帰った**ばかりだ**。(作例)

(2) 晩飯を食った**ばかりで**、何をするのも億劫だった。(作例)

(3) さっき研究室で会った**ばかり**の阿部君が、どうしてここにいるの。(作例)

(4) 国内では、凶作によるコメ不足騒ぎが一段落した**ばかりだ**。(朝日新聞 '94. 4. 15)

(5) 親会社の勧めもあって昨年、新工場を近くに建てた**ばかりだ**。(朝日新聞 '94. 10. 19)

(6) 「またこれか……と思った。昨夜ボクは、まったく同じ事を両親から言われた**ばかりだった**」(吉田紀子「卒業旅行」)

(7) 宇宙の歴史をたどり、ルーツを探す私たちの旅はまだはじまった**ばかりである**。(野本陽代「宇宙の果てにせまる」)

(8) どんなにキレイなドレスを着ていても昨日飼っていた子犬が死んだ**ばかりだった**ら、やはり手放して笑みを浮かべるわけにはいきません。(柴門ふみ「恋愛論2 応用篇」)

(9) 各社の夏のキャンペーンは終わった**ばかりだ**が、文庫売り場の陣取り合戦はこれからなお激しさを増しそうだ。(朝日新聞 '94. 9. 4)

(10) このとき、かれはミュンヘン大学を卒業した**ばかりで**、二七歳の若さであった。(亀井節夫「日本に象がいたころ」)

(11) その一つは、ちょうど五年前に私に市民権を与えてくれた**ばかりだった**国、すなわちアメリカ合衆国は一体何ができるか、という点についての冷めた感覚であり、もう一つは科学がどの方向に進みつつあるかを知った上での嘔吐を催すほどの恐れであった。(村上陽一郎「科学者とは何か」)

(12) たい積した**ばかりの**地層は、粒子間に水が含まれて軟弱であるが、上にたい積した地層の重さによって、しだいに圧縮される。(湊正雄ほか「地学I」)

(13) 菜穂子は、やきもきする**ばかりで**、どうしていいか分からなかった。(作例)

(14) こんなことをしていても、時間が経つ**ばかりだ**。(作例)

(15) 善行は、文句を言っている**ばかりで**、協力はしてくれないさ。(作例)

(16) 平気で失敗を繰り返す**ばかりの**人に、何が言えますか。(作例)

(17) あとは、経理に回す**ばかりだ**。(作例)

(18) 問題が山積しているこの時期に、分裂騒ぎなど起こせば、期待どころかひんしゆくを買う**ばかりだ**。(朝日新聞 '94. 11. 16)

(19) エリートコースだそうだが、並のサラリーマンならストレスがたまる**ばかりだ**ろう。(朝日新聞 '94. 7. 29)

(20) 諸藩の財政も、早くから苦しくなり、都市の大商人から金をかりて、一時をしのいでいたが、借金はふえる**ばかりで**あった。(鶴飼信成ほか「新しい社会 [公民]」)

(21) 三人の息子たちを失った祖母は墓に出かけては泣く**ばかりでした**。(朝日新聞 '94. 9. 26)

(22) それどころか、痒いエリアは広がってゆく**ばかりで**、よくよく見ると皮フの下に小さな水疱が多数結集している。(さくらももこ「もものかんづめ」)

(23) が、首相との溝が深まる**ばかりだった**武村氏にとって、いつかこの日が来ることは織り込み済みだった気配もある。(朝日新聞 '94. 4. 9)

(24) 古都のたたずまいを守ろうとする側は、開発側を破壊者であるといわん**ばかりだ**。(朝日新聞 '94. 3. 16)

(25) 今や林家の台所は、ヤシの実が、棚といわず床といわず、あふれ出ん**ばかりである**。(森村桂「天国にいちばん近い島」)

文法

(1) の用法では、基本的に動詞のシタ形を受ける。連用中止の形や連体修飾の形はとれるが、この形式自体を否定にすることはできない(「～したばかりでない」とすると意味が違ってくる)。(2) の用法では、基本的に用言の連体形(テイル形を含む)を受ける。やはり、連用中止の形や連体修飾の形はとれるが、この形式自体を否定にすることはできない(「～する／しているばかりでない」とすると意味が違ってくる)。

ノート

1. 「～するばかりだ」の形では、“～するのが残っている・～しさえすればいい”といった意味になることもあるが、基本的にこうした場合、“あとは”のような、「～するばかりだ」に対する主語と見なされる語句が出てくるから、まだ文末形式的な複合辞になりきっていないと考えるべきだろう。

2. (1) の用法では、受けることができるのは、動作的な意味の動詞で、状态的な意味の動詞は受けられない。例えば、「彼はそこに来たばかりだった」といっても、「彼はそこにいたばかりだった」とはいえない。

3. また、(1) の用法の「～したばかりだ」の類義表現としては、「～したところだ」が考えられる。両者は極めて近い言い方であるが、「～したばかりだ」の方が「～したばかりの」「～したばかりだった」など連体修飾では、ずっと自然に用いられるようである。

4. (1) の用法では、動作に入ってから間がないのか、動作全体が終了してから間がないのかという意味の違いを考える必要がある。例えば「さっき寝たばかりだ」は、どちらとも解せられ、「さっき寝入ったばかりだ」とも「さっき寝て、起きたばかりだ」ともとれるが、「さっき雨が降ったばかりだ」は、「さっき雨が降って、止んだばかりだ」というような意味で、「さっき雨が降り出したばかりだ」のような意味にはならない。こうした相違は、動詞の意味のタイプによって決まってくるとされる。

5. (2) の用法では、「～だけだ」とほぼ同義的に書き換えができる。一見、この用法の「～ばかりだ」と「～だけだ」とは、互換的のように見えるが、厳密には、「～だけだ」は「することは～しかない」という言い方で、「～ばかりだ」は「いくらでも～をする」というような意味と思われる。従って、結果として違わないことが多いのでほぼ同義的な言い換えになるのがふつうだが、上記のずれが表立つような場合には、書き換え不可になる。例えば「そんなことをしても、せいぜいケガするだけだ」は、「そんなことをしても、せいぜいケガするばかりだ」とは言えない。何度もケガをするわけではないからである。

6. なお、例文(23)(24)のように古典語の仮定・婉曲の助動詞「ン」を伴う形に由来するなどとされる「～センばかりだ」という言い方で、「ほとんど～したも同様の有り様だ」という意味を表す言い方もある。この場合は、「～センバカリノ」「～センバカリニ」と連体修飾・連用修飾の形もとれ、「～センバカリデ」と連用中止もとれる。これは「ンバカリだ」でひとまとまりの複合助辞とみるのがよいと思われ、この項の「バカリダ」とは厳密には別のものとして扱うべきだろうが、ここで参考までに挙げておく。

関連項目

B 4 「～ところだ」

参考文献

森山卓郎 (1984)

～二系

◇B19 ～に決まっている

接続

動詞・形容詞のスル形・シタ形（シテイル形・シテイタ形を含む）に付く。また、形容動詞・名詞の「～デアル／デアッタ」の形に付くか、語幹もしくは名詞に直接付く。

意味・用法

「Aにきまっている」で、何らかの事柄・考えを念頭に置いて、そうである以上、A以外の可能性はないとの主張を述べる。

用例

(1) こういう連中は、運転中にだって居眠りする**に決まっている**のだ。(土屋賢一「哲学者かく笑えり」)

(2) 行かないのかって、何いってんだよ。行く**にきまってる**だろ。(作例)

(3) すぐに歳出が増大し、五年後には再び「福祉充実のために消費税を一〇%にしたい」などと言い出す**に決まっている**のである。(朝日新聞 '94.4.29)

(4) うるせエのがいなくなっただって、大喜びする**にきまってる**んだから(山田太一「それからの冬」)

(5) こんなことをいうと俳人に叱(しか)られる**にきまっている**が、それではプロでなくては良い句が出来ないかということ、全くそうではない。(朝日新聞 '94.7.17)

(6) だれだって言いたいことを率直に言い、玉虫色でない決着をしたい**に決まっている**。(朝日新聞 '94.2.19)

(7) 空気の悪い都会のマンモス校よりも、過疎の村の小学校の方がずっと**いいに決まっています**。(朝日新聞 '94.1.17)

(8) 暗譜で怪しげに弾くよりも楽譜を見てちゃんと弾いた方がよほど**良いに決まっている**し、そもそもただ覚え込むことが本当に音楽的能力であるのかも疑問である。(朝日新聞 '94.10.16)

(9) A ところで桑田は第5戦で167球も投げたけど大丈夫かな。C 二十七日の試合で「交代するか」と言われて、「完投します」と答えている。第7戦も投げますという桑田の意思表示だよ。本当なら、完投させずに余力を残す形を作った方が**いいに決まっている**けど、監督もそれを認めた。(朝日新聞 '94.10.29)

(10) あいつがやった**に決まってる**。(作例)

(11) 初めからうそだ**に決まっている**、と考える人もいるだろう(朝日新聞 '94.3.15)

(12) 加納「誰にも気づかれないで外に出るなんて無理**に決まってる**」(寺田敏雄「24時間だけの嘘」)

(13) 「道端で声をかけられたなんて、ウソ**に決まっている**。(朝日新聞 '94.10.29)

(14) 丈一「無理**に決まってる**でしょ。今の世の中、おれみたいのに金貸してくれる人

なんかいませんよ。知ってるでしょ、今は不況で」(君塚良一「グッドニュース」)

文法

「きまっている」は、言い切りで使われるのが一般で、「～にきまっています」というような中止形や連体修飾では、使えなくはないもののかなりぎこちない。「～に決まっていた」と過去の形はとれる。(なお、B 2 4 「にちがいない」のノートもあわせて参照)

ノート

それ以外の可能性はないという主張の言い方なので、言い切りで使われるのが普通である。物事を理を推して考えていくというより、何らかの考えから、それ以外にないと主張する言い方なので、しばしば主観的で決めつけるような言い方にもなる。実際、「別に証拠はないが、あいつがやったに決まってるよ」という強引な言い方はできても「別に証拠はないが、あいつがやったにちがいないよ」というのは幾分不自然である(でなければ、「証拠はない」といいながら、何らかの根拠となることがあると感じられる)。「～にちがいない」の方は、物事を理を推して考えてそうである可能性が高いという言い方だからである。

関連項目

B 2 3 「～にちがいない」

◇ B 2 0 ～に限る

接続

名詞に付く。また、動詞・形容詞のスル形(シテイル形を含む)に付く。

意味・用法

「AはBに限る」で、AについてはBが一番だという意味をあらわす。

用例

- (1) 犬はビーグル犬**に限る**。(作例)
- (2) 冬は鍋**に限る**。(作例)
- (3) 「良いじゃん別に。そういう時は卓球**に限る**よ。どお？ 俺たちと清々しい汗でもかいてみない？」(坂東賢治「新・俺たちの旅」)
- (4) 織り台に向かうのは、神経を集中できる夜**に限る**。(朝日新聞 '94. 5. 21)
- (5) そういうわけで、ひとり暮らしの30歳すぎた男は手料理でオトす**に限り**ますよ。(永尾カルビ「体育会系恋愛論」)
- (6) 冬は南国へ行く**に限る**。(作例)
- (7) こうなると、国民は一日も早く細川さんに見切りをつける**に限る**。(朝日新聞 '94. 3. 3)
- (8) もちろん女は美しい**に限る**。(山口洋子「愛されかた知っていますか」)
- (9) 日本酒は冷や**に限る**。(朝日新聞 '94. 11. 29)
- (10) 結局あぶないものには近づかない**に限る**、ということになってしまいうんですよ。(森村桂「天国にいちばん近い島」)
- (11) 目の不自由な方にとって発車ベルの音は必要だとしても、毎日聞かされるものは、やはり単純なもの**に限る**。(朝日新聞 '94. 2. 13)

文法

「～に限る」といいきりで用い、連用中止や過去の形（「～に限った」）は用いられない。連体修飾の形は、とれなくはないかもしれないが、稀であろう。否定の形も用いられず、「～に限らない」とすると、“～以外にもある”という意味をあらわし、ここで扱う形式とは別の表現と見るべきものになる（ちなみに、この場合は「～に決して限らない」などと副詞を挿入して述語を修飾できるから、「限らない」にはかなり実質的意味が残っていて、「～に」との固定度も低く、複合辞と扱わないほうがよいようである）。

ノート

1. 動詞・形容詞の基本形（スル形）に接続するが、これらも、「南国へ行く、冬はそれに限る」のように代名詞で受け直すことができるから、名詞相当のものとして使われているものと考えられる。

2. 「AはBに限る」で、AはBが一番だという言い方だが、どういう意味で「一番」なのかは、文脈に委ねられる。その点、いわゆるウナギ文の「AハBダ」が、AとBとが関係付けられることを述べるだけで、具体的どのような関係かは文脈に委ねられることと通じるものがある。実際、例(1)(2)のようにBに名詞を受ける場合、いずれも「犬はビーグル犬だ」「冬は鍋だ」といわゆるウナギ文的に書き直しても、同様の意味の表現になる。

「に限る」は助動詞「だ」のヴァリエーション的な形式になっていて、ウナギ文のうちの特定の意味タイプのもを明示的に表現するために用いられると言えるかもしれない。

◇B21 ～にとどまらない

接続

名詞あるいは用言のスル形・シタ形（シテイル形・シテイタ形を含む）に付く。

意味・用法

「Aにとどまらない」の形で、Aという行為・事実・有り様だけでなく、それを超えるものがあるという話し手の見方を示す。基本的に、“AはBにとどまらない”で、AはBだけでなく、それ以上のものがあるという言い方である。

用例

- (1) 検校の悪行は、それにとどまらない。（作例）
- (2) 悲報は、東部戦線での大敗にとどまらなかった（作例）
- (3) これは、もはや個人の責任にとどまらない問題だ。（作例）
- (4) 裁判所と特許庁の判断の行き違いは、この一例にとどまらない。（朝日新聞 '94. 1. 28）
- (5) 有料老人ホームへの関心は決して一部の高齢者にとどまらない。（朝日新聞 '94. 9. 30）
- (6) オーストリアの領土をめぐるオーストリア・プロイセンの戦争は、たんに2国だけの戦争にとどまらず、全ヨーロッパ的な戦争となった。（土井正興ほか「三省堂世界史」）
- (7) 〔吉行淳之介氏の〕最期をみとった宮城まり子さんとは、「ねむの木学園」の理事を務めるなど、恋愛にとどまらないパートナーだった。（朝日新聞 '94. 7. 27）
- (8) 「東京に本格的な国際音楽フェスティバルを」との狙いでスタートした〈東京の夏〉

音楽祭（アリオン音楽財団、朝日新聞社主催）が今年で十周年を迎える。地域や時代で切り取った新鮮なテーマで、クラシックにとどまらない新しい音楽の聴き方を提案してきたユニークなイベントだ。（朝日新聞 '94.6.14）

(9) アルツハイマー病にはまだ有効な治療法がなく、医療費に比べ、看護費用の方が圧倒的に多いのが特徴。米国では、老人保健施設に入ると年間四万ドル必要だが、在宅看護でも年間二万ドルかかる。在宅の場合、肉親が看護することが多いため、負担は経済面だけにとどまらない。（朝日新聞 '94.8.22）

(10) 原発事故の影響が一国だけにとどまらないことを知らされたのは、一九八六年のチェルノブイリ事故（現ウクライナ）だった。（朝日新聞 '94.6.20）

(11) もはやヴィラ・ロボスは、一ブラジルの作曲家であるにとどまらず、世界的な存在というべきであろう。（作例）

(12) しかしこの問題は、夫婦間の問題であるにとどまらず、子どもの利益や福祉にとってどうかという側面からも考える必要がある。（朝日新聞 '94.7.13）

(13) それは第二次大戦後のヤルタ体制を崩壊させたにとどまらず、チェコスロバキアやユーゴスラビアの解体に示されるように第一次大戦後のベルサイユ体制の遺制をも突き崩しつつある。（朝日新聞 '94.7.12）

文法

接続は、名詞については、直接受けるか、「～デアル／デアッタにとどまらない」となる。動詞・形容詞・形容動詞については、スル形・シタ形（形容動詞は“～デアル”の形・“～デアッタ”の形）ともに受けるが、これらも、実質的には“スルこと”“シタこと”のような名詞相当の表現として理解されるものである（なお、）あわせて、B25「にほかならない」のノート1も参照）。「とどまらない」は、言い切りでも、「とどまらず」のような中止形でも、また連体修飾でも用いられ、「とどまらなかった」のように過去形もとれる。

ノート

「～に過ぎない」と対照的に見えるが、「～にとどまらない」は、事柄の評価というより、むしろ、それ以上のものがあるという事実をいうことに重点があるようである。それだけ、具体的な意味が強く辞化が進んでいないといえる。そのことと相応じて、「～に必ずしも／決してとどまらない」のように「～に」と「とどまらない」の間に副詞が挿入できる。

関連項目

B25 「～に過ぎない」

◇ B22 ～に足りない

接続

動詞のスル形に付く。

意味・用法

「Aするに足りない」で、「Aするだけの価値がない」という意味を表わす。

用例

(1) 「ジンギスカン＝義経説」などということをおまじめに唱える輩もあるが、歴史学とはどういうものかを弁えない独りよがりの主張であって、まともに論ずるに**足りない**ものである。(作例)

(2) そのような提案は、本委員会で検討するに**足りない**ことである。(作例)

(3) その意味で社会党は自民党に吸収されていくわけであるから、政策転換自体は不可避であって、問題とするに**足りない**ともいえる。(朝日新聞 '94.8.10)

(4) 特にMRSAは健康な人にも検出される常在菌で、手洗いなどを励行すれば恐れるに**足りない**弱い菌といわれる。(朝日新聞 '94.6.29)

(5) 自民・さきがけはもともと同根だろうから怪しむに**足りない**が、自民・社会には越えることの出来ない政策の相違がある。(朝日新聞 '94.7.5)

(6) 人口約八百万の神奈川県が定数四、その七割の人口の北海道が定数は二倍の八という逆転現象があっても「違憲の問題が生ずる程度の著しい不平等状態が生じていたとするに**足りない**」という判決だ。(朝日新聞 '94.5.3)

(7) 理由の中で岩佐裁判長は「出入国管理法は『日本人の配偶者』の在留資格について、何の条件もつけておらず、夫婦関係の実体がないから在留が認められないとする法務省の処分は、裁量権を逸脱している」などとした一審判決を引用、「新たな証拠調べの結果によっても、この結論を動かすに**足りない**」と述べた。(朝日新聞 '94.5.27)

文法

「～するに足りない(／足りぬ) こと・ものだ」というような言い方で用いられることが多い。なお、「～するに足らぬ」という形も有り得る。

ノート

一般的には、「論ずる・言う・批判する」といった“問題にする”意の動詞としか結びつかないようである。例えば、「会うに足りない人だ」「買うに足りない品だ」といった言い方はできない。もっぱら“問題にする”価値がないことをいう言い方と言える。例文(5)の「怪しむに足りない」も、こうした用法上の延長上にあると思われるが、より固定した言い方で、「怪しむ価値がない」というより「怪しむ必要がない」といった意味で用いられる。更に固定化し、もはや一語化したというべき「とるに足りない」(＝つまらない)といった語もある。なお、(6)(7)のように裁判の判決文に「～には不十分だ」といった意味で用いられた例が見られるが、一般的でなく「足りない」がなおももとの実質的な意味を残した用法かと考えられる。

◇B23 ～にちがいない

接続

動詞・形容詞のスル形・シタ形(動詞については、シテイル形・シテイタ形を含む)に付く。また、形容動詞・名詞の場合、「～デアル／デアッタ」の形に付くか、語幹もしくは名詞に直接付く。また、「～スル(／シタ)」のにちがいない」と準体助詞を介する形をとったり、「～から」「～時」などの理由節・時間節に付いたりもする。

意味・用法

「～にちがいない」で、その可能性が非常に高いという推量を述べる。

用例

- (1) 宇宙の歴史を探るうえで、X線はこれからさらに重要な役割をはたす**にちがいない**。
(野本陽代「宇宙の果てにせまる」)
- (2) 現在の「ちょっとかわいくて、歌がまるでへタ」程度のアイドルは、恥ずかしくて消え去る**にちがいない**。(柴門ふみ「恋愛論2 応用篇」)
- (3) 川合玉堂の作品に接する若い人々はきっと、これが日本画！と驚きの声を発する**にちがいない**。(朝日新聞 '94. 1. 25)
- (4) 米国も内心では、空爆という強硬手段を避けたい**に違いない**。(朝日新聞 '94. 2. 11)
- (5) 1球目の変化球を見逃して、自信を持って投げ込んでくる**に違いない**直球を待つ。
(朝日新聞 '94. 9. 7)
- (6) 子供を犠牲にするなというメッセージが共感を呼んでいる**のに違はなく**、ダニエルに父親の理想像を見ている**のに相違ない**。(朝日新聞 '94. 4. 8)
- (7) 赤羽根氏なら、宇都宮のことは何でも知っている**に違いない**。(作例)
- (8) 被害状況から考えると、かなり大きな地震だった**に違いない**。(作例)
- (9) 女性の幸福は結婚にあるといわれた時代、ものを書くことは大変な重荷だった**に違いない**。(朝日新聞 '94. 2. 22)
- (10) 私の「鈍感さ」を悟らせてやろうという有り難い親切心だった**に違いない**。(村上陽一郎「科学者とは何か」)
- (11) この私たちの常識を古代人や中世人にも押しつけ、古代人や中世人も同じ感じをもって**にちがいない**と考えがちです。(阿部謹也「自分のなかに歴史をよむ」)
- (12) 昔は、日本の風景も今よりずっと広がった**に違いない**。(朝日新聞 '94. 8. 24)
- (13) しかし、今生きていれば喜んでくれた**に違いない**母に、「なぜ父親がいないの」「育てられないなら産まなければ良かったのに」と言葉を投げつけた日のことを思い起こすこともある。(朝日新聞 '94. 1. 15)
- (14) しかも、とても読みやすいのは、問題意識がはっきりしていたから**に違いない**。
(朝日新聞 '94. 10. 23)
- (15) そんなことが言えるのだから、権威ぶっていたって、あの男も相当な食わせ者に**違いない**。(作例)
- (16) これは天狗の仕業**に違いない**。(さくらももこ「もものかんづめ」)
- (17) あの遠い地ひびきは、足を踏み鳴らす音**にちがいない**。(森村桂「天国にいちばん近い島」)
- (18) が、それでも書き直したい個所が次々と思いつかぶのは、まだ作家になりきれていない証左**にちがいない**。(朝日新聞 '94. 7. 3)
- (19) [宝くじの一等賞に] かすめたのも私が持って生まれた運の大小**にちがいない**だろうと変な悟りを持ってしまったのだ。(朝日新聞 '94. 12. 18)
- (20) あの戦争は、侵略戦争**に違いない**んです。(朝日新聞 '94. 8. 12)
- (21) どちらかといえば、家で本を読んだり、レコードを聞いていることの好きな彼を、山登りや深夜の海へ誘い出したり、ペアの服を着てドライブすることになったのも、彼女の思いつきの結果**にちがいなかった**。(夏樹静子「鼓笛隊」)

(22) この傷からして、下手人は侍、それも、かなりの使い手に**相違ない**（作例）

(23) いずれも重要な視点**にちがない**が、個々には、これまでの各種の答申や提言で強調されてきたことだ。（朝日新聞 '94. 12. 27）

(24) 何か恨みがあった**に違いない**が、浅野は禁じられて遺言を残せなかった。（朝日新聞 '94. 3. 14）

(25) 確かに、不愉快な話**には違いない**が、これで、相手が何を考えているのかよく分かった。（作例）

文法

「ちがない」は、言い切りでも、「ちががなく」のような中止形でも、また連体修飾でも用いられる。「ちがなかった」のように過去形もとれる。

ノート

1. 「～にちがない」は、名詞を受ける場合は、一種の繫辞的な形式となる。いわば「AはBだ」構文を形成する「だ」の指定の意味を強めたヴァリエーションの一つといえる。ところで、「AはBだ」構文については、例えば「寒かったから、ヒーターをつけた」→「ヒーターをつけたのは、寒かったからだ」のような強調の表現がある。「AはBにちがない」の場合も、例文(14)に見るとおり、同様の表現が可能である。「AはBだ」構文では、「彼は東京でCDを買った」→「彼がCDを買ったのは、東京でだ」など、この種の強調がかなり自由に行われるが、「AはBにちがない」構文もこれに準ずるものと言える（あまり使わないだろうが、「～に決まっている」も同様と思われる）。

2. ほぼ同義的な言い方として、「～に相違ない」という表現が考えられるが、現代語としては古風な語感があり、今日では普通書き言葉でしか用いられない。

3. 類義的な言い方として、「～にきまっている」があるが、「～にちがない」が、根拠となる事柄を踏まえるとそうである可能性が高いという推量判断を述べるのに対し、「～にきまっている」は、何らかの事柄を念頭に置いて、そうである以上コレコレ以外の可能性はないと主張する言い方である。

4. 事実について根拠を踏まえて判断するという点では、「はずだ」も「ちがない」と一面で近くなるが、「はずだ」は、基本的に、話し手が知っている知識に拠る以上、理の当然としてコレコレなのだと思うということをいう言い方である。

5. 「～に（は）ちがないが、…」と前置きのに使われると、推量判断というより「～であることはもちろんだが・～であることには間違いはないが」と言った断りを述べる言い方となる。この言い方では「違い（が）ない」との原義がなおいっくらか生きているといえる。そして、こうした言い方の場合、「～に」と「ちがない」の間に「は」が挿入しやすくなる。

関連項目

B 2 「～はずだ」、B 1 9 「～に決まっている」

参考文献

野田尚史（1985）

◇ B 2 4 ～にほかならない

接続

名詞・名詞節もしくは「～から」「～時」などの理由節・時間節に付く。

意味・用法

「Aにほかならない」の形で、話題になっているものが、まさしくAであることを表す。

用例

- (1) この数が大きく異なるということは、彼の理論モデルがまちがっている、ということに**ほかならない**。(野本陽代「宇宙の果てにせまる」)
- (2) 一九四〇年にソ連に併合されたエストニアにとって、ロシア軍は「占領軍」に**ほかならない**。(朝日新聞 '94. 9. 2)
- (3) この上向きの力が浮力**にほかならない**。(坪井忠二ほか「新理科1分野上」)
- (4) こうした動きが出てきたのは、米国の現状に米国民が悩んでいるから**にほかならない**。(朝日新聞 '94. 8. 31)
- (5) 行助がこの仕事に単調さを感じなかったのは、大学で建築学をまなんでいたから**にほかならない**。(立原正秋「冬の旅」)
- (6) しかし、良かれ悪しかれ、それは切実な現実社会の反映**にほかならない**。(朝日新聞 '94. 10. 5)
- (7) 東京五輪は、敗戦でうちのめされた日本が見事に立ち直り、世界に日本の存在感を大きく示した証(あかし) **にほかならなかった**。(朝日新聞 '94. 10. 9)
- (8) 誕生日を祝うということも過去の再現**にほかならない**でしょう。(阿部謹也「自分のなかに歴史をよむ」)
- (9) 人にモノをあげるという行為は、「あなたと付き合いたい」という意思表示**にほかならない**ので、受け取らざるをえません。(阿部謹也「自分のなかに歴史をよむ」)
- (10) その壁とは、戦後の出発点で憲法によって否定されたはずの男女の不平等**にほかならない**が、あるいはこう言った方が分かりやすいかもしれない。(朝日新聞 '94. 8. 21)
- (11) このように考えてみると、輸出の円建て比率を上げるということは、小手先の円高対策**にほかならず**、長期的な対策としてはあまり意味がない。(朝日新聞 '94. 8. 10)
- (12) [上略] あやしげな一ふしが聞えて来たのは、この深夜に他のたれが歌うものぞ、まさしくわたしみずからの唇から洩れて来るひびき**にほかならない**のだが、[下略] (石川淳「葦手」)
- (13) 「黒」という題詠である。恐らく作者は、ひたすら「黒」について想いを凝したのであろうが、得たものはまさしく彼自身の心に**他ならず**、題詠の類型を超脱した特色ある形を成している点で興味ある歌と思うのであげたのであるが、[下略] (小林秀雄「実朝」)
- (14) 他の国民への挑発**にほかならない**歌詞だ。(朝日新聞 '94. 10. 21)
- (15) 公共事業を食い物にする政・官・業の癒着の中心部分にあるのが、**ほかならぬ**談合だった。(朝日新聞 '94. 3. 9)

文法

過去の形や連用中止の形(「～にほかならず」)、連体修飾の形もとれる。

ノート

1. 「～にほかならない」は、一種の繫辞的な形式で、いわば「AはBだ」構文を形成

する「だ」の指定の意味を強めたヴァリエーションの一つといえる。ところで、「AはBだ」構文については、例えば「寒かったから、ヒーターをつけた」→「ヒーターをつけたのは、寒かったからだ」のような強調の表現がある。「AはBにほかならない」の場合も、例文(5)にみるとおり、同様の表現が可能である。ただし、「AはBだ」構文では、「彼は東京でCDを買った」→「彼がCDを買ったのは東京でだ」など、この種の強調がかなり自由であるが、「AはBにほかならない」の場合、Bにとれるのは、理由や時間規定の節に限られるようである（また、「AはBにすぎない」「AはBにとどまらない」となると、理由節しか不可のように思われる）。

2. 「ほかならない」の部分が、連体修飾専用の修飾語として用いられ、「ほかならない竹下氏」「ほかならぬ研究所の仕事」などと使われることがある。こうした場合、意味としては、“重要で無視できない”といった意に等しくなる。

◇ B 2 5 ～に過ぎない

接続

動詞・形容詞のスル形・シタ形（動詞については、シテイル形・シテイタ形を含む）に付く。また、形容動詞・名詞の場合、「～デアル/デアッタ」の形に付くか、語幹もしくは名詞に直接付く（なお前項 B 2 4 「にほかならない」のノート 1 も参照）。

意味・用法

「Aに過ぎない」の形で、Aという行為・性質・あり様以上のものではないという話し手の事実についての評価的見方を表す。

用例

(1) 電子は普通は金属の内部を動きまわる**にすぎない**が、これは、表面から外に出ようとすれば電子を引きもどす力がはたらくからである。（大塚明郎ほか「標準高等物理 I」）

(2) 男の育児が珍しくなくなったとはいえ、これまでは妻の手伝いや、いわれたことをやっている**にすぎない**人が多かった。（朝日新聞 '94. 12. 3）

(3) 別に面倒なことをするのではなく、間に立ってちょっと口を利いてやる**に過ぎない**。（作例）

(4) 古畑氏は、実はそれを知っていたふりをした**に過ぎなかった**。（作例）

(5) 彼女は、寛容というわけではない。ただ、ちょっと人より気が長い**に過ぎず**、君のことを思いやっつてのことではないのだ。（作例）

(6) しかも、原子核の大きさ（直径）は、原子の大きさの約 10 万分の 1 **にすぎない**。（柴田雄次ほか「化学 I」）

(7) サウジアラビアは、アラビア半島の大部分を占めるが、砂漠が広大な面積を占め、耕地は国土の 1% 未満**にすぎない**。（青野壽郎ほか「高校新地理 B」）

(8) 批判者に「おまえにそんなことを言う権利はあるのか」と切り返すのは、論点のすりかえ**にすぎない**。（朝日新聞 '94. 5. 11）

(9) しかしシラードは当時、コロンビア大学の一介の外国人客員研究員**に過ぎなかった**。（村上陽一郎「科学者とは何か」）

(10) しかし現実には、親友の言葉は彼女の、「こう言われたい」（つまり、励ましの言葉

が欲しい) と思う心の反射鏡に過ぎないのです。(柴門ふみ「恋愛論2 応用篇」)

(11) 白書によると、男性の場合、同じ企業で六十歳まで働きつづける割合は、おおむね二割程度にすぎないという。(朝日新聞 '94. 7. 16)

(12) 人類は死滅して、つぎに来る何者かへバトン・タッチしていくための存在にすぎないのだろうか？(石川喬司「彗星伝説」)

(13) 漢字は意思伝達や表現の道具にすぎないのだから、読めて理解でき、判別できる形が書ければ十分だと思ってきた。(朝日新聞 '94. 12. 3)

(14) いつのころからか、私にとってコメは、数ある主食用穀類のうちの一つにすぎなくなつた。(朝日新聞 '94. 4. 1)

(15) 国連専門機関の一部署にすぎない我々のオフィスでも、年間数千通の手紙が寄せられる。(朝日新聞 '94. 9. 6)

(16) アマチュアバンドのボーカルに過ぎなかった彼女を、レコードデビューまでもっていった。(朝日新聞 '94. 5. 2)

文法

「過ぎない」は、言い切りでも、「過ぎず」のような中止形でも、また連体修飾でも用いられる。「過ぎなかった」のように過去形もとれる。

ノート

1. 事柄がそれ以上ではないという話し手の評価を言う言い方である。一見価値が低いものとして評価するように見えるが、必ずしもそれがよくないことというような意味でばかり用いられるわけではない。「彼は大学の必修授業の単位を二つ取ったに過ぎない」というと、あまりよくないとしているように見えるが、「彼は大学の必修授業の単位を二つ落としたに過ぎない」ともいえて、この場合“単位を二つ落とした”ぐらいは気にするほど悪いとも言えないとするような言い方である。つまり、「～に過ぎない」は、本質的には価値評価ではなく、事実のレベルをそれ以上でないとして評価する言い方なのである。

2. 名詞を受ける場合、固有名詞を単に受けることはできない。つまり、「あれは富士山に過ぎない」のような言い方は不自然である。「～に過ぎない」は、事実のレベルをそれ以上で評価する言い方であり、事実のレベル(どのようなあり様か)が分かる言い方が来なければならない。しかし、固有名詞は、対象を指示するだけで、それがどのような性質・状態・あり様であるかを示すものではないからである。(ちなみに「あれは富士山という一個の山に過ぎない」と、対象の問題となる側面が分かるようにすると可となる。)

関連項目

B 2 1 「～にとどまらない」

◇ B 2 6 ～には及ばない

接続

動詞のスル形(シテイル形を含む)か動作的な意味の名詞に付く。

意味・用法

「Aには及ばない」の形で、Aまでする必要はないという意味を表わす。

用例

- (1) 礼を言うには及ばない。(作例)
 (2) 心配には及ばない。(作例)
 (3) 税金を払っているのだから、施設課の迅速な対応だって、何も感謝するには及ばないのだ。(作例)
 (4) わざわざ学部長自らがおいで下さるには及びません。(作例)
 (5) 「社長はどうぞ家でお休みになっていて下さい。わざわざ出社して来られるには及ばないでしょう」(赤川次郎「女社長に乾杯！」)

文法

基本的に、言い切りでは「～には及ばない」の形でしか用いられない(「及ばなかった」の形は、「～には及ばなかったのだ」「～には及ばなかったことだ」などといった形で、済んでしまった事実を振り返る言い方でなら出てくる)。連体修飾なども、不可ではないが、まれであろう。

ノート

1. 「AがBするには及ばない」のように、「には及ばない」が受ける動詞には主語立てにくく、敢えて主語を立てると、例(4)のように総記(いろいろある中でも特に)の意味が出てくる。

2. 「必要はない」という言い方と、類義的であるが、「～には及ばない」の場合、そこまで(特に人間関係の面で)厄介なこと・負担になることをしなくてもよいと言った含みがある。従って、そうした含みのないような場合は、「～には及ばない」は使いにくい。例えば、「私の仕事ではパソコンがあれば、ワープロを買う必要はない」といっても、「私の仕事ではパソコンがあれば、ワープロを買うには及ばない」というのは(指示を与えているような場面でもなければ)不自然である。

イイ／ワルイ系

◇B27 ～ほうがいい

接続

前接語が動詞・形容詞の場合、スル形・シタ形(動詞については、シテイル形・シテイタ形を含む)に付く。形容動詞の場合、「～ナ／デアル／デアッタ」の形に付く。名詞の場合、「ノ／デアル／デアッタ」を伴う形に付く。

意味・用法

「Aほうがいい」の形で、選択の幅があることを念頭に置いて、Aがそれ以外よりもよいとする話し手のとらえ方を示す。そのような事柄の選択についての判断を述べることから、その判断を相手に持ちかけ示すことで、忠告の用法にもなる。

用例

- (1) 酒は、冷やで飲むほうがいい。(作例)
 (2) あんまり早くいい目を見るより、年とってから楽しみをとっておく方がいいかもしれない。(柴門ふみ「恋愛論」)
 (3) 須磨さんは「バイパスを長持ちさせるためには動脈を使う方がいいが、手術は難し

い。静脈は太くて手術しやすいという利点もある」と話す。(朝日新聞 '94. 1. 16)

(4) それぞれの国の文化に優劣をつけるべきではないが、質の違い、背景にある文化観の違いは理解しておく**方がいい**。(朝日新聞 '94. 3. 17)

(5) 下手に動くセンサーに引っ掛かるのが落ちで、じっとしている**方がよかった**。

(6) やっぱり、夜景は、美しい**方がいい**な。(作例)

(7) ここに置きます。ちょっと小さいですね、この花瓶。もっと大きかった**方がよかった**ですかねえ。(作例)

(8) 棒寒天は、洗ってすぐに煮てもとけることはとけるが、多少とけ残りがあるので、やはり30分ぐらいは水につけてもどした**ほうがいい**。「なつかしい手作りおやつ」)

(9) 良吉「領収書、もらっといた**方がいい**よ。領収書のあて名はねえ……」(大石静「アフリカの夜」)

(10) 観客に長いナレーションの抄訳が渡されるが、客席の反応を高めるためにも、日本語の字幕かイヤホンを用意した**方がよかった**のではないか。(朝日新聞 '94. 1. 28)

(11) 三輪子は、薄気味悪そうに塩村の顔を見て、「警察に届けた**ほうがいい**んじゃないかしら」(向田邦子「鮎」)

(12) そろそろヘルパーのお世話になった**ほうがよ**さそうなお年寄りの姿が多かった。(朝日新聞 '94. 11. 15)

(13) また、象はからだの大きいわりに臆病な動物だともいわれているが、これは臆病というより用心深いといった**ほうがよ**いらしい。(亀井節夫「日本に象がいたころ」)

(14) 遺族に会葬者の対応をさせずに、じっくり悲しみにひたらせることもあれば、逆に会葬者とともに故人を語る機会をつくった**ほうがよ**い場合もあるだろう。(朝日新聞 '94. 11. 21)

(15) 彼とうまくやって行きたいなら、何も隠し事をしない**方がいい**よ。(作例)

(16) 「今からコメが余る、余ると言わない**方がいい**のではないか」。(朝日新聞 '94. 8. 30)

(17) ただ、あなたのその性格では、早急には結婚しない**ほうがよ**いと思います。(柴門ふみ「恋愛論」)

(18) 世の中には、見ない**ほうがいい**事実もあるんだよ。(作例)

(19) しかし噺(はなし)家と同じで、おもしろい話は語り手がはしゃがない**方がいい**。(朝日新聞 '94. 7. 17)

(20) そんなことって、私が日本人だった**ほうがよかった**の？(作例)

文法

言い切りや「～が」「～のに」など独立度の低くない節で用いられ、連用中止は不可ではないまれである。過去・推量の形もとれる。連体修飾も可能である。

ノート

1. 動詞については、一般に連体形を受ける場合とシタ形を受ける場合とが見られるが、シタ形を受ける場合の方が、完了的な意味が加わって“ちゃんとやってしまう”というようなニュアンスを帯びるようである。それゆえ、忠告に用いても、「行く**ほうがいい**」より「行った**ほうがいい**」の**ほうが**やや強い意味合いが感じられる。

2.) 動詞以外では、一般にシタ形を用いることはないが、事実と反対のことを述べて、

「～方がよかった（のに）」のような反事実的な想像の言い方があり、後悔や反省の意味で用いられるが、この場合には、動詞以外の語・語句（また、否定の「～ない」）でもシタ形で「ほうがいい」に接続する（ただし、連体形でもよい）。

3. 「私は寝たほうがいい」のような一人称の主語をとることは、通常は不可である。「～ほうがいい」は、話し手が選択の幅のある事柄について選択の結果を述べるものであり、話し手においてはどうか選択すべきかが既に決まっているのに、「～ほうがいい」とコメントされる側にあって、これから実際に行為を選択することになるはずの主体がその同じ話し手では矛盾するということなのであろう。

関連項目

B 2 8 「～たらいい」、B 3 0 「～て（も）いい」、B 4 0 「～ざるを得ない」、B 4 1 「～べきだ」、B 4 2 「～なければならない」、

参考文献

森山卓郎（1997）

◇ B 2 8 ～たらいい・～といい・～ばいい

接続

「～たらいい」は、用言（及び用言＋否定の助動詞“ない”の連用形（動詞については、「シテイル」の連用形「シテイ」を含む）に付く。

「～といい」は、用言（及び用言＋否定の助動詞“ない”の終止形（動詞については、シテイル形を含む）に付く。

「～ばいい」は、用言（及び用言＋否定の助動詞“ない”の假定形（動詞については、「シテイル」の假定形「シテイレ」を含む）に付く。

意味・用法

「Aしたらいい」等の形で、当該の状況・場面で「A」という事柄の実現が望ましい・然るべきことであるという話し手のとらえ方を述べる。そこから、行為者自身が実現可能なことについては、当為（「～するのがしかるべきだ」）の意味、行為者自身では実現不可能なことについては、願望（「～なることがねがわしい」）の意味になる。また、当面している問題に関して相手に持ちかけることで、当為の意味から勧めの用法も出てくる。事実と反対のことをこの言い方でいうことで、後悔というようなニュアンスが出てくる。

用例

(1) 豊かな暮らしがしたいなら、あなたが働けばいいのです。（柴門ふみ「恋愛論」）

(2) 黒みつを作るときは、かたまりのまま水を加え、かきまぜながら煮とかせばいい。（「なつかしい手作りおやつ」）

(3) 高かったり、サービスが悪かったりすれば、品物やお店を変えればいいことだ。（朝日新聞 '94.9.23）

(4) 胚のどの部分が、どのような器官になるように予定されているかを知るには、発生の過程を逆にたどればよいわけである。（石田寿老ほか「生物Ⅰ」）

(5) 安心して皆で悪口を言える「悪役」が必要とされる一方で、人々はだれもが感情移入できる「涙の物語」を求めていると言ったたらいいのか。（朝日新聞 '94.3.15）

(6) ペアは息があった者どうして組む**と良い**ので、夫婦一緒に楽しんではいかがか。(朝日新聞 '94. 1. 29)

(7) どちらの道を歩ん**だらいい**のか、アドバイスをお願いします。(柴門ふみ「恋愛論」)

(8) ぼくは、こんなとき、どんなアイサツを**したらいい**か、わからない。(田中小実昌「不思議な娘」)

(9) 国の経済力をはかるためには、なにをものさしとすれば**ばよい**だろうか。(鵜飼信成ほか「新しい社会 [歴史]」)

(10) 必要以上に、自分が先生に向いているなんて言わないこと。これも、心得ておいて**よい**ポイントの一つだ。(作例)

(11) 一日一回だけ飲め**ばいい**薬だと、患者の七割は全部きちんと飲んでいたが、一日に三回飲まないといけない薬では、半分くらいしか飲んでいなかった——朝日生命成人病研究所(東京)が高血圧の通院患者を調べたら、こんな結果が出たという。(朝日新聞 '94. 10. 30)

(12) 明日は晴れた**たらいい**ね。(作例)

(13) うまく行く**といい**ですが、まだ予断を許しませんな。(作例)

(14) 「上海バンスキング」の中で、ヒロインのまどかが出征する兵士に「戦争も夢だ**たら良かった**のにね」というせりふがあります。(朝日新聞 '94. 6. 22)

(15) 幸子「それにしたって、ひとこと言ってくれた**たらいい**のに」(山田洋次・高橋正園「北の夢」)

(16) 「青木さんが力になって下さる**といい**んですけどね。(森村桂「天国にいちばん近い島」)

(17) 確かに裁判は早ければ**ばいい**というものではない。(朝日新聞 '94. 7. 19)

(18) 安打は10回に3回成功すれば**ばいい**けど、バントは10回のうち、9回成功させなければいけない。(朝日新聞 '94. 4. 23)

(19) 一刻も早く日が暮れてくれれば**ばいい**のに、曇り空と灰色の海は、いつまでも闇に包まれる気配がなかった。(夏樹静子「鼓笛隊」)

(20) ストレスがたまったときは、温泉に入る**といい**。(作例)

(21) 子どもが生まれたら、庭の鉢でもかまわないから、木を植えた**たらいい**。(朝日新聞 '94. 10. 26)

(22) 先輩の話を聞いて、いいところは率先してまね**したらいい**。(朝日新聞 '94. 5. 5)

(23) 「〔前略〕大昔からクジラを魚と見て利用してきた民族に、牛肉を食べ**たらいい**じゃないかという言い方はないですよ」(朝日新聞 '94. 9. 30)

(24) 旅行するなら、社会のルールを少しずつでも教える場に**したら良い**のでは。(朝日新聞 '94. 8. 8)

(25) 良からぬことをしていそうだと、何をされるか分からないと不気味がる前に、遠くからでも隣人の暮らしぶりをのぞいてみる**といい**。(朝日新聞 '94. 7. 26)

(26) 栽培棚は、高いほど風通しがよく、乾きやすいので、植物の種類によって、高さを決めると**よい**。(「覚えたい山野草のテクニック」)

(27) まず、芝生の上で練習する**といい**そうだ。(朝日新聞 '94. 7. 17)

(28) 男の浮気を解釈するには、「源氏物語」を読め**ばよい**。(柴門ふみ「恋愛論」)

(29) もし、この事態を打開できる案があるのなら、提案する**がよい**。(朝日新聞 '94. 3. 15)

文法

言い切りや「～が」「～のに」など独立度の低くない節で用いられ、連用中止は不可ではない稀である。過去・推量の形もとれる。連体修飾も可能である。

ノート

1. これら三つの表現は、極めて近いもので、用法は基本的に重なってくる。このうち、「～したらいい」と「～すればいい」とは、ほとんど同義とっていい。これに対して、「～するといい」と「～すればいい」「～したらいい」とは、微妙に用法が異なるところがある。すなわち、「～するといい」が、単に～がよいといえることだというのに対して、「～すればいい」「～したらいい」は、～すればそれで十分だ・事足りるといった含みが出てきがちである。それゆえ、「子供を助けたかったら、身代金を払えばいい／払ったらいい」というのは自然でも、「子供を助けたかったら、身代金を払うとよい」は、特別の文脈でもなければ、極めて不自然であろう。

2. 類義的な言い方として、「～するがいい」という表現もあり、当為の意味では、以上とほぼ同義的に用いられた。例えば、「すぐに行くがいい」は「すぐに行くといい」等とほぼ同義とってよいだろう。しかし、この言い方は現代語としては、かなり古風なものと感じられ、特別な立場・地位などの者が、ものものしく言い渡すような効果を考えた場合でもなければ、ふつうは使われない。

関連項目

B 3 0 「～て (も) いい・～たっていい」、B 2 9 「～てはいけない」、B 3 1 「～ても仕様がなない」、B 4 1 「～べきだ」

参考文献

高梨信乃 (1995)

◇ B 2 9 ～たらいけない・～といけない・～てはいけない

接続

「～たら／てはいけない」は、動詞・形容詞（及び“動詞／形容詞”＋“助動詞／補助形容詞のナイ”）の連用形（動詞については、「シテイル」の連用形「シテイ」などを含む）に付く。形容動詞・“名詞＋断定の助動詞”については、「～ダッタラ／～デハイケナイ」の形をとる。

「～といけない」は、用言の終止形（シテイル形を含む）に付く。

意味・用法

「Aたらいけない」等の形で、当該の状況・場面で「A」という事柄の実現がしかるべきことでない・のぞましくないという話し手のとらえ方を述べる。そこから、行為者自身が実行可能なことについては、なすべきでないという意味、行為者が自力では自由にできないことについては、危惧（「～なることきづかわしい」）の意味になる。また、当面している問題に関して相手に持ちかけることで、為すべきでない意味から禁止の用法も出てくる。「いけない」は、しばしば「いかん」となる。

用例

- (1) おれも、いつまでも、こんなだらしな**い**ことして**いたら**い**け**ないな。(作例)
- (2) このまま忘れて帰ると**い**け**ない**から、持って出ることにするよ。(作例)
- (3) 食**て**は**い**け**ない**乾燥剤まで食**て**しまったのか。(作例)
- (4) 人たるもの、信義をないがしろにして**は**な**ら**ない。(作例)
- (5) これ、本当は笑**ち**い**け**ないんですが、人間というものは人の過剰な不幸を笑**っ**てしまう。(朝日新聞 '94. 5. 11)
- (6) これらのことは、物質と物質とを反応させる場合、一方の物質の量だけに注目して**は**い**け**ないことを示している。(坪井忠二ほか「新理科1分野上」)
- (7) そのうえ、誤植かと思って簡単に訂正してしまうと、「わざとまちがえている」ので直**して**は**い**け**ない**場合もあるのですから、問題は単純ではありません。(野崎昭弘「人工知能はどこまで進むか」)
- (8) あらかじめ患者の脳の血管の立体画像を撮影しておき、手術前に患者の頭をこの装置でのぞくと、傷**つ**て**は**い**け**ない血管などが事前に把握できる。(朝日新聞 '94. 4. 27)
- (9) 「そんな浮わついた暮らしを**続**けて**い**て**は**駄**目**だ。(半村良「秋子の写真」)
- (10) 我々は歴史的な転換の中で、日本が今までと同じこと**で**は駄**目**だ、変わらなければ**な**ら**な**いと言っている。(朝日新聞 '94. 10. 15)
- (11) 十グラムは、健康人が高血圧にならないために、これ以上摂取**して**は**な**ら**な**い量だ。(朝日新聞 '94. 10. 9)
- (12) 黒豆というのは、カチ栗みたいに堅**く**て**は**い**け**ないが、されば**と**い**っ**て、ふやけたように柔く煮**い**ても**い**け**な**い。(田辺聖子「姥ごよみ」)
- (13) なんだ**っ**て？ アメリカ暮らしが長**く**て**は**い**け**ないのかい。(作例)
- (14) お侍さん、嘘**つ**いて**は**い**け**ないな。こっちは**す**べてお見通**し**なんだ。(作例)
- (15) こら、芝生の上で遊**ん**で**は**行**か**んぞ。(作例)
- (16) 気を許**し**て**は**い**け**ない、もう一息だ。(作例)
- (17) 犬もい**け**ない猫も駄**目**、伝書鳩もうちを汚**す**と**い**け**ない**づく**し**だったが、鮎を飼**っ**てい**け**ない理由は**す**ぐには考**え**つ**か**な**か**った。(向田邦子「鮎」)
- (18) そして、見知らぬ人々に、自分が誕生日だから**と**い**っ**て祝福を強**制**して**は**い**け**ない。(柴門ふみ「恋愛論」)
- (19) その日は朝から何も食**て**は**い**け**ない**。(さくらももこ「もものかんづめ」)
- (20) 希望していた県立高校に落ちて入ったミッションスクールは、「最悪」。「靴下を折**ち**い**け**ないだの、アルバイトは厳禁だの、罰則ばかり。灰色も**い**いところでした」(朝日新聞 '94. 10. 26)
- (21) たまたま訪ねてきた息子に、二時間以上**続**けたら駄**目**だよ**と**言われ、機械が壊れるのかとあわてたら、いや、その前に体がこわれるよ、なんておどかされた**こ**ともありません。(朝日新聞 '94. 5. 9)
- (22) 座の雰囲気**が**息苦**く**て**は**い**け**ないと、いろいろ気を配**っ**ている (作例)
- (23) 後で文句を言**わ**れたら**い**け**ない**。一言断**っ**ておき**な**さい。(作例)
- (24) 「足が弱**く**な**っ**たら**い**け**ない**」と週に一回、五ホール程度のゴルフ**を**していたが、今夏は猛暑でお預**け**となった。(朝日新聞 '94. 9. 4)

(25) 角地に立つわが家の北側、袋小路を見やると、子供たちが雪の滑り台で遊んでいる。邪魔したらいけない、放っておこうと勝手に決めた。(朝日新聞 '94.2.15)

(26) 電話をしたいのは山々だけれど、そのために、先生に迷惑がかかる**といけない**と考え自重した(佐野洋「無事永眠」)

(27) 王女はガチョウ番をさせられたのですが、家から連れてきた馬のファラダは口がきけるので、腰元は自分のしたことがばれる**といけない**と思って、王子に頼んで馬を殺させたのです。(阿部謹也「自分のなかに歴史をよむ」)

(28) 「パニックを起こす**いけない**から言わなかったけれど」。(朝日新聞 '94.4.10)

(29) 「おぼれて**はいけない**からと、水泳のできない人を水に入れなかったら、一生泳げない。〔下略〕」(朝日新聞 '94.11.1)

文法

言い切りや「～が」「～のに」など独立度の低くない節で用いられ、連用中止は不可ではない稀である。過去・推量の形もとれる。連体修飾も可能である。

ノート

1. 「～したらいい」「～するといい」「～すればいい」と、ちょうど裏返し判断だと言える。そして、三つの形式間で意味は重なるところもあるが、「～するといけない」は、基本的に危惧の意味にしか使われない。また、「～してはいけない」に比べると、方言差もあるようだが、「～したらいけない」はいささか不安定である。例えば、「こんなところで死んではいけない」に比べ、「こんなところで死んだらいけない」はかなり不自然と思われるが如何か(「こんなところで死んだらあかん」と関西方言的な形をとれば、かなりよくなると思われる)。

2. 「いけない」に代えて、「だめだ」「ならない」などの言い方も用いられる。ただし、「だめだ」はもっぱら「(～し)たら／てはだめだ」の形で、「ならない」は「(～シ)てはならない」という結び付きでしか用いられない。また、もちろん「～だめだ」「～ならない」といった言い方は、為すべきでないという意味でしか用いられない。

3. 「(～し)ては／(～する)といけない」が、“動詞＋否定の助動詞”を受ける「～しなくてはいけない」「～しないといけない」の形は、義務・必然等を表わす複合辞と同形になり紛らわしいが、文脈的に文意がはっきりとれば、使われないわけではない。「陰になって見えないといけないから、席を移った」のような言い方は、ここでとり上げる危惧の意味のものといえる。

4. これらの形式でも、当面の事実と反対のことを言うのに用いると、「こんなときに、嘘をついてはいけなかったな」のように、後悔というようなニュアンスが出てくる。

関連項目

B 2 8 「～たらいい」、B 3 0 「～て(も)いい・たっていい」、B 3 1 「～ても仕様がない」、B 4 1 「べきだ」

◇ B 3 0 ～て(も)いい・～たっていい

接続

前接語が、動詞・形容詞の場合、「動詞・形容詞の連用形(「シテイル」の連用形「シ

テイ」なども含む) +テモ/タッテイイ」の形をとる(なお、否定の助動詞の接続については、「～しないでいい」の形もある)。形容動詞・名詞の場合、「形容動詞・“名詞+断定の助動詞”の連用形(～デ) +モイイ(もしくは終止形(～ダ) +ッテイイ)」の形をとる。「いい」に代えて、「かまわない」「さしつかえない」「けっこうだ」なども用いられる。

意味・用法

「Aしてもいい/たっていい」で、基本的には、あり得ると容認できる事柄としてAということもあるということを示す。そこから、相手の側の行為・物事のあり様について、許可・許容の言い方として用いられ、自分の側の行為について、申し出の言い方として用いられる。また、論理・道理の上での可能性を示す言い方にもなる。

用例

- (1) 夕食は、外で食べて**もいい**な。(作例)
- (2) 別にその日は、急いで帰らなく**てもよかった**。(作例)
- (3) マイクの設備さえあれば、会場は狭く**てもいい**。(作例)
- (4) スタンドの従業員の手を借りず、自分で給油、あとでレジで代金を払う「セルフ化」の導入も本気で考えて**てもいい**。(朝日新聞 '94. 6. 25)
- (5) 風土、気候、文化にあったコメをそれぞれ食べてきたのだから、むりやり日本のコメと同じように食べなく**てもよい**。(朝日新聞 '94. 6. 11)
- (6) 現在の物語なのだろうが、二、三十年前の設定にして**もいい**し、「古き、よきアメリカ」のころにしても通用する。(朝日新聞 '94. 10. 17)
- (7) ミキサーでなく、泡立て器でまぜ**てもいい**が、卵がなめらかにまざりにくいので、紅茶こしでこしてから凍らせること。(「なつかしい手作りおやつ」)
- (8) 宇宙が膨張・収縮して**たっもいい**ではないか。(野本陽代「宇宙の果てにせまる」)
- (9) 聞きかじりですからまちがっているかもしれませんが、一手指すのに何時間かかっ**てもかまわない**というぐらいの覚悟でやらせれば、いまコンピュータはチェスではめっちゃくちゃに強いのです。(野崎昭弘「人工知能はどこまで進むか」)
- (10) したがって、イオンの質量も、原子の全体の質量と同じと考えて**さしつかえない**。(大塚明郎ほか「標準高等物理 I」)
- (11) 今日は、だいたいの図柄が描き上がったら、帰**ってもいい**よ。(作例)
- (12) おまえさんも、命が惜しくなったら、断**ったっもいい**んだぜ。(作例)
- (13) うそだ**っもいい**から、愛してる**っもいい**って言ってくれ。(作例)
- (14) 腕白**でもいい**。たくましく育てほしい。(作例)
- (15) 次回は、野外実習なので、各自汚れて**もいい**服装で集まってください。(作例)
- (16) 小さなせいろがない場合は、底が平らなざるを使**ってもいい**。(「なつかしい手作りおやつ」)
- (17) あさみ「写真、撮**ってもいい**ですか？」(大森美香「美少女H 十七歳の記録」)
- (18) 公一「じゃあこのまま別れて**もいい**の？」(吉田紀子「卒業旅行」)
- (19) 高橋「まったく。そんなんじゃ、また振られ……い、いや、(咳払い) とにかく……だ。今日のコンパは俺の顔立てで、遅れて**もいい**から来いよ」(田淵佐奈「あの日の君にありがとう」)

(20) 欲しいという人があれば、あげ**てもいい**くらいだ。(朝日新聞 '94.8.3)

(21) テコンドーは拳(こぶし)で突いたり、腰より上はどこをけ**てもいい**格闘技。
(朝日新聞 '94.8.30)

(22) じぶんに不利益な質問には答えなく**てもよい**黙秘権や、弁護人をたのむ権利がある(第33~36, 38条)。(鶴飼信成ほか「新しい社会[歴史]」)

(23) 母親がストレス解消のため少しくらいお金を使**たっていい**のです。(朝日新聞 '94.3.5)

(24) IWCの科学者たちが合意した資源管理方式をあてはめれば、南極海のミンククジラは、年間二千頭ほど捕獲**しても差し支えない**という結論が出ている。

(25) 二十人以上の父母が応じ、「約束を破ったときは、きつくしか**っても結構です**」などと、教諭に一切の指導を任せる趣旨の文書を出した。(朝日新聞 '94.12.19)

(26) もうそろそろ戻って来**てもいい**んだがね。(作例)

(27) さんざん心配かけたんだ。ごめんなさいの一言ぐらい言**たっていい**んじゃないか。(作例)

(28) もうみんなそこそこ金持ちでそこそこリッチなのだから、つまらない見栄なんか捨て**てもいい**のではないかと思う。(柴門ふみ「恋愛論2 応用篇」)

(29) 本当は福祉が整っていれば入院しなく**てもいい**人が病院に残され、重症で介護の必要な人が追い出される。(朝日新聞 '94.7.27)

(30) この川でなら、ぼくだ**って**、水上生活者にな**ったっていい**ですよ。(伊藤桂一「羊蹄甲の花の蔭」)

(31) 次回の議長は、私がや**ってもいい**。(作例)

文法

言い切りや「～が」「～のに」など独立度の低くない節で用いられ、連用中止は不可ではない稀である。過去・推量の形もとれる。連体修飾も可能である。

ノート

1. 「行ってもいいし、行かなくてもいい」「行**ったって**いいし、行か**なく**った**って**いい」と、相反することを並列して、同列の選択項として言えることでもわかるように、「～してもいい/た**って**いい」は、「～」という事柄を、他に比べてこれこそよしとしたりダメとしたりするような価値づけはしないで、一つの選択肢としてただ提示する言い方である。

2. 「～しても(／た**って**)かまわない」「～しても(／た**って**)さしつかえない」「～しても(／た**って**)け**っこう**だ」のような形も用いられるが、例(26)のような論理の上での可能性を述べる言い方では、用いにくい。

3. 類義的な言い方として、「～して**いい**」が考えられるが、基本的に許可や許容の意味でない使いにくい。例えば、例(1)は独白的に所感を述べて許可・許容とはいえないが、これを「夕食は、外で食べて**いい**な」としては、不自然である。また、不定代名詞と結びつくことができない。「何を**しても**(／した**って**)**いい**」とは言えても、同じ意味で「何を**して****いい**」とは言えない。

関連項目

B 2 7 「～ほうが**いい**」、B 4 0 「～ざるを得**ない**」、B 4 1 「～べき**だ**」、B 4 2 「～

なければならない」

参考文献

森山卓郎（1997）・高梨信乃（1995）

その他

◇B31 ～ても仕様ががない・～たって仕様ががない

接続

動詞・形容詞の連用形（「シテイル」の連用形「シテイ」なども含む）＋「テモ／タツテ仕様ががない」の形をとる。また、形容動詞・“名詞＋断定の助動詞”に接続する場合、「～デモ／～ダツテ仕様ががない」の形をとる。

意味・用法

「Aシテモ（／シタツテ）仕様ががない」で、（1）敢えてAする・Aになる・Aであることに意味が認められないという話し手のとらえ方、（2）Aという成り行きになっても、それを残念に思ったりできないという話し手のとらえ方を表わす。「～しても／たって仕方がない」という言い方もある。「しようがない」は、しばしば拗音化して「しょうがない」となる。

用例

- (1) いまさら謝**っても仕様ががない**だろう。（作例）
- (2) 言**っても仕方がない**ことをいつまでも繰り返すなよ。（作例）
- (3) 何笑ってるんだ。君がおもしろく**ても仕方がない**だろう。（作例）
- (4) 歴史をどうきちんと総括するかは生やさしい仕事ではないが、過去から目をそらせたり、過去を言い繕ったりしてみ**てもしようがない**。（朝日新聞 '94.9.12）
- (5) 何事にも中途半端で、よく言えば「へたうま」なんだけど、デザインについては、これ以上勉強**てもしようがない**などあきらめた。（朝日新聞 '94.3.28）
- (6) 外交官じゃない私におっしや**てもしようがない**のに。（朝日新聞 '94.7.25）
- (7) 帰ると、おやじに説教された。「一カ月も遊んで、今さら高校で勉強**したって仕方がない**。体を生かしてプロレスでもやれ」と。（朝日新聞 '94.5.4）
- (8) 根本監督（ダ）「チームのリズムを崩さないようにやっていだけ。まだ先があるから。ゲーム差を気に**してもしようがない**」（朝日新聞 '94.8.8）
- (9) 「〔前略〕でも、車が売れないのだから、『賃上げを』と**言っただってしようがない**よ」と話す。（朝日新聞 '94.1.13）
- (10) きちんと品質管理してなかったのだから、食中毒が起**こっただって仕様がなかった**のだ。（作例）
- (11) だいたい、健のやつ、責任感なんかないんだから、発起人になっておいて、当日出席しなく**たって仕様ががない**さ。（作例）
- (12) こんな状態では負**けても仕方がない**が、せめて一言相談しててほしかったな。（作例）
- (13) こんなお粗末な台本では、往年の大スターが主役であ**っても仕方がない**よ。（作例）

例)

(14) 完全試合まで残り一人になり、「ここまできたら、思い切って振って、アウトになってもしょうがない」と思い、打席に立ったという。(朝日新聞 '94. 3. 27)

(15) 最初から犯人だときめつけ、無自覚に情報を垂れ流すのでは、騒ぎ立てるだけの「お囃子 (はやし) ジャーナリズムだ」とさげすまれても仕方がない。(朝日新聞 '94. 4. 1)

(16) 「この方法は理論モデルに依存しすぎているから、あまり信用がおけない」とある会議で発言した人がいたが、現時点ではそういわれてもしかたがないだろう。(野本陽代「宇宙の果てにせまる」)

(17) 「悪いことをしたんなら、殴られても仕方ないじゃないですか」。(朝日新聞 '94. 11. 3)

(18) 野心満々とみられても仕方がない経歴である。(朝日新聞 '94. 3. 5)

(19) たとえば、売春反対を唱えている政治家が売春婦を買っていれば、それは、欺瞞行為であるから、政治家生命を断たれてもしょうがない。(柴門ふみ「恋愛論」)

文法

言い切りや「～が」「～のに」など独立度の低くない節で用いられ、連用中止は不可ではないがまれである。過去・推量の形もとれる。連体修飾も可能である。

ノート

1. 類義的な言い方として、「～したところで仕様がないう・仕方がない」といった言い方があるが、(1)の“～することに意味が認められない”意でしか使われない。

2. また、「～ても／～たってやむをえない」といった言い方もあるが、(2)の“～となっても、残念に思ったりできない”意でしか用いられず、「～ても／～たって仕様がないう」と違って、こちらは、その成り行きを一応あるべき筋目・筋道に反したこととはとらえない言い方のようなのである。従って、物事の道理に反した成り行きについてあきらめて言う場合などは、「やむをえない」は使いにくい。「あいつは、いい加減な奴なのだから、約束を破ったって仕方がない」とはいえるが、「あいつは、いい加減な奴なのだから、約束を破ったってやむをえない」は、いささか不自然だろう(いい加減な奴だからといって、約束を破って言い道理はないわけである)。

◇B32 ～ないではいられない

接続

動詞の未然形(「シテイル」の未然形「シテイ」も含む)に付く(サ変動詞については、「～シ」の形を承ける)。

意味・用法

「Aしないではいられない」の形で、その場の状況(及び主体の性向)からAする行為・有り様に入ってしまうのは、主体が押さえようとしても押さえられない必然のことだったというとらえ方を述べる。「せずにはいられない」「なくてはいられない」などの形もある。また、「いられない」の部分は「おられない」を用いることもある。

用例

- (1) こんな話を聞いてしまつては、泣か**ないで**いられない。(作例)
- (2) 当然至極、単純この上ないことながら、句にされてみると着眼の非凡さに感銘を受け**ないで**はいられない。(朝日新聞 '94. 10. 2)
- (3) 一個の人間として、私はそれを想像し**ないで**はいられないのです。(朝日新聞 '94. 12. 8)
- (4) すなわち、この地上に生を受けた人間のだれもが問いつづけ、われわれもまた人間として問わ**ないで**はいられない課題である。(中村元ほか「倫理・社会」)
- (5) 人間心理の的を見事に射当てていて、親近感を抱か**ず**には**いられない**。(朝日新聞 '94. 6. 19)
- (6) その後、参政権を皮切りに、受胎調節の自由を手中に収め、結婚後も人生の選択の幅を広げて、最近では夫婦別姓の声を上げるまでになった女性をみていると、五十年の歳月の重さを考え**ず**には**いられない**。(朝日新聞 '94. 9. 4)
- (7) しかし、枚数が少なくても、年賀はがきを買い求め、出せること自体、健康のあかしであり、感謝せ**ず**には**いられない**。(朝日新聞 '94. 11. 30)
- (8) しかし、苦勞して入国し、一生懸命働いて故郷に送金している姿を見ていると、かわいそうで助け**ず**には**いられなかった**。(朝日新聞 '94. 7. 22)
- (9) しかし、いま、親元から離れ、両親の作ったお米を子供たちと食べていると、どのようにして作ったかがわかるだけに、感謝せ**ず**には**いられなくなる**のです。(朝日新聞 '94. 4. 20)
- (10) 英語との格闘、まずさ中心の食談議、泥棒との遭遇、王室事情、英会話学校での珍事など、噴き出さ**ず**には**いられない**エピソードを満載。(朝日新聞 '94. 6. 12)
- (11) 子どもの行動がいちいち気にかかり、子どもが友達同士で遊んでいても口を出さ**ず**には**いられない**親。(朝日新聞 '94. 3. 16)
- (12) あの娘のことだから、箸がこけてもわらわ**ないで**おれ**なかつた**だろう。(作例)
- (13) 一言反論せ**ず**には**おれなくて**、彼は人垣を押し分けて進み出た。(作例)
- (14) 参加者には、もれなくスヌーピーの絵入りの懐中電灯が当たるというのだから、これは、行か**ず**には**おれない**話ですなあ。(作例)
- (15) あんなどころに一日中立たされていたんだから、風邪を引か**ないで**は**おれない**よ(作例)
- (16) そうしたことによって、新しい事実は次々に発見され日本の第四紀についてのこれまでの定説のいくつかは、破綻を示さ**ないで**は**いられなくなつた**。(亀井節夫「日本に象がいたころ」)

文法

言い切りや「～が」「～のに」など独立度の低くない節で用いられ、「～いられず」「～いられずに」「～いられなくて」「～いられないで」といった連用中止の形も、過去・推量の形もとれる。連体修飾も可能である。

ノート

1. 基本的に主体が自由に制御できるか、少なくとも制御を試みることで できる行為について使われる(例えば、例文(15)の場合、「風邪を引かないでおこう」と思って自由に「引かないで」いるというわけには行かないが、少なくとも「風邪を引かない」ように

その場で努めることはできるまた、例文(16)の場合は、“定説”を主張する主体が意識され、その説を正しいとしつづけようと務めてもできなくなったという含みで解されるものだろう)。そうではなく主体が制御を試みることさえできない行為・変化の場合は、いくら必然の成り行きでも、こうした言い方はできない。例えば、「こんなところを殴られては、死なないではいられない」などという言い方は、かなり不自然である。

2. 仮に制止しようという意志があっても、それを越えてしまうくらいだとの言い方があるので、明確な意志に基づいて迷いなくやることについては、たとえそれが必然的な行動であったとしても、こうした言い方はとりにくい。例えば、「明日までに金を払うと決めていたので、彼も働かないではいられなかった」は、かなり不自然で、このような場合は「明日までに金を払うと決めていたので、彼も働かないわけにはいかなかった」のようにするところであろう。

◇B33 ～てならない・～て仕方がない・～てしようがない・ ～てたまらない

接続

「～てならない」等の形で、感情形容詞の連用形「～ク」(動詞+タク)などを含む・感情的な意味の動詞の連用形に付く。「ならない」以外に、「仕方がない」「仕様がなない」「たまらない」なども用いられる。感情的な意味の形容動詞については、その連用形「～デ」+「ならない」の形で同様の用法がある(「ならない」以外は不自然なようである)。

意味・用法

「Aてならない」等の形で、Aという感情が抑えられないほど募っていることを述べる。しばしば、「～クってならない」のように促音の入った強調形でも用いられる。

用例

- (1) その生命がいとおしくて**ならない**。(朝日新聞 '94.9.23)
- (2) なんともその桐山という男が憎くて**ならなかった**が、憎めば静子が桐山にいじめられるみたいで、憎むことも出来なかった。(藤原審爾「風とまる」)
- (3) 春の到来が待ち遠しくて**ならない**のが、落語家の柳家小緑さん＝写真。(朝日新聞 '94.1.7)
- (4) 四十数年におよぶ長い付き合いだが、このまま交流が途絶えていくように思えて残念で**ならない**。(朝日新聞 '94.11.30)
- (5) おまけに、なんだかダルくて**仕方がない**。(さくらももこ「もものかんづめ」)
- (6) さまざまな場所でさまざまな人と芝居をすることが、楽しくて**仕方がない**。(朝日新聞 '94.12.28)
- (7) 部屋に閉じ籠ってテレビを見たが、退屈で**仕方がない**。ベッドに寝転がっても、なかなか眠りはやって来ない。(阿刀田高「夜間飛行」)
- (8) 「それにぼくは学校がおもしろくて**しかたがない**んです。[下略]」(井上ひさし「夏に花散る天坊一座」)
- (9) 「こういう仕事、やってみたくて**仕方がなかった**。[下略]」(朝日新聞 '94.3.17)
- (10) 私は葬式のおみやげの弁当が**楽しみで仕方がなかった**。(さくらももこ「もものか

んづめ」)

(11) 痛くて**仕方がない**が、病院に行くのは恥ずかしい。(朝日新聞 '94.2.21)

(12) 知事の緊張から解かれ、一人の人間に戻るのが**楽しみで仕方がない**ようだ。(朝日新聞 '94.12.7)

(13) 「自分がやりたくて**仕方がない**ものを探してほしい。(朝日新聞 '94.11.9)

(14) まして『泉』のあんなウェイトレスでは、睦子やユカ子の手前もカッコ悪くて**しかたがない**。(ねじめ正一「ただし恋愛」)

(15) 腹が立って**仕様が**ない和博は、傍らのドラム缶を思い切り蹴飛ばした。(作例)

(16) 昨夜、船においてかれたら困るので、このときばかりは母も時計も信用できず、目をしっかり開いたまま寝たので、眠くて**しょうがない**。(森村桂「天国にいちばん近い島」)

(17) それでも心の中では、そんなだらしのない自分が嫌で**しょうがない**。(朝日新聞 '94.12.22)

(18) 大学は楽しくて**しょうがなかった**。(朝日新聞 '94.2.28)

(19) 結婚したくて**しょうがない**若い男性が増えていると聞く。(柴門ふみ「恋愛論」)

(20) 他人の持っているものほど、自分の持っていないものほどステキに思えて、欲しくて欲しくて**たまらない**。(柴門ふみ「恋愛論」)

(21) いつまた大きな揺れが来るかと思うと、不安で**たまらない**。(朝日新聞 '94.1.18)

(22) そんな学食のおばさん達が特別につくってくれた炊きこみ御飯であるから、おいしくてうれしくて**たまらなかつた**。(さくらももこ「もものかんづめ」)

(23) 兄は転勤して豊橋にいるし、私がいなくなったら、母はわびしくて**たまらない**だろう。(森村桂「天国にいちばん近い島」)

(24) 事故以来、生きるのが苦しくて**たまらず**、何かにすがりたい一心で出かけた。(朝日新聞 '94.12.4)

(25) 「雑木林を歩いているうちに、絵本を書きたくて**たまらなくなりました**」(朝日新聞 '94.12.15)

(26) 彼とともに青春を過ごし、結婚したくてしたくて**たまらない**人と一緒になった私ですが、じつはプロポーズされたときはすでに心は冷めてしまっていたのです。(柴門ふみ「恋愛論」)

文法

「～なくて」の形で連用中止でも用いられ、連体修飾も可能である。過去・推量の形もとれ、疑問でも使えなくはない。

ノート

1. 感情形容詞と呼ばれるものは、一般に「わたしはそれが悲しい」のように、スル形の言い切り述語で使って、その感情主体を主語にとれるものである(感情的な形容動詞も同様)。ここでとり上げている「～てならない」等の表現が受ける形容詞も、基本的にはその種のものだが、一部例えば「やかましくてたまらない」の「やかましい」のように、そのような規定から外れるもの(「やかましい」は、「わたしはそれがやかましい」とは使えないだろう)も出てくることがある。例文(14)の「カッコ悪い」もその例である。

2. 「～てならない」等の表現が受ける感情的な動詞は、「腹が立つ」「悔やまれる」な

ど、もっぱら心中に感情が持続的に発生することを言うものであり、「いらいらする」のように外的に観察されるものとしての感情の動きや「がっかりする」のような瞬時的な感情の発生を言うものは受けることができない。

3. 類義的な表現として「～とितたらない」が考えられるが、「～とितたらない」は、広く物事のありようが並大抵の程度でないということを示すもので、問題になるのは感情に限らない。

関連項目

B 3 5 「～とितたらない」

◇ B 3 4 ～とितたらない

接続

形容詞・形容動詞の終止形（スル形）もしくは“語幹+さ”の形に付く。（「～シタイ」「～ナイ」など形容詞に準ずる語句も同様）。形容動詞の場合、「いやみたらありゃしない」のように、語幹を終止形相当として受けることもある。また、有り様の意味の読み取れる程度性の際立つ名詞も受ける。

意味・用法

「～とितたらない」の形で、物事のありようが並大抵の程度でないということを示す、詠嘆的に述べる。しばしば「～たらない」という省略形も用いられ、「～（とい）たらありゃしない」という形もある。

用例

(1) 来年の3月までには仕上げなくちゃならなくなっね、全く忙しい**とितたらない**よ。(作例)

(2) そんなことまで言われて、全く悔しい**たらありゃしない**。(作例)

(3) その時は、ほんとに死んだかと思ったんだけど、いたずらだと分かったときの馬鹿らしさ**たらなかつた**よ。(作例)

(4) 簡単そうだが、ゆっくり上げ下げすることのつらさ**とितたらない**。(朝日新聞 '94.3.5)

(5) 別に悪いことをしてはいたわけではないが、この時のはずかしさ、バツの悪さ**とितたらなかつた**。(朝日新聞 '94.12.20)

(6) しばらく仕事のつきに見放された状態が続きました。つらかったですね。劣等感、屈辱感**とितたらなかつた**。(朝日新聞 '94.7.2)

(7) 全然気がついてなかつたんだな。ほんと、あの時の彼女の顔**たらなかつた**ぜ。(作例)

(8) あいつ、ほんとに気が利かない**たらありゃしない**。(作例)

(9) 彼も、本気になってさ、やたら食ってかかる**たらなかつた**よ。(作例)

文法

詠嘆的な言い方であり、基本的に言い切りで用いられ、「とितたらなかつた」と回想的に過去の形はとれるが、連用中止や連体修飾の形では用いられない。

ノート

1. 感情形容詞も状態形容詞も受けるが、主観的なとらえ方が際立つ語を受け、どちらかという物事の客観的なありようについていう語は受けにくい。例えば、「その赤さったらなかった」とか「まったく正しいといたらありゃしない」などという言い方は、困難であろう。また、例文(6)のように、その行為の程度性が際立つ場合には、動詞でも受けることが有り得る。

2. “語幹+さ”の形や名詞を受ける場合は、「そのやかましさといたらない」の「ない」の部分に、「ない」に代えて程度表現のいろいろな述語をとれる（「そのやかましさといたら並大抵でない」「そのやかましさといたら物凄いものだ」等々）。この場合、「ない（ありゃしない）」は、こうした程度述語の特殊なものとも見ることができる。これに対して、終止形を受ける場合は、「ない」に代えて別の程度表現述語をとることはできない。

3. 類義的な言い方として、「おかしいのおかしくないのって（ない）」「おかしいのなんのって」のような言い方が、考えられる。「おかしいたらない」に比べ、大仰なだけ詠嘆の度合いの強い言い方といえよう。

◇B35 ～つつある

接続

動詞の連用形に付く。細かには文法の項参照。

意味・用法

「Aつつある」の形で、Aの動詞（述語句）の表わす行為が成立・完成する完了点に向けて、行為・動作・変化が継続進行していくことを示す。

用例

- (1) 燭台の明かりも、もはや消え**つつあった**。(作例)
- (2) 都市の成長，農民解放の動き，国王の力の伸張にみられる，14～15世紀のヨーロッパの社会変動は，中世のわくを破り**つつあった**。(土井正興ほか「三省堂世界史」)
- (3) 政治が大きく動き**つつある**いま、新聞の政治報道はどう評価されているのか。(朝日新聞 '94.10.18)
- (4) 最近ピークを超え**つつある**とはいえ、都市部では前年比二〇%前後の物価上昇が続いている。(朝日新聞 '94.8.14)
- (5) 最後に、日本は国連安保理常任理事国入りを希望しているようだが、それは沈み**つつある**タイタニック号の一等船客になりたがっているようなもの。(朝日新聞 '94.11.18)
- (6) ジェット機は、滑走路を滑走し**つつあった**。(作例)
- (7) 三百数十キロ離れたチェルノブイリ原発から飛び散った放射能は、風に乗って北上し**つつあった**。(朝日新聞 '94.10.16)
- (8) 私は自分の運命が、大きく開け**つつある**のを感じた。(森村桂「天国にいちばん近い島」)
- (9) 女子の志向が四年制に移り**つつある**うえ、大学で編入枠を増やしている
- (10) フラれて泣くのは男の子 男と女がどんどん近づき**つつある**世の中である。(柴門ふみ「恋愛論2 応用篇」)

(11) 道場氏は、秋の味覚を生かして、茶わん蒸しを作り**つつあった**。(作例)

(12) 日本での研究論文集を作り**つつある**張さんは、今も資料探しに研究室をよく訪ねる。(朝日新聞 '94.5.19)

(13) S F の域を出なかったこの人工生命がいま、主にコンピューターサイエンスの分野で具体化し**つつあります**。(朝日新聞 '94.2.4)

(14) 委嘱を請けた研究所では、その文書を解読し**つつあった**。(作例)

(15) 20世紀後半の世界においては、欧米の植民主義によって長い間抑圧されていたアジア・アフリカ・ラテンアメリカの諸民族が自主的な生活と文化をとりもどし**つつある**。(土井正興ほか「三省堂世界史」)

(16) 社会主義建設の第1次5か年計画を実施し**つつある**ソ連だけは、恐慌下の諸国と異なってこの時期にめざましい工業化に成功した。(土井正興ほか「三省堂世界史」)

(17) オーストリアの加盟決定で、ドイツ語人口も英語に次ぐ地位を固め**つつあり**、公式文書をめぐる三言語の勢力争いは激しさを増しそうだ。(朝日新聞 '94.8.5)

(18) 日本の一般家庭ではもはや見られなくなった豆炭と七輪(コンロ)が、いまアフリカのザンビアで森林減少を食い止めるのに、重要な役を演じ**つつある**。(朝日新聞 '94.2.2)

(19) その船は、洲本港に向けて進み**つつあった**。

(20) その快晴の虚空を、はるか太陽の彼方からこちらに向い**つつある**という彗星の姿を、私は想像しようとしてみた。(石川喬司「彗星伝説」)

文法

「つつある」は、継続動詞(～テイル形で動作の継続を表わす動詞)とも、瞬間動詞(～テイル形で瞬間的動作の結果の残存を表わす動詞)とも結びつくが、状態動詞(「ある」など～テイル形がとれない動詞)や第四種動詞(「そびえる」など言い切りとしては～テイル形しかとれない動詞)とは結びつけない。「～シつつあり」のような連用中止の形や連体修飾でも用いることができるが、「～シつつある」に対する否定の言い方はなく、また、命令や意志の表現でも用いられない。

ノート

1. 瞬間動詞+「つつある」の場合、例文(1)～(5)のように、動詞の表わす瞬間的変化が成立する時点にむけて変化が進行していく意味を表す。

2. 継続動詞+「つつある」の場合、以下の3のような条件がなければ、例文(6)～(10)のように、動詞の表わす動作・行為に完全に入り切ってしまう時点にむけて変化が進行していく意味を表す。

2. 継続動詞+「つつある」が、①例文(11)～(13)のように動作結果として生まれるものを示す目的語を伴う場合、②例文(14)～(18)のように特定されるものを表わす目的語を伴う場合、③例文(19)(20)のように動作の目的地を規定する語句を伴う場合には、動詞の表わす動作の進行する意味を表す。こうした条件によって、継続動詞の継続動作がどこまで続けられたら完了かが明示されることになる(①なら結果としてその産物を生み出すまで、②ならその特定のを処理するまで、③なら目的地まで)ので、その時点までの動詞の表す動作の進行が示されることになるのである。このような場合に限り、「～シつつある」は「～シている」とほぼ同義に書き換え可能になる。

関連項目

B 3 7 「～（よ）うとする」

参考文献

高橋純(1996)

◇B 3 6 ～（よ）うとする

接続

動詞の未然形（「シテイル」の未然形「シテイ」も含む）に付く。

意味・用法

動詞の未然形を受けて、

- (1) 主体がその行為の実現を意図して、そのための行動・態勢に入る、
- (2) 事柄の実現が近づいている、という意味を示す。

用例

- (1) 佐藤氏は、直美に本当のことを話そうとした。(作例)
- (2) おもしろい本を読むと、子どもは親に感動を伝えようとする。(朝日新聞 '94. 10. 7)
- (3) 政治家はこぞって「政治改革」を唱えるが、疑惑をかけられると「知らぬ存ぜぬ」を繰り返し、ウヤムヤにしようとする。(朝日新聞 '94. 4. 6)
- (4) 彼女は、その家の前に立つと、すぐそのドアをひこうとした。(澤野久雄「小さな林檎の実から」)
- (5) 財政難におちいったルイ16世は、重農主義者チュルゴーを蔵相に任命し、特権身分へも課税して、国庫収入をふやそうとした。(土井正興ほか「三省堂世界史」)
- (6) イエズス会は東洋でカトリックの勢力をひろめようとしていた。(宝月圭吾ほか「詳説日本史(再訂版)」)
- (7) 徹底的に嫌ったのは長女の真弓で、鮎が来てから、うち中が生臭くなった、と言い、顔をそむけて絶対に鮎を見ようとしなかった。(向田邦子「鮎」)
- (8) 自動車不況の中で、メーカーは未来車の研究開発をどう進めようとしているのか。(朝日新聞 '94. 1. 7)
- (9) 私は手紙を彼女に返そうとして、何気なく封筒の裏を見た。(石川喬司「彗星伝説」)
- (10) 政府は、地租改正を進めるとともに、近代的な産業をさかんにしようとし、さまざまな改革を進めていった。(鶴飼信成ほか「新しい社会[公民]」)
- (11) 固体は形が一定で、圧縮しようとしても体積はほとんど変わらない。(坪井忠二ほか「新理科1分野上」)
- (12) せっかく自分の言葉で語ろうとしたのに、うまくいかなかった。(朝日新聞 '94. 10. 20)
- (13) しかし日本全体に水まきで一ミリの雨を降らせようしますと、日本人一億人として、総出で一人ドラム缶十九本ぐらいまかないと一ミリになりません。(朝日新聞 '94. 8. 29)
- (14) 仮に貯蓄だけで老後の生活を賄おうとすれば、かなり多くの金額を保有しなければ

ばならないであろう。(経済企画庁編「平成10年版国民生活白書」)

(15) ブランドで恋人選びをしようとしている人たちは、きっと一生燃える恋に巡り合えないであろう。(柴門ふみ「恋愛論2 応用篇」)

(16) 先日、定期預金を下ろそうとしたとき、若い局員に「利率の高い時の定期ですの
で、短期間でしたら、貸し付けの方がお得です」と言われ、解約せずに済んだ。(朝日新聞 '94.8.12)

(17) スクリーンから文字が消えても、席を立とうとしない観客がいる。(朝日新聞 '94.3.23)

(18) 価値の多元化時代に自分を見失うまいとすると、何かにこだわらざるをえない。
(朝日新聞 '94.4.3)

(19) 二人の対戦を一手も見逃すまいとする目の肥えたギャラリーたちの真剣なまなざしが印象的だった。(朝日新聞 '94.8.16)

(20) この時、沖縄ではサミットが開かれようとしていた。(作例)

(21) 夏の夜は短く、もう夜が明けようとしていた。(作例)

(22) あれから間もなく二年がすぎようとしている。(夏樹静子「鼓笛隊」)

(23) 風化しようとしている戦争体験を五十年という節目の前にきちんと刻んでおきたい」と話している。(朝日新聞 '94.7.30)

(24) 人口が増加する時代が終わろうとしている。(経済企画庁編「平成10年版国民生活白書」)

(25) ライフスタイルが変わろうとしている現在、できるだけ多くの方が納得でき、みなさんの「暮らし」に役立つニュースをお届けしたいと考えています。(朝日新聞 '94.2.20)

(26) 東京生活も、半年になろうとしています。(朝日新聞 '94.9.17)

(27) 摘発は企業のトップクラスや地方自治体の首長から中央政界にも及ぼうとしており、そこに検察の意気込みを見る思いがする。(朝日新聞 '94.1.28)

(28) 涼子の身体は、青白い夜光虫に取囲まれながら沈もうとしている。(黒岩重吾「海の螢」)

文法

五段動詞には「うとする」、それ以外には「ようとする」の形で接続する。意志的な動作を表す動詞を受ける場合は、(1)の用法になる。主語としては意志をもつ主体がとれる。無意志的な動き・変化を表す動詞を受ける場合や、例文(20)のように受け身化されて動作主が背後に隠れ、出来事の叙述だけが表に出てくる場合は、(2)の用法になる。後者の用法の場合、例文(21)～(28)のようにテイル形でしか用いられない。(1)の用法では、例文(18)(19)のように行為の非実現を意図する言い方として「～スルまいとする」という形があるが、これは、いささか古風な語感がある。

ノート

1. (1)の用法でも、テイル形をとると、意図された行為の実現に向けての動作の継続という面に焦点が当てられ、実現へ向けての進行・実現が近づくという意味が表立ってくる。

2. (2)の用法に関連して、類義的な言い方として「～シつつある」が考えられるが、

「～シつつある」は、実現に向かって既にそれにつながる動作に入っていることをいうが、「～シ（よ）うとしている」は、その実現が近づいていることをいうのが基本で、必ずしもそれにつながる動作に入っているとは限らない。従って、「三日後に、臨時国会が開かれようとしていた」とはいえても、「三日後に、臨時国会が開かれつつあった」というのは不自然である。

関連項目

B 3 5 「～つつある」

◇ B 3 7 ～かもしれない

接続

前接語が、動詞・形容詞の場合、スル形・シタ形（動詞については、シテイル形・シテイタ形を含む）に付く。形容動詞・名詞の場合、「～デアル／デアッタかもしれない」となるか、語幹もしくは名詞に直接付く。また、「～のかもしれない」といった形でも用いられる（この場合、形容動詞・名詞については、「～デアル／デアッタ／ナ」の形で承ける）。

意味・用法

「Aかもしれない」の形で、Aであると考えが、それが絶対確実とも言えないとする推量を述べる。

用例

- (1) もう少し遺伝子の解読が進めば、人間の老化のなぞも解明される**かもしれない**。(作例)
- (2) あなたがたは面白い**かもしれない**が、そんなものを書かされる私の身にもなってみなさいよ。(作例)
- (3) 芸風も所属する協会も異なる二人が師弟であることを意外と思う**かもしれない**。(朝日新聞 '94. 3. 12)
- (4) 高台の地区などでは水の出が悪くなる**かもしれない**という。(朝日新聞 '94. 7. 19)
- (5) 最近では、電子レンジがなければ生きていけない、という人も多**いかもしれない**。(野本陽代「宇宙の果てにせまる」)
- (6) その意味で、二年目を迎えたJリーグは恐らく、ファンの怖さを味わう**かもしれない**ね。(朝日新聞 '94. 3. 27)
- (7) あなたに怪我がなかったことがわかれば、警察でもそこまでは調べない**かもしれない**けど。(夏樹静子「鼓笛隊」)
- (8) 日本の伝統のなかには、人生に対するすぐれた考えかたが含まれている**かもしれない**。(中村元ほか「倫理・社会」)
- (9) あなたは「きちんとしたメイク」だと思っていることが、じつは、ケバいと思われている**かもしれない**のです。(柴門ふみ「恋愛論」)
- (10) 全く新しい素粒子の仲間「超対称粒子」をとらえた**かもしれない**興味深いデータが、文部省高エネルギー物理学研究所（茨城県つくば市）の粒子加速器トリスタンの実験で出てきた。(朝日新聞 '94. 2. 14)

(11) このとき、ヴェーゲナーの見た地図が正確なものでなかったとしたら、彼は大陸移動説を思いつかなかった**かもしれない**。(野本陽代「宇宙の果てにせまる」)

(12) もっと早く行動を起こしていれば、あるいはこれほど收拾不能な状態にはならず済んだ**かもしれない**。(朝日新聞 '94. 11. 9)

(13) 多分、彼は彼女が好きだったの**かもしれない**な。(作例)

(14) とすれば多分、植民地時代に西欧化がより進んだアフリカよりも、独自の文化の長い歴史を持つアジアに、〔民主化への〕反発は強い**かもしれない**。(朝日新聞 '94. 1. 29)

(15) 平気で悪口なんか言うから、ほんとに天狗の罰があたったの**かもしれんぞ**。(作例)

(16) 二十面相の奴は、その事実を知ったの**かも分からないぞ**。(作例)

(17) 片道十分程度なので、大した運動にはなっていない**かもしれない**が、それ以前よりは確実に足の筋肉がついてきた。(柴門ふみ「恋愛論2 応用篇」)

(18) もしかしたらこの男の人は水道屋さんで、真夜中なのに点検に来たの**かもしれない**。(さくらももこ「もものかんづめ」)

(19) 迷わずに使っていたら、いくらかでも効果があったから**かもしれず**、一概に薬効がなかったとも言い切れない。(作例)

(20) ひょっとすると、さっきの電話は彼からのもの**かもしれない**。(作例)

(21) ひょっとすると、この作品のカヌ・グランプリ受賞は、西欧のオリエンタリズムを刺激しただけのこと**かもしれない**。(朝日新聞 '94. 5. 12)

(22) 確かに、あなたの言うとおりの**かもしれない**。しかし、世の中には論理で片付かないこともあるのだ。(作例)

(23) ビッグ・バン自体が、前の宇宙の死**かもしれない**。(石川喬司「彗星伝説」)

(24) ちょっと耳慣れない名前**かもしれない**が、ギリシャ語の「五」に由来すると聞けば納得する。(朝日新聞 '94. 9. 26)

(25) ご存じ**かも知れませんが**、私たち、もうすぐ結婚します。(作例)

(26) ですが、それがかえってよかったの**かも分からない**。(朝日新聞 '94. 7. 19)

(27) こうした自然災害に際しての行動の仕方に限らず、いつ巻き込まれる**かもわからない**旅先での火事や交通機関の事故、デマやパニックへの対処の仕方は、家庭や地域社会だけで教えるのは難しい。(朝日新聞 '94. 6. 27)

文法

「かもしれない」は、言い切りでも、「かもしれず」のような中止形でも、連体修飾でも用いられる。「かもしれなかった」のように過去形もとれる。また、「かもしれない」の「ない」は、しばしば「ぬ(ん)」とも交替する。

ノート

1. 口頭語では、「かもわからない」というヴァリエーションが見られ、また、「そうかもね」のように「かも」という省略形も使われる。

2. 「かもしれない」は、しばしばそうであると確信する度合いが低い言い方とされる。確かに共起する副詞としては例文(20)(21)のように、「ひょっとすると」などが典型的だが、例文(6)(13)(14)のように「多分」「恐らく」など確信の度合いがかなり高いものとも

結びつき、一概に確信の度合いが低いとも言えない。「かもしれない」が共起できないのは「絶対」「明らかに」のような絶対的な確信を表わすもので、この点から考えると、基本的には、「かもしれない」は、そう考えるが、それが絶対確かだ、そうでしかないとは見ていないといった気持ちでの推量を示すとするのが穏当であろう。そして、そのような意味から、例文(21)のようないったん相手の主張を受け入れる言い方や例文(2)(25)のように相手に配慮して決めつけない言い方も出てくるものと考えられる。

関連項目

B 2 3 「～にちがいない」

参考文献

寺村秀夫(1984)・野田尚史(1984)・森山卓郎(1989)

◇ B 3 8 ～とは限らない・～とも限らない

接続

前接語が、動詞・形容詞の場合、スル形・シタ形（シテイル形・シテイタ形を含む）に付く。形容動詞・名詞の場合、「～デアル／デアッタとは限らない」となるか、語幹もしくは名詞に直接付く。

意味・用法

「Aとは限らない」の形で、Aと考えられるだろうことを予想しつつ、自身の見解に立ってA以外の可能性もあると述べる。「とも限らない」は、「とは限らない」の「は」が「も」に入れ替わったバリエーションで意味・用法が変わらない場合もあるが、「Aナイとも限らない」と否定を受ける形で、Aする可能性がすこしでもあるという推量判断を示すことがある。。

用例

- (1) なにも、下手人が侍だった**とは限らない**だろう。(作例)
- (2) きれいなバラならみんな刺がある**とは限らない**さ。(作例)
- (3) お嬢様だからと言って、おとなしい**とは限らない**よ。(作例)
- (4) 男が皆狼**とは限らない**。(作例)
- (5) これであまく行く**とは限らない**が、まずは様子を見てみよう。(作例)
- (6) 会える**とは限らない**人を追って、どこまで行くつもりなのだ。(作例)
- (7) 必ずしも多数派の世論が正しい**とは限らない**。(朝日新聞 '94. 2. 7)
- (8) そして、一つの恋のすぐあとに新しい恋に巡り合える**とは限らない**。(柴門ふみ「恋愛論」)
- (9) 地下室といっても暗い**とは限らない**。(朝日新聞 '94. 9. 13)
- (10) もうインターネットが結ぶのは、人間だけ**とは限らない**。(朝日新聞 '94. 5. 9)
- (11) 痛みなどを起こすのは激しい運動**とは限らない**。(朝日新聞 '94. 1. 23)
- (12) 「歴史的混乱に陥った社会に身を置くのは、創作者にとっては不幸**とは限らない**。(朝日新聞 '94. 1. 6)
- (13) それより大事なことは、世の中がコンピュータのおかげでますます便利になるとしても、それで人間が幸せになる**とは限らない**、ということでしょう。(野崎昭弘「人工

知能はどこまで進むか」)

(14) 見たことがないからといって、いない**とは限らない**し、いなかったとしても信じていけば、私の心の中でサンタクロースは、いつまでも存在している。(朝日新聞 '94. 12. 2)

(15) 子供と同居している高齢者が必ずしも経済的に子供に依存している**とは限らない**が、逆に経済的に子供に依存している高齢者にとっては同居による生活費節約の効果は非常に大きいといえよう(図1)。(経済企画庁編「平成10年版国民生活白書」)

(16) 三交代制の看護婦の場合、土・日曜日が休める**とは限らない**が、だいたい三日に一度は休みの計算だ。(朝日新聞 '94. 10. 18)

(17) しかし、事実は変わりやすく、常に真実を伝える**とは限らない**から、その演出や表現手段はリサーチや事実に基づいて真実を伝えようとする制作者の判断にまかされる。(朝日新聞 '94. 9. 14)

(18) 容姿とか、大手のメディアに出たからというだけで人気が出る**とは限らなくなる**。(朝日新聞 '94. 10. 10)

(19) 算数でも答えが一つ**とは限らない**問題や、素材を示して問題そのものを作らせる問題など、児童が自分で考えたり判断したりする力を試している。(朝日新聞 '94. 3. 16)

(20) カネが絡んでいる話だから、下手をしたら、妙な事件に巻き込まれない**とも限らない**。(朝日新聞 '94. 7. 23)

(21) あまり調子に乗ってつまらないことを言うと、検察官が義行のアリバイのことを蒸し返さない**とも限らなかつた**。(作例)

(22) 元気でいると元気であることが当たり前のように思われるが、私だっていつ入院しない**とも限らない**。(朝日新聞 '94. 3. 24)

(23) ひょっとして、「うそ」から「まこと」が出てこない**とも限らない**。(朝日新聞 '94. 4. 1)

文法

言い切りや「～が」「～ので」など独立度の低くない節で使われるのが一般で、「～とは限らず」というような中止形や連体修飾では、使わえなくはなかろうがかなりぎこちない。「～とは限らなかつた」と過去の形はとれる。「～シナイとも限らない」は、やはり、言い切りや「～が」「～ので」など独立度の低くない節で使われるのが一般で、「～とは限らず」というような中止形や連体修飾では、かなり使いにくい。過去の形はとれる。

ノート

1. 「Aとは限らない」は、「Aに決まっている」という言い方のいわば裏返しである。「そうにきまつてるよ」「いや、そうとは限らないよ」という応答になることから知られるように、A以外の可能性はないという「Aに決まっている」の主張を否定すると、A以外の可能性もあると述べる「Aとは限らない」という表現が対応してくるのである。

2. 「Aナイとも限らない」は、可能性は高くないが有りうることを推し量ってという言い方で、その意味では、一見「Aかもしれない」と近いもののように見える。しかし、「Aかもしれない」は、「多分そうするかもしれない」のように、可能性がかなりあるという気持ちを示す副詞とも結びつき、実際は、可能性が絶対とはいえない程度の気持ちで推量する言い方である。それに対して、「Aナイとも限らない」は、「ひょっとするとそうし

ないとも限らない」とはいえども「多分そうしないとも限らない」などとはいえず、可能性が本当に高くないという気持ちでしか使えない言い方だといえる。そして、その必ずしも大きいわけでない可能性を云々する言い方であるから、いちいち気にしている・気遣っているというような語感も際立ってくるのであろう。

関連項目

B 1 9 「～に決まっている」、B 3 7 「～かもしれない」

◇ B 3 9 ～得る

接続

動詞の連用形に付く。

意味・用法

「A得る」の形で、状況・性質などからAすることが可能であるということ を言う。

用例

(1) 作物の生育が天候や疫病に左右される生産性の不安定な社会状況では、大規模な飢饉がしばしば起こり**得**た。(作例)

(2) 被害者側のプライバシーについて何らかの保護措置を考えなければならなくなる場面もあり**得**るだろう。(作例)

(3) 美術展で、図録に写真が掲載され、解説などに「出品」とありながら実際には展示されていないという事故は、たまには起こり**うる**。(朝日新聞 '94. 2. 23)

(4) 日本には多数の外国機が乗り入れており、外国機絡みの事故は今後もあり**える**。(朝日新聞 '94. 12. 14)

(5) うまくすれば、首都移転の必要がなくなることも十分あり**得**よう。(朝日新聞 '94. 3. 30)

(6) 万が一、銀行倒産でも起これば、預金の一部切り捨てすらあり**うる**かもしれない。(朝日新聞 '94. 12. 12)

(7) しかし、要介護となることは誰にでも起こり**得**、しかも、いったんそうなると、その費用負担も、介護する人の負担もかなりのものとなり得るために、多くの人が介護に不安を感じている。(経済企画庁編「平成10年版国民生活白書」)

(8) 確かに、よほど条件が良ければ、数千万年以上前の化石からDNAを取ることができるケースもあり**得**るが、極めてまれ。(朝日新聞 '94. 10. 4)

(9) なお、「改正の目玉」とされている「五年別居」条項の導入については、本来ケース・バイ・ケースである「破綻」を一律に判断するという点で疑問があり、「離婚の自由」を規制する方向でも働き**うる**ので、賛成できない。(朝日新聞 '94. 11. 24)

(10) 障害者も社会にかかわって生きざるを得ないので、出来**得**るならば特殊教育と普通教育校の双方が同じ敷地で学び交流を持ち、それぞれに合う教育を受けられたら良いと思います。(朝日新聞 '94. 4. 2)

(11) 人がもしそれぞれの役割を持ってこの世に生かされているとしたら、彼にもたらされたそれはまさしく、彼でしか成し**得**られないものだったと思う。(朝日新聞 '94. 6. 1)

(12) 将来の治療の柱にもなり**得**る遺伝子治療だけに、どんな形で始めたら良いのか慎

重な検討が必要だろう。(朝日新聞 '94. 2. 5)

(13) 原爆の使用は、人類の滅亡をもたらし**得る**唯一の要因であることを再認識しなければならないと思う。(朝日新聞 '94. 10. 13)

(14) 経済大国をめざし共通の目的を掲げ**得**た時代にはなかった現象が広がっている。(朝日新聞 '94. 1. 3)

(15) 十八世紀になって実用化されたピアノも、小さい部品にかかる力とその運動を力学的に計算し、材料を非常に高い精度で加工する高度な技術なしには完成し**得**なかった。(朝日新聞 '94. 11. 27)

(16) オペラは女性歌手がいなければ存在し**え**ないし、ごつい男がゴリゴリと楽器を弾くより、きれいな女性が弾く方がだれが見ても華があるし音楽的だ。(朝日新聞 '94. 1. 16)

(17) これに対し、検察側の控訴を受けた二審の大阪高裁は九一年九月、自白について「犯人しか知り**得**ない事実が含まれ、客観的証拠と符合するものもあり、重要な点で信用できる」と評価。(朝日新聞 '94. 10. 20)

(18) 夫婦の話し合いが離婚や病気で不可能な場合や、合意ができない場合などはどうするか、裁判所が決め**得る**か、といった問題が出てくる(朝日新聞 '94. 7. 14)

(19) 本書がそうした問題にただちに有効な解決を与え**得**ているわけではむろんない。(朝日新聞 '94. 11. 13)

(20) だから、彼とラグビー観戦に行くのなら、ラグーたちに充分対抗し**得る**ボーイフレンドを選ぶべき。(柴門ふみ「恋愛論」)

(21) 新幹線も、現在なお利用客が着実に増加していることから考えても、今後どのくらい長期間利用されるのか、だれも知り**得**ないが、長く日本列島を支えるであろうことは明瞭(めいりょう)である。(朝日新聞 '94. 10. 8)

(22) 減税はありがたいが、財源のめどのない減税などあり**得**ず、直間比率是正の上からも、消費税アップは避けられないものと覚悟はしていた。(朝日新聞 '94. 10. 1)

(23) その戦いは既に始まっているはずで、政党が政策を示し**得**ないなら、政党ではなく政治家を選ぶ選挙制度を再び検討しなければならなくなるかも知れない。(朝日新聞 '94. 10. 29)

(24) そしてこの問題は、じつは私がドイツへ留学する際に解決し**え**ないままであった問題に、ひとつの解答を示してくれる問題でもあったのです。(阿部謹也「自分のなかに歴史をよむ」)

(25) 貧困の問題は、こうした必要限度の貨幣収入が得られず、最低限の生活資料を購入し**得**ないところに発生する。(辻清明ほか「政治経済 新訂版」)

文法

言い切りや「～が」「～のに」など独立度の低くない節で用いられ、「～シえ(て)」といった連用中止の形も不可ではないが、稀であろう。過去・推量の形もとれる。連体修飾も可能である。

ノート

1. 可能表現だが、可能と言っても用法が限定されており、基本的に状況・条件的に可能であることをいう用法しかない。能力的に可能であるといったいみの言い方はできない。

つまり、「彼は英語を話せる／話すことができる」のような可能にする能力を持っている意味の可能表現として「彼は英語を話し得る」とは言えない（例文(18)のような例でも、「裁判所が決める」ことができる法的条件が整っているかという意と解される）。

2. 漢文訓読に由来するやや硬い言い方で、基本的に硬い書き言葉専用と言える。それゆえ、用法も固定化しつつあるようで、上記のような文体的な経緯から、サ変動詞・連用形の「～し（／じ）得る」や、「ある」の連用形を受けた「あり得る」のような形が多い。このことから、あるいは同じ連用形でも「～し／じ／り」といった活用語尾のものと結び付きやすいという傾向が生じて来ているのかもしれない。たとえば、サ変動詞や「ある」でなくても、「なし得る」の方が「行ない得る」より使いやすそうであるし、「起こり得る」の方が「起き得る」より自然な印象があるように思われる。

関連項目

B 1 3 「～ことができる」

◇ B 4 0 ～ざるを得ない

接続

動詞の未然形に付く。

意味・用法

「Aざるを得ない」の形で、Aのようにしない・ならない可能性はないという事実・成り行きのもとで、必ずAということになるという判断を述べる。

用例

- (1) 君の意気込みを聞けば、私だって本気になら**ざるを得ない**よ。（作例）
- (2) 確かに幕府財政をある程度立て直した田沼の功績は、定信も認め**ざるを得なかった**。（作例）
- (3) 今回はいったん見送ら**ざるを得ない**が、次の機会を記することにしよう。（作例）
- (4) さすがに法医学界の権威の鑑定だけに、裁判所としても証拠として採用せ**ざるを得ず**、それが冤罪を生む一つのきっかけとなってしまった。（作例）
- (5) この寒さでは、今夜は雪になら**ざるを得ない**だろうな。（作例）
- (6) 税制改革論議は、しばらく先延ばしになら**ざるを得ない**だろう。（朝日新聞 '94. 6. 30）
- (7) デジタル技術で大容量情報の伝送を可能にする光ファイバーケーブルの今後の普及によって、幅広い領域を一つのチャンネルでしか放送出来ない今のテレビ形態は変わら**ざるを得ない**、との見方があるからだ。（朝日新聞 '94. 11. 1）
- (8) 打つ手がすべて裏目に出て、ついに憂慮せ**ざるを得ない**事態を招いてしまった。（作例）
- (9) 固定資産税を上げれば、土地の有効利用を考え**ざるを得ない**。（朝日新聞 '94. 2. 19）
- (10) この連休にテレビの画面に映し出された人の群れとごみの山に埋まった屋久島の姿に、私はがく然とせ**ざるを得なかった**。（朝日新聞 '94. 5. 27）
- (11) ついには、悩み抜いた末に病院でのケアを選ば**ざるを得なかった**のです。（朝日

新聞 '94.10.18)

(12) トイレやふろ場が狭くて段差がある家の場合、要介護になると施設や病院に移ら**ざるをえず**、それが特別養護老人ホームの増設や医療費の増大を余儀なくさせる。(朝日新聞 '94.7.9)

(13) 「かりに何らかの告白があったとしても、〔少年に〕罪を問えるわけではない。成人の事件のように裁判所へ起訴する手続きがない以上、慎重になら**ざるをえない**し、結論を急ぐ必要もない」(捜査幹部)との判断からだ。(朝日新聞 '94.2.25)

(14) 仕事に行く際も、月に三、四回病院通いしなければならない私は、現行料金でさえも往復ともにタクシーを使わ**ざるを得ない**ので、一回ごとに四、五千円もの金が消えてゆく。(朝日新聞 '94.6.22)

(15) 立場はどうであれ、銃を持た**ざるを得ない**現状が不幸だ。(朝日新聞 '94.11.7)

(16) これらの医薬品は「副作用発生の危険性が高いが、ほかに代わる治療法がなく、危険性を承知で使わ**ざるを得ない**ケースがあるから」というのが厚生省の説明だ。(朝日新聞 '94.10.6)

(17) 数千万円の入居一時金を払って、「終身利用型」ホームに入りながら、介護用の部屋や職員が足りないため、老人病院に移ら**ざるをえない**お年寄りも少なくない。(朝日新聞 '94.5.21)

(18) 言論弾圧の中で、子どもですら、本当の気持ちとは裏腹のことを書か**ざるを得なかった**事情がうかがえる。(朝日新聞 '94.8.8)

文法

言い切りや「～が」「～のに」など独立度の低くない節で用いられ、「～ず」「～ずに」といった連用中止の形(「～なくて」「～ないで」も不可ではないが、口調がよくない)も、過去・推量の形もとれる。連体修飾も可能である。

ノート

1. 「Aざるを得ない」という言い方は、“避けられない成り行き”であることを念頭に置いて、Aという結果・結末になる(それ以外の可能性はない)とする言い方であるので、しばしば「望んだわけではないが」「不本意ながら」といった含みが生じてくる。

2. 「Aざるを得ない」という言い方は、動作主が自分でできる行為について言う場合と、そうでない場合とで、かなり意味合いが違ったものになってくる。前者の場合、自分で自由にできることについて「(成り行きからして)Aする以外の可能性がない」ことをいうのだから、そうする必要があるという当為の表現になってくる。後者の場合、物事が“避けられない成り行き”であることに焦点が当てられて、事実の必然的な関係を述べる表現になる。

3. 当為の表現として、類義的なものに「Aべきだ」「Aなければならない」があるが、これらは、相手に対して、命令的な言い方で用いることができるのに対して、「Aざるを得ない」はそうした用法ができない。つまり、「すぐ行くべきだ」「すぐ行かなければならない」と相手に言ってそうさせることはできるが、「すぐ行かざるを得ない」は、そのようには使えない。これは、「ざるを得ない」に「望んだわけではないが」といったニュアンスが付いて回ることによるようである。つまり、望んだわけでもないのに、それを相手に持ちかけてそのようにさせるべく促すのは、矛盾した行為だからであろう。

関連項目

B 4 1 「～べきだ」、B 4 2 「～なければならない」

参考文献

野林靖彦(1996b)・森山卓郎(1997)

◇ B 4 1 ～べきだ

接続

動詞のスル形（なお、シテイル形も含む）に付く。サ変動詞については、古い終止形の「～ス」の形に付くこともある。また、形容動詞・“名詞＋断定の助動詞”の「～デアル」の形に付く。形容詞については、敢えて受けるなら「～クある」の形を受ける（ex. 「美しくあるべきだ」）が、やや無理した言い方という印象がある。

意味・用法

「Aスルべきだ」の形で、話し手がAという行為・事態の実現が妥当だと評価し、それが必要だと述べる言い方である。否定の言い方として、「Aスルべきでない」があり、Aという行為・事態の実現が妥当でないとし、実現回避が望ましいとする言い方である。

用例

- (1) 毎食後には、歯を磨く**べきだ**。（作例）
- (2) 岩国に行くなら、ぜひ錦帯橋を見る**べきだ**。（作例）
- (3) 日本映画でいいものがあれば、米国に「リメイクしてみては」と積極的に売り込む**べきだ**。（朝日新聞 '94.5.7）
- (4) しかし、苦情がある乗客は、やはり言葉でいう**べきだ**。（朝日新聞 '94.9.13）
- (5) すべての人は同じように自由・権利を保持し、平等である**べきである**。（鶴飼信成ほか「新しい社会〔歴史〕」）
- (6) 高い買い物ですから、建物の構造のほか権利関係もチェックす**べきです**。（朝日新聞 '94.12.14）
- (7) こんなことになるなら、ふだんから早起きの癖をつけておく**べきだった**。（作例）
- (8) 今回は、ドキュメンタリーの手法の一つとして許されうる再現と思うので、再現なら再現とはっきり断っておく**べきだった**。（朝日新聞 '94.9.9）
- (9) 対外的なことを考えると、委員長は、ぜひ教授である**べきだろう**。（作例）
- (10) 木登りは自分の能力の範囲で、安全に楽しむ**べきだろう**。（朝日新聞 '94.6.12）
- (11) そして、新しい物語がはじまった以上、古い物語の幕は、やはりここで一度下ろされる**べきでしょう**。（長田弘「ねこに未来はない」）
- (12) 読み手の気持ちを考えれば、こうした儀礼的な文章は極力簡潔である**べきだった**。（作例）
- (13) 父の倒れました折に、あるいはお知らせす**べきだった**かもしれませんが、父の考えで、人に余計な心配を与えてはならぬ、といわれ、さしひかえました。（伊藤桂一「羊蹄甲の花の蔭」）
- (14) 例えミスジャッジだったとしても、抗議は短時間で切り上げる**べきだった**ろう。（朝日新聞 '94.9.10）

(15) ここまで来たら潔く負けを認める**べきだ**が、今少し猶予をいただけないだろうか。
(作例)

(16) これに対し、父親は「プライバシーの保護は十分尊重する**べきだ**が、それを盾に作文を公開しないのは、むしろ校内暴力やいじめなど学校側に都合の悪い情報を隠してしまう恐れがある」と反発している。(朝日新聞 '94. 1. 17)

(17) なお、最高税率については、中長期的には引き下げていく**べき**であるが、当面は、現行水準を維持する。(朝日新聞 '94. 9. 23)

(18) 変革の時代に直面し、早急に検討す**べき**課題は山積している。(作例)

(19) 〔前略〕気象異変をハレー彗星と結びつけて注目す**べき**仮説を立て、われわれに警告を発しているのが、太陽物理学の桜井邦朋博士である。(野本陽代「宇宙の果てにせまる」)

(20) ここは即答を避けて態度を保留する**べき**で、つい言質を取られてしまったのは、どうにもY君が拙かったな。(作例)

(21) 公共投資についても、地下鉄の建設などは受益者負担で行う**べき**で、いたずらに財政の負担を増やすのはおかしい。(朝日新聞 '94. 4. 19)

(22) 米政策当局は、もはや円高・ドル安に誘導するような発言は慎む**べき**だし、その余裕もないはずである。(朝日新聞 '94. 4. 6)

(23) 高齢者社会の福祉とリンクして考えれば、さらに地価は下がる**べき**であるし、下げなければならない。(朝日新聞 '94. 9. 22)

(24) どんな名前でもいじめはありうるし、もしそうなったら騒いだ分だけ周囲が守ってやる**べき**では。(朝日新聞 '94. 1. 29)

(25) 子どもの受験があるからといって、単身赴任はす**べき**でない。(朝日新聞 '94. 1. 13)

(26) 選挙の取り組み方はいくつか選択肢があるが、政治が混迷している時代に急いで結論を出す**べき**ではない。(朝日新聞 '94. 10. 7)

文法

言い切りや「～が」「～のに」など独立度の低くない節で用いられ、「～べきで」といった連用中止の形も、過去・推量の形もとれる。連体修飾も可能である。

ノート

1. 類義表現として「～なければならない」の類が考えられるが、「～なければならない」等が外的状況・規制などからそれが必要とする当為表現であるのに対して、「～べきだ」は、話し手が～する・～なることを妥当ととらえて、それが必要だと述べる言い方である。したがって、話し手の主観による判断という面が表立ってくる。それ故、特定の話し手の判断と意識されないことについては、「～べきだ」を使うのは不自然である。例えば、「鉤を紛失した場合は実費弁償しなければならない」といった規則の言い方では、「ロッカーの鍵を紛失した場合は実費弁償**すべきだ**」と「～べきだ」を使うのはもちろん不適切である。

2. また、「これから私は行かなければならない」とは、ふつうにいえるが、「これから私は行く**べきだ**」は、特別の文脈でなくては不自然である。つまり、「～べきだ」は、一人称主語を取っては使いにくい。自分自身が当事者である以上、何をなすのか直接意志

表明しまえばいい（あるいは、分かっているなら実行したらいい）ことについて、わざわざ何をなすのが妥当と判断するかを語る形をとるのはいかにも迂遠な言い方になるからであろう。（ちなみに、「～シなければならない」が不自然でないのは、それが要請される状況にあるという状況説明の意味をもつからであろう。）

3. 「～べきだ」は、推量の形もとれるとしたが（「～べきだろう」）、「～にちがいない」という強い推定の言い方とはなじみが悪く、「～べきにちがいない」とは言いにくい。しかし、「～に決まっている」となら、「～べきに決まっている」というような言い方も可能である。「～にちがいない」が事実を踏まえた推定という意味に重点があるのに対し、「～に決まっている」は、話し手の主張という面が際立つ言い方であるので、後者が、話し手の評価としての意味の際立つ「べきだ」となじみがよいのも首肯される。

4. 「～べきだ」は、もともと古典語の助動詞「べし」に由来するが、現代語でも「べし」の連体形「べき」・連用形「べく」は、やや硬い文章語ではなお使われる。その場合、「べし」の多義的な表現性を引きずって、必ずしも当為の意味とばかりは読めないものが多い。例えば、「私には帰るべき家がない」の場合なら、「べき」は可能の意味に読めるし、「準備不足はいかんともしがたく、負けるべくして負けた」の場合は、「べく」は当然といった意味になる。こうした「べき」「べく」は、「べきだ」に準じて扱えるとは限らないと見ておく必要がある。

関連項目

B 4 0 「～ざるを得ない」、B 4 2 「～なければならない」

参考文献

丹羽哲也(1991)・野林靖彦(1996a)(1996b)・森山卓郎(1997)

◇ B 4 2 ～なければならない・～なくてはならない

接続

動詞の未然形（「シテイル」の未然形「シテイ」も含む。なお、サ変動詞は「～シ」の形）及び形容詞・形容動詞・「名詞＋断定の助動詞」の連用形に付く。

意味・用法

「Aシなければならない」等の形で、状況や決まり・道理といった外的な制約・要請からAという行為・事態の実現が必要だと述べる言い方である。“否定の条件形式＋ならない”という構成で、前半については、「～シナクテハはならない」「～セネバならない」「～シナクチャならない」「～シナキヤならない」など、ヴァリエーションがいろいろ考えられる。また、後半の「ならない」の部分についても、「～しなければイケナイ」「～しなければダメだ」などのヴァリエーションがあり得る。

用例

- (1) 死因に不審がある死体については、医師は直ちに警察に届け出**なければならない**。
(作例)
- (2) 恒星がその形を保ち続けるためには、内部のどの部分でも、内部からの圧力と外側からの圧力がつりあってい**なければならない**。（湊正雄ほか「地学Ⅰ」）
- (3) 出発二時間前空港集合のため、首都圏では四時間ほど前に自宅を出**なければならぬ**。

(朝日新聞 '94. 2. 21)

(4) 今回ロサンゼルスで見られた電話の障害や停電などは、程度や広がりとはともかく、日本でも起きることを覚悟し**なければならない**だろう。(朝日新聞 '94. 1. 19)

(5) 町おこし、村おこしの一環として、まず玄関口である駅の活性化を図ら**なければならない**でしょう。(朝日新聞 '94. 2. 1)

(6) 場合によっては石油の消費を増やさ**なければならない**かもしれない。(朝日新聞 '94. 3. 8)

(7) 重量挙げは、男性の競技と**思ってきたが**、もうそんな考えは改め**なければならない**ようだ。(朝日新聞 '94. 10. 4)

(8) 高校教師の夫とその妻は、二十三歳になった長男をなぜ殺さ**なければならなかった**のか。(朝日新聞 '94. 10. 23)

(9) フリーエージェント (F A) 制度について、現行では選手が所属球団以外と交渉するまで、宣言して約1カ月待た**なければならない**が、この期間を短縮することで意見がまとまった。(朝日新聞 '94. 4. 14)

(10) 政党というのは、あくまでも自由で**なきやならない**。(朝日新聞 '94. 2. 3)

(11) あなたには覚えて貰わ**なきやならない**ことがたくさんあるの。(武田徳久「屋根裏のガラスの靴」)

(12) この手紙を、母にみせ**ねばならなかった**。(伊藤桂一「羊蹄甲の花の蔭」)

(13) いまさら、後に引くわけにもいかず、周作も、今度こそ、又八郎に会って入門を許してもらわ**なくてはならなかった**。(作例)

(14) ハナさんは夫を亡くし、病気の娘を抱え、生活のために働か**なくてはならなかった**。(朝日新聞 '94. 7. 16)

(15) 二十年先、三十年先をにらんで何をし**なくてはならないか**という議論が抜け落ちた。(朝日新聞 '94. 9. 17)

(16) また、地表付近の大気の流れでは、地表と大気との摩擦の影響を考え**なくてはならない**が、上層の大気の流れでは、このような摩擦の影響は無視することができる。(湊正雄ほか「地学 I」)

(17) メーカー側でも客に商品をきちんと説明したり、見積もりを出したりできる専門職を置か**なくてはならなくなった**。(朝日新聞 '94. 9. 14)

(18) 家具など重いものは税関から自力で運ば**なくてはならず**、送料がかさむ。(朝日新聞 '94. 9. 10)

(19) 大会組織委員会の最大の悩みは、参加者数が確定しないまま準備作業を進め**なくてはならない**ことだ。(朝日新聞 '94. 4. 2)

(20) どうしても休ま**なくてはならない**ときは、叔父や叔母が死んだことにした。(朝日新聞 '94. 11. 13)

(21) ときには、「私はなんで、こんなに仕事をし**なくちゃならないの**」と不満にも思った。(朝日新聞 '94. 7. 1)

(22) 大学教官といえども、研究者であるとともに教師であるという自覚をもた**なくては**いけないだろう。(作例)

(23) 「なんであんな男のためにあたしが身を粉にして働か**なくちゃいけないの**」(柴

門ふみ「恋愛論」)

(24) みんな、これほど心配してくれるのだから、おじいちゃんだって、これからも元気で**なければいけない**よ。(作例)

(25) 石油資源がなくなったときには、木材がそれに代わる可能性があり、たくさん残しておか**なければいけない**。(朝日新聞 '94. 3. 10)

(26) たとえ物語でも、その物語世界での真実を描か**なければいけない**。(柴門ふみ「恋愛論2 応用篇」)

(27) 今回、別の日本の検査関係者が「なぜこれほどあせら**なければいけなかったのか**」と首をひねった。(朝日新聞 '94. 11. 29)

(28) 裕生「なんで、引っ越しし**なきゃいけない**んだよ。ここがボク達のうちなんですよ！」(森治美「さわやか3組(第19回)」)

(29) 今度の監督は、なんとしても長島級の**大物でないといけない**ので、球団側も人選に苦労しているという。(作例)

(30) 一日一回だけ飲めばいい薬だと、患者の七割は全部きちんと飲んでしたが、一日に三回飲ま**ないといけない**薬では、半分くらいしか飲んでいなかった——朝日生命成人病研究所(東京)が高血圧の通院患者を調べたら、こんな結果が出たという。(朝日新聞 '94. 10. 30)

(31) 良いコンクリートを作るには、構造物の条件や環境をすべてクリアし**なければだめだ**。(朝日新聞 '94. 7. 22)

(32) チェーン化するには店長始め、人材育成から始め**ないとだめだ**。(朝日新聞 '94. 1. 22)

(33) 「太りすぎだ。やせさせ**なくっちゃダメだ**」と獣医は言った。(朝日新聞 '94. 1. 8)

(34) 「人を助ける前に自分をどうにかすることを考え**なきゃだめ**でしょ!!」。(朝日新聞 '94. 5. 14)

(35) 3時には東京を発ったのだから、もういいかげん着いてい**なければならない**。(作例)

文法

言い切りや「～が」「～のに」など独立度の低くない節で用いられ、「～ず」「～ずに」といった連用中止の形(「～なくて」「～ないで」も不可ではないが、口調がよくない)も、過去・推量の形もとれる。連体修飾も可能である。

ノート

1. 「～べきだ」が、話し手が～する・～なることを妥当として、それが必要だと述べる言い方で、いわば内発的な評価に基づく当為表現であるのに対して、「～しなければならぬ」の類は、外的状況・規制などからそれが必要とする当為表現である。そうしたところから、しばしば建前を述べる言い方だなどともされるが、もちろん必ずしも実質のない建前を言うものとは限らない。

2. 外的な状況・制約から～になる必要があるという当為の意味を示す言い方だが、そこから例文(35)のように、そんな条件下では必然的に～ということになるという論理関係に焦点を当てた言い方も派生してくる。

4 第二部 助動詞的複合辞

3. この言い方の一ヴァリエーションとして、「～シてはだめだ」といういいかたがあるが、これは、その場で具体的な事実を指して評価・判定や指示の言い方で用いられることが普通で、もともと決まっていたようなことについては使えない。例えば、「わたしは、6時から人に会わなければならない」とはいえても、「わたしは、6時から人に会わなければだめだ」とは、いえない。

関連項目

B 4 0 「～ざるを得ない」、B 4 1 「～べきだ」

参考文献

丹羽哲也(1991)・野林靖彦(1996a)(1996b)・森山卓郎(1997)

第三部 複合辭關係文獻目錄

複合辞関係文献目録

現代日本語の複合辞を主に取り扱っている研究文献のリストである。ただし、どの程度立ち入って論じているものを探るかによって取捨の幅も違ってくる。そのあたりの判断も微妙なことが出てくるので、ここではまず一応機械的に題名に個々の複合辞を示しているものを探ることとし、更に、そうでないものでも内容として重要と思われるものを探った（なお、雑誌論文を中心とし、単行本は、用例集など特に重要なものにとどめた。単行本として刊行された書物の名称にのみ『』を付した）。方言を対象とするものは採り上げていない。まだ落ちているものもあるかもしれないが、ご教示いただければ幸いである。なお、調査の範囲は、日本国内で日本語で発表されたものに限った。

文献の表示の仕方は、著者、発表年、題名、出典の順にあげた。文献の掲出順は、著者のよみの五十音順である。中国語・韓国語で表記された人名については、検索の便のため、便宜上現代の日本漢字音で読んだ場合のよみのところに配列した。

- 青木三郎(2000) <ところ>の文法化, 青木・竹沢編『空間表現と文法』くろしお出版
- 青山文啓(1992) 説明をめぐる日本語の文末表現, 東海大学文明研究所紀要 12
- 揚妻祐樹(1990) 形式的用法の「もの」の構文と意味—〈解説〉の「ものだ」の場合—
国語学研究 30
- 揚妻祐樹(1991) 実質名詞「もの」と形式的用法との意味的つながり, 東北大学文学部
日本語学科論集 1
- 揚妻祐樹(1992) 体言的素材性カテゴリーとしての「もの」, 東北大学文学部日本語学
科論集 2
- 揚妻祐樹(1999a) 「ものだ」文の表現構造, 加藤正信編(1999)『日本語の歴史構造』
明治書院
- 揚妻祐樹(1999b) 「ような(みたいな)ものだ」「というものだ」の表現構造, 佐藤
武義編(1999)『語彙・語法の新研究』明治書院
- 阿曾村陽子(1999) 「ほうがいい」についての一考察, 湘南文学(東海大学) 33
- 安達太郎(1999) 『日本語疑問文における判断の諸相』くろしお出版
- 雨宮雄一(1999) 現代日本語における義務論的表現 「して(も)いい」「しなければ
ならない」をめぐる, 日本学報(大阪大学) 18
- 雨宮雄一(2000) 「するべきだ」「したほうがいい」と「しなくてはいけない」につい
ての覚え書き, 現代日本語研究(大阪大学大学院文学研究科日本語学講座) 7
- 有田節子(1999) テハ構文の二つの解釈について, 国語学(国語学会) 199

4 第三部 複合辞関係文献目録

- 案野香子(1996) 「モノダ」の意味・用法 「トイウモノダ」文を例として, 千葉大学
留学生センター紀要 2
- 案野香子(1997) トイウモノダの主観性, 語文論叢(千葉大学) 24
- 井口厚夫(1988) 「ところを」に関する考察, Sophia International Review(上智大
学比較文化学部) 10
- 池田英喜(1996) 経験をあらわす「シタコトガアル」について, 待兼山論叢(大阪大学
文学部) 30
- 石川禎紀(1972) 近代女性語の語尾 「てよ・だわ・のよ」, 解釈(解釈学会) 18-10
- 石川 守(1985) 「～てみる」と「～ようとする」に関する一考察, 語学研究(拓殖大
学) 41
- 石川 守(1988) 目的の「ために」と「ように」, 及び既定条件の「たら」, と「て」
における自己の意志の問題, 語学研究(拓殖大学) 54
- 石川 守(1997) 否定形のモダリティ, 語学研究(拓殖大学) 86
- 井島正博(1998) 組立モダリティ表現, 『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究
論集』汲古書院
- 磯山麻衣(2000) 「なんて」の意義と用法, 昭和女子大学大学院日本文学紀要 11
- 伊藤 晃(1993) 分裂文と「のだ」文 課題設定のあり方と構文の文脈依存性, さわら
び(文法研究会) 2
- 伊藤 勲(1987) 「ても」の用法, 国際学友会日本語学校紀要 12
- 伊藤 勲(1994) 「ものの」の用法, 国際学友会日本語学校紀要 16・17
- 伊藤智博(1996) 原因・理由の「だけに」に関する一考察, 三重大学日本語学文学 7
- 糸川 優(1990) 「つもり」を含む文の陳述性 日本語教科書の例文, 緑岡詞林(青山
学院大学) 14
- 今井新悟(1990) シタ方ガイイとスル方ガイイの意味・構文的な違い, 東京外国語大学
日本語学科年報 12
- 今井新悟(1991) 認識的議事モダリティーのモダリティー度, 東京外国語大学日本語学
科年報 13
- 今井新悟(1992) モダリティー——モダリティー形式のモダリティー度, 日本語教育(日本語
教育学会) 77
- 今尾ゆき子(1994) ガ/ケレド/ノニ/クセニ/テモ— 談話語用論からの考察, 日本語
学(明治書院) 13-9
- 岩崎 卓(1996) ノデの視点とノニの視点 トイウノデとトイウノニから, 現代日本語
研究(大阪大学) 3
- 岩野靖則(1984) ～てから/～たあと, 日本語学(明治書院) 3-10
- 尹 相実(1995) 日本語の判断モダリティー形式について(I) ノダ・ワケダ・ハズダを

- 中心に, 国語国文研究 (北海道大学国語国文学会) 101
- 尹 相実(1996) 日本語の判断モダリティ形式「モノダ」について, 日本学報 (大阪大学) 37
- 尹 相実(1999) 話し手の不確実な判断を表すモダリティ, 国語国文研究 (北海道大学) 113
- 于 日兵(1997) 動作目的表現と結果目的表現ー [タメニ] と [ヨウニ] を中心にー, 筑波日本語研究 (筑波大学文芸・言語研究科日本語学研究室) 2
- 衛 東(1992) 日本語のムード表現の一形式 「のだ」文を中心に, 国文学論集 (上智大学) 25
- 江後千香子(1999) 小説文の構造 「のだ」の機能を中心に, 早稲田大学大学院文学研究科紀要 第3分冊44
- 遠藤織枝(1984) ～からは／～からには, 日本語学 (明治書院) 3-10
- 王 暁宇(1985) 「ものの」は形式名詞だとの説は正しくない, 日本語教育研究論纂 (在中華人民共和国日本語研修センター紀要) 4
- 王 笑峰(1992) 連体法の引用の諸問題, 日本学報 (大阪大学) 11
- 大島資生(1991) 連体修飾構造に現れる「という」の機能について, 人文学報 (東京立大学) 225
- 岡野喜美子(1991) 許可を求める表現 ～タインデスケドをめぐって, 早稲田大学日本語教育センター紀要 3
- 岡部 寛(1994) 説明のモダリティ 「わけだ」と「のだ」の用法とその意味の違いの比較の観点から, 日本学報 (大阪大学) 13
- 岡部嘉幸(1995) 「のですか」質問文の表現性, 築島裕博士古稀記念会(1995)『築島裕博士古稀記念国語学論集』汲古書院
- 岡部嘉幸(1998) ハズダの用法について, 『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』汲古書院
- 沖 裕子(1998) 接続詞と接続助詞の「ところで」 転換」と「逆接」の関係性, 日本語教育 (日本語教育学会) 98
- 奥田靖雄(1986) 現実・可能・必然 (上), 言語学研究会編『ことばの科学1』むぎ書房
- 奥田靖雄(1990) 説明 (その1) ーのだ、のである、のですー, 言語学研究会編『ことばの科学4』むぎ書房
- 奥田靖雄(1992) 説明 (その2) ーわけだー, 言語学研究会編『ことばの科学5』むぎ書房
- 奥田靖雄(1993) 説明 (その3) ーはずだー, 言語学研究会編『ことばの科学6』むぎ書房

4 第三部 複合辞関係文献目録

- 奥田靖雄(1996) 現実・可能・必然(中)－「していい」と「してもいい」－, 言語学研究会編『ことばの科学7』むぎ書房
- 奥田靖雄(1999) 現実・可能・必然(下)－「しなければならない」－, 言語学研究会編『ことばの科学9』むぎ書房
- 奥津敬一郎(1966) 「マデ」「マデニ」「カラ」－順序助詞を中心として－, 日本語教育 9
- 奥津敬一郎(1975a) 形式副詞論序説－「タメ」を中心として－, 人文学報 104
- 奥津敬一郎(1975b) 程度の形式副詞, 都大論究 12
- 奥津敬一郎(1983) 続・形式副詞論－理由・目的の形式副詞－, 平山輝男博士記念会編(1983)『平山輝男博士古稀記念 現代方言学の課題1』明治書院
- 奥津敬一郎・他(1986) 『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社
- 小高 愛(1999) 動詞派生の後置詞「とって」, 千葉大学留学生センター紀要 5
- 小野米一・李志華(1988) 係助詞「でも」と「だって」の用法について, 北海道教育大学紀要 1A39-1
- 影浦慎太郎(1996) 後置詞「ために」, 日本文学研究(大東文化大学) 35
- 梶井恵子(1995) 話し言葉の分析1 文末形式, 立教大学日本語研究 2
- 片村恒雄(1980) 「のである」の用法－主として芥川龍之介の初期小説における－, 解 積 26-1
- 片村恒雄(1981) 「のである」と「からである」－小説における理由表現をめぐって－, 島田勇雄先生古稀記念論文集刊行会編(1981)『島田勇雄先生古稀記念ことばの論文集』明治書院
- 加藤陽子(1999) 話し言葉における「トイウコトダ」の諸相, 日本語と日本文学(筑波大学) 28
- 加藤理恵(1999) 「ところ」を含む文について－2つのタイプの構文とその解釈の可能性－, 名古屋大学人文科学研究 28
- 金子尚一(1983) 日本語の後置詞, 国文学 解釈と鑑賞(至文堂) 48-6
- 金子尚一(1994) ～～テハ／～デハとその用法をめぐって, 国文学 解釈と鑑賞(至文堂) 59-1
- 河上誓作(1986) 「マエニ」の前の肯定と否定, 大阪大学文学部共同研究論集3日本語・日本文化研究論集
- 川越菜穂子(1989) トコロダ文の意味と構造 情報のなわばりとの関連で, 日本学報(大阪大学) 8
- 川越菜穂子(1990) トコロヲの用法について, 帝塚山学院大学研究論集 25
- 川端芳子(1995) 「ところが」について, 立教大学日本語研究 2
- 河原修一(1997) 「だ」で終る日本語の表現 <ウナギ文>と<のだ>文の統合, 表現

- 研究 (表現学会) 65
- 北川千里(1995) 「わけ」というわけ, 日本語学 (明治書院) 14-9
- 北村よう(1989) 日本語におけるアスペクトとaspectual character—ヨユニナルという表現をめぐって—, 『吉沢典男教授追悼論文集』吉沢典男教授追悼論文集編集委員会発行』
- 許 夏玲(1999) 文末の「って」の意味と談話機能, 日本語教育 (日本語教育学会) 101
- 金 銀淑(1989) 連体修飾構造における「トイウ」の意味機能, 国語学研究 (東北大学) 29
- 金 勝漢(1992) アスペクトの複合接続助詞「～て以来」の構文をめぐって, 国文学論集 (上智大学) 25
- 金 仙姫(1990) 現代日本語における「について」「に関して」「に対して」の用法上の差異について アンケート調査を中心に, 国語学研究 (東北大学) 30
- 金 仙姫(1992) 現代日本語における「についての」「に関する」「に対する」の用法上の差異の考察, 東北大学文学部日本語学科論集 2
- 金 東郁(1995) 単独形式化モダリティ, 日本語と日本文学 (筑波大学) 21
- 工藤真由美(1996) 「～ノデハナイ」の意味と機能, 横浜国立大学人文紀要 2語学・文学 43
- 工藤真由美(1997) 否定文とディスコース—「～ノデハナイ」と「～ワケデハナイ」—, 言語学研究会編『ことばの科学8』むぎ書房
- 久野 暁(1973) 『日本文法研究』大修館書店
- グループ・ジャマシイ(1998) 『日本語文型辞典』くろしお出版
- 権 奇洙(1991) 受身文の動作主マーカーについての—考察—主に「に・によって・から」を中心に, 東北大学文学部日本語学科論集 1
- 権 奇洙(1992) 「うちに」と「あいだに」について—時間的限度を表す用法を対象として—, 東北大学文学部日本語学科論集 2
- 小出慶一(1994) ヨウニスル形の使役性, 群馬県立女子大学紀要 15
- 黄 麗華(1985) 「～や否や」「～が早いか」「～し(た)かと思うと」「～か……ないうちに」「～か……ないかに」, 日本語教育研究論纂 (在中華人民共和国日本語研修センター紀要) 3
- 幸田佳子(1994) 「わけがない」、「わけではない」、「わけにはいかない」について, 語学教育研究論叢 (大東文化大学) 11
- 江田すみれ(1991) 複合辞による条件表現(1) 「となると」の意味と機能, 日本語教育 (日本語教育学会) 75
- 江田すみれ(1992) 複合辞による条件の表現2 「と」「とすると」「となると」の意味と

- 機能について, 日本語教育 (日本語教育学会) 78
- 江田すみれ(1994) 複合辞による条件の表現 「ば」「とすれば」「となると」, 日本語教育 (日本語教育学会) 83
- 小金丸春美(1990) 相手の推論を否定する形式をめぐって 「～といっても」と「～からといって」, 梅花短大国語国文 (梅花短期大学国語国文学会) 3
- 小金丸春美(1991) 「のではなく」の機能, 阪大日本語研究 3
- 国立国語研究所 [永野賢] (1951) 『現代語の助詞・助動詞—用法と実例—』大日本図書 [もと、秀英出版より刊行]
- 木下りか(1997a) ハズダの意味分析—他の真偽判断モダリティ形式と比較して—, 日本語教育 (日本語教育学会) 92
- 木下りか(1997b) カモシレナイ・ニチガイナイ 真偽判断のモダリティの体系における「可能性」, 言語学研究会編『ことばの科学10』むぎ書房
- 木下りか(1998) 真偽判断を表す文末形式と「既定性」, 言語学研究会編『ことばの科学11』むぎ書房
- 此島正年(1973) 複合助詞「とは」の解釈, 解釈 (解釈学会) 19-12
- 小針裕樹(1996) 同意要求文の位置と形式, 国語学研究 (東北大学) 35
- 小松紀子(1985) 意向表現の現れ方 ツモリ・タイ・ウ/ヨウを中心にして, アメリカ・カナダ11大学連合日本研究センター紀要 8
- 小矢野哲夫(1981) 「のだ」をめぐる諸問題, 島田勇雄先生古稀記念論文集刊行会編(1981)『島田勇雄先生古稀記念ことばの論文集』明治書院
- 小矢野哲夫(1995) 格くずれ, 仁田義雄編(1995)『複文の研究 (上)』くろしお出版
- 近藤純子(1998) 複合辞としての「ということで」, 日本語教育 (日本語教育学会) 9
9
- 近藤純子(1999) 複合辞「ところを」についての論考, 日本語教育 (日本語教育学会) 103
- 近藤真宣(1999) 「トイウコト」から考える「トイウ」の特性, 語学研究 (拓殖大学) 90
- 才田いずみ(1980) 「のに」と「ても」, アメリカ・カナダ11大学連合日本研究センター紀要 3
- 斎藤 学・他(1999) ドコロカについて, 東アジア日本語教育・日本文化研究 (東アジア日本語教育・日本文化研究学会) 1
- 佐伯哲夫(1966) 複合格助詞について, 言語生活 178, 佐伯(1976)『語順と文法』関西大学出版・広報部に再録
- 佐伯哲夫(1987) 受動態動作主マーカー考 (上) (下), 日本語学 (明治書院) 6-1・2
- 三枝令子(1991) 「だけに」の分析, 言語文化 (一橋大学語学研究室) 27

- 三枝令子(1997) 「って」の体系, 言語文化(一橋大学) 34
- 佐治圭三(1989) 「~のだ」の本質を求めて 再び山口佳也氏に答えて, 阪大日本語研究 1
- 佐治圭三(1991) 『日本語の文法の研究』ひつじ書房
- 佐治圭三(1992) 『外国人が間違えやすい日本語の表現の研究』ひつじ書房
- 佐竹久仁子(1984) ~もので/~ものの/~ものを, 日本語学(明治書院) 3-10
- 佐藤尚子(1989) 現代日本語の後置詞の機能—「~について」と「~に対して」を例として—, 横浜国立大学国語研究 7
- 佐藤尚子(1990) 後置詞と前置詞 名詞の格の周辺, 国文学 解釈と鑑賞(至文堂) 55-1
- 佐藤尚子・他(2001) 社会科教科書における後置詞について, 千葉大学留学生センター 紀要 7
- 佐藤雄一(1996) 補助的な品詞から, 同音形式・多機能形式, 国文学 解釈と鑑賞(至文堂) 61-1
- 沢田奈保子(1986) 複合接続助詞「うちに」の時を特定する用法の分類, ことば(現代日本語研究会) 7
- 塩入すみ(1993) 「テハ」条件文の制約について, 阪大日本語研究 5
- 塩入すみ(1994) 「トハ」文の主節の述語について, 現代日本語研究(大阪大学) 1
- 塩入すみ(1999) 「変化の連動」を表す副詞節の分析 トトモニ・ニツレ・ニトモナイ・ニシタガイ, 東呉日語教育學報(東呉大學日本語文學系) 22
- 清水佳子(1997) 主題連鎖と「のだ」との関連, 現代日本語研究(大阪大学) 4
- 謝 新平(1999) 中国語の“由字句”と日本語の“によって”受け身文について, 福岡教育大学国語科研究紀要 40
- 初 玉麟(1981) どころか その接続と意味の説明・分類をめぐって, 言語(大修館書店) 10-10
- 申 鉉竣(1999) 近代語可能表現の推移 「~コトガナル」から「コトガデキル」へ, 国学院雑誌(国学院大学) 100-4
- 新屋映子(1989) “文末名詞”について, 国語学(国語学会) 159
- 須賀一好(1995) 「かもしれない」の意味と蓋然性, 山形大学紀要 人文科学 13-2
- 杉田くに子(1997) 学術論文における思考判断を表す文末表現の用法 「と思う」「と考える」を中心して, 言語文化(一橋大学) 34
- 杉村博文(1980) 「の」「のだ」と「的」「是……的」, 大阪外語大学報 49
- 杉本和之(1996) 「~たあとで~」と「~てから~」, 愛媛大学教育学部紀要 2 人文・社会科学 29-1
- 鈴木重幸(1972) 『日本語文法・形態論』むぎ書房

4 第三部 複合辞関係文献目録

- 鈴木義和(1993) テハ条件文について, 親和国文(親和女子大学) 28
- 須田義治(1991) 「なければならぬ」の文, 東京外国語大学日本語学科年報 13
- 鈴藤和子(1984) ～あいだ／あいだに, 日本語学(明治書院) 3-10
- 砂川有里子(1984) 〈に受身文〉と〈によって受身文〉, 日本語学(明治書院) 3-7
- 砂川有里子(1987) 複合助詞について, 日本語教育(日本語教育学会) 62
- 砂川有里子(2000) 空間から時間へのメタファー, 青木・竹沢編『空間表現と文法』くろしお出版)
- 関 正昭(1989) 評価述定の誘導成分となる複合助詞について, 日本語教育(日本語教育学会) 68
- 千 昊載(1994) 真偽判断のモダリティと丁寧さ, 東北大学言語学論集 3
- 戴 宝玉(1987) 複合助辞「にしても・にしろ・にしたところで」ー接続助詞と限定助詞との関連ー, 日本語教育(日本語教育学会) 62
- 高市和久(1989) 文法的なてだてとしての形式名詞ー「こと」の場合, 山梨英和短期大学紀要 23
- 高市和久(1991) 述語での「もの」の用法, 日本文藝論集(山梨英和短期大学日本文学会) 23・24
- 高梨信乃(1995) 条件接続形式による評価的複合表現 スルトイイ, スレバイイ, シタライイ, 阪大日本語研究 7
- 高梨信乃(1996) 条件接続形式を用いた<勧め>表現ーシタライイ, シタラ, シタラドゥー, 現代日本語研究(大阪大学現代日本語学講座) 3
- 高橋匡雄(1996) 使用のなかでの「スルコトダ」 ダブルテンスの述語形式を中心にして, 大学院年報(立正大学大学院文学研究科) 13
- 高橋匡雄(1997) 意味の“限定”と時間の“限定” ダブルテンスの述語形式「スルバカリダ」の意味・用法, 立正大学国語国文 34
- 高橋 純(1996) 「～つつある」について, 日本語教育(日本語教育学会) 89
- 高橋太郎(1983) 動詞の条件形の後置詞化, 渡辺実編(1983)『副用語の研究』明治書院所収
- 高橋太郎(1989) 形式名詞についてのおぼえがき, 『吉沢典男教授追悼論文集』吉沢典男教授追悼論文集編集委員会発行』
- 高橋太郎(1994) ダブルテンスの観点からみた<スルコトガアル>の種々相, 立正大学文学部論叢 100
- 高橋太郎(1997) 「～というもの」「～ということ」「～というの」, 立正大学人文科学研究年報 34
- 高橋美奈子(1994) 名詞修飾表現における「トイウ」の介在可能性についてー「内の関係」の名詞修飾表現を中心にー, 待兼山論叢(大阪大学文学部) 28

- 立藺洋子(1984) ～まで/～までに/～までは/～にかけて, 日本語学 (明治書院) 3-10
- 田中章夫(1977) 近代語における複合辞的表現の発達, 松村明教授還暦記念会編(1977) 『松村明教授還暦記念国語学と国語史』 明治書院
- 田中俊子(1993) 「～カモシレナイ」について, 東北大学留学生センター紀要 1
- 田中 寛(1988) 動詞派生の後置詞について 「中止形」の意味と機能, 言語と文化 (文教大学言語文化研究所紀要) 1
- 田中 寛(1989) 逆接の条件文<ても>をめぐって, 日本語教育 (日本語教育学会) 67
- 田中 寛(1994) 条件表現と基本文型, 日本語学 (明治書院) 13-9
- 谷守正寛(1998) ムードの「わけだ」再考, 鳥取大学教育学部研究報告 人文・社会科学 49-2
- 田野村忠温(1986) 命題指定の「の」の用法と機能—諸説の検討—, 言語学研究 5, 田野村(1990) 『現代日本語の文法 I — 「のだ」の意味と用法—』 和泉書院に再録
- 田野村忠温(1990) 『現代日本語の文法 I — 「のだ」の意味と用法—』 和泉書院
- 田野村忠温(1993) 「のだ」の機能, 日本語学 (明治書院) 12-11
- 田野村忠温(印刷中) 辞と複合辞, 『日本語学と言語学 (仮題)』 (2001 刊行見込み) 明治書院
- 玉村禎郎(1984) ～ものなら, 日本語学 (明治書院) 3-10
- 田村直子(1995) ハズダの意味と用法, 日本語と日本文学 (筑波大学国語国文学会) 21
- 田村直子(1997) 必然系と可能系のモダリティ 条件接続表現によるモダリティ形式を例に, 日本語と日本文学 (筑波大学) 24
- 田村直子(1998) 命題要素のモダリティ化について ナケレバナラナイやテモイイ等を例に, 筑波応用言語学研究 5
- 田村直子(1999) ナケレバナラナイの用法と命題要素とのかかわり ザルヲエナイ, ベキダ, ハズダとの置換性を手がかりに, 日本語教育 (日本語教育学会) 103
- 趙 順文(1989) 国語辞書に見る「もので」の記述, 『吉沢典男教授追悼論文集』 吉沢典男教授追悼論文集編集委員会発行
- 張 正来(1995) 文末の助詞についての一考察, 立教大学日本語研究 2
- 張 素芳(1993) 「どころか」の用法と機能 「ばかりか」との比較を中心にして, 文芸研究 (日本文芸研究会) 132
- 張 麗華(1984a) ～て仕方 (仕様) がない, 日本語学 (明治書院) 3-10
- 張 麗華(1984b) ～よりほかはない/～より (ほか) に 仕方がない, 日本語学 (明治書院) 3-10

4 第三部 複合辞関係文献目録

- 塚本秀樹(1991) 日本語における複合格助詞について, 日本語学(明治書院) 10-3
- 蔦原伊都子(1984) ~に(へ)かけて, 日本語学(明治書院) 3-10
- 蔦原伊都子(1984) ~について, 日本語学(明治書院) 3-10
- 土屋博嗣(1987) 条件節と「~(という)わけでもない」について, 亜細亜大学教養部
紀要 36
- 坪根由香里(1996) 「ことだ」に関する一考察 そのモダリティ性を探る, ICU日本語教育
研究センター紀要(国際基督教大学日本語教育センター) 5
- 坪根由香里(1994a) 「ものだ」に関する一考察, 日本語教育(日本語教育学会) 84
- 坪根由香里(1994b) 「もの」「こと」「の」に関する考察-「のだ」を中心に, 南山二
言語教育 1
- 坪根由香里(1996) 終助詞・接続助詞としての「もの」の意味 「もの」「ものなら」「も
のの」「ものを」, 日本語教育(日本語教育学会) 91
- 鶴田洋子(1999) 「~とばかりに」「~といわんばかりに」, 立教大学日本語研究 6
- 鄭 相哲(1994) 所謂確認要求のジャンイカとダロウ 情報伝達・機能論的な観点か
ら, 現代日本語研究(大阪大学文学部日本学科現代日本語学講座) 1
- 寺村秀夫(1978) 「トコロ」の意味と機能, 語文(大阪大学) 34
- 寺村秀夫(1980) 名詞修飾部の比較, 国広哲弥編(1980)『日英語比較講座2』大修館書
店
- 寺村秀夫(1982) 『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版
- 寺村秀夫(1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 寺村秀夫(1991) 『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版
- 寺村秀夫(1992) 『寺村秀夫論文集Ⅰ-日本語文法編-』くろしお出版
- 徳田裕美子(1989) 「という」の使われ方の研究, 東京外国語大学日本語学科年報 11
- 戸村佳代(1989) 日本語における二つのタイプの譲歩文 「ノニ」と「テモ」, 文芸言
語研究 言語 15
- 永井鉄郎(1997) 「~ようとする」の意味と用法について, 日本語教育(日本語教育学
会) 92
- 中里理子(1996) 「ものの」の意味・用法について, 東京大学留学生センター紀要 6
- 中野伸彦(1993) 終助詞の接続形「よね」について, 松村明先生喜寿記念会編(1993)『国
語研究』明治書院
- 永野 賢(1953) 表現文法の問題-複合辞の認定について-, 金田一博士古稀記念論文
集刊行会編(1953)『金田一博士古稀記念言語民族論叢』三省堂所収, 永野賢(1
970)『伝達論にもとづく日本語文法の研究』東京堂出版に再録
- 中嶋孝幸(1990) 「という」の機能について, 阪大日本語研究 2
- 中嶋孝幸(1993) 確かさの度合い カモシレナイ・ニチガイナイ, 三重大学日本語学文

学 4

- 中嶋孝幸(1999) 当然を表すモダリティ形式について ハズダとベキダ, 甲南大学紀要
文学編 111
- 中道知子(1995) 「～(ヨ)ウトスル」について, 語学教育研究論叢(大東文化大学)
12
- 仁田義雄(1981) 可能性・蓋然性を表わす議事ムード, 国語と国文学 58-5
- 仁田義雄(1991) 『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 仁田義雄(1992) モダリティ——判断から発話・伝達へ 伝聞・婉曲の表現を中心に,
日本語教育(日本語教育学会) 77
- 仁田義雄(1994) <疑い>を表す形式の問いかけの使用 「カナ」を中心とした覚書,
現代日本語研究(大阪大学) 1
- 仁田義雄(1997) 断定をめぐって, 阪大日本語研究 9
- 丹羽哲也(1991) 「べきだ」と「なければならない」, 大阪学院大学人文自然論叢 23
・24(合併号)
- 丹羽哲也(1993) 引用を表す連体複合辞「トイウ」, 人文研究(大阪市立大学文学部紀
要) 45-1
- 丹羽哲也(1994) 主題提示の「って」と引用, 人文研究(大阪市立大学文学部紀要) 4
6-2
- 丹羽哲也(1995) 「さえ」「でも」「だって」について, 人文研究(大阪市立大学文学
部紀要) 47-7
- 丹羽哲也(1998) 逆接を表す接続助詞の諸相, 人文研究(大阪市立大学文学部紀要) 5
0-10
- 祢津仁美(1990) 辞結合における慣用表現の文法的考察, 日本文学(東京女子大学) 7
4
- 野田春美(1992a) 複文における「の(だ)」の機能 「のではなく(て)」「のでは」
と「のだから」「のだが」, 阪大日本語研究 4
- 野田春美(1992b) 単純命題否定と推論命題否定 「のではない」と「わけではない」,
梅花短大国語国文 5
- 野田春美(1993) 「の」の言語学—「のだ」と終助詞「の」の境界をめぐって, 日本語
学(明治書院) 12-11
- 野田春美(1997) 『「の(だ)」の機能』くろしお出版
- 野田尚史(1984) ～にちがいない／～かもしれない／～はずだ, 日本語学(明治書院)
3-10
- 野田尚史(1994) 仮定表現のとりたて—「～ても」「～ては」「～だけで」などの体系
—, 日本語学(明治書院) 13-9

- 野林靖彦(1996a) 「ベキダ／ホウガイイ」「ナケレバナラナイ」が表し分ける評価的態度の差異と類似, 文藝研究(日本文芸研究会) 141
- 野林靖彦(1996b) 「～ベキダ」「～ナケレバナラナイ」「～ザルヲエナイ」 3形式が表わす当為判断の連関, 東北大学文学部日本語学科論集 6
- 野村真一(1999) 「Sッテ」文の分析 引用標識「ッテ」を用いたストラテジー, 金沢大学語学・文学研究 27
- 野村真一(2000) 「Sッテ文」伝聞用法の分析, 金沢大学語学・文学研究 28
- 野村剛史(1984) ～にとって／～において／～によって, 日本語学(明治書院) 3-10
- 馬 小兵(1997a) 「立場・資格」を表す「として」の用法について—「に・で」との比較を中心に—, 筑波日本語研究(筑波大学文芸言語研究科日本語学研究室) 2
- 馬 小兵(1997b) 複合助詞「として」の諸用法, 日本語と日本文学(筑波大学) 24
- 蓮沼昭子(1985) 「ナラ」と「トスレバ」, 日本語教育(日本語教育学会) 56
- 蓮沼昭子(1987) 条件文における日常的推論—「テハ」と「バ」の選択要因をめぐって—, 国語学(国語学会) 150
- 蓮沼昭子(1993) 日本語の談話マーカー「だろう」と「じゃないか」の機能—共通認識喚起の用法を中心に—, 『第1回小出記念日本語教育研究会論文集』
- 蓮沼昭子(1995) 対話における確認行為「だろう」「じゃないか」「よね」の用法, 仁田義雄編『複文の研究(下)』くろしお出版
- 蓮沼昭子(1997) 「だって」と「でも」 取り立てと接続の相関, 姫路獨協大学外国語学部紀要 10
- 服部 匡(1995) 「～どころか(どころではない)」等の意味用法について, 同志社女子大学日本語日本文学 7
- 花蔭 悟(1999) 条件形複合用言形式の認定, 国語学(国語学会) 197
- 馬場俊臣(1996) 時間的後続性を表す従属節 「～シタあと, あとで, あとに」を中心にとして, 北海道教育大学紀要 1A人文科学編 47-1
- 馬場俊臣(1997) 条件表現形式による継起・対比・反期待用法 「(か)と思うと、思ったら、思えば」について, 北海道教育大学紀要 1A人文科学編 47-2
- 馬場俊臣(1999) 複合接続詞の体系的考察の試み 動詞の条件表現形式による複合接続詞を対象として, 語学文学(北海道教育大学札幌校) 37
- 浜田麻里(1991) 「デハ」の機能—推論と接続語—, 阪大日本語研究 3
- 原田登美・小谷博泰(1994) 「はず」の現代と近世, 甲南大学紀要 文学編 91
- 備前 徹(1989) 「～ことだ」の名詞述語文に関する一考察, 滋賀大学教育学部紀要人文科学・社会科学・教育科学 39
- 姫野伴子(1989a) 「のだ」の機能と用法, 東京外国語大学日本語学科年報 11

- 姫野伴子(1989b) 「説明ムード助動詞」について、『吉沢典男教授追悼論文集』吉沢典男教授追悼論文集編集委員会発行』
- 福田嘉一郎(1998) 現代日本語におけるモノダの構文と意味, 熊本県立大学文学部紀要 4-1
- 福田恵子(1997) 話しことばにおける「の(だ)」, 東京外国語大学日本語研究教育年報 1
- 藤井義久(1997) 「ものだ」の意味論, 神戸大学留学生センター紀要 4
- 藤井ゆき(1996) 文末の「モノダ」の意味・用法, 広島大学留学生センター紀要 6
- 藤城浩子(1997) 判断のモダリティについての一考察, 日本語教育(日本語教育学会) 92
- 藤田保幸(1987) 「～トイウト」「～トイエバ」と「トイッテ」「～トイッテモ」 複合辞に関する覚書, 国語国文学報(愛知教育大学国語国文学研究室) 44
- 藤田保幸(1989) 「意図引用」の諸相ー「仇を討とうと旅に出る」などの表現についてー, 愛知教育大学研究報告(人文科学) 38
- 藤田保幸(1991) 引用と連体修飾, 表現研究(表現学会) 54
- 藤田保幸(1992) 「～ト来ル」から「～ト来タラ」へ, 国語国文学報(愛知教育大学国語国文学研究室) 50
- 藤田保幸(1995a) 思考・発話の内容節として働く「～ヨウニ」について, 詞林(大阪大学古代中世文学研究会) 17
- 藤田保幸(1995b) 「～トハ」構文小考 「嘘をつくとはけしからん」などの表現について, 滋賀大国文 33
- 藤田保幸(1998) 複合助辞「トイッテモ」「トイッテ」「トハイエ」について, 滋賀大国文 36
- 藤田保幸(1999) 「～するごとに」という言い方について, 表現研究(表現学会) 70
- 藤田保幸(2000) 『国語引用構文の研究』和泉書院
- 細川由紀子(1986) 日本語の受け身文における動作主マーカーについて, 国語学(国語学会) 144
- 堀口和吉(1985) 「のだ」の表現性, 山辺道(天理大学国語国文学会) 29
- 堀川智也(1991) 「のだ」を用いる文の焦点, 北海道大学言語文化部紀要 19
- 堀口純子(1995) 会話における引用の「～ッテ」による終結について, 日本語教育(日本語教育学会) 85
- 前田直子(1993a) 「目的」を表す従属節「～するように」の意味・用法 様態用法から結果目的用法へ, 日本語教育(日本語教育学会) 79
- 前田直子(1993b) 逆接条件文「～テモ」をめぐって, 益岡隆志編『日本語の条件表現』くろしお出版

4 第三部 複合辞関係文献目録

- 前田直子(1994a) 「比況」を表す従属節「～ように」の意味・用法, 東京大学留学生センター紀要 4
- 前田直子(1994b) テモ/タッテ/トコロデ/トコロガ, 日本語学(明治書院) 13-9
- 前田直子(1996) 必須成分として機能する「～ように」節の意味・用法 発話・思考の内容節の場合を中心に, 東京大学留学生センター紀要 6
- 前田直子(1997) 原因・理由を表す「ばかりに」と「からこそ」, 東京大学留学生センター紀要 7
- 牧原 功(1994a) 蓋然性判断のムード形式と疑問化, 言語学論叢(筑波大学) 13
- 牧原 功(1994b) 間接的な質問文の意味と機能 ダロウカ, デショウカについて, 筑波応用言語学研究 1
- マクグロイン・H・直美(1984) シリーズ・日本語の談話分析(4) 談話・文章における「のです」の機能, 言語(大修館書店) 13-1
- 又平恵美子(1996) 終助詞の研究 「っけ」の機能, 筑波日本語研究 1
- 松岡 弘(1987) 「のだ」の文・「わけだ」の文に関する一考察, 言語文化(一橋大学語学研究室) 24
- 松岡 弘(1993) 再説ー「のだ」の文・「わけだ」の文, 言語文化(一橋大学語学研究室) 30
- 松岡 弘(1994) 「文型」を見直す, 言語文化(一橋大学) 31
- 松木正恵(1987) 複合辞の認定ーその基準と尺度ー, 国語学会昭和62年春季大会要旨
- 松木正恵(1990) 複合辞の認定基準・尺度設定の試み, 早稲田大学日本語研究教育センター紀要 2
- 松木正恵(1992a) 複合辞性をどうとらえるかー現代日本語における複合接続助詞を中心にー, 『辻村敏樹教授古稀記念論文集 日本語史の諸問題』明治書院
- 松木正恵(1992b) 複合接続助詞の特質, 早稲田大学大学院文学研究科紀要別冊(文学・芸術学編) 18
- 松木正恵(1993a) 「の」と終助詞の複合形をめぐって, 日本語学(明治書院) 12-11
- 松木正恵(1993b) 複合辞, 国文学 解釈と教材の研究(学燈社) 38-12
- 松木正恵(1994) 「～はずだった」と「～はずがない」ー過去形・否定形と話者の視点ー, 学術研究〔国語・国文学編〕(早稲田大学教育学部) 42
- 松木正恵(1995a) 時制と視点ー「～はずだ」を中心にー, 学術研究〔国語・国文学編〕(早稲田大学教育学部) 43
- 松木正恵(1995b) 複合助詞の特性, 言語(大修館書店) 24-11
- 松木正恵(1996a) 引用の形式をとる複合辞について 引用から複合辞へ, 学術研究 国語・国文学編(早稲田大学) 44
- 松木正恵(1996b) 「とみえる」の表現性 「らしい」との比較を通して, 表現研究(表

- 現学会) 64
- 松木正恵(1997a) 「と思うと」の連続性, 学術研究 国語・国文学編 (早稲田大学) 45
- 松木正恵(1997b) 「見る」の文法化—「てみると」「てみれば」「てみたら」を例として—, 早稲田日本語研究 (早稲田大学国語学会) 5
- 松木正恵(1999) 「とみえ(て)」をめぐって—出現頻度対照表を検証する—, 学術研究〔国語・国文学編〕(早稲田大学教育学部) 47
- 松田剛丈(1986) 受身文の「によって」, 大谷女子大國文 16
- 松村瑞子(1995) いわゆる～テイルの交替形としての～タ, 言語科学 (九州大学) 30
- 松本泰丈(1976) 補助的な品詞とその周辺, 国語国文論集 (学習院女子短大國語国文学会) 5
- 丸山直子(1996) 話しことばの助詞 「とか」「なんか」「なんて」, 日本文学 (東京女子大学) 85
- 三浦 昭(1974) 「と」と「って」, 日本語教育 (日本語教育学会) 24
- 三上 章(1953) 『現代語法序説』刀江書院, 復刊 くろしお出版 1972
- 水谷 修(1964) ～やいなや・～が早いか・～とともに, 森岡健二他編(1964)『口語文法講座3 ゆれている文法』明治書院所収
- 水谷信子(1985) 『日英比較 話しことばの文法』くろしお出版
- 三隅友子(2000) 文末の「ンジャンイ(カ)」の誤用論的機能, 言語科学研究 (神田外語大学大学院紀要) 6
- 三井正孝(1993) ニツイテ格の意味, 静岡英和女学院短期大学紀要 25
- 三井正孝(1995) 現代日本語におけるヲモツテ格の意味, 静岡英和女学院短期大学紀要 27
- 三宅知宏(1996) 日本語の確認要求表現の諸相, 日本語教育 (日本語教育学会) 89
- 宮崎和人(1996) 確認要求表現と談話構造—「～ダロウ」と「ジャンイカ」の比較—, 岡山大学文学部紀要 25
- 宮崎和人(1997) 判断のモダリティの体系と疑問化, 岡山大学文学部紀要 27
- 宮崎和人(1998) 推量と想像 「ダロウ」と「コトダロウ」, 岡山大学文学部紀要 30
- 宮崎茂子(1984) ～たところで／～たところでは, 日本語学 (明治書院) 3-10
- 宮島達夫・仁田義雄編(1995)『日本語類義表現の文法(上)(下)』くろしお出版
- 村木新次郎(1983) 日本語の後置詞をめぐって, 日語学習与研究 18
- 村田 年(1991) 「なんか」の用法(1) 接続の形態から, 日本語と日本語教育 (慶應義塾大学日本語・日本文化研究センター) 19
- 村田 年(1993) 中・上級表現文型研究 「…を通して／…を通じて」, 日本語と日本語教育 (慶應義塾大学日本語・日本文化研究センター) 22

4 第三部 複合辞関係文献目録

- 村田美穂子(1993) 「ニ+ハ」「デ+ハ」「ト+ハ」をめぐる考察 日本語教育の立場から(5), 千葉大学留学生センター雑誌[1993] 1993
- 村田美穂子(1997) 『助辞「は」のすべて』至文堂
- 村松由起子(1997) 順序を表す「～てから」と「～まえに」, 雲雀野(豊橋技術科学大学人文・社会工学系紀要) 19
- 榎山洋介(1989) 現代日本語「トコロ」の意味的・統語的・文体的特徴, *Litteratura* (名古屋工業大外国語教室) 10
- 森重 敏(1954) 「て、って」「てば、ってば」「たら、ったら」について, 国語国文 23-11 (『日本語文法の諸問題』笠間書院(1971)に所収)
- 森田良行・松木正恵(1989) 『日本語表現文型 用例中心・複合辞の意味と用法』アルク
- 守時なぎさ(1994) 話し言葉における文末表現「ッテ」について, 筑波応用言語学研究(筑波大学大学院文芸・言語研究科応用言語学コース) 1
- 守屋三千代(1989) 小説の対話文に見られる文末の「ノ」の用法, 『吉沢典男教授追悼論文集』吉沢典男教授追悼論文集編集委員会発行
- 守屋三千代(1989) 「モノダ」に関する考察, 早稲田大学日本語研究センター紀要 1
- 森山卓郎(1984a) ～するやいなや／～するがはやいか, 日本語学(明治書院) 3-10
- 森山卓郎(1984b) ～ばかりだ／～ところだ, 日本語学(明治書院) 3-10
- 森山卓郎(1988) 『日本語動詞述語文の研究』明治書院
- 森山卓郎(1989) 「認識のムードとその周辺」(仁田・益岡編『日本語のモダリティ』くろしお出版)
- 森山卓郎(1992) モダリティ——価値判断のムード形式と人称, 日本語教育(日本語教育学会) 77
- 森山卓郎(1995) 伝聞考, 京都教育大学国文学会誌 26
- 森山卓郎(1997) 日本語における事態選択形式 「義務」「必要」「許可」などのムード形式の意味構造, 国語学(国語学会) 188
- 森山卓郎・安達太郎(1996) 『セルフマスターシリーズ6 文の述べ方』くろしお出版
- 安田芳子(1997) 連体修飾形式「ような」における<例示>の意味の現れ, 日本語教育(日本語教育学会) 92
- 山内啓介(1987) トハ措定とトイウノハ ことばと意味のとらえかた, 愛知大学国文学 27
- 山口佳也(1975) 「のだ」の文について, 国文研究(早稲田大学国文学会) 56
- 山口佳也(1987) 「からとって」について, 十文字学園女子短期大学研究紀要 19
- 山口佳也(1989) 「のだ」文のとらえ方, 早稲田大学教育学部紀要 I-37
- 山崎和夫(1994) 「～ウチニ／～ウチハ」と「モウ／マダ」の視点—時間接続名詞と取

- り立てのハを巡ってー, 北九州大学文学部紀要 50
- 山崎和夫(1996) 従属節における誘導型否定疑問についてー「～ないかと(思っ)」
表現をめぐってー, 北九州大学文学部紀要 53
- 山崎 誠(1996) 引用・伝聞の「って」の用法, 国立国語研究所研究報告集 17
- 山下明昭・他(1993) 「に対して」の文法的機能, 国語と教育(大阪教育大学) 18
- 山中美恵子(1996) 引用と評価, 砂川他編(1996)『小泉保古稀記念記念論文集 言語探求
の領域』大学書林
- 楊 凱榮(1995) 「かわりに」「そのかわりに」について, 仁田義雄編『複文の研究(下)』
くろしお出版
- 吉田茂晃(1988) ノダ形式の連文論的側面, 国文学研究ノート(神戸大学) 21
- 吉田茂晃(1994) 疑問文の諸類型とその実現形式 ノデスカ/マスカ型疑問文の用法を
めぐって, 島大国文(島大国文会) 22
- ラオハブラナキット, カノックワン(1996) 「カナ」「カシラ」に関する考察, 日本語と
日本文学(筑波大学) 23
- 季 林根(1983) 「あとに」、「あとで」、「あと」及び「あとから」の特徴について,
日本語教育研究論纂(在中華人民共和国日本語研修センター紀要) 1
- 劉 向東(1996) 「わけだ」文に関する一考察, 日本語教育(日本語教育学会) 88
- 劉 笑明(1998) 判断系のモダリティ 「なければならない」と「べきだ」を中心に,
国語国文研究(北海道大学) 109
- 鷺見幸美(1996) テイルの意味機能, 名古屋大学日本語・日本文化論集 4
- 渡辺誠治(1994) 認識, 知識と表現の形式主語表示形式《ハ/ガ/ッテ》に関する試論,
さわらび(文法研究会) 3
- 渡辺誠治(1995) 題目表示に関わる「Φ」「ッテ」をめぐって, さわらび(文法研究会)
4
- 渡部 学(1995) 形式名詞と格助詞の相関, 仁田義雄編『複文の研究(上)』くろしお
出版
- 渡邊ゆかり(2000) 「動詞の過去形+ままだ」述語文と「動詞の連用形+っぱなしだ」
述語文の意味的相違, 広島女学院大学日本文学 10

現代語複合辞用例集

平成13年3月31日

発行・国立国語研究所

〒115-8620 東京都北区西が丘3-9-14

電 話 03-3900-3111 (代表)

F A X 03-3906-3530 (〃)

URL <http://www.kokken.go.jp/>

(平12-20)